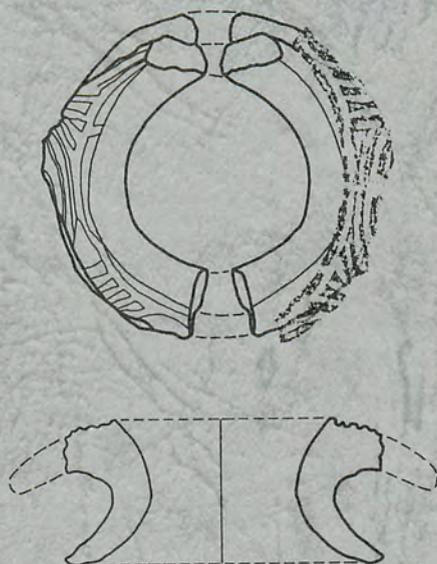


熊本県文化財調査報告 第127集

白鳥平 A 遺跡

九州縦貫自動車道（人吉～えびの）建設に伴う埋蔵文化財調査



1993.3

熊本県教育委員会

熊本県文化財調査報告書

SIRA TORI BIRA

白鳥平 A 遺跡



▲白鳥平A遺跡航空写真
(南上空より)

▶白鳥平A遺跡出土耳栓



1993.3

熊本県教育委員会

序 文

熊本県教育委員会では、日本道路公団の九州縦貫自動車道（八代～えびの間）建設に伴い、昭和57年から路線予定地内の埋蔵文化財の発掘調査を進めてまいりました。

ここに報告する熊本県人吉市赤池水無町所在の白鳥平A遺跡は、平成2年度から平成3年度にかけて発掘調査を実施し、平成4年度に報告書作成を行ったものであります。

調査の結果、熊本県内で初めて縄文時代早期の耳栓が出土したのをはじめ、先土器時代と縄文時代早期の良好な資料が検出され、大きな成果を得ることができました。

この報告書が、埋蔵文化財の保護に対する認識を深め、学術・研究上の一助になれば幸いです。

発掘調査に際しましては、多方面で日本道路公団福岡建設局人吉工事事務所から御配慮を賜り、感謝致しております。さらに、専門調査員の先生方からは適切な御指導がありました。ここに心から厚く御礼を申し上げます。

平成5年3月31日

熊本県教育長 道 越 温

例 言

1. 本書は、日本道路公団の九州縦貫自動車道（人吉～えびの）建設計画に伴い、事前に実施した埋蔵文化財調査の調査報告書である。
2. 発掘調査を実施した遺跡は、熊本県人吉市赤池水無町に所在する白鳥平A遺跡で、日本道路公団福岡建設局からの委託を受けて、熊本県教育委員会が行ったもので、当初白鳥平I遺跡としていたが人吉市教育委員会の「人吉市文化財地図」にあわせて白鳥平A遺跡と改めた。
3. 当遺跡の発掘調査は、平成2年度から平成3年度にかけて実施し、その整理・報告は平成4年度に行った。
4. 本書は、層序に従って古い時代から順に報告している。
5. 本書に使用した地形図は、日本道路公団福岡建設局人吉工事事務所から提供を受けたものを基礎にしている。
6. 現地調査に関する実測及び写真撮影は調査員で行った。また、遺構の製図は木下春千代・丹生英里が行った。遺物の実測は、主として宮坂孝宏がこれにあたり、一部六田育子・植野治代が行った。製図は宮坂・植野・丹生・日置正香が行った。遺物の写真撮影は、白石巖（土器・磨石・敲石）と宮坂（その他）で行った。
7. 本書の執筆は、主として宮坂がこれにあたり、一部を松本健郎（第I章第1節）が担当した。
8. 本書の編集は、熊本県教育庁文化課で行い、宮坂が担当した。

本文目次

序文

例言

第I章 調査の概要

- 第1節 調査に至る経緯 1
- 第2節 調査の方法と経過 3

第II章 遺跡の概要

- 第1節 遺跡の環境 6
 - 1. 地理的環境 6
 - 2. 歴史的環境 7
- 第2節 遺跡の概要 9
- 第3節 遺跡の層位と包含層 12

第III章 調査の成果

- 第1節 先土器時代の遺物と分布 14
 - 1. 石器組成と分布の構成 16
 - 2. 出土石器とその分布 16
 - 3. まとめ 25
- 第2節 細石器文化の遺物 26
 - 1. 出土遺物とその分布 26
 - 2. まとめ 29
- 第3節 縄文時代早期の遺構と遺物 31
 - 1. 遺構とその分布 31
 - 2. 遺物とその分布 50
 - 3. まとめ 168

第IV章 総括

- 1. 先土器時代について 174
- 2. 細石器文化について 174
- 3. 縄文時代早期について 174

参考文献 175

図版

挿 図 目 次

第1図	地形図	3	第32図	土坑実測図	47
第2図	球磨川流域図	7	第33図	縄文式土器検出状況実測図及び 土器実測図	48
第3図	遺跡分布図	8	第34図	遺物分布図(土器)	51
第4図	地形断面図	9	第35図	遺物分布図(吉田式土器・円筒 形条痕文土器)	53
第5図	土層図	11	第36図	土器実測図	55
第6図	調査区域図	12	第37図	遺物分布図(押型文土器)	56
第7図	遺物分布図	14	第38図	土器実測図	57
第8図	遺物分布図(先土器時代)	15	第39図	遺物分布図(手向山式土器)	58
第9図	石器実測図	17	第40図	土器実測図	59
第10図	石器実測図	18	第41図	遺物分布図(塞ノ神式土器1類)	62
第11図	石器実測図	21	第42図	土器実測図	63
第12図	石器実測図	22	第43図	土器実測図	64
第13図	石器実測図	23	第44図	土器実測図	65
第14図	遺物分布図(細石器文化)	27	第45図	土器実測図	66
第15図	石器実測図	28	第46図	土器実測図	67
第16図	石器実測図	29	第47図	土器実測図	68
第17図	遺構配置図(縄文時代早期)	32	第48図	土器実測図	69
第18図	集石実測図	33	第49図	土器実測図	70
第19図	集石実測図	34	第50図	土器実測図	71
第20図	集石実測図	35	第51図	遺物分布図(塞ノ神式土器2類)	77
第21図	集石実測図	36	第52図	土器実測図	78
第22図	集石実測図	37	第53図	土器実測図	79
第23図	集石実測図	38	第54図	遺物分布図(塞ノ神式土器3類)	81
第24図	集石実測図	39	第55図	土器実測図	82
第25図	集石実測図	40	第56図	土器実測図	83
第26図	集石実測図	41	第57図	遺物分布図(底部)	87
第27図	集石実測図	42	第58図	土器実測図	88
第28図	集石実測図	43	第59図	遺物分布図(石器)	91
第29図	集石実測図	44	第60図	遺物分布図(石鏃)	92
第30図	集石実測図	45			
第31図	配石土坑実測図	46			

第61図	石器実測図	93	第91図	石器実測図	135
第62図	石器実測図	94	第92図	石器実測図	136
第63図	石器実測図	95	第93図	石器実測図	137
第64図	石器実測図	96	第94図	石器実測図	138
第65図	石器実測図	97	第95図	遺物分布図 (石皿・台石)	141
第66図	石器実測図	98	第96図	石器実測図	142
第67図	石器実測図	99	第97図	石器実測図	143
第68図	石器実測図	100	第98図	石器実測図	144
第69図	石器実測図	101	第99図	遺物分布図 (使用痕ある剝片)	145
第70図	遺物分布図 (尖頭器)	109	第100図	石器実測図	146
第71図	石器実測図	110	第101図	石器実測図	147
第72図	遺物分布図 (石匙・削器・ 抉入石器)	112	第102図	石器実測図	148
第73図	石器実測図	113	第103図	石器実測図	149
第74図	石器実測図	114	第104図	石器実測図	150
第75図	石器実測図	115	第105図	石器実測図	151
第76図	石器実測図	116	第106図	石器実測図	152
第77図	石器実測図	117	第107図	石器実測図	153
第78図	石器実測図	118	第108図	石器実測図	154
第79図	石器実測図	119	第109図	遺物分布図 (石核)	159
第80図	石器実測図	120	第110図	石器実測図	160
第81図	石器実測図	123	第111図	石器実測図	161
第82図	遺物分布図 (石錐)	124	第112図	石器実測図	162
第83図	遺物分布図 (打製石斧・ 磨製石斧・楔形石器)	125	第113図	石器実測図	163
第84図	石器実測図 (打製・磨製石斧・ 楔形石器)	128	第114図	石器実測図	164
第85図	遺物分布図 (磨石・敲石)	129	第115図	遺物分布図 (土製品・石製品)	165
第86図	石器実測図	130	第116図	土製品・石製品実測図	166
第87図	石器実測図	131	第117図	土坑実測図	167
第88図	石器実測図	132	第118図	土器分析図	168
第89図	石器実測図	133	第119図	石鏃の制作工程図	170
第90図	石器実測図	134	第120図	石鏃分析図①	171
			第121図	石鏃分析図②	172

表 目 次

第1表	遺跡地名表①	10	第11表	石器計測表	106
第2表	遺跡地名表②	11	第12表	石器計測表	111
第3表	先土器時代石器組成表	16	第13表	石器計測表	113
第4表	石器計測表	19	第14表	石器計測表	122
第5表	石器計測表	20	第15表	石器計測表	123
第6表	縄文時代早期石器組成表	90	第16表	石器計測表	126
第7表	石器計測表	102	第17表	石器計測表	127
第8表	石器計測表	103	第18表	石器計測表	139
第9表	石器計測表	104	第19表	石器計測表	140
第10表	石器計測表	105	第20表	石器計測表	155
			第21表	石器計測表	156

図 版 目 次

図版1	遠景		図版10	縄文時代早期の遺物	
	上 遠景 (南方より)			1 塞ノ神式土器 (1類)	
	下 遠景 (南上空より)			2 塞ノ神式土器 (1類)	
図版2	全景		図版11	縄文時代早期の遺物	
	遺跡全景 (上空より)			1 塞ノ神式土器 (1類)	
図版3	先土器時代の遺物			2 塞ノ神式土器 (1類)	
図版4	細石器文化の遺物		図版12	縄文時代早期の遺物	
図版5	縄文時代早期の遺構			1 塞ノ神式土器 (3類)	
	1 15号集石			2 塞ノ神式土器 (3類)	
	2 1号配石土坑		図版13	縄文時代早期の遺物	
図版6	縄文時代早期の遺物			1 塞ノ神式土器 (3類)	
	1 押型文土器			2 塞ノ神式土器 (3類)	
	2 手向山式土器		図版14	縄文時代早期の遺物	
図版7	縄文時代早期の遺物			1 石鏃	
	1 手向山式土器			2 石鏃	
	2 手向山式土器		図版15	縄文時代早期の遺物	
図版8	縄文時代早期の遺物			1 石匙	
	1 手向山式土器			2 石斧	
	2 手向山式土器		図版16	縄文時代早期の遺物	
図版9	縄文時代早期の遺物			磨石・敲石	
	1 塞ノ神式土器 (1類)		図版17	縄文時代早期の遺物	
	2 塞ノ神式土器 (2類)			磨石・敲石	
	3 塞ノ神式土器 (1類)				

第 I 章 調査の概要

第 I 節 調査に至る経緯

昭和52年3月29日付けで日本道路公団福岡建設局から熊本県教育委員会に対し、九州縦貫自動車道（八代～えびの間）の分布調査依頼があり、同年8月4日～6日と8月10日～12日の2回にわたる分布調査を実施した。その結果、下記の遺跡（参考地）を確認した。

八代市（東片町古墳群、上片町条里遺跡）、球磨郡山江村（淡島遺跡、狸谷遺跡、本城遺跡、高城遺跡、大丸・藤ノ迫遺跡）、人吉市（笹栗山遺跡、梢山遺跡、佐無田狩所遺跡、石清水遺跡、七地条里遺跡、尾丸横穴群、原城跡、尾丸古塔碑群、七地遺跡、人我胸遺跡、昼子遺跡）

この分布調査の結果を基に、八代～人吉間の試掘調査を行い、昭和57年～62年にかけて発掘調査を行った。

その後、改めて人吉～えびの間の分布調査を行い、前回確認されていた昼子遺跡を含めて、新たに6遺跡（昼子遺跡、白鳥平A遺跡、白鳥平B遺跡、赤池永谷遺跡、人我胸遺跡、古屋敷遺跡）を確認した。

この結果を日本道路公団福岡建設局へ回答し、その後日本道路公団から文化庁長官あて協議書が提出され、熊本県教育委員会の意見を付けて文化庁長官あてに発送した。文化庁からは、「熊本県教育委員会と協議の上事前に発掘調査を実施すること。なお、調査の結果、重要な遺構等が発見されたときは、設計変更等によりその保存に配慮すること」という通知があった。

熊本県教育委員会は日本道路公団の依頼を受け、平成元年度から各遺跡の試掘調査を行った。白鳥平A遺跡については平成元年10月に行い、文化財保護主事西住欣一郎が担当し、「アカホヤ層下から、土器及び剝片類が検出され、この台地一帯が縄文時代早期の遺跡であり本調査が必要である。またシラス層直上から剝片類が検出されることから先土器時代の遺物の包含層が存在する可能性がある」との結果を得た。

日本道路公団と協議のうえ、本格的な発掘調査は平成2年度から実施することになり、文化財保護主事宮坂孝宏と嘱託松舟博満（平成2年7～8月）が担当し、その後嘱託松舟博満が赤池永谷、人我胸遺跡の発掘調査を担当したため、平成3年度は文化財保護主事浜田彰久（4～5月）、7月末から嘱託宮川 聡、奥田和秀が調査に加わった。

第1章 調査の概要

調査の組織

調査主体 熊本県教育委員会

調査責任者 江崎 正（平成2年度文化課長） 大塚正信（平成3、4年度文化課長）

調査総括 隈 昭志（教育審議員・課長補佐） 桑原憲彰（平成2年度文化財調査第二係長） 松本健郎（平成3、4年度文化財調査第二係長）

調査・報告 宮坂孝宏（文化財保護主事、調査・報告書） 松舟博満（嘱託、平成2年度調査

書担当 濱田彰久（文化財保護主事、平成3年度調査） 宮川 聡（嘱託、平成3年度調査） 奥田和秀（嘱託、平成3年度調査） 植野治代（嘱託、報告書） 木下春千代（整理嘱託、報告書） 丹生英里（整理嘱託、報告書） 日置正香（整理嘱託、報告書）

専門調査員 賀川光夫（別府大学教授） 橘 昌信（別府大学教授）

山中一郎（京都大学助教授） 大塚達朗（東京大学助手）

新東晃一、宮田栄二（鹿児島県埋蔵文化財センター）

中村幸史郎（山鹿市立博物館副館長）

調査指導及び協力者（敬称略、順不同）

三島 格（肥後考古学会会長）、織笠 昭（東海大学助教授）、岡本東三（千葉大学助教授）、甲元真之（熊本大学助教授）、山下秀樹（京都文化博物館）、宮坂 清（下諏訪町教育委員会）、亀田直美（早稲田大学助手）、山崎純男（福岡市教育委員会）、長野真一（鹿児島県埋蔵文化財センター）、諏訪問 順（小田原市教育委員会）、堤 隆（御代田町教育委員会）、長嶺 均（沖縄県教育委員会）、網田龍生、（熊本市教育委員会）、澤田宗順（八代市立博物館）、和田好史、鶴嶋俊彦（人吉市教育委員会）、黒田裕司（三加和町教育委員会）、浦田信智（西合志町教育委員会）、清田 純一（城南町教育委員会）、人吉市教育委員会

調査事務局 中川義孝（平成2年度教育審議員・課長補佐）、松崎厚生（平成3、4年度課長補佐） 上村忠道（平成2年度主幹・経理係長）、木下英治（平成3、4年度主幹・経理係長）、大広美枝子（平成2、3年度主任主事）、川上勝美（平成2、3年度主任主事）、高濱保子（平成4年度参事）、相馬治久（平成4年度参事）

道路公団 村田迪雄（人吉工事事務所長）、久保伸一（人吉工事事務所副所長）

安岡東一（人吉工事事務所工事長）、喜多 徹（人吉工事事務所庶務課長）

財津 勝（人吉工事事務所工務課長）

第2節 調査の方法と経過

九州縦貫自動車道は、遺跡が立地する丘陵をほぼ南北に横ぎって、建設される計画である。調査区画の設定は、この自動車道の二つの中心杭を使用して行った。

まず、STA434と STA434+60を結ぶ線を基準とし、20m×20mの大区画を設定した。この大区画は、北→南へ I～XI、東→西へ A～Fとして設定した。この大区画を4 m×4 mの中区画25個に分割し、1～25という番号を付した。このように設定した大区画と中区画を基本として調査を実施した。

調査の手順と方法は、以下のとおりである。

まず、重機による表土除去を行い、その清掃の後トランシットを使用して、4 m×4 mの中区画を設定した。20m ごとに丸太杭を使用した。

調査は、遺構の検出と遺物の検出を中心に実施した。

遺構は、平面形の確認を行った後に、土層観察のため土手を残し掘り下げた。その観察後土手を取り除いて全体像を確認する。その間に作成される資料には、 $\frac{1}{10}$ (場合によっては $\frac{1}{5}$)



第1図 地形図

に縮尺して作る平面図、土層断面図、断面図などがある。

遺物の検出は、上記した遺構調査の完了後に実施した。検出遺物は、中区画別、基本土層別、遺物の種類別に台帳を作り遺物番号を付した。この台帳に記載する事項には、土器型式、文様、石器器種、石材、などがある。

こうした発掘調査作業のほか、関連調査として周辺に分布する遺跡の所在確認調査を行った。その成果は、第 II 章第 1 節の歴史的環境の項に示している。

次に、調査の経過を月別に示しておこう。

7 月 発掘調査の準備及び調査の開始。調査事務所の建設。V～XI、A～D 区の表土剥ぎ作業。調査区内の清掃作業。調査区画の設定。遺構確認作業。

8 月 本格的な調査の開始。調査は、主に南側 (X, XI, C, D 区) から始めた。アカホヤ層を除去し、縄文時代早期の遺構確認を行った。その結果集石 1 基と土坑 2 基を確認した。またこの他、遺構のみられない部分での包含層の掘り下げも行った。

9 月 包含層の掘り下げを行った。

10 月 南側調査区の発掘作業と並行して、西側斜面部 (VIII, IX, C, D 区) の発掘を行う。この調査区での包含層の掘り下げ中、集石 2 基と配石土坑 2 基を確認した。またこの調査区での調査中に壺形土器と耳栓を検出した。

11 月 南側調査区の掘り下げもほぼ完了し、西側斜面部の調査と並行して、東側斜面部 (VI～VIII, A, B 区) の調査を南から北へ徐々に行っていった。また I～V, E, F 区の表土剥ぎ作業を行い、あわせて清掃と調査区の設定を行った。

12 月 東側斜面部では、集石 5 基と縄文時代早期の土器が集中して検出された。IV 層及び V 層の堆積が薄く、遺構検出の後掘り下げを行った結果シラス上面の VI 層から先土器時代の遺物を検出した。

1 月 東側斜面部北側の掘り下げと並行して、I～V, E, F 区の調査を行った。この調査区は、試掘調査が都合により実施できなかった箇所であるため、その状況を把握するため任意に 4 m × 4 m の中区画ごとに地形と土層の堆積状況を考えながら掘り下げた。しかしこの調査区から、遺物遺構を検出することはできなかった。

2 月 北東側谷部 (IV～VI, A, B 区) の調査を行う。IV 層を掘り下げた段階で集石 5 基を検出し、これらの遺構実測を行った。

3 月 北東側谷部の掘り下げを行う。縄文時代の遺物を検出した。

4 月 北東側谷部の調査と並行して、北側凹部 (V～VII, C, D 区) の調査を行った。この結果 V 層上面で、集石 5 基を検出し、これらの遺構の実測を行った。

第2節 調査の方法と経過

5月 さらに北側凹部の掘り下げを行った。縄文時代早期の遺物が、多数検出された。

6月 北側凹部の掘り下げを行い、縄文時代早期の遺物の検出を急いだ。

7月 調査終了の月である。北側凹部の掘り残し部分の発掘を進める一方で、土層図や地形図など、必要な図面の作成を行った。また、あわせて遺跡遠望などの写真撮影や周辺遺跡の踏査も実施した。

以上の経過により、調査は8月2日無事終了した。

第 II 章 遺 跡 の 概 要

第 1 節 遺跡の環境

1. 地理的環境

白鳥平A遺跡の所在する人吉市は、九州山地に挟まれ大きく口を開けた標高100m～200mを測る断層盆地である。

盆地の中央には、球磨川が東西に貫流する。この球磨川は、人吉盆地を抜けるとその流れを大きく北に変え、蛇行しながら八代（不知火）海に注ぐ全長約115kmの九州でも有数の河川である。また球磨川の流域面積は、約1880km²で熊本県の面積の25%を占めている。支流の数は、実に80本以上を数える県下有数の規模をもつ河川である。

人吉盆地は、この球磨川の流路に沿って存在する沖積地と台地・丘陵に分けられ、その周辺に山地が位置する。

下球磨地方（人吉市周辺）の球磨川南岸は、始良起源の入戸火砕流（シラス）を基盤とする台地・丘陵が分布している。またこの丘陵は、加久藤（宮崎県）～大口（鹿児島県）にかけての山地に連なり、支流によって開析され谷を形成している。また人吉盆地全体を眺めた場合、中球磨地方の球磨川南岸の台地・丘陵は、白髪岳山地の麓に形成された、複合扇状地である。球磨川北岸では、川辺川によって形成された、扇状地と阿蘇溶結凝灰岩や入戸火砕流を基盤とする丘陵地がある。このように人吉盆地の台地・丘陵には、その生成の違いがみられる。

またこのような台地・丘陵及び沖積地を取り囲むように山地が広がる。このような環境の中、先史時代の人々の生活に欠くことのできない道具である石器の素材（石材）のあり方を球磨川流域での岩石・岩層の分布からみていく（第2図）。

白鳥平A遺跡出土の石器の中で、最も多いのは、黒耀石・珪岩である。

黒耀石は、人吉市桑木津留と球磨村の白浜林道で産出が確認されている。また鹿児島県大口市の日東及びその周辺にも原産地が分布している。珪岩は、人吉盆地の北側の山地に岩脈があり、川原や礫層中に転石の形で存在し入手が容易である。また安山岩は、盆地南西の山地に分布し入手が容易である。これらの石器石材は、すべてそれぞれの支流によって運ばれ球磨川の川原で転石として容易に入手できる。

2. 歴史的環境

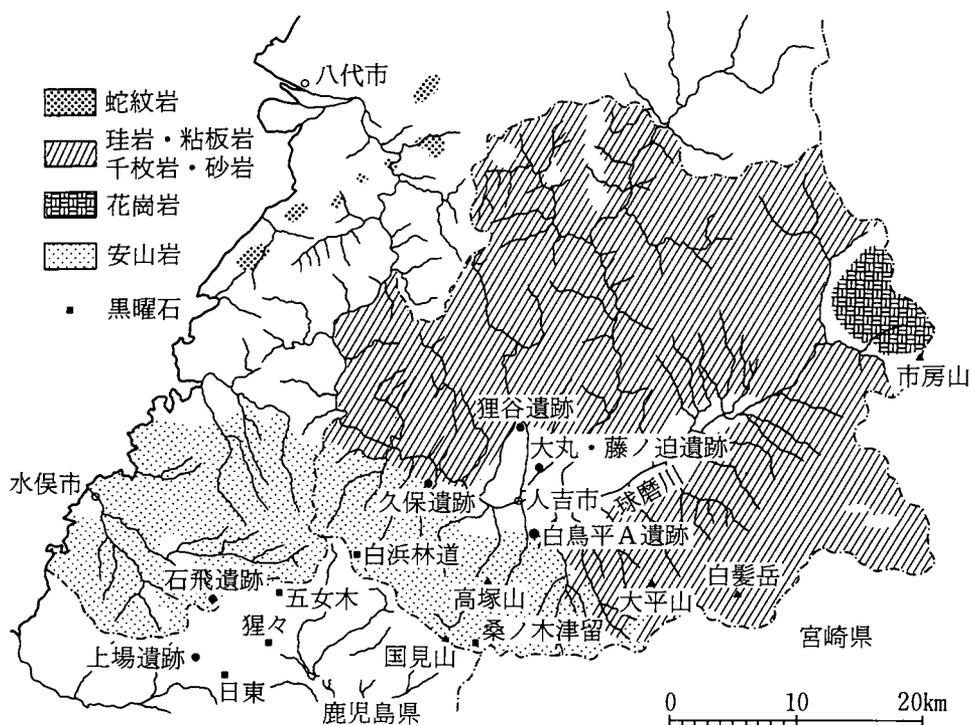
白鳥平A遺跡は、球磨川の支流である人我胸川の流域に存在する。ここでは、人吉市周辺（下球磨地方）の先土器時代及び縄文時代の遺跡について概観する。

(1)先土器時代

現在までに確認されている先土器時代の遺跡は、人吉・球磨地方に31箇所を数える。これらの遺跡の多くが人吉市・山江村を中心とする地域に存在する。しかしこれらの遺跡の中で、狸谷遺跡、大丸・藤ノ迫遺跡、高城遺跡、鼓ヶ峰遺跡、天道ヶ尾遺跡、村山闇谷遺跡、血気ヶ峰遺跡、城・馬場遺跡第2地点、島廻遺跡、白鳥平A遺跡、白鳥平B遺跡、中尾別府遺跡の12遺跡を除けば、すべて表面採集によるものであり、その全体像については不明な部分が多く残されている。また、近年の開発に伴う発掘調査の増加により、AT（シラス）下位の石器文化が確認され、類例が増えつつある。狸谷遺跡（山江村）、久保遺跡（球磨村）、血気ヶ峰遺跡（人吉市）である。この中で血気ヶ峰遺跡のI石器文化は、曲野遺跡の石器文化段階に比定できるものである。

(2)縄文時代

平成3年度の調査で、白鳥平B遺跡において草創期に属する爪型文土器が検出された。この



第2図 球磨川流域図

第II章 遺跡の概要



第3図 遺跡分布図

第1節 遺跡の環境

時期の遺跡は、近年南九州でも検出例が増加している。熊本県内では、狸谷遺跡・里の城遺跡で隆起線文土器が、また無田原遺跡・白鳥平B遺跡で爪形文土器が検出されている。中でも白鳥平B遺跡では同一層から爪形文土器と共伴する石器群がまとまって検出され、同時期の南九州を考える上で興味深い。

また、白鳥平A遺跡では、縄文時代早期に属する遺物が多く出土した。人吉市周辺での早期の遺跡としては、狸谷遺跡、大丸・藤ノ迫遺跡、城・馬場遺跡、同第2地点、村山閣谷遺跡、鼓ヶ峰遺跡、天道ヶ尾遺跡、島廻遺跡、赤池永谷遺跡、石清水遺跡、射場ノ本遺跡、深水谷川遺跡、益手遺跡、野々脇遺跡がある。この中で、狸谷遺跡、大丸・藤ノ迫遺跡では、塞ノ神式土器を中心に様々な土器が検出され、それに伴う遺構も検出された。またこれらの遺跡は、当時の集落のあり方を考える上で重要な遺跡である。また城・馬場遺跡、同第2地点、天道ヶ尾遺跡、白鳥平A遺跡では、手向山式土器の壺形土器が検出されている。この中で城・馬場遺跡と同第2地点は、検出された早期の土器の中で手向山式土器の占める比率が高い遺跡である。これらの早期の遺跡相互の比較は、極めて興味深い。

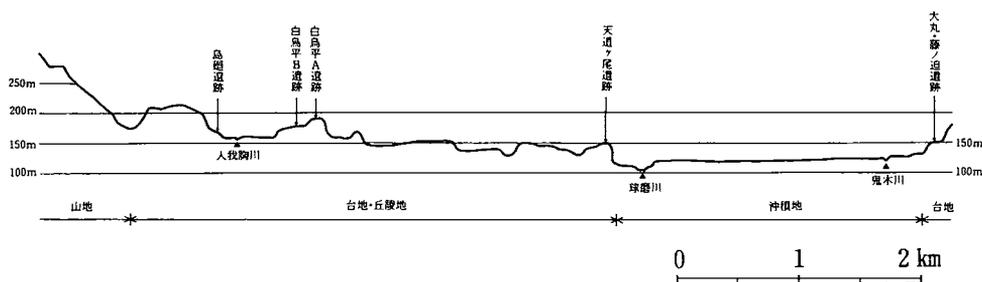
アカホヤ降灰以降、前・中期の遺跡は人吉球磨地方では激減する。その中で鼓ヶ峰遺跡では、曾畑式土器、船元式土器が検出され、射場ノ本遺跡では、並木式土器が出土している。

後・晩期の遺跡としては、中堂遺跡、アンモン山遺跡、天道ヶ尾遺跡、七地遺跡がある。この中で中堂遺跡は球磨川左岸低地に位置し、石器製作址が確認されている。このことは、当時の集落のあり方を考える上で興味深い。

第2節 遺跡の概要

遺跡は、熊本県人吉市赤池水無町に所在し、球磨川の支流である人我胸川の左岸丘陵に立地する。丘陵の基盤は、入戸火砕流（シラス）である。標高は、187m～189mを測る。

当地は、加久藤～大口にかけて三県を画する山地から連なる丘陵で、胸川・人我胸川及び鳩胸川によって開析されたそれぞれの谷に挟まれている。また、丘陵は、南方の山地から徐々に



第4図 地形断面図

第二章 遺跡の概要

第1表 遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	時代	典拠他	番号	遺跡名	所在地	時代	典拠他
1	後田	人吉市上原町後田	縄文	①	61	東耳取 A	人吉市下永野町東耳取	〃	①
2	馬草野	〃 〃 馬草野	〃	〃	62	八峰	〃 〃 八峰	〃	①
3	羽田口	〃 〃 羽田口	〃	①	63	東耳取 C	〃 〃 東耳取	〃	①
4	牛塚	〃 〃 牛塚	〃	①	64	東耳取 B	〃 〃	〃	①
5	六地藏	〃 〃 六地藏	〃	①	65	斧研	〃 下永野町斧研	〃	①
6	広瀬	〃 〃 広瀬	〃	①	66	射馬ノ本	〃 上永野町射馬ノ本	先土器・縄文	①
7	尾崎	〃 〃 尾崎	〃	①	67	表村	〃 〃 表村	縄文	①
8	清来寺	〃 〃 清来寺	〃	①	68	西原	〃 〃 西原	〃	①
9	天王宝	〃 〃 八王寺	〃	①	69	永野桑木津留	〃 〃 桑木津留	〃	①
10	八王寺	〃 〃 八王寺	〃	①	70	融山	〃 〃 融山	〃	①
11	平ノ上	〃 〃 平ノ上	〃	①	71	赤松ヶ尾	〃 〃 赤松ヶ尾	〃	①
12	奥山入	〃 合ノ原町奥山入	〃	①	72	永葉山	〃 〃 永葉山	先土器・縄文	①
13	平山入	〃 〃 平山入	〃	①	73	成石 A	〃 木地屋町成石	〃	①
14	永野田	〃 〃 瓦屋町永野田	〃	①	74	成石 B	〃 〃	〃	①
15	馬場平	〃 下原町馬場平	〃	①	75	棚平	〃 中神町棚平	縄文	①
16	山仁田	〃 〃 山仁田	〃	①	76	新地ノ下	〃 鹿目町新地ノ下	〃	①
17	西ノ門	〃 〃 西園・西ノ前	〃	①	77	橋本	〃 〃 橋本	〃	①
18	西ノ前	〃 〃 西ノ前	〃	①	78	鹿ノ中尾	〃 〃 鹿ノ中尾	〃	①
19	アンモン	〃 〃 高千穂	縄文(晩期)	①	79	元屋敷	〃 〃 元屋敷	〃	①
20	若宮	〃 〃 若宮	〃	①	80	鹿ノ中園	〃 〃 鹿ノ中園	〃	①
21	無田原	〃 〃 無田原	〃	①	81	野田大野	〃 〃 野田・大野	〃	①
22	上ノ段	〃 中神町上ノ段	〃	①	82	鶴川 A	〃 田野町上鶴川	〃	①
23	石原	〃 〃 石原	〃	①	83	鶴川 B	〃 〃	〃	①
24	桜ノ前	〃 〃 桜ノ前	〃	①	84	須ノ山	〃 田野町須ノ山	〃	①
25	中神御蔵	〃 〃 石坂	江戸	①	85	宮ノ谷	〃 〃 宮ノ谷	〃	①
26	瓜生田	〃 上原町瓜生田平草	縄文	①	86	上笹ノ谷	〃 〃 笹ノ谷	〃	①
27	石坂	〃 中神町石坂	〃	①	87	泉水松	〃 〃 泉水松	先土器・縄文	①
28	別府	〃 〃 別府	〃	①	88	植木迫	〃 〃 植木迫	縄文	①
29	八久保	〃 〃 八久保	〃	①	89	高仁田	〃 西大塚町高仁田	〃	①
30	八龍	〃 〃 大柿八龍	〃	①	90	日添	〃 〃 日添	〃	①
31	寺本 A	〃 〃 大柿寺田	〃	①	91	西大塚	〃 〃	〃	①
32	宮本 A	〃 〃 大柿宮本	〃	①	92	上屋敷	〃 東大塚町上屋敷	〃	①
33	宮本 B	〃 〃	〃	①	93	桑木津留	〃 〃 桑木津留	〃	①
34	大谷	〃 中神町大柿大谷	〃	①	94	岩塚	〃 〃 岩塚	〃	①
35	湯ノ谷	〃 〃 大柿湯ノ谷	〃	①	95	麦字野	〃 西間上町麦字野	〃	①
36	中堂	〃 中堂町中堂	〃	①	96	茂田	〃 〃 茂田	〃	①
37	村山	〃 上林町鹽ヶ谷	〃	①	97	永谷	〃 東間上町永谷	〃	①
38	村山閣谷	〃 上林町村山	先土器・縄文	①	98	善生院	〃 鬼木町善生院	〃	①
39	尾園	〃 城本町観音堂・尾園	縄文	①	99	上の寺 B	〃 願成寺町上ノ寺	〃	①
40	浜川	〃 下城本町浜川	〃	①	100	鼓ヶ峰	〃 〃 鼓ヶ峰	〃	①
41	稻荷山	〃 西間下町蓬来ヶ迫	〃	①	101	上の寺 C	〃 〃 上ノ寺	〃	①
42	蓬来ヶ迫	〃 〃	〃	①	102	釜屋	〃 〃 釜屋	〃	①
43	拾君畑	〃 西間下町拾君畑	〃	①	103	上の寺 A	〃 願成寺町上ノ寺鬼松	〃	①
44	岩川内	〃 〃 岩川内	〃	①	104	原畑	〃 七城町原畑	〃	①
45	矢黒	〃 矢黒町西園・下矢黒	〃	①	105	七地水田	〃 〃 迫田	〃	①
46	下天ヶ野	〃 下永野町下天ヶ野	縄文(晩期)	①	106	黒田清明	〃 〃 黒田・清明・迫田	〃	①
47	三日ヶ原	〃 下戸越町三日ヶ原	〃	①	107	天道ヶ尾	〃 〃 天道ヶ尾	先土器・縄文	①
48	今村	〃 〃 今村	〃	①	108	尾丸	〃 〃 赤地源	縄文	①
49	高山	〃 〃 高山	〃	①	109	南目	〃 〃 南目	〃	①
50	唐渡神	〃 〃 唐渡神	〃	①	110	赤池源	〃 〃 赤池源	〃	①
51	大坪	〃 〃 大坪	〃	①	111	花立	〃 〃 花立	〃	①
52	内ノ原 B	〃 〃 内ノ原	〃	①	112	下須馬場	〃 〃 下須馬場段治ヶ迫	〃	①
53	内ノ原 A	〃 〃 内ノ原	〃	①	113	中道	〃 赤池源町西中通東中通	〃	①
54	高栗栖	〃 〃 高栗栖	〃	①	114	白鳥平 A	〃 赤池水無町立山	先土器・縄文	①
55	瓜生迫	〃 下永野町瓜生迫	〃	①	115	白鳥平 B	〃 〃	〃	①
56	永葉	〃 上戸越町永葉	〃	①	116	赤池水谷	〃 〃 水谷	〃	①
57	大原	〃 〃 大原	〃	①	117	島廻	〃 〃 島廻	〃	①
58	耳取	〃 下永野町東耳取	〃	①	118	永迫	〃 〃 永迫	〃	①
59	門木	〃 〃 門木・上戸越永葉	縄文・室町	①	119	早水	〃 〃 早水・袁野町平山	〃	①
60	笹	〃 上戸越町笹	縄文	①	120	楠木迫	〃 〃 楠木迫	〃	①

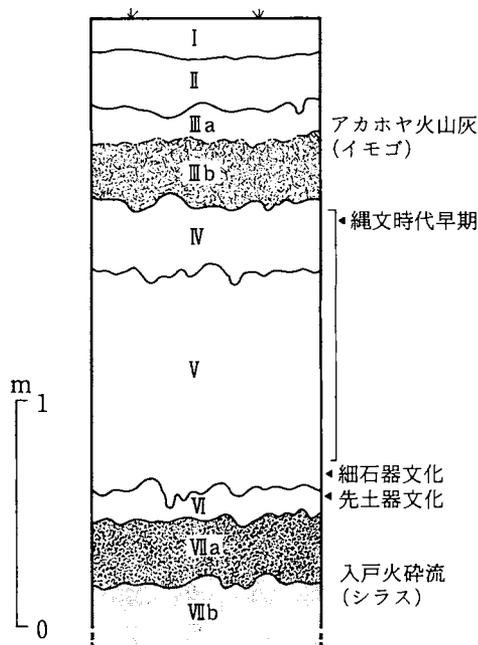
第2節 遺跡の概要

第2表 遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	時代	典拠他
121	大野 A	人吉市大野町	〃	①
122	大野 B	〃	〃	①
123	平谷	〃 東漆田町平谷	〃	①
124	石野	〃 赤池原町石野	〃	①
125	野田	〃 東漆田町野田	〃	①
126	椎貝	〃 〃 椎貝	〃	①
127	後平	〃 下漆田町後平	〃	①
128	孫四郎	〃 上漆田町孫四郎	〃	①
129	頭無	〃 〃 頭無	〃	①
130	下原	〃 下田代町下原	〃	①
131	向原	〃 〃 向原	〃	①
132	川添	〃 〃 川添	〃	①
133	中原	〃 上田代町中原	〃	①
134	田代大原	〃 〃 大原	〃	①
135	馬渡	〃 大畑町馬渡	〃	①
136	清水	〃 〃 清水	〃	①
137	小麦野	〃 〃 小麦野	〃	①
138	政井野	〃 上田代町政井野	〃	①
139	山渋谷	球磨郡山江村大字山田渋谷	先土器・縄文	②
140	中山狸谷	〃 〃 字中山狸谷	〃	②
141	狸谷	〃 〃 狸谷	〃	②
142	段岡	〃 〃 山田字段岡	〃	②
143	井龍	人吉市下原町井龍	縄文	③
144	城馬場	〃 〃 〃	〃	③
145	大丸・藤ノ迫	球磨郡山江村大字山田字藤ノ迫	先土器・縄文	②

番号	遺跡名	所在地	時代	典拠他
146	血気ヶ峯	人吉市鬼木町血気ヶ峯	先土器	①
147	一本松	〃 北願成寺町一本松	〃	②
148	佐無田	〃 〃 大字鼓ヶ峰	〃	①
149	鼓ヶ峰	〃 〃 〃	〃	④
150	天道ヶ尾	〃 七地町天道ヶ尾	先土器・縄文	⑥
151	千太郎	〃 蟹作町千太郎	〃	①
152	無田ノ原	〃 〃 無田ノ原	〃	①
153	村山閣谷	人吉市上林町炭焼谷	先土器	⑤
154	小柿	〃 下戸越町小柿	〃	①
155	中尾	〃 〃 中尾	先土器	①
156	高山	〃 〃 高山	〃	①
157	田栗須	〃 上戸越町田栗須	〃	①
158	大原	〃 戸越町大原	〃	①
159	射場ノ本	〃 上永野町射場ノ本	先土器	①
160	白鳥平 A	〃 赤池水無町立山	〃	①
161	楠木迫	〃 〃 楠木迫	〃	①
162	永葉山	〃 上永野町	〃	①
163	野畑	〃 木地屋町野畑	〃	①
164	下山入	〃 合ノ原町下山入	縄文	①
165	鶴川 B	〃 田野町上鶴川	先土器	①
166	泉水松	〃 〃 泉水松	〃	①
167	田野	〃 田野町	〃	①
168	国見峠	〃 東大塚町茶ノ平	先土器	①
169	国見	〃 大塚町国見	〃	①

低くなり、当遺跡の立地する丘陵はその突端部に位置し、北方に人吉市街地を望む。この丘陵の南側に土丈原遺跡が所在し、いったん低くくびれ遺跡の立地する丘陵へと続く。遺跡は、この丘陵のほぼ全面に広がる。最高部は、遺跡の中央部にあり標高189mを測る。この部分はシラスの露出している地点である。この最高部から東西南北に緩やかに傾斜し、北及び西側は崖となり急激に傾斜する。西側崖下に、湧水点がある。また、V E区と北東隅、南端にも同様にシラスの露出がみられる。このような地形の中で、遺構・遺物の出土状況を説明する上で、最高部を中心にV E区のシラス露出部分との間を北側凹部、また北東隅のシラス露出部分との間で北側崖を望む地点を北東側谷部、最高部の東西をそれぞれ東、西斜面部とし、最高部から南に傾斜し南端のシラスの露出部分とに挟まれた地点を南側斜面部と呼称しておきたい。遺跡から先土器時代では、AT 上位でナイフ形石器文化に属する石器が検出され、また細石器文化に属する細石核及



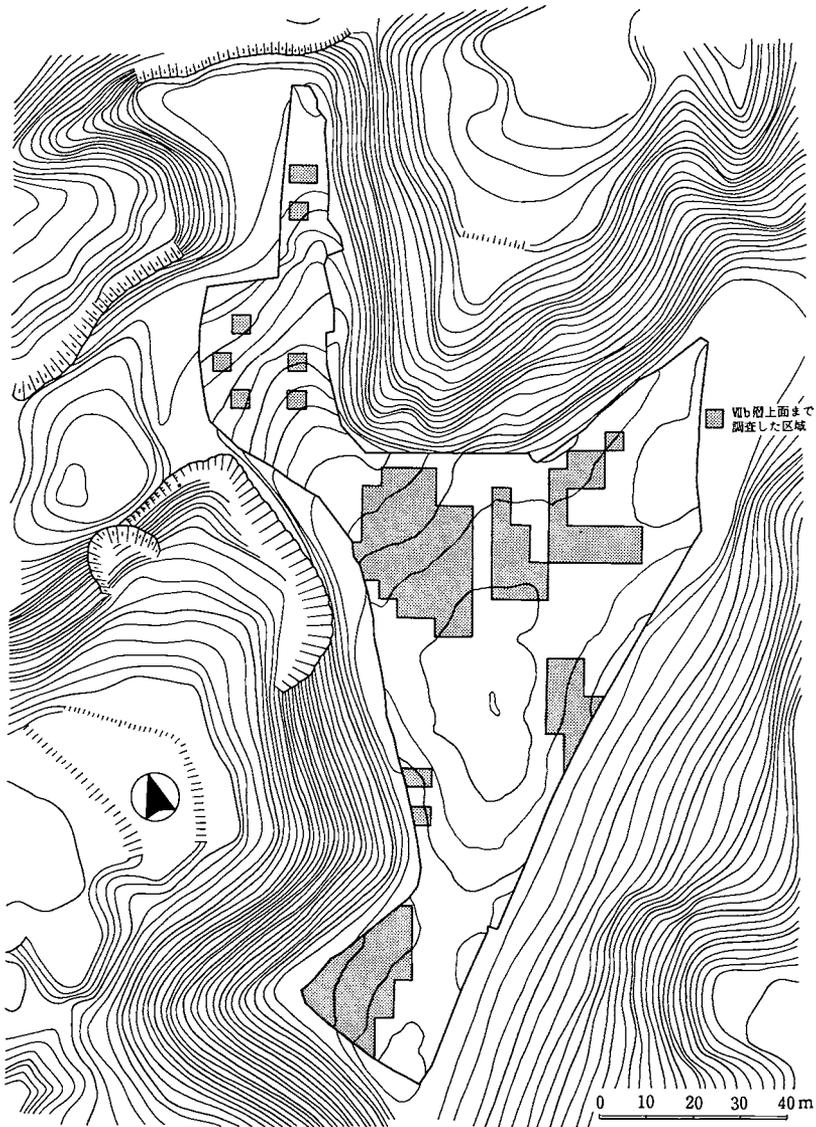
第5図 土層図

び細刃器も検出された。縄文時代では、早期の遺構・遺物が多く検出され、中でも耳栓は県下初出の資料で注目される。

第3節 遺跡の層位と包含層

遺跡では、始良カルデラ起源の入戸火砕流をVII層として、7枚の土層が確認できた。以下、各層ごとに説明をしていく。

第I層 表土層（耕作土）



第6図 調査区域図

第II層 暗茶褐色土層

この層は、堆積が薄くほとんどが耕作などによって削られており、わずかに残存しているだけである。しまりがなく、フカフカとした状態の土層である。この層から、遺物は検出されなかったが、遺構としてはII層からの掘り込みと考えられる炭化物の詰まった長方形の土坑が検出された。

第III層 黄褐色土層

アカホヤ火山灰層である。この層は、その土質の違いによってさらにIII a層とIII bの2枚に分層できる。

第III a層は、シラス（VII層）露出部分を除きほぼ全面に堆積する。フカフカとした細かい砂粒のアカホヤ火山灰層である。この層の成因については、大丸・藤ノ迫遺跡や狸谷遺跡でも記載されているとおり、土壌化したアカホヤ火山灰の二次的な堆積層であると考えられる。

第III b層は、III a層と同様にシラスの露出部分を除き、ほぼ全面に堆積している。この層は非常に硬くしまった、アカホヤ火山灰の一次堆積層である。無遺物層である。

第IV層 暗褐色土層

縄文時代早期の遺物包含層である。粒子は比較的細かく、やや粘性を帯びる。

第V層 黒褐色土層

縄文時代早期及び細石器文化の遺物包含層である。土質はしまりがあり粘性がある。この土層は、遺跡全面には分布せず、北側凹部、北側凹部、西側斜面部、南側斜面部に堆積している。またV層中には、ガチガチに固まった黒色のブロックを多量に含む。

第VI層 褐色土層

この層は、シラスが土壌化して、二次的に堆積した層であると考えられ、わずかに粘性を帯びる。土層の分布は、東側斜面部に堆積している。またこの層からは、先土器時代の石器が検出された。

第VII層 入戸火砕流（シラス）

この層は、始良カルデラ起源の入戸火砕流であり、その土色と土質からVII a層とVII b層に分層した。

第VII a層は、黄色火山灰層で、粒子が粗くザラザラとしている。入戸火砕流（シラス）の二次的堆積層である。

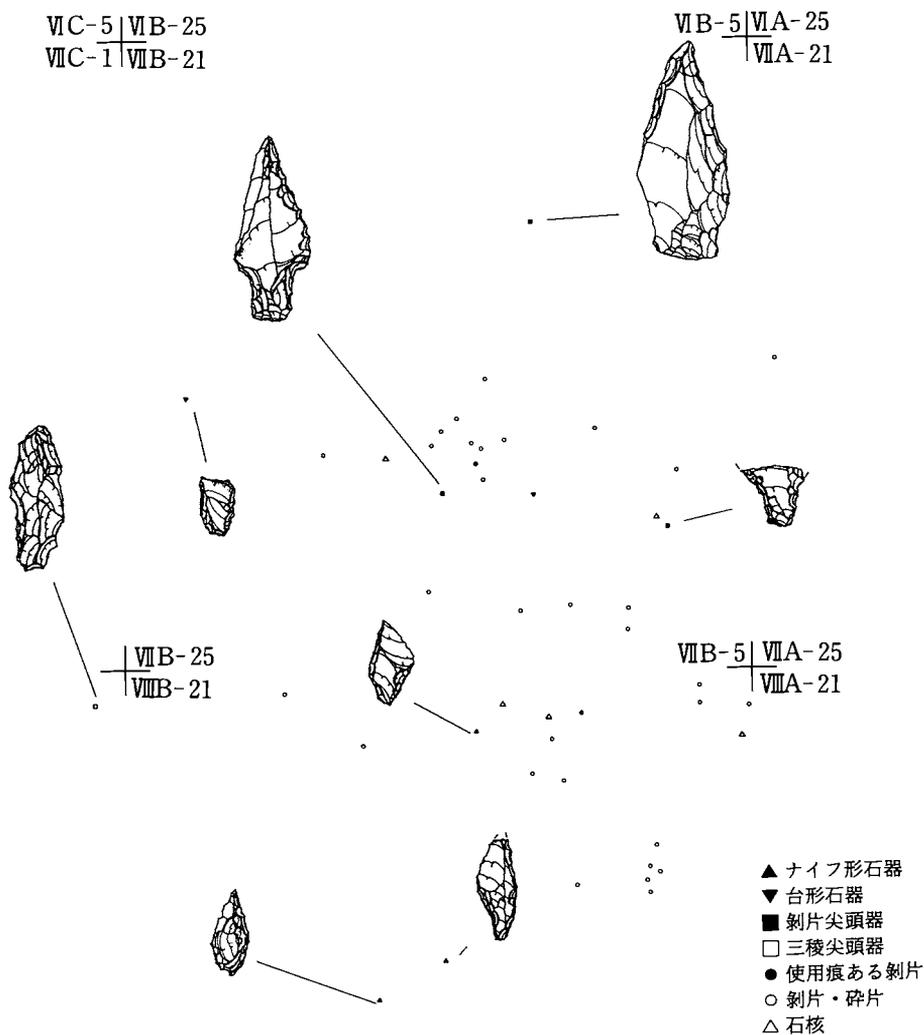
第VII b層は、灰白色土層で入戸火砕流（シラス）である。この丘陵の基盤をなす層である。この層の堆積は厚く、西側崖面で確認すると30m以上である。

VII a層・VII b層とも無遺物層である。

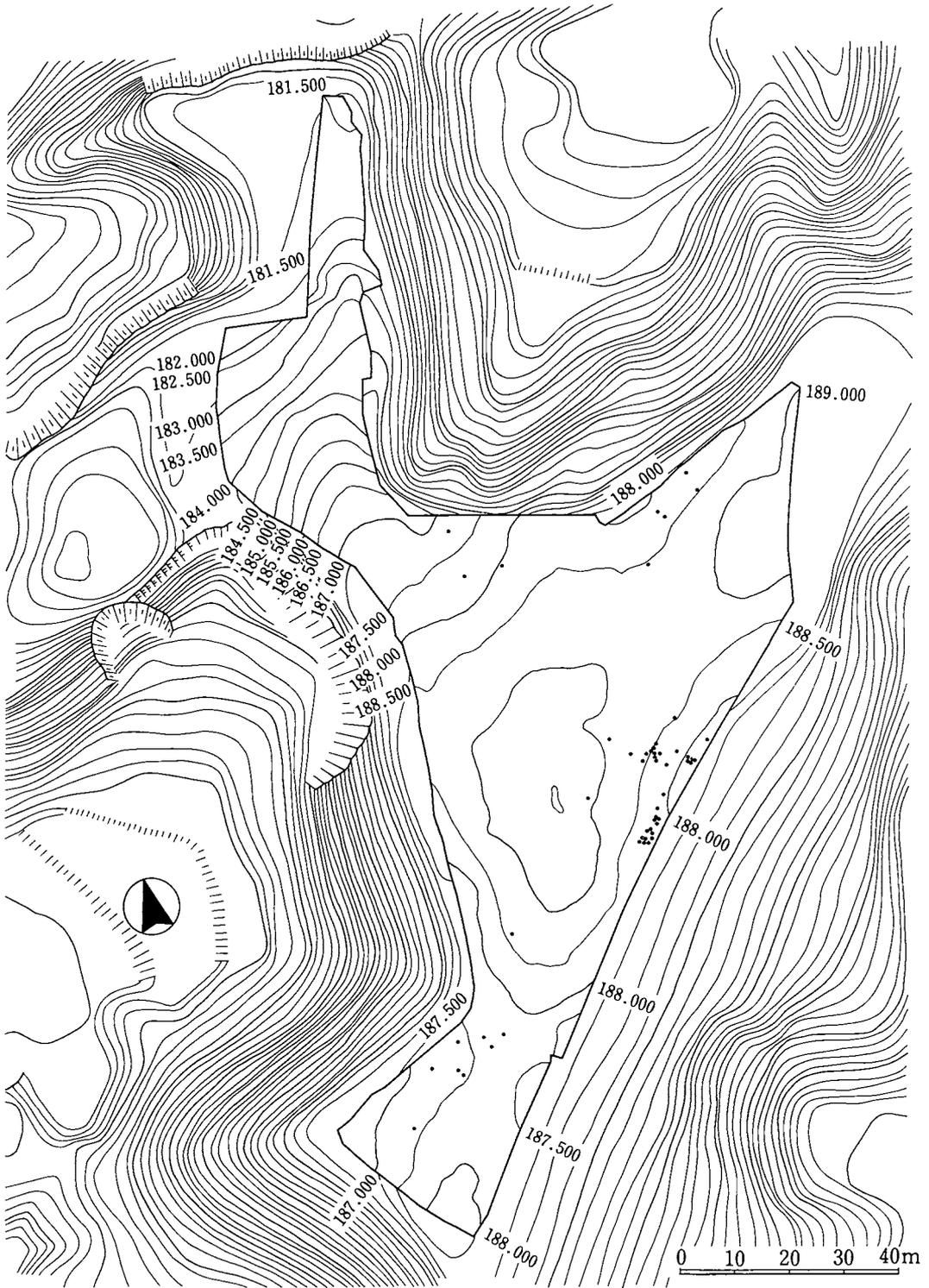
第 III 章 調 査 の 成 果

第 1 節 先土器時代の遺物と分布

先土器時代の調査は、遺跡全面において実施した。その結果VI層という、入戸火砕流の直上の層に包含層を持つナイフ形石器を主体とした石器が検出された。しかし遺物の検出された位置は、北東側の谷部、東側緩斜面及び南側斜面部で、包含層であるVI層は、東側斜面部にわずかに堆積し、包含層の層厚は薄く良好とは言い難い。また東側斜面部以外では、縄文時代早期の包含層であるV層に混入している遺物もみられた。その出土石器の内容はナイフ形石器や三



第 7 図 遺物分布図



第8図 遺物分布図(先土器時代)

第3表 先土器時代石器組成表

器 種	計 (%)	珪 岩	黒 耀 石	安 山 岩	砂 岩	凝 灰 岩
ナイフ形石器	15(50.0)	5(33.3)	9(60.0)	1(6.7)	—	—
三稜尖頭器	4(13.5)	2(50.0)	2(50.0)	—	—	—
削 器	1(3.0)	1(100.0)	—	—	—	—
彫 器	1(3.0)	1(100.0)	—	—	—	—
二次加工ある不定形石器	4(13.5)	1(25.0)	—	3(75.0)	—	—
使用痕有剥片	5(17.0)	2(40.0)	—	3(60.0)	—	—
石 器 総 計	30(43.0)	12(40.0)	11(36.7)	7(23.3)	—	—
石 核	5(7.0)	2(40.0)	2(40.0)	1(20.0)	—	—
剥 片 ・ 碎 片	35(50.0)	5(14.3)	27(77.1)	3(8.6)	—	—
総 計	70	19(27.1)	40(57.1)	11(15.8)	—	—

稜尖頭器を主体とする石器組成からなる石器群である。出土点数は70点と少ない。分布は、遺跡全体に広がるが、VI層の堆積している東側斜面部に、わずかに集中する傾向が窺える。

1. 石器組成と分布の構成

出土した遺物はすべて石器関係の資料であり、その総数は70点である（第3表）。その内訳はナイフ形石器15点、三稜尖頭器4点、彫器1点、削器1点、使用痕ある剥片5点、石核5点、剥片・碎片39点である。白鳥平A遺跡の先土器時代の遺物では、特にナイフ形石器が多く検出されている。石材では、珪岩（19点）、黒耀石（40点）、安山岩（11点）で黒耀石が卓越している。石器の分布は、全面に広がるが北東部の北側に開く谷部と東部の緩斜面、南側の西側斜面、それぞれにわずかにかたまる傾向がみられるが、包含層の堆積は東側斜面部のみである。その他の出土地点での層位は、V層中である。

2. 出土石器とその分布

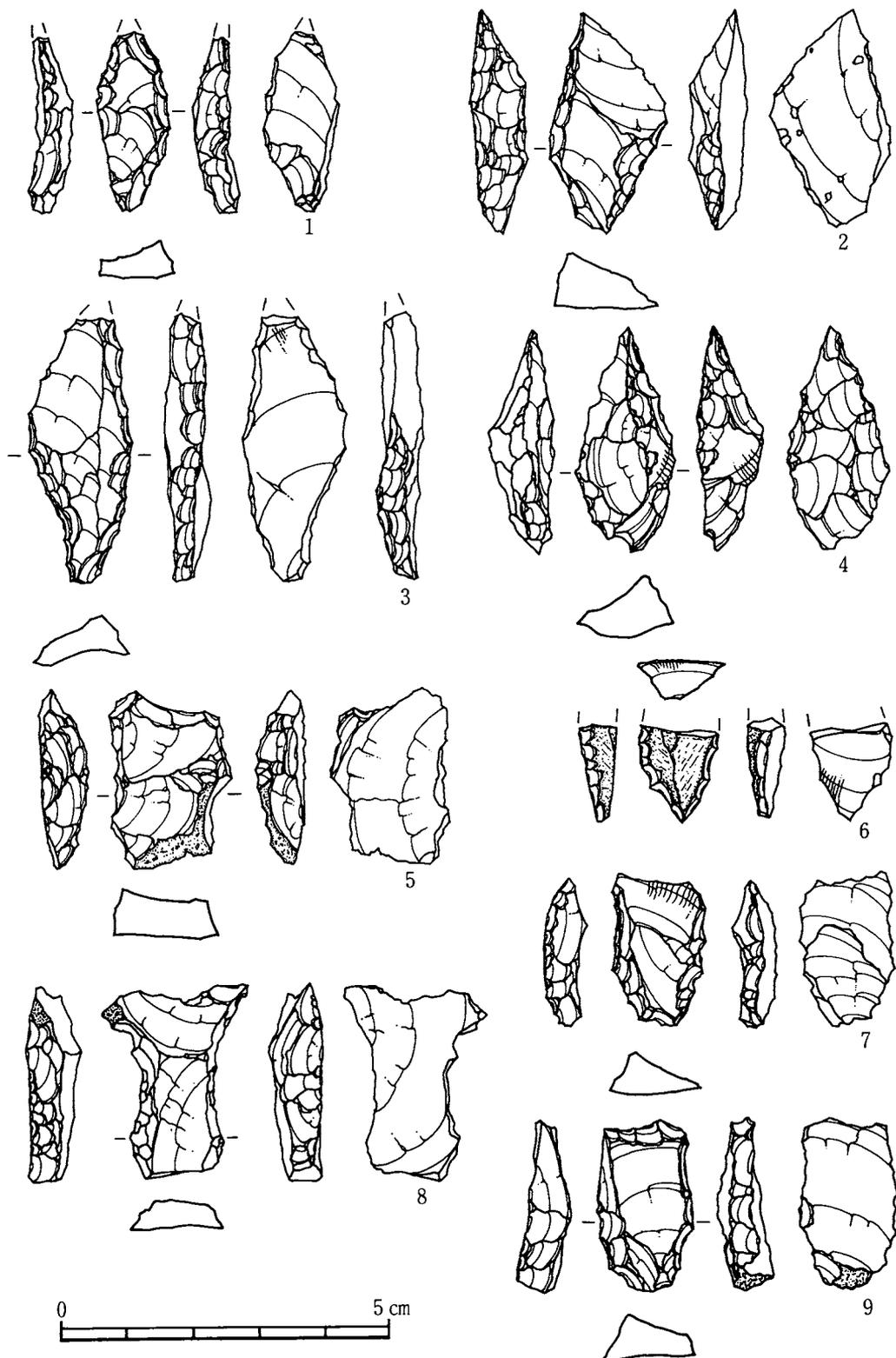
ナイフ形石器（第9図1～13、15、16）

ナイフ形石器は15点出土したが、石器組成の中に占める割合は、50%と極めて高い数値を示している。石材の内訳は珪岩5点、黒耀石9点、安山岩1点である（第3表）。

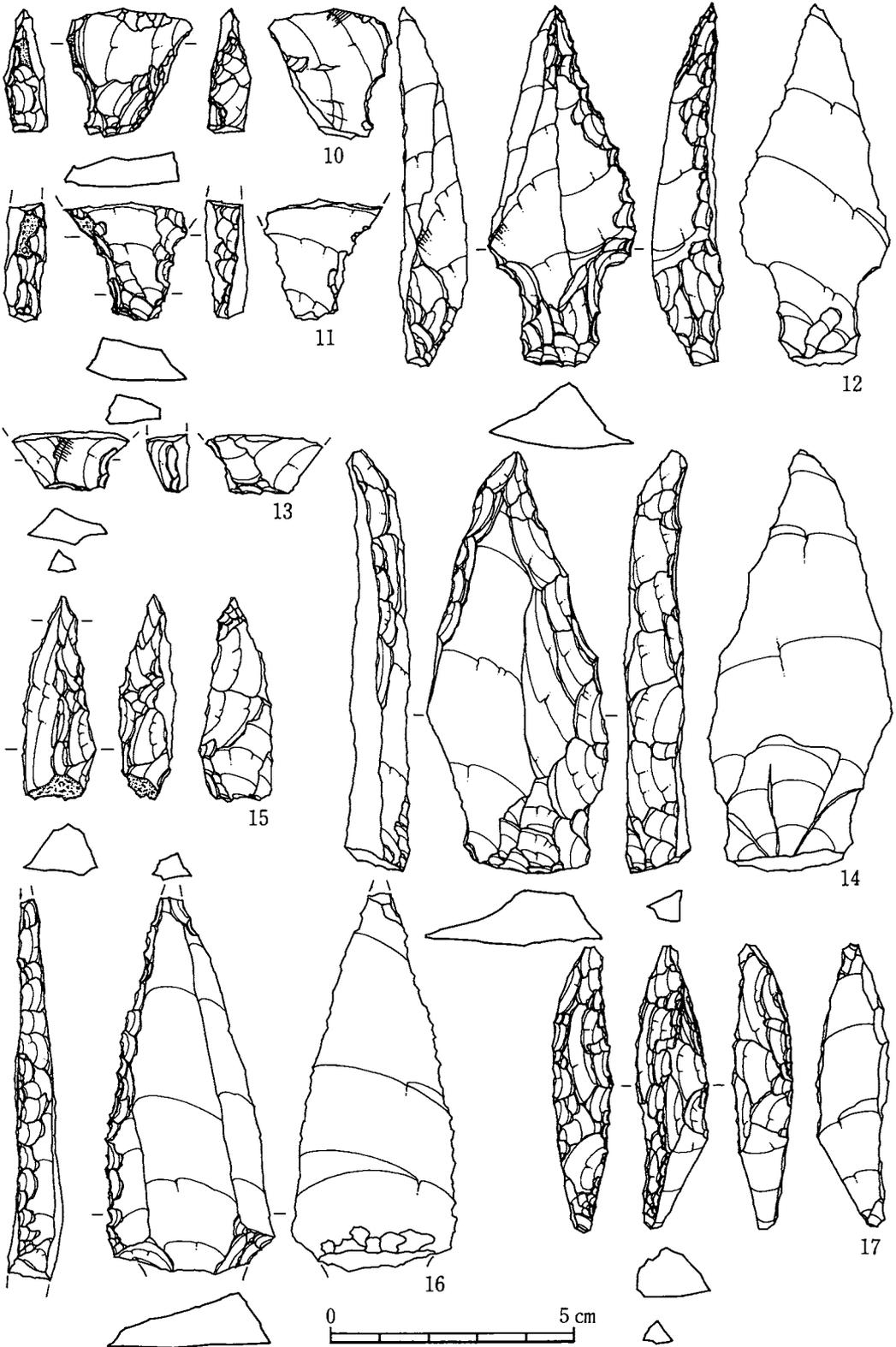
ナイフ形石器の分布は、その大半が東側緩斜面に集中する傾向がみられ8点検出されている。15点のナイフ形石器をその刃潰し加工の部位や形状によって、第1類～第3類に分類できる以下、類ごとに説明を行う。

第1類(第9図1～7、第10図11～13、15、16)

第1節 先土器時代の遺物と分布



第9図 石器実測図



第10図 石器実測図

第1節 先土器時代の遺物と分布

第4表 石器計測表

No	器種	石材	計測値				欠損部位	登録番号
			長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
1	ナイフ形石器	珪岩	(2.71)	1.01	0.56	(1.87)	先端部欠損	4667
2	〃	黒耀石	3.31	1.80	0.87	3.60	—————	13055
3	〃	珪岩	(4.00)	1.59	0.61	(3.62)	先端部欠損	18061
4	〃	黒耀石	3.38	1.51	0.98	3.05	—————	17964
5	〃	〃	2.70	1.70	0.70	3.68	—————	6777
6	〃	〃	(1.37)	(1.19)	(0.58)	(0.15)	上半部欠損	124
7	〃	〃	2.21	1.40	0.62	1.88	—————	14526
8	〃	〃	2.82	2.20	0.82	3.20	—————	17736
9	〃	珪岩	(2.61)	1.41	0.65	(3.08)	先端部欠損	3060
10	〃	黒耀石	2.59	2.55	0.80	4.52	—————	6753
11	〃	〃	(2.39)	(2.60)	(0.79)	(4.10)	上半部欠損	17546
12	〃	珪岩	7.30	3.02	1.44	22.62	—————	18062
13	〃	黒耀石	(1.11)	(2.83)	(0.88)	(1.84)	上半部欠損	8048
14	〃	安山岩	8.55	3.69	1.20	37.70	—————	4429
15	三稜尖頭器	黒耀岩	4.13	1.50	1.18	4.95	—————	17618
16	ナイフ形石器	珪岩	(7.69)	3.40	1.08	27.25	基部欠損	4625
17	三稜尖頭器	〃	5.80	1.49	1.21	9.35	—————	16536
18	〃	黒耀石	5.79	2.05	1.70	16.89	—————	12963
19	〃	珪岩	3.52	1.50	1.09	4.29	—————	4617
20	彫器	〃	4.57	1.39	0.70	3.80	—————	500
21	削器	安山岩	3.41	2.91	1.00	8.75	—————	2902

第1類のナイフ形石器は、石器本体の二側縁に刃潰し加工がみられみられるもので、平坦剝離がみられる場合もある(1、4、7)。この類型に属するものは、その形状の特徴からa、bに細分できる。1a類は、刃部が斜めに設定され、原則として先端部を持つもの(1~4)である。1b類は、刃部が石器本体の主軸線に対して直角に設定されるもの(5、7、8、9、10)で、台形石器と呼称されるものに相当する。

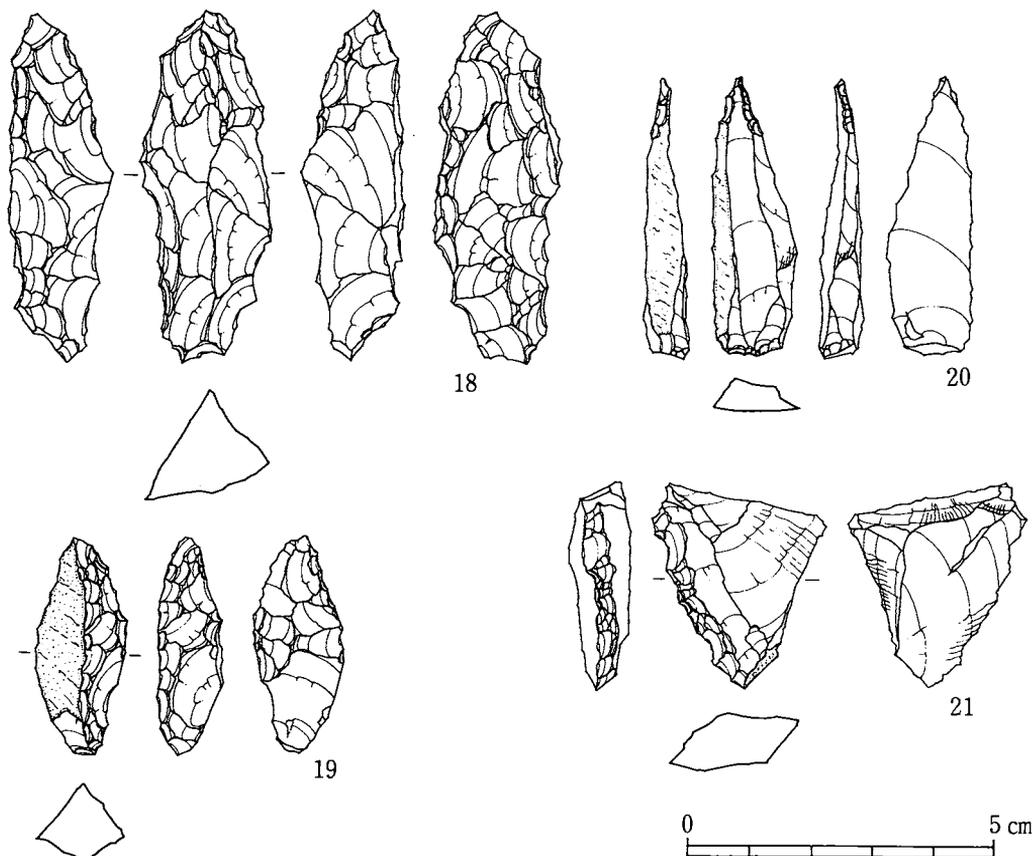
1a類は、4点検出された(1~4)。1は、縦長剝片を素材とし、基部側に打面部をおき裏面基部側に平坦剝離を施す。左右両側縁とも裏面から、刃潰し加工が施される。二側縁加工のナイフ形石器である。2は、比較的幅広の剝片を素材とし打面部を左位において、その素材剝片上部打面側に表裏両面から刃潰し加工を施す。また右側縁下半部にも裏面から細かい刃潰し加工を施す。刃部は右位に設定する。3は、縦長剝片を素材とし、打面部は基部側におく。両側縁とも裏面側から刃潰し加工を施し、刃部を左位に設定している。4は、素材となる剝片の状態は、裏面にみられる平坦剝離により不明である。両側縁とも裏面からの調整剝離により

作り出されて、刃部は左位に設定されている。

1 b類は、5点検出された(5、7、8、9、10)。5は、打面部を左位におき素材剥片上部を裏面から刃潰し加工を施す。右側縁は、裏面から6枚の剥離調整が施されている。7は、風化して光沢がない黒耀石製である。縦長剥片を素材とし、打面部を基部側におき、打点部は平坦剥離により削除されている。調整は左側縁に裏面から刃潰し加工を施し、右側縁部の調整は裏面側から細かい調整剥離が施されているが、刃潰し加工とは違い平坦剥離である。8は、幅広の縦長剥片を素材として、打面部を右位上部方向におきその素材剥片の縁辺を刃部としている。左右側縁部の調整は裏面から施し、両側縁とも抉入状に作り出されている。台形様石器である。9は、縦長剥片を素材とし、打点部を基部側におく。両側縁とも裏面からの調整加工を施す。刃部は潰れによる欠損である。10は、縦長剥片を素材として、打面部を右位におき左右側縁の刃潰し加工は左側縁部においては裏面から、また右側縁部では表面から施す。表面基部側に右側縁より平坦剥離を施す。

第5表 石器計測表

No	器種	石材	計測値				欠損部位	登録番号
			長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
22	二次加工ある剥片	珪岩	3.45	3.12	0.68	10.65	—————	14653
23	〃	〃	3.60	1.84	0.53	3.51	—————	14568
24	〃	〃	3.10	1.49	0.69	2.48	—————	17795
25	〃	〃	2.55	2.03	0.80	4.85	—————	7246
26	使用痕ある剥片	〃	(3.35)	2.52	0.79	7.60	先端部欠損	4593
27	〃	〃	8.27	2.90	1.02	19.80	—————	2883
28	〃	安山岩	6.47	3.58	1.10	28.00	—————	3053
29	〃	〃	5.86	2.42	1.40	15.44	—————	7848
30	〃	砂岩	4.72	1.39	0.96	4.36	—————	1835
31	剥片	珪岩	5.02	3.09	0.78	14.70	—————	10392
32	〃	安山岩	8.22	2.36	1.59	18.36	—————	16847
33	〃	〃	5.80	2.89	1.00	26.18	—————	3040
34	〃	珪岩	4.02	2.54	1.01	12.80	—————	17079
35	〃	〃	4.18	2.35	1.16	8.78	—————	2881
36	〃	安山岩	6.94	3.72	1.15	36.44	—————	3061
37	〃	珪岩	5.75	2.82	2.19	26.46	—————	2963
38	〃	安山岩	5.08	3.14	1.45	10.44	—————	4762
39	石核	珪岩	5.70	2.89	3.10	53.69	—————	17542



第11図 石器実測図

第2類(第10図11、12、14、16)

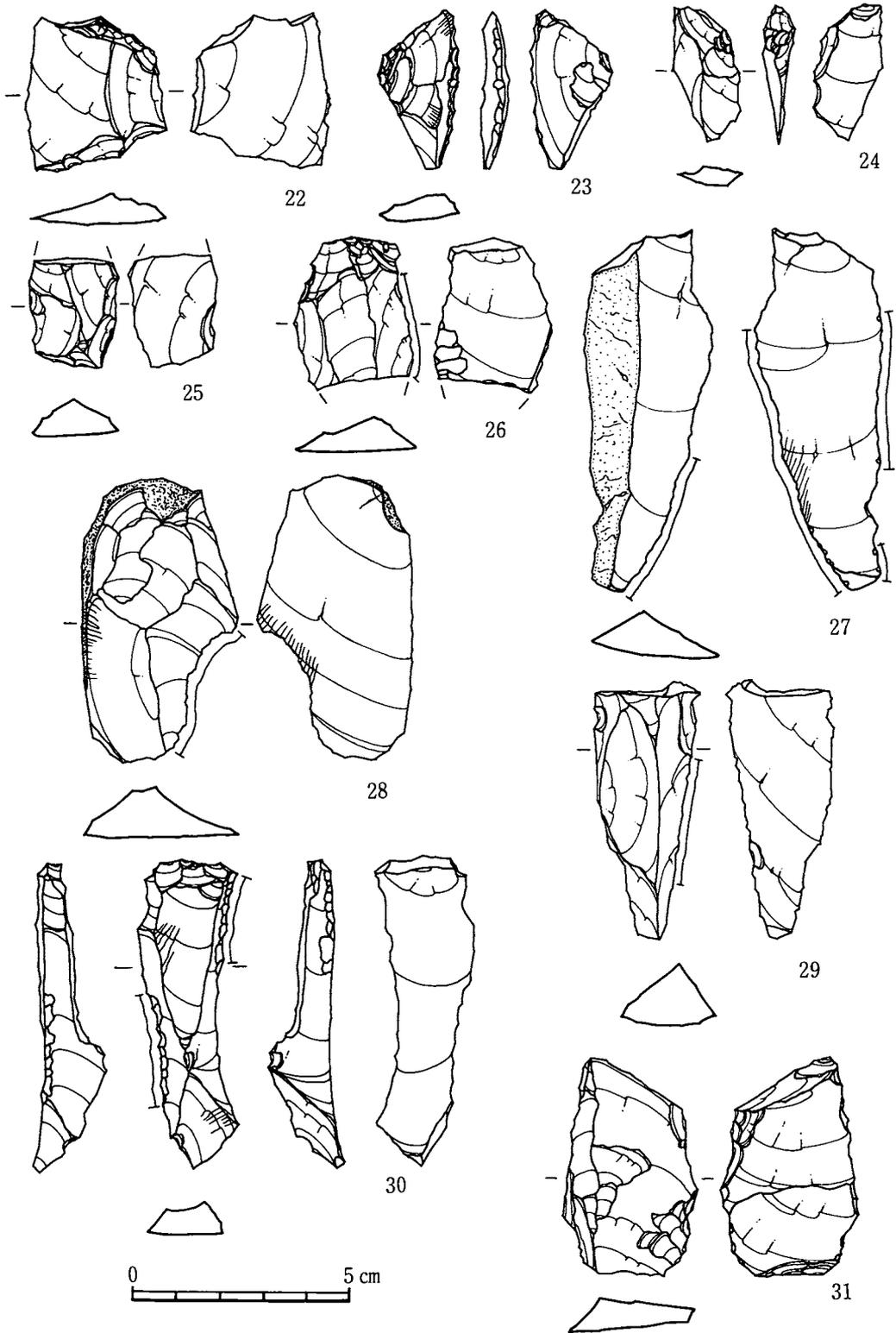
第2類のナイフ形石器は、素材となる縦長剥片の打面部を残して、その両側ないしは片側に抉入状の刃潰し加工が施されたもので、九州において剥片尖頭器と呼称されるものである。

11は、先端部側大半を欠損している。縦長剥片を素材として、基部は両側縁とも抉入状の調整加工が施されている。12は、縦長剥片を素材として、右側縁部及び左側基部に刃潰し加工が施され、基部両側を抉入状に作り出している。14は、安山岩製である。縦長剥片を素材とし、右側縁と石器先端部左位に刃潰し加工が施される。右側基部は浅い抉入状の調整加工を施し、左位は素材剥片の形状をそのまま利用している。16は、基部欠損である。縦長剥片を素材として、基部側では細く柄を作り出していることから二側縁加工の剥片尖頭器になるものであろう。

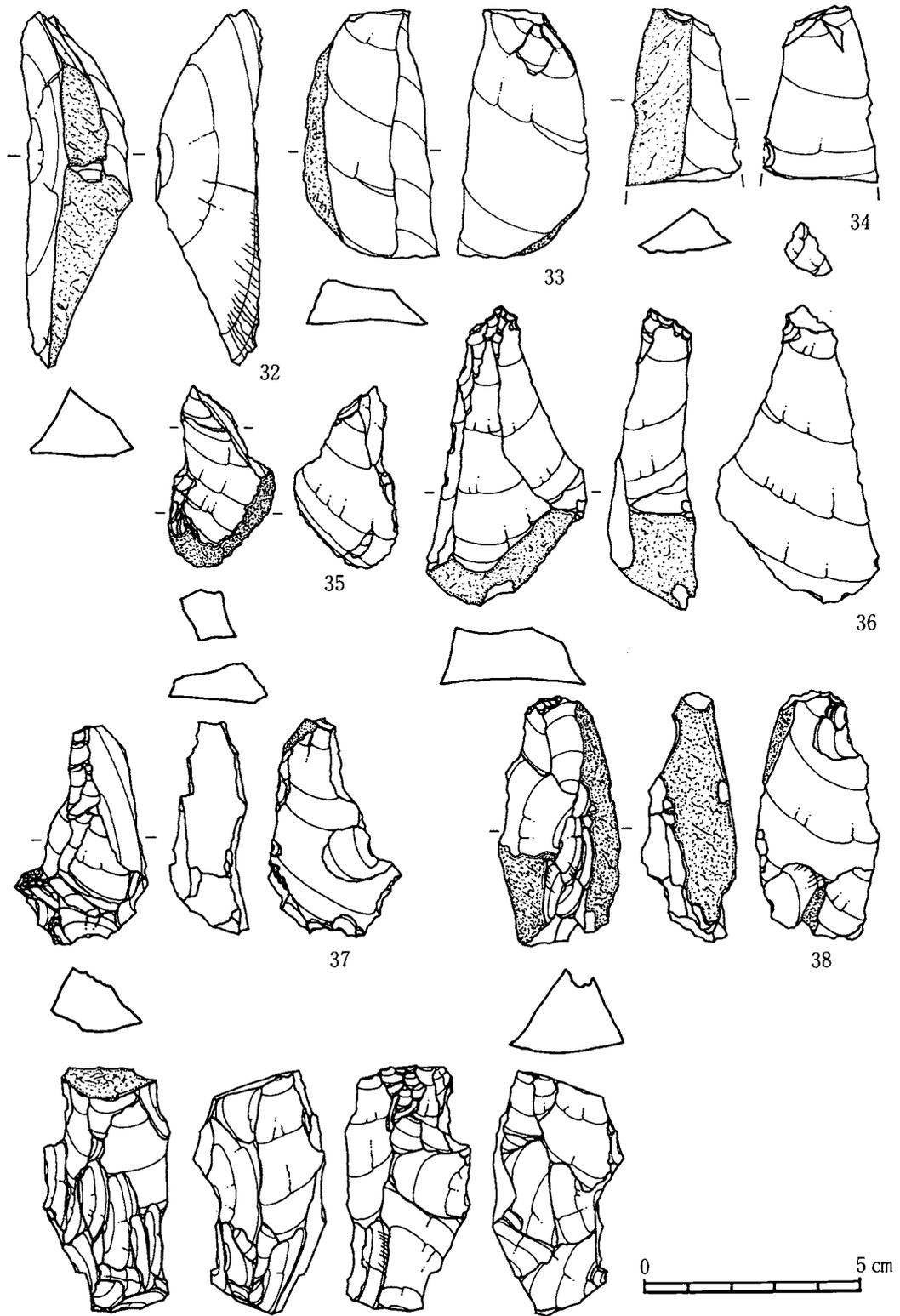
所属不明のナイフ形石器(第9図6、第10図13)

所属不明のナイフ形石器が2点存在した。6は、黒耀石製の縦長剥片を素材とし、表面には大きく転礫のローリング面を残す。調整加工は、小さく両側縁に施されている。13は、黒耀石製である。調整加工は、右側縁の基部側に裏面から抉入状に施している。

三稜尖頭器(第10図15、17、第11図18、19)



第12図 石器実測図



第13図 石器実測図 39

三稜尖頭器は、4点検出された。二面加工のもの(15,17,19)と、三面加工のもの(18)が出土した。石材別では黒耀石製(15,18)、珩岩製(17,19)である。15は、裏面に大きく3面の平坦剥離がみられ、素材となった剥片の形状は不明である。調整加工は、右側縁に稜上及び裏面から粗い加工を施し、断面三角形に作り出している。17は、珩岩製で、縦長剥片を素材とする。右側縁基部側を除き、二側縁とも稜上及び裏面から細かい加工を施している。また、石器先端部右側に1面の槌状剥離がみられる。18は、三面加工の三稜尖頭器である。器長に比べて器幅が広く、また器厚も厚いため全体形が「ゴロゴロ」とした形態をとっている。左右両側縁とも稜上及び裏面から、調整加工を施し断面三角形につくりだしている。19は、縦長剥片を素材とし、表面左側面には、礫面を残す。左側縁に、稜上及び裏面から細かく調整加工を施している。裏面中央部には、素材剥片の厚みを削除するように、平坦剥離によって調整加工が施されている。

彫器(第11図20)

彫器は、1点のみ検出された。20は、縦長剥片を素材とし、打面部を基部側におく。打面は、設定せず礫面を利用している。調整加工は石器先端部両側縁とも細かい加工を施し、左側縁上部から、1面の槌状剥離を施し彫刀面を作り出している。

削器(第11図21)

削器は、1点のみ検出された。21は、安山岩製である。横広の厚手の剥片を素材とし、表面右側縁に裏面側から調整加工を施し刃部を作り出している。

不定形石器(第12図22～30)

不定形石器には、使用痕のみがある石器(26～30)と二次加工がみられる石器(22～25)がある。石材では、珩岩製(23)と安山岩(22, 24, 25)がある。24は、縦長剥片を素材とし、右側縁辺部に6面の加工を施している。22、25は、横長剥片を素材として、2点とも素材剥片を折断している。

22は、右側縁に大小合わせて6面の調整剥離がみられる。25は、折断面に粗い調整剥離を施している。23は、左右両側縁に細かい調整剥離がみられる。使用痕のある石器は、5点検出された。すべて縦長剥片を素材とする。

剥片・碎片(第12図31～第13図38)

剥片・碎片類は全部で35点検出された。その石材別の内訳は、珩岩5点、黒耀石27点、安山岩3点である。これらの資料の中で8点を図示した。以下遺物ごとに説明を加えていきたい。

31～34は、単設打面の剥片である。31、33、34は、縦長剥片である。この中で33は二稜、34は一稜である。35～38は、剥離作業面の整理剥片である。

石核 (第13図39)

石核は、全部で6点検出された。その石材別の内訳は、珪岩2点、黒耀石3、安山岩1点である。これらの資料の中で1点を図示した。39は、縦長剥片の剥出作業面と幅広の剥片の剥出作業面とがある。縦長剥片は、上下の平坦面を打面として剥出を行っている。また幅広の剥片は、その作業面を打面として、剥出を行っている。

3. まとめ

先土器時代は、遺跡の基本層位では第VI層を包含層とする。このVI層は、シラス(AT)直上にあたる。この包含層の堆積は、東側斜面部に薄く存在しており、ブロックを形成している。他の石器の分布は広く遺跡全面にみられ、まとまりとしては確認できなかった。

石器組成は、ナイフ形石器を中心とし三稜尖頭器、彫器、削器、二次加工ある不定形石器、使用痕ある剥片である。これらの出土石器の中で、ナイフ形石器の占める割合は、50%である。またその中には、1a類(切出状)4点、1b類(台形石器)5点、2類(剥片尖頭器)4点、不明2点であり、それぞれに差がない状況である。このような石器組成は、大丸・藤ノ迫遺跡(熊本県教育委員会 1986)、小牧III A遺跡(長野 1979)に類似する。

参考文献

- 木崎 康弘 『大丸・藤の迫遺跡』 熊本県文化財調査報告第80集 1986
木崎 康弘 『狸谷遺跡』 熊本県文化財調査報告第90集 1987
西住 欣一郎 『鼓ヶ峰遺跡』 熊本県文化財調査報告第96集 1988
西住 欣一郎 『天道ヶ尾遺跡』 熊本県文化財調査報告第111集 1990
長野 真一 「小牧III A遺跡の紹介」『指宿史談』創刊号 1979
肥後考古学会 『肥後考古』第5号(特集:熊本県の旧石器文化) 1985
清水 宗昭 「剥片尖頭器について」 古代文化第25巻第11号 1973
緒方 勉・古森政次 『下城遺跡II』 熊本県文化財調査報告第50集 1980
江本 直 『熊本県旧石器時代調査報告書』 熊本県文化財調査報告第81集 1986

第2節 細石器文化の遺物

細石器文化の遺物は、細石核11点・細刃器11点検出された。石材は、すべて良質の黒耀石である。しかしこの石器文化は、明確な包含層をもっておらず、先土器文化の包含層である第VI層と縄文時代早期の包含層の第V層との中間に介在し、一部V層に混在する形で検出されている。

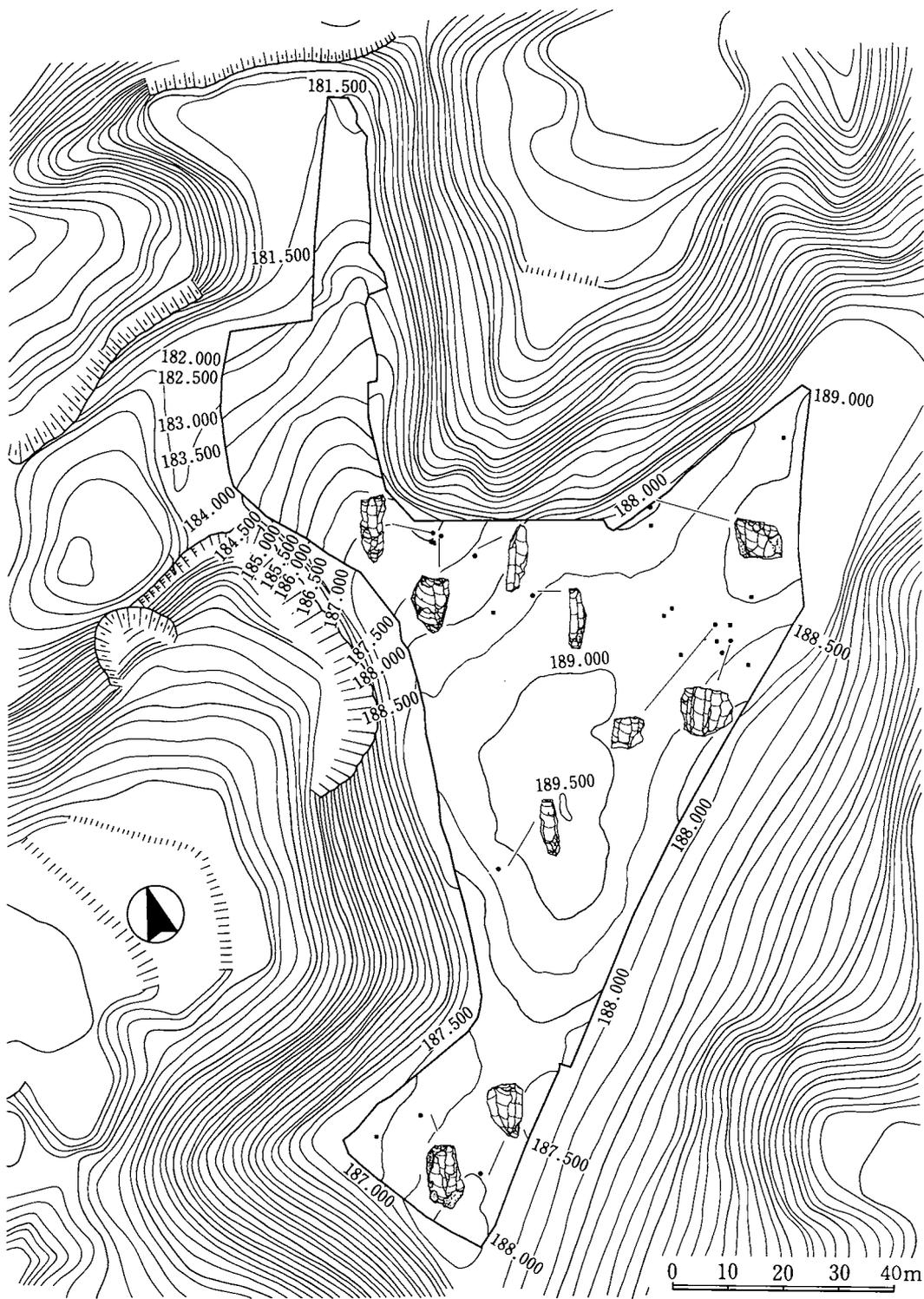
1. 出土遺物とその分布

細石器文化の遺物の分布は、先土器文化の遺物分布とほぼ同様に、北東部谷部及び東側緩斜面を中心に遺跡全面に広がる。また、細石器文化の遺物はすべて良質な黒耀石製で、礫面の状態や透明度及び不純物の状態から石材を分類することができる。以下、遺物ごとに説明を加えていきたい。

細石核（第15図1～第16図10）

1は、北側凹部で検出した。不純物をほとんど含まない飴色を呈した、良質の黒耀石製である。桑木鶴原産の黒耀石である。上下両端から剥出作業を行っている。上部打面は、転石のローリング面を打面としてそのまま利用している。下部打面は潰れが観察される。剥出作業は上部打面から、正面及び側面に2枚、そして下部打面から1枚行っている。2は、漆黒色の不純物を含まない良質の黒耀石製である。下半部を欠失している。打面部と剥出作業面との角度は、40度である。左側面及び背面に礫面を残し、打面調整のあと細刃器の剥出を行っている。3は、北側凹部で検出した。石質は飴色を呈し、不純物を含まない良質の黒耀石製で桑木津留原産である。打面と剥出作業面との角度は、40度である。左側面に礫面を残し、側面調整は行わず打面調整のあと4枚の細石刃の剥出を行っている。4は、北東側谷部で検出した。漆黒色の不純物を含まない良質の黒耀石製である。打面部と剥出作業面との角度は、60度である。右側面に小さく礫面を残し、上下両面とも切断である。打面調整のあと8枚の細刃器の剥出を行っている。5は、側面調整はみられない。左・右両側面及び背面に、礫面を残し、打面調整の後剥出作業を行っている。打面と剥出作業面との角度は、50度である。6は、原石の形状を大きく変化させず、打面調整を行った後細刃器の剥出を行っている。打面と剥出作業面との角度は、50度である。7、9、10は、剥出作業面の再生剥片である。8は、原石の形状を大きく変更せず、剥出作業面との角度が鋭角になるように、大きく剥離を施しその後細かい打面調整を行い細刃器の剥出を行っている。打面と剥出作業面との角度は、50度である。

第2節 細石器文化の遺物



第14図 遺物分布図(細石器文化)



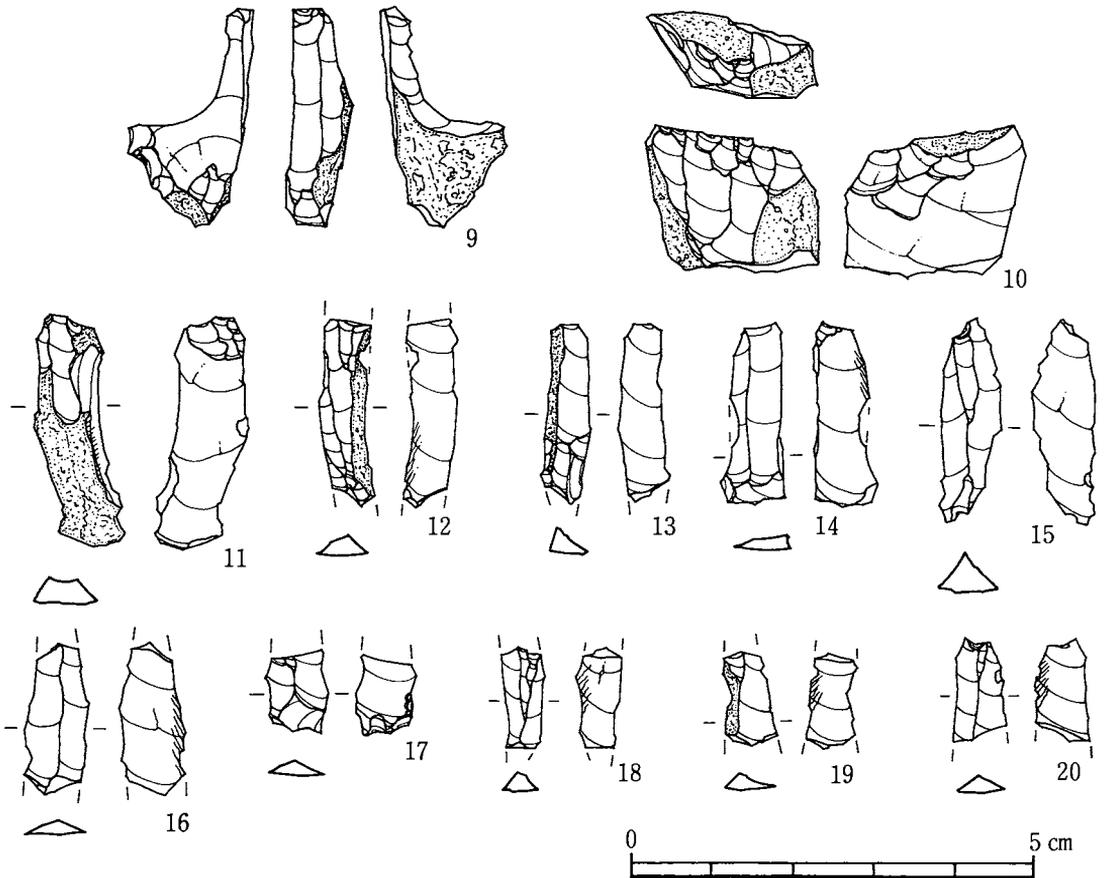
第15図 石器実測図

細刃器 (第16図11~20)

細刃器は、10点出土したが石材はすべて黒耀石である。また黒耀石の色調から2種類の原産地に分けることができる。ひとつは、飴色をした黒耀石で桑木津留原産である(13~16、19)。もうひとつは、漆黒色の黒耀石で原産地は不明である(11、12、17、18、20)。16~20は、頭部及び先端部を欠損する資料である。11~13、19は、表面に礫面を残し、細刃器剥出の初期段階の資料である。11は、完形の資料である。14は、左側縁をわずかに欠損している。17は、先端部だけの資料であり、20は、頭部のみの資料である。

2. まとめ

細石器文化に属する資料は、細石核と細刃器である。またこの石器文化の資料は、検出量が少なく、その包含状態も良好とはいえない。そのため、細石器文化の資料が細石核と細刃器のみの検出で、共伴する遺物等については不明である。しかし当該文化に伴う土器の検出はされなかった。細石核の特徴では、比較的小さい黒耀石原石を素材とし、その原石に側面調整は行



第16図 石器実測図

第Ⅲ章 調査の成果

わず、背面にかけて鋭角になるように打面調整を行い細刃器の剥出を行い、共通している。この状況は、城・馬場遺跡第2地点出土の細石核と類似している。また、素材となる黒耀石原石の特徴から、礫面の状態は類似するが内部の色調では2種類に分けられる。色調が鉛色をするものは、胸川支流の桑木津留川上流に原産地が存在し、宮崎県・鹿児島県との県境で確認されている。また漆黒色をする黒耀石原石は、原石の大きさはほぼ変わらない。しかし現在のところ原産地を特定できていない。

参考文献

- 肥後考古学会 『肥後考古』第5号(特集:熊本県の旧石器文化) 1985
大田幸博・下村 智 『里の城遺跡』 熊本県文化財調査報告第51集 1980
木崎 康弘 『狸谷遺跡』 熊本県文化財調査報告第90集 1987
江本 直 『熊本県旧石器時代調査報告書』 熊本県文化財調査報告第81集 1986
九州旧石器文化研究会 『九州旧石器時代関係資料集成Ⅰ』(細石器文化編) 1992
宮田 栄二 『西丸尾遺跡』 鹿児島県文化財調査報告第64集 1992

第3節 縄文時代早期の遺構と遺物

縄文時代早期の遺構と遺物は、鬼界カルデラを起源とするアカホヤ火山灰層下のIV層暗褐色土層及びV層黒褐色土層中より検出された。これらの遺構・遺物は、厚い火山灰に覆われており、開墾等の後世の攪乱を除けば比較的良好な状態で確認された。調査は、丘陵のほぼ全面において実施した。その結果、丘陵の最高部を取り囲むように多数の遺構・遺物を検出した。その内容は、集石19基・配石土坑3基・土坑3基の遺構と、塞ノ神式土器を中心とした早期土器群とそれに伴う石器・石製品・土製品などの遺物群である。

1. 遺構とその分布

(1)集石 (第18図～第30図)

調査の結果、19基の集石を検出した。遺構は、遺跡I区のほぼ全面に分布している。またこれらの集石遺構は、IV～V層上面で検出された。集石遺構の分布は、遺跡中央の最高部を中心に北西部、北東部、東部、南西部及び南側に分けられる。この中で北東部では、土坑をもたない集石が3基集中している。

1号集石(第18図)

西側斜面で検出された集石で、1.46m×1.06m、深さ0.25mの長楕円形の掘り込みをもっている。土坑内には、拳大の砂岩、加久藤溶結凝灰岩を中心に焼けて赤変した破碎礫が、95個詰まっている。埋土中から、擦糸文施文の土器の小破片と安山岩製の石鏃(第61図16)が検出された。土坑の埋土は、IV層を基本とした暗褐色土である、その中には、微細な炭化物を含んでいる。

2号集石(第19図)

遺跡南側で検出した集石で1.5m×1.2m、深さ0.25mの不整形の掘り込みをもっている。この土坑のなかには、砂岩、加久藤溶結凝灰岩を中心に、45個の破碎礫が詰まっている。土坑の埋土は、IV層を基本とした暗褐色土で、1～3mm程度の炭化物を微量に含んでいる。埋土中から、土器の小破片が1点出土したが、文様及び型式は不明である。

3号集石(第20図)

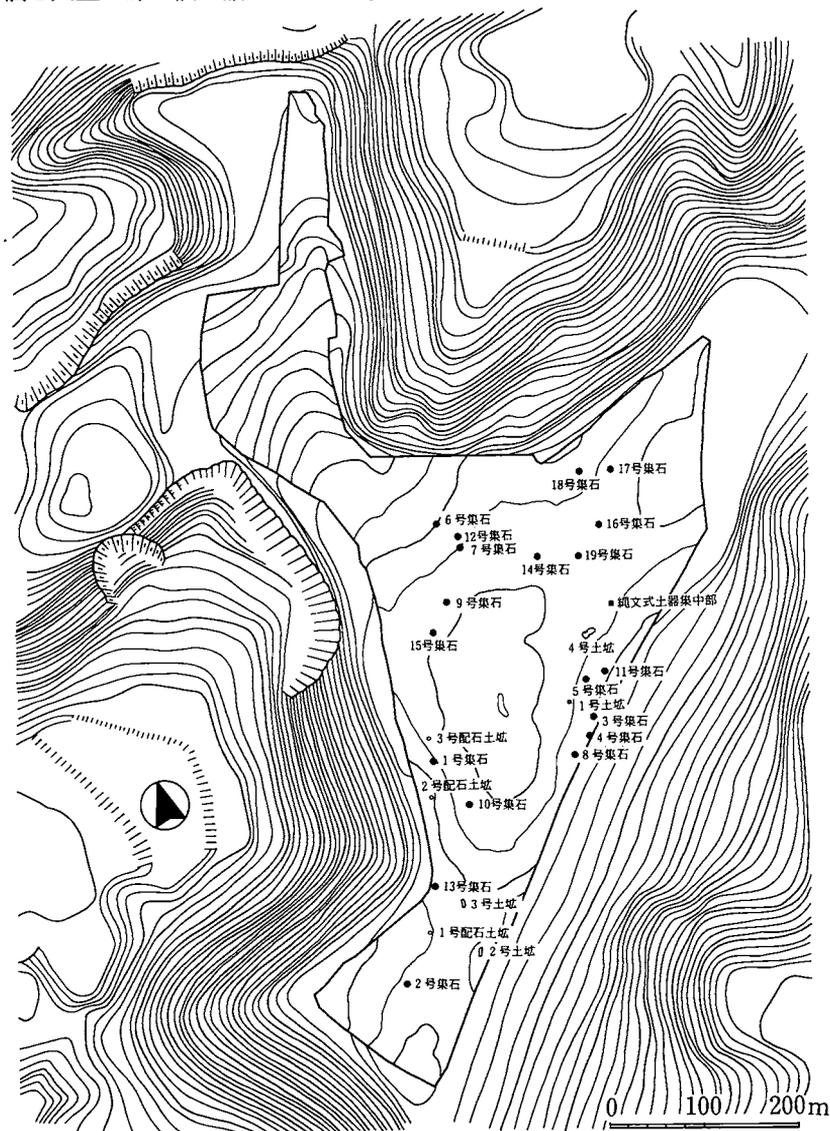
東側傾斜面で検出した集石で、1.2m×0.95m、深さ0.26mの楕円形の掘り込みをもっている。この掘り込みの中には、砂岩、加久藤溶結凝灰岩を中心に、65個の破碎礫及び円礫が詰まっている。土坑の埋土は、IV層を基本とした暗褐色土で、微量の炭化物を含んでいる。また土坑埋土中からは、塞ノ神式土器の胴部破片及び石皿、磨石も出土した。また、集石を構成する礫のほとんどが拳大で、赤変している。

4号集石(第21図)

3号集石の南側で検出した集石で、1.3m×0.8m、深さ0.24mの、楕円形の掘り込みをもって
いる。集石を構成する礫は、砂岩、加久藤溶結凝灰岩の、円礫、破碎礫である。また、大半の
礫が、赤変している。土坑の埋土は、IV層を基本とした暗褐色土で微量の炭化物を含んでいる。
伴出する遺物には、塞ノ神式土器の胴部破片がある。

5号集石 (第22図)

東側緩斜面で検出した集石で、0.9m×0.6m、深さ0.2mの掘り込みをもっている。この土坑
は北東-南西を主軸とする楕円形を呈する。。この土坑内には、拳大の加久藤溶結凝灰岩の破
碎礫が12個と大型の礫1個が詰まっている。またこれらの礫は主軸方向に偏在している。これ

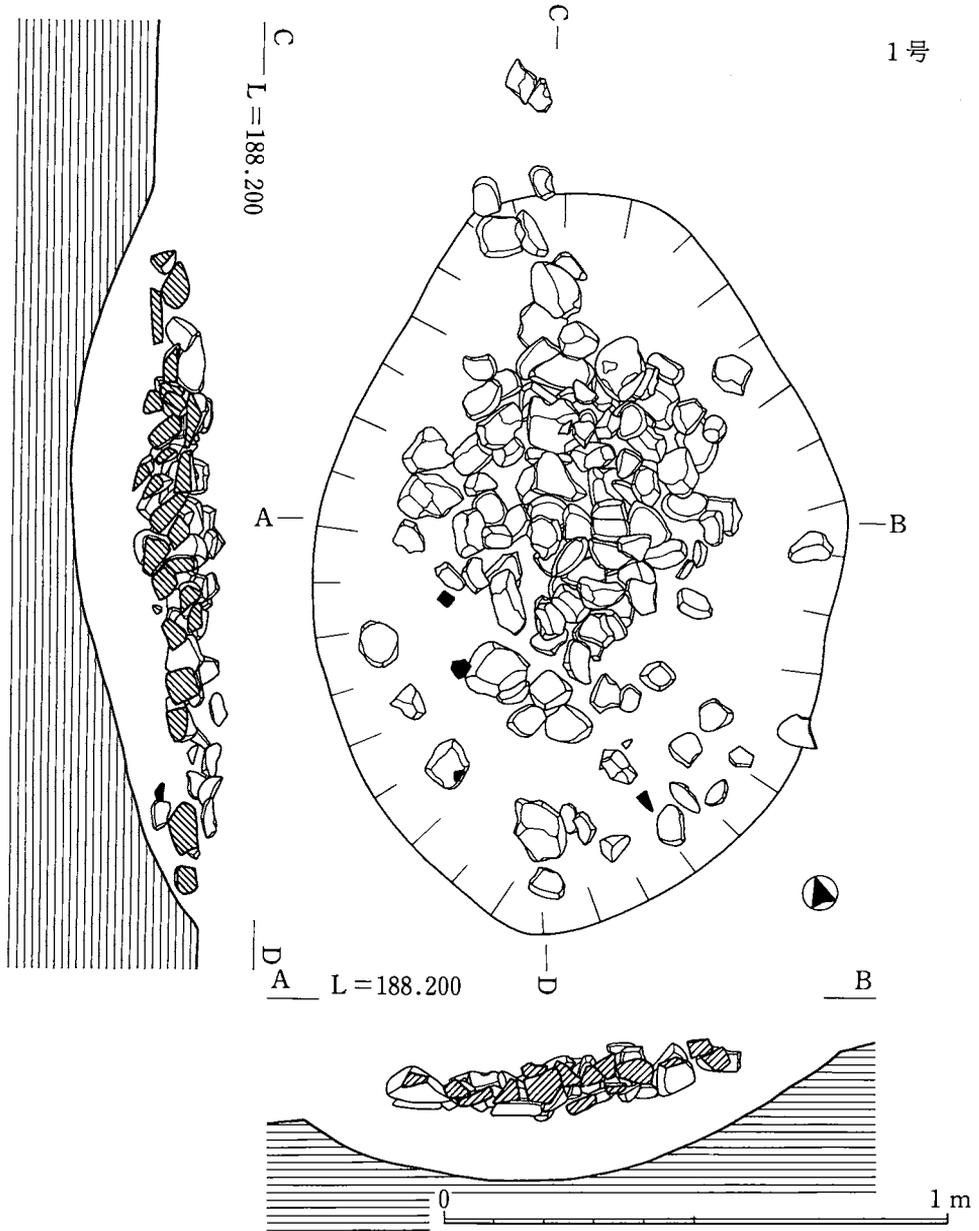


第17図 遺構配置図

ら大小の礫は、すべて赤変している。埋土は、IV層を基本とした暗褐色土で微量の炭化物を含んでいる。

6号集石(第22図)

遺跡北西部から検出された集石で、0.83m×0.57m、深さ0.16mの楕円形の掘り込みをもっている。土坑内には、砂岩・加久藤溶結凝灰岩を中心に、比較的大型の礫が22個詰まっている。また集石を構成する礫の中に、扁平な加久藤溶結凝灰岩の石皿が含まれている。微細な炭化物を



第18図 集石実測図

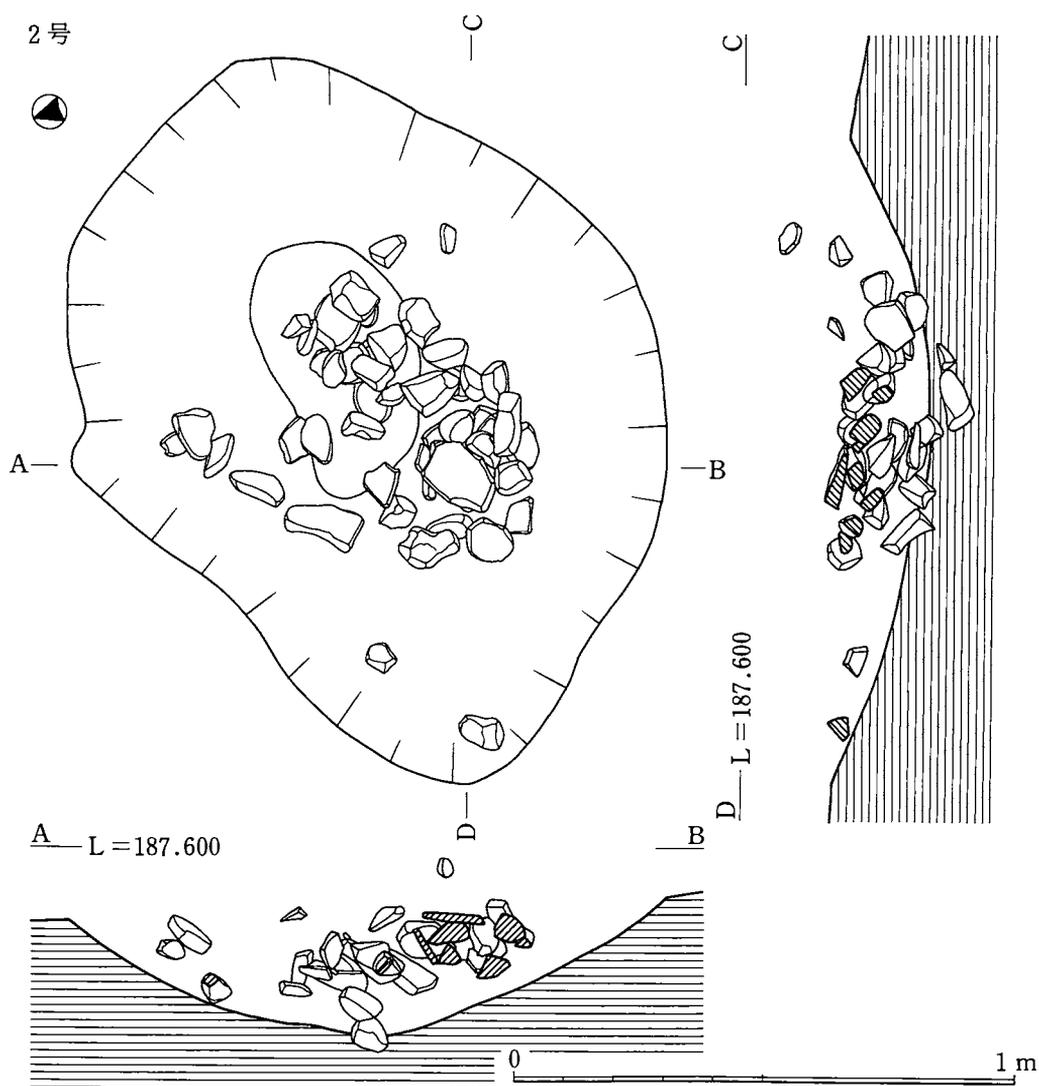
多量に含んでいる。土坑内から、土器等の遺物は検出されなかった。

7号集石(第23図)

北西部の6号集石に近接する地点で検出された。0.78m×0.6m、深さ0.22mの円形の掘り込みをもっている。集石を構成する礫は、31個で砂岩・加久藤溶結凝灰岩の破碎礫である。これらの礫は、ほとんどが赤変している。土坑の埋土は、IV層を基本とした暗褐色土で、微細な炭化物を含んでいる。この炭化物は、埋土中床面に近い部分で、わずかに増加する傾向にある。また土坑床面は、1号集石と同様にガチガチにしまり、赤味がかかった暗赤褐色を呈している。

8号集石(第23図)

東部傾斜面で検出された集石で、1.13m×0.70m、深さ0.24m 楕円形の掘り込みをもってい

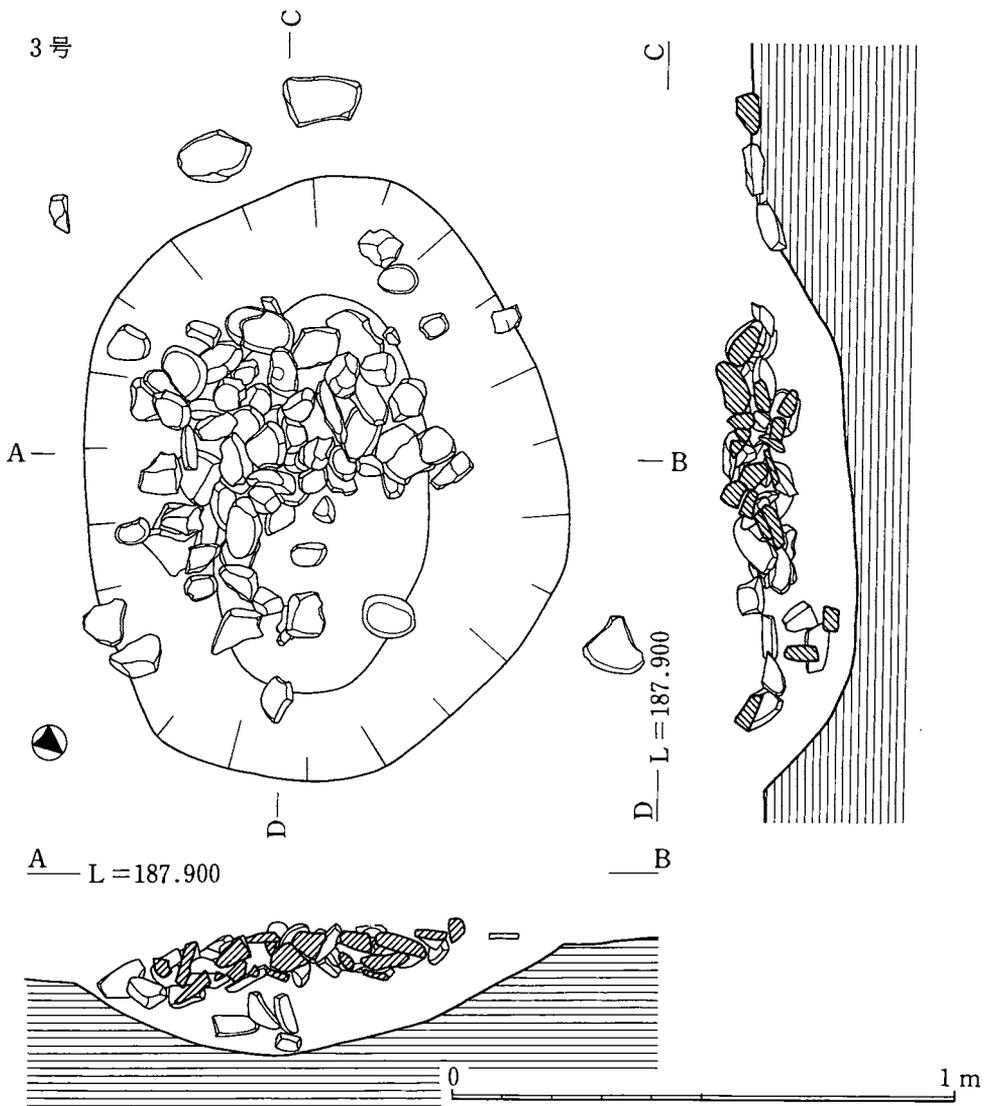


第19図 集石実測図

る集石を構成する礫は、63個の砂岩・加久藤溶結凝灰岩の拳大の破碎礫が詰まっている。またこれらの礫は、土坑東側に偏在している。土坑の埋土は、IV層を基本とした暗褐色土である。埋土中からは、黒耀石の原石が検出された。

9号集石(第24図)

北側で検出された集石で、0.8m×0.7m、深さ0.2mの掘り込みをもっている。集石を構成している礫は、大小17個で、すべて赤変している。また、土坑北側壁面及び中央床面直上に、扁平な大型の加久藤溶結凝灰岩を配する石組炉である。この大型で扁平な礫は、火を受けたと思われる赤変している。土坑は、V層上面からの掘り込みで、埋土はIV層を基本とした暗褐色土である。また、北側壁面及び床面とそれぞれの扁平礫との間には、しまりのある粘性を帯びた土



第20図 集石実測図

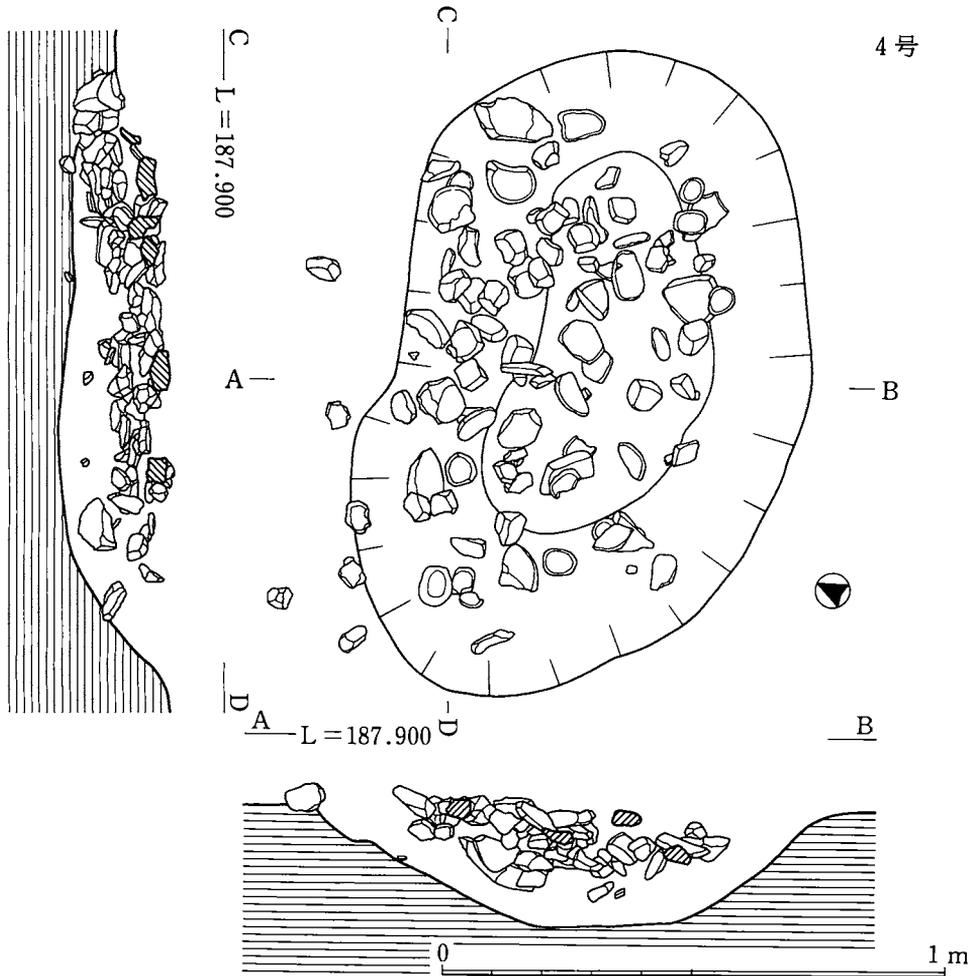
が存在した。埋土中から、遺物は出土しなかった。

10号集石(第25図)

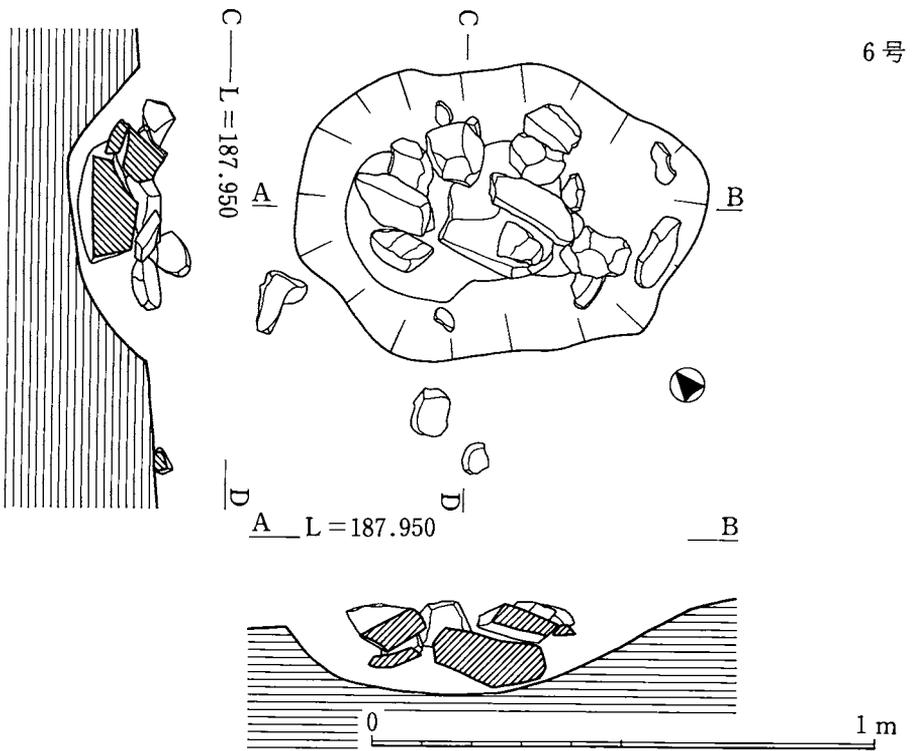
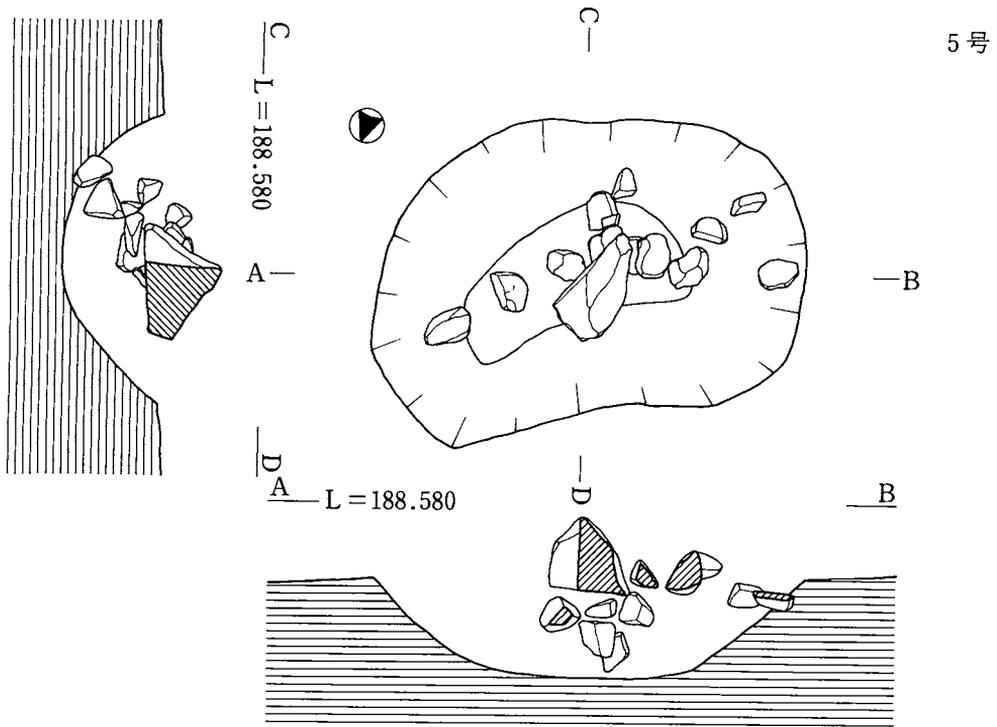
遺跡西側の1号集石に近接する地点で検出された集石で、直径0.8m、深さ0・28mの円形の掘り込みをもっている。集石を構成する礫は、26個の拳大の破碎礫である。またこれらの礫は、土坑南側にやや偏在する傾向がみられる。土坑の埋土は、IV層を基本としており、微量に炭化物を含んでいる。埋土中から、遺物は検出されなかった。

11号集石(第25図)

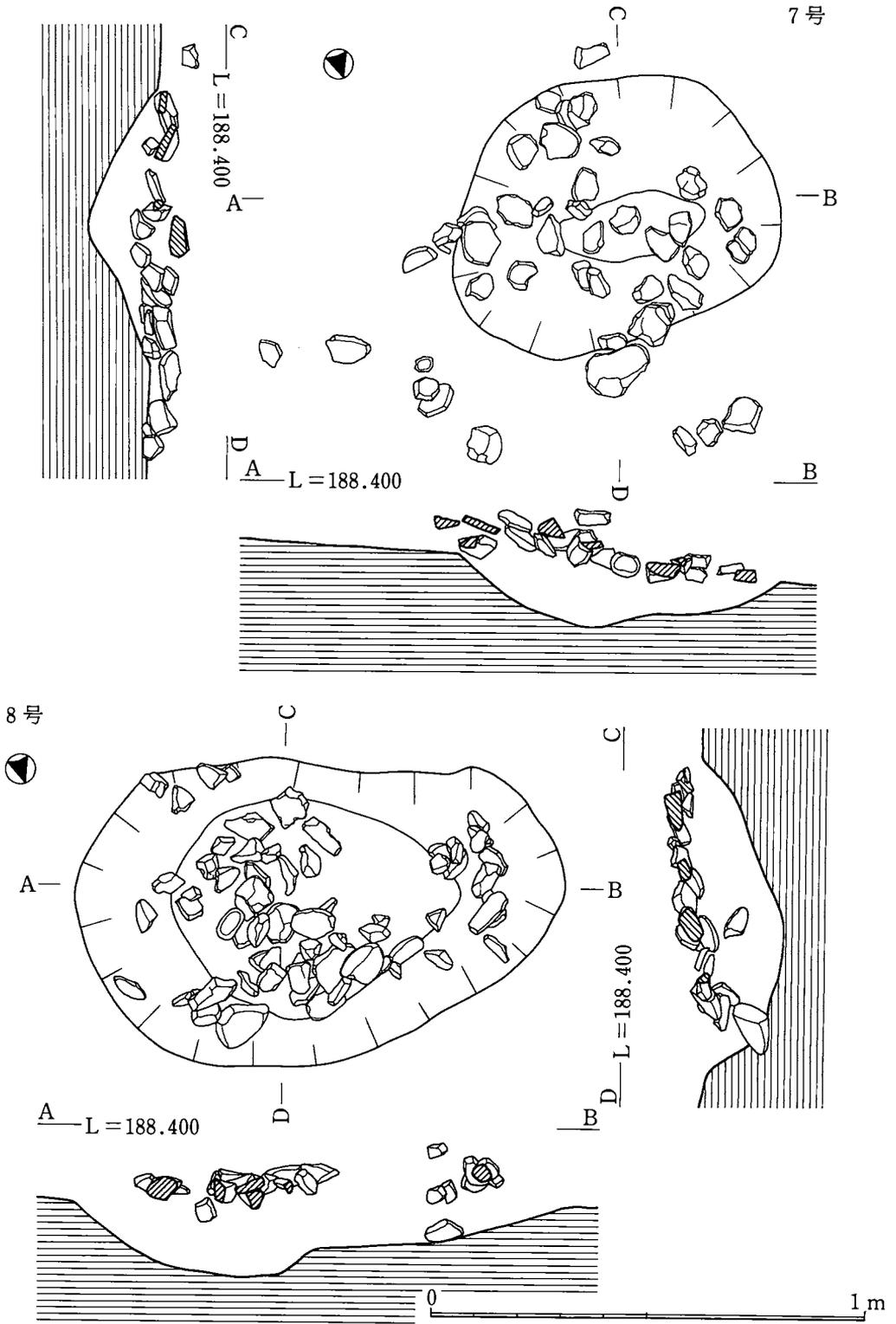
東側傾斜面で検出した集石で、1.0m×0.8m、深さ0・21mの不整形の掘り込みをもっている。集石を構成する礫は、砂岩・加久藤溶結凝灰岩の破碎礫42個が詰まっている。土坑の埋土は、IV層を基本として、微量の炭化物を含んでいる。また、土坑内の小穴の埋土は、褐色のサラサラとした土で、炭化物をまったく含まないことから、10号集石に伴うとは考えにくい。



第21図 集石実測図



第22図 集石実測図



第23図 集石実測図

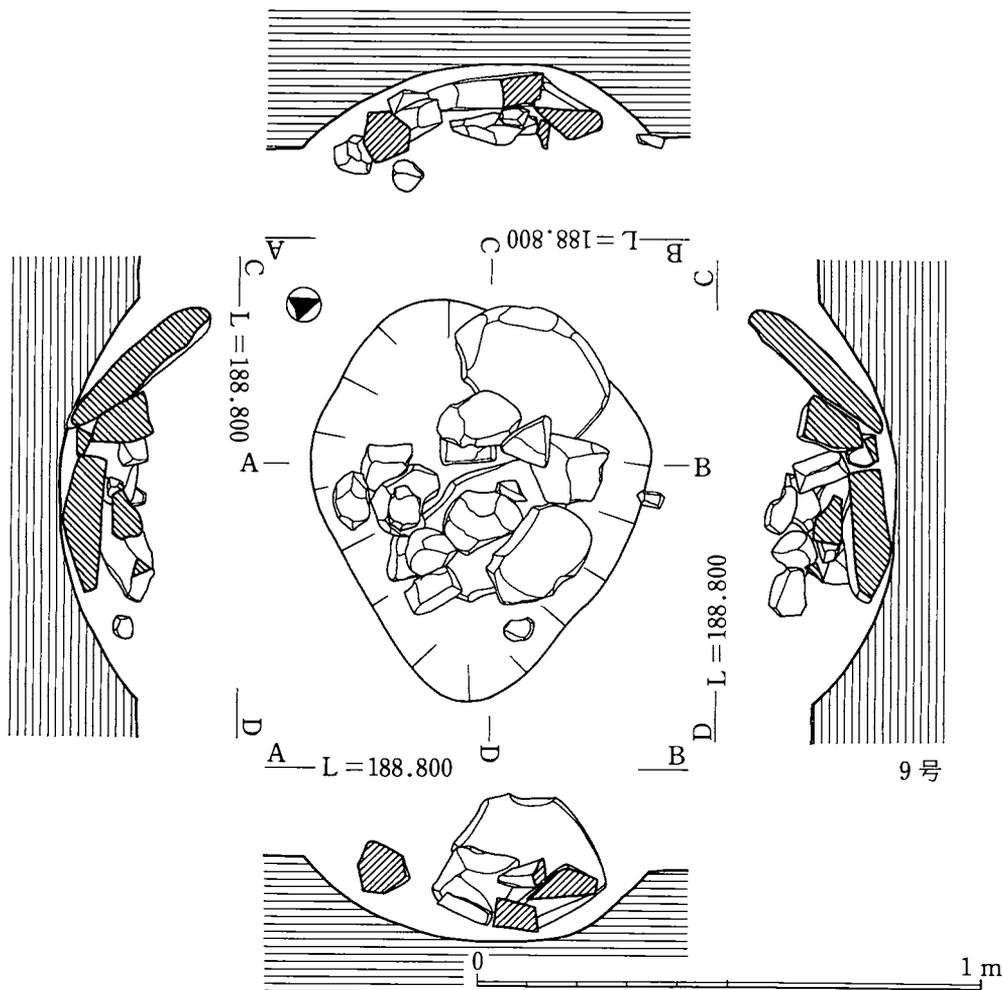
12号集石(第26図)

北西部で検出した集石で、0.85m×0.08m、深さ0.25m円形の掘り込みをもっている。集石を構成する礫は86個で赤変した破碎礫である。土坑の埋土は、IV層を基本とした暗褐色土で、上から下へ徐々にしまりが強くなる。また埋土には微細な炭化物を含んでいる。床面は、赤褐色のブロック状のガチガチの部分もみられる。また土坑内から塞ノ神式土器の胴部破片が出土した。この土器と同一個体の口縁部破片が、土坑外で出土している。

13号集石(第27図)

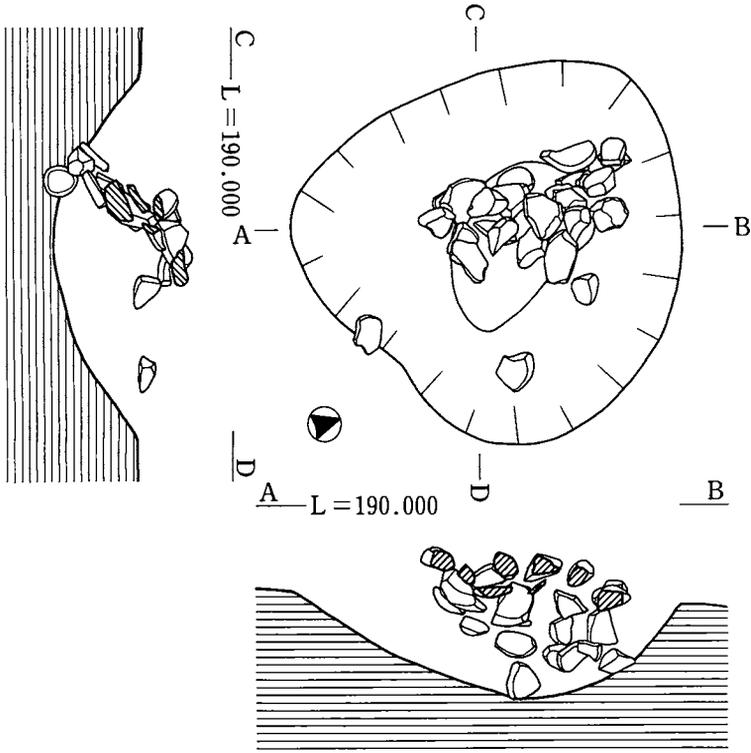
南側で検出された集石で、0.7m×0.6m、深さ0.13mの不整形の掘り込みをもっている。集石を構成する礫は、砂岩・加久藤溶結凝灰岩の破碎礫で、すべて赤変している。土坑の埋土は、IV層を基本とした暗褐色土で、微細な炭化物をわずかに含んでいる。

14号集石(第28図)

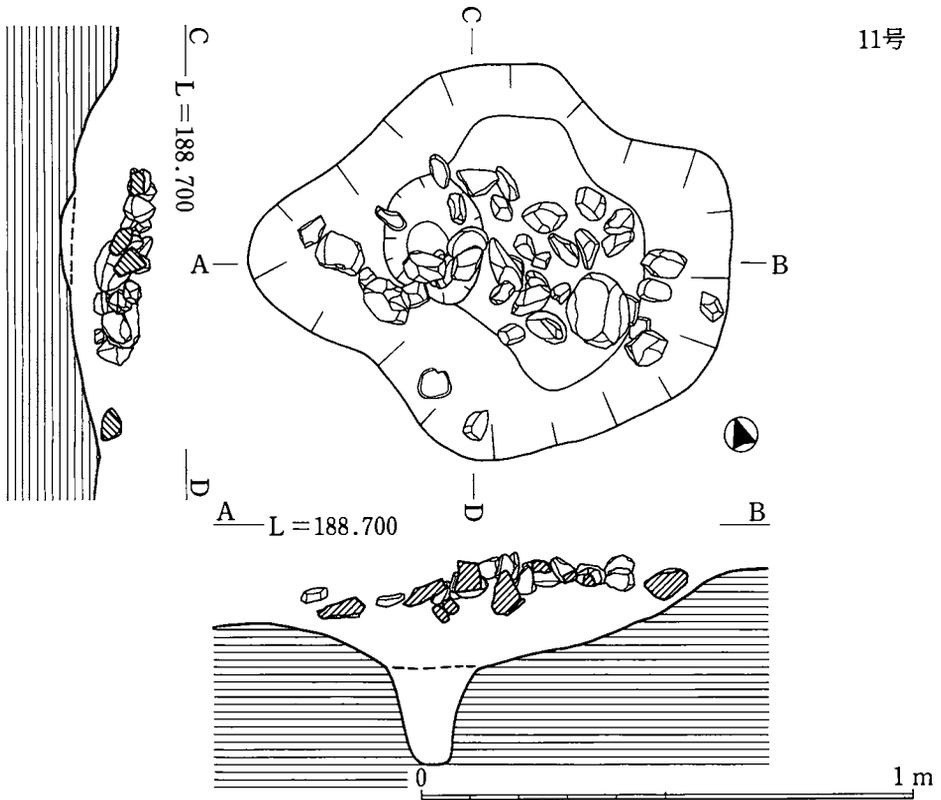


第24図 集石実測図

10号



11号



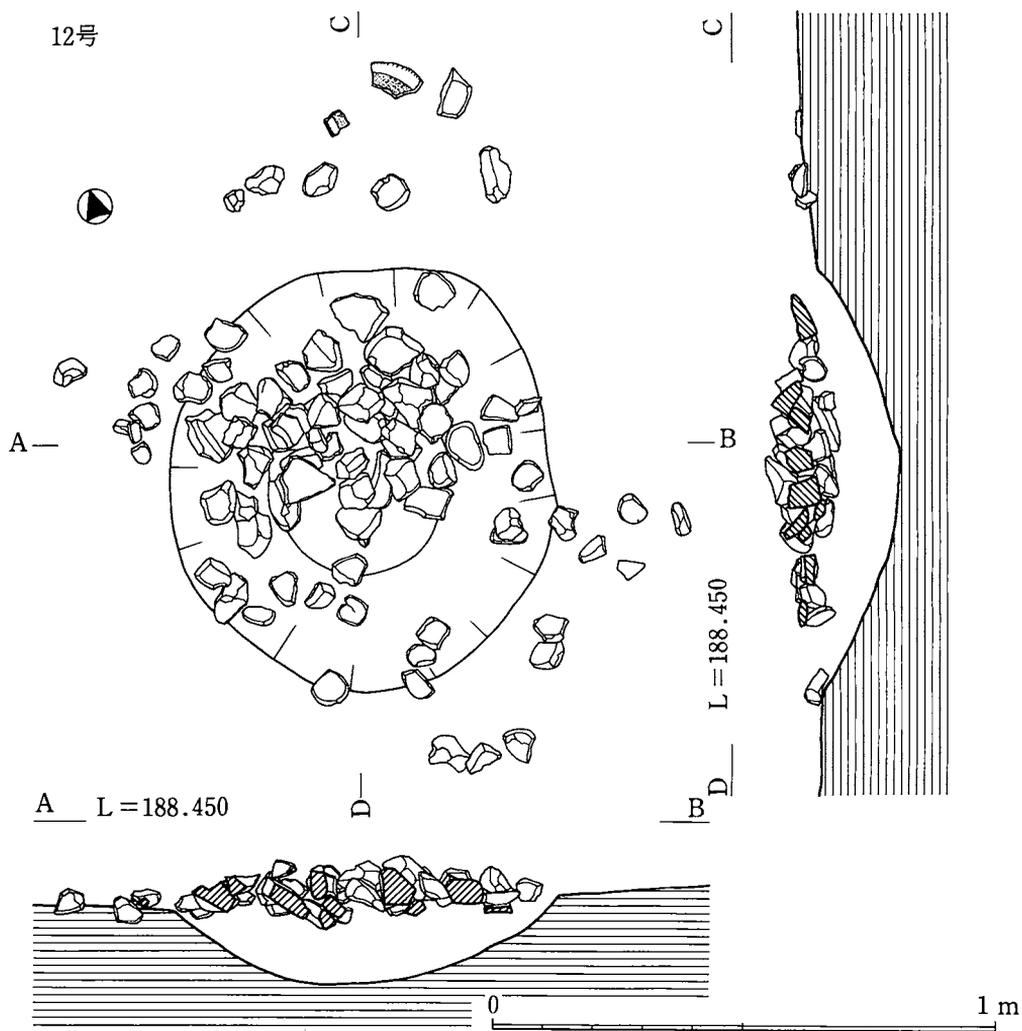
第25図 集石実測図

北東部で検出された集石で、直径0.7m、深さ0.15mの円形の掘り込みをもっている。集石を構成している礫は、31個でほとんどが加久藤溶結凝灰岩である。土坑の埋土は、IV層を基本とした暗褐色土で、微量の炭化物を含んでいる。

15号集石(第28図)

西側で検出された集石で、直径0.85m、深さ0.22mの掘り込みをもっている。集石を構成している礫は、38個の加久藤溶結凝灰岩の破碎礫ですべて赤変している。土坑は、V層上面からの掘り込みである。土坑の埋土は、IV層を基本とした暗褐色土で、わずかに炭化物を含んでいる。伴出する遺物には、塞ノ神式土器がある。

16号集石(第29図)



第26図 集石実測図

北東部で検出した集石で、0.8m×0.6m、深さ0.28mの楕円形の掘り込みをもっている。土坑内には、加久藤溶結凝灰岩の赤変した破砕礫が、40個詰まっている。土坑は、V層上面からの掘り込みである。埋土は、IV層を基本とした暗褐色土である。

17号集石 (第29図)

北東部で検出した集石で、掘り込みは確認できなかった。直径0.6mの範囲内に19個の加久藤溶結凝灰岩の赤変した破砕礫が集中している。確認面は、V層上面である。

18号集石 (第30図)

北東部で検出した集石で、V層上面で確認した。直径1.3mの範囲内に、加久藤溶結凝灰岩を中心に、赤変した破砕礫が63個集中している。

19号集石 (第30図)

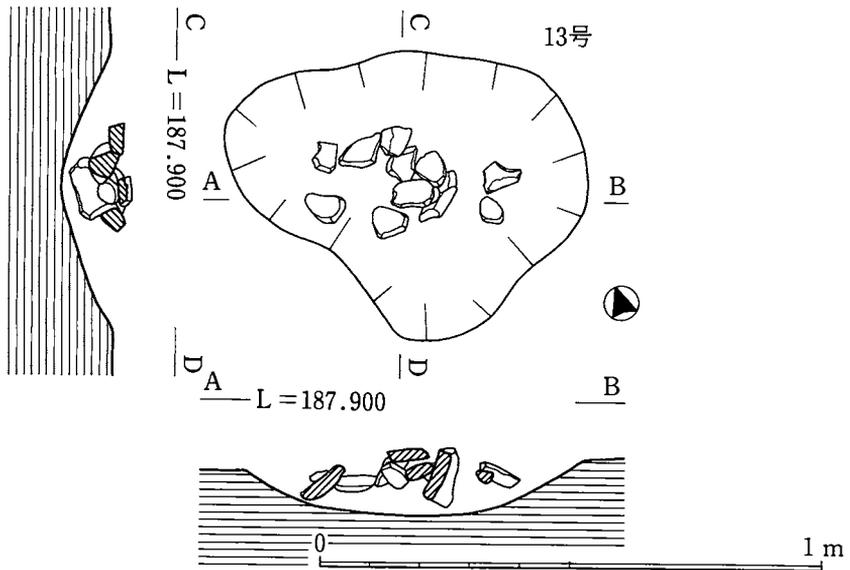
北東部で検出した集石で、V層上面で確認した。直径0.8mの範囲内に、拳大の赤変した加久藤溶結凝灰岩の破砕礫が34個集中している。

(2)配石土坑 (第31図)

配石土坑は、楕円形あるいは不整形の土坑内に、大型の礫を配した遺構で、3基検出された。この配石土坑の分布は、遺跡全体の中で南側半分に検出地点が偏る傾向がみられる。その中でも西側斜面に2基・南側に1基で検出された。

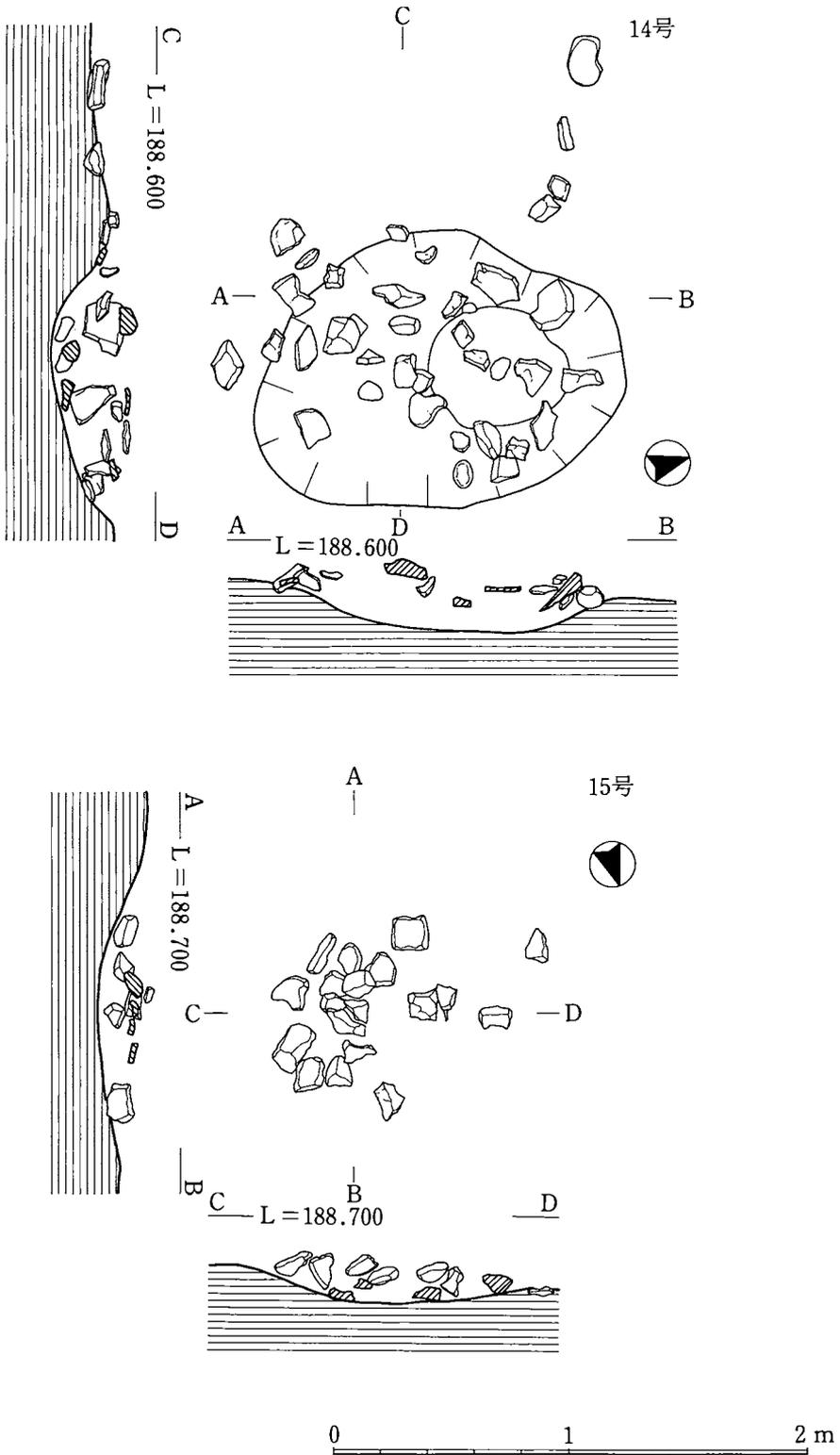
1号配石土坑 (第31図)

南側で検出した配石土坑で、0.5m×0.4m、深さ0.1mの比較的小さい土坑である。この土坑のなかに、4個の礫を配している。断面は、浅い皿状を呈している。埋土は、IV層を基本とした暗褐色土である。炭化物は、確認されなかった。



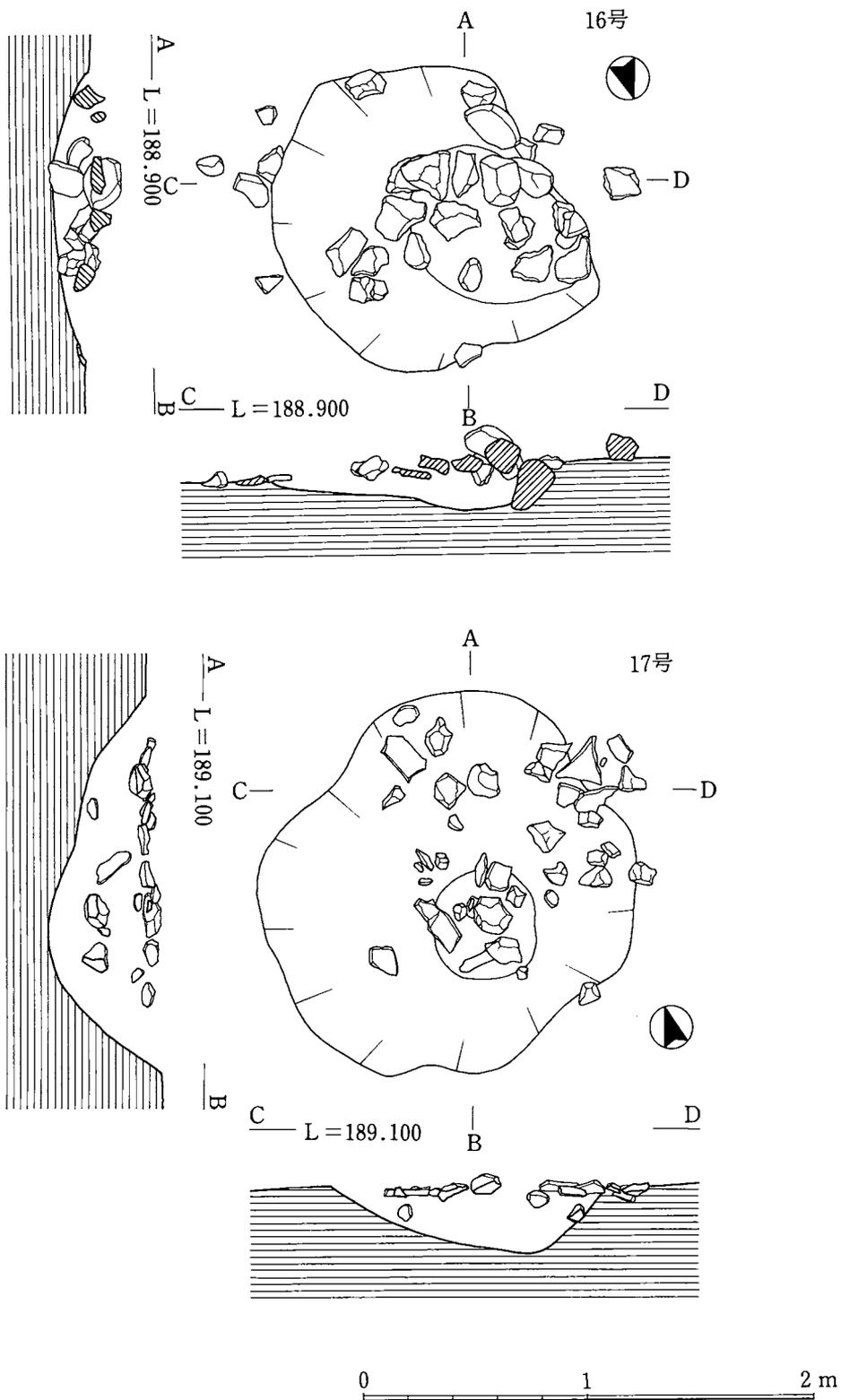
第27図 集石実測図

第3節 縄文時代早期の遺構と遺物



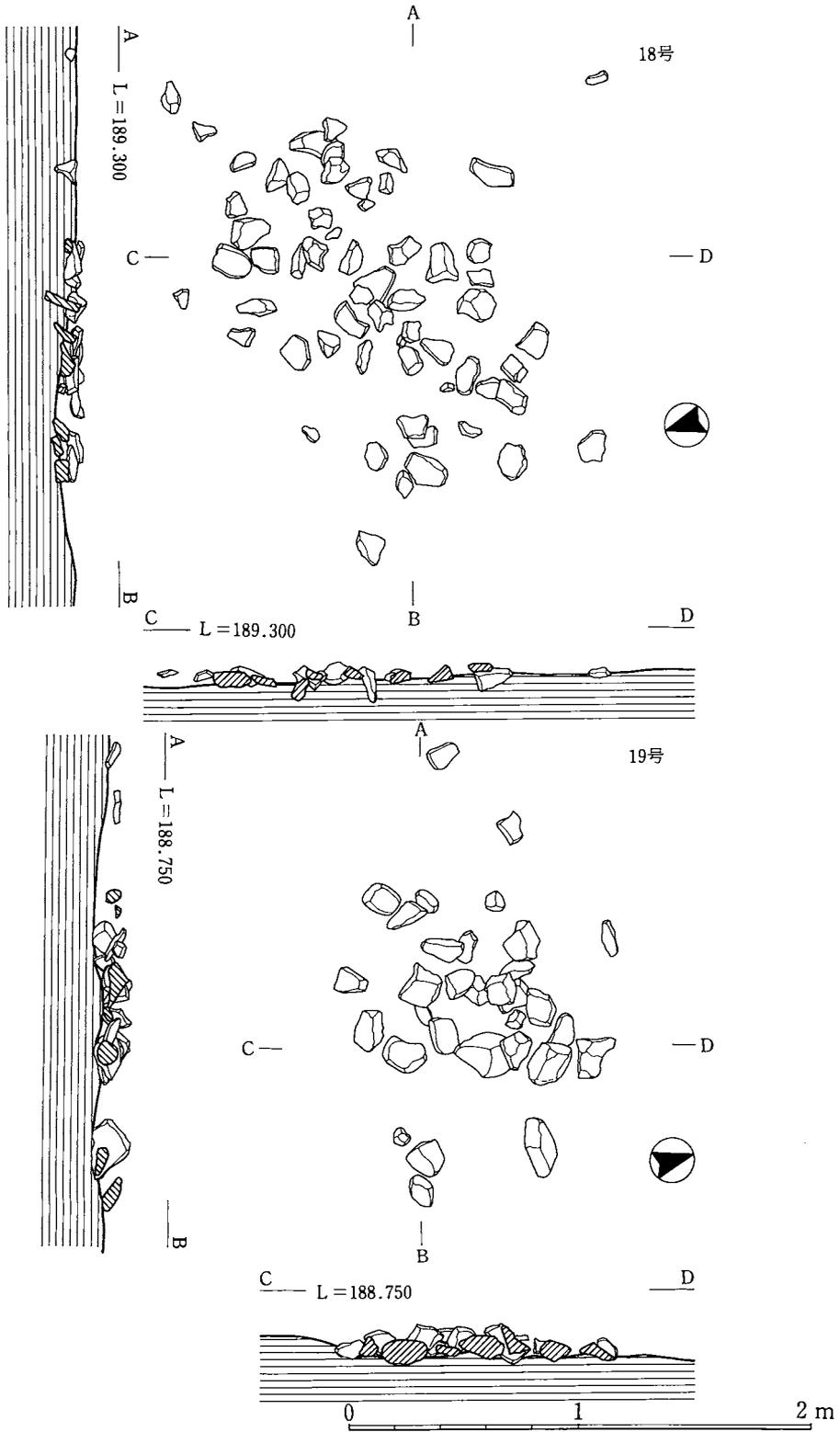
第28図 集石実測図

第III章 調査の成果

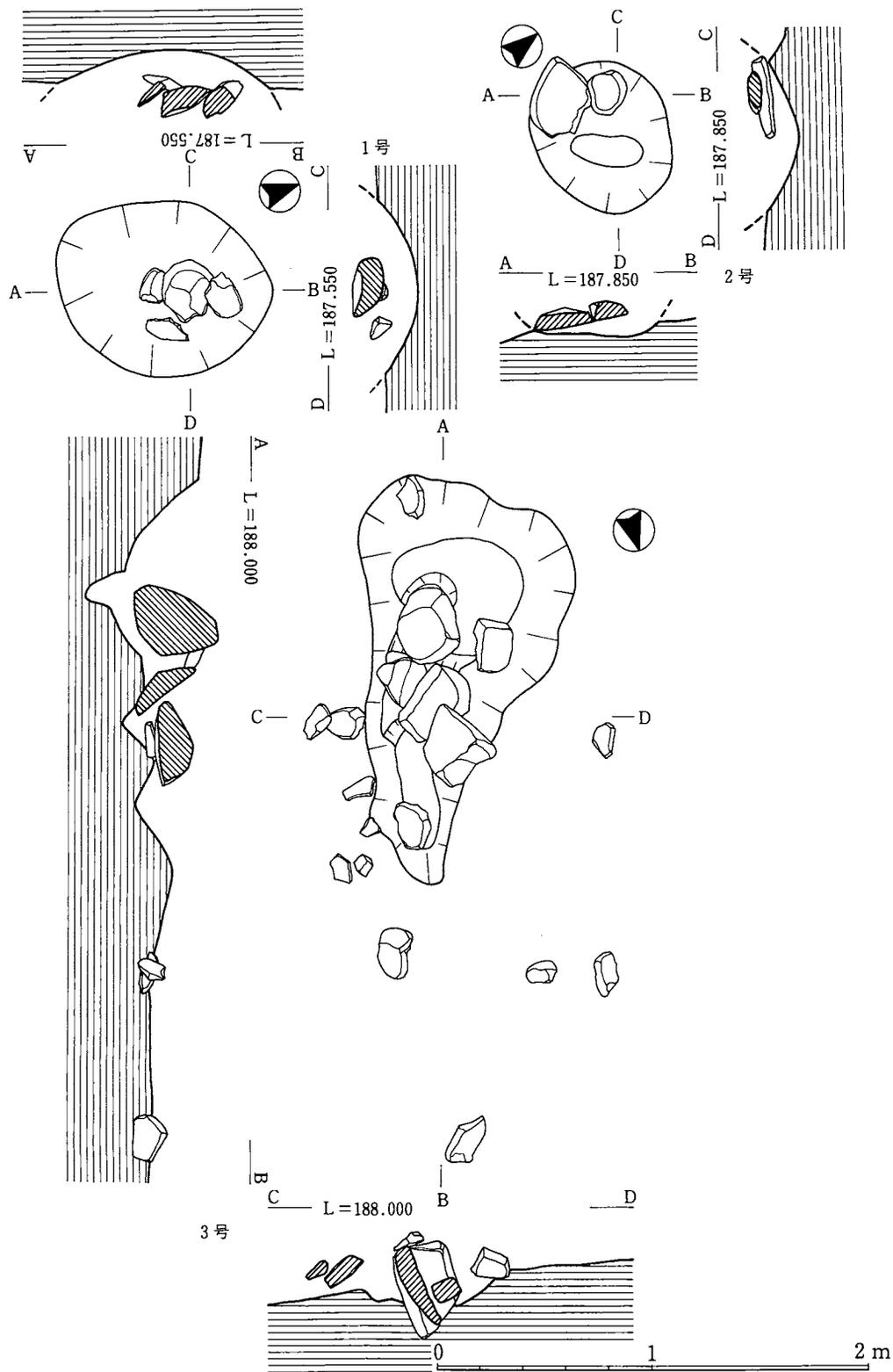


第29図 集石実測図

第3節 縄文時代早期の遺構と遺物

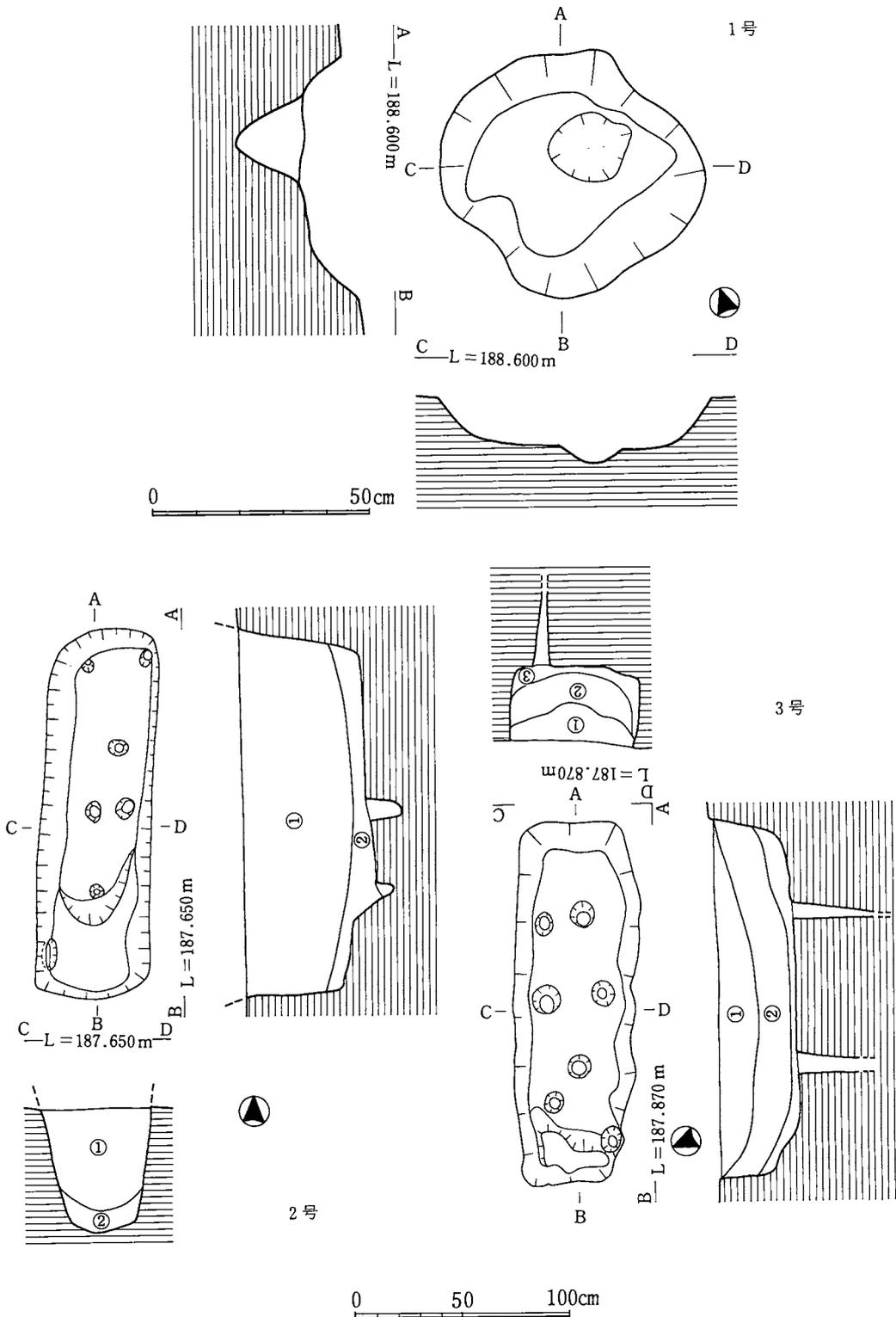


第30図 集石実測図

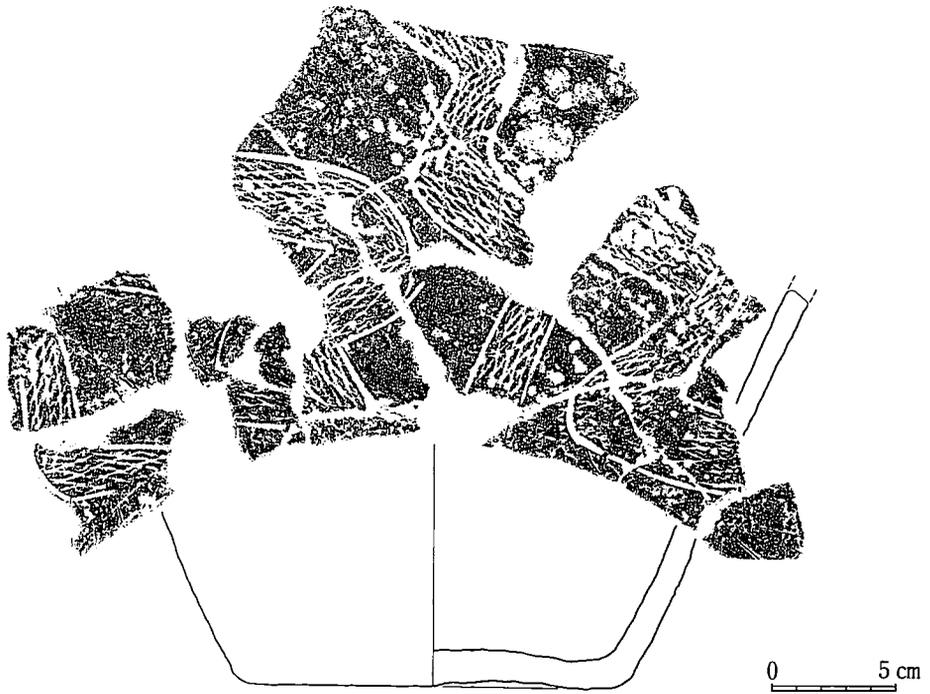
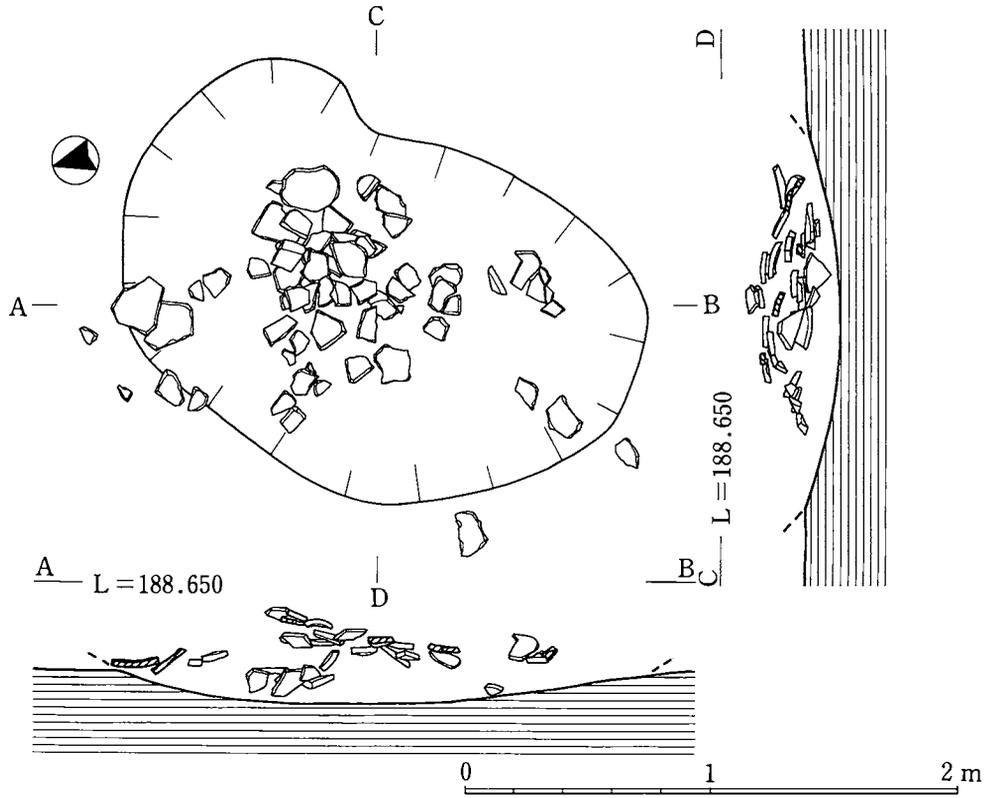


第31図 配石土坑実測図

第3節 縄文時代早期の遺構と遺物



第32図 土坑実測図



第33図 縄文式土器検出状況実測図及び土器実測図

2号配石土坑（第31図）

南側で検出した配石土坑で、直径0.3mと小さい土坑である。土坑には2個の礫を配している。この礫の配された部分の壁面は、暗赤褐色を呈し固くしまっている。また確認面はVI層であるが、埋土はIV層を基本とした暗褐色土である。このことから、本来の掘り込み面はV層上面であると考えられる。

3号配石土坑（第31図）

西側で検出された配石土坑で、東-西方向に主軸をもつ不整形の土坑である。土坑中央部に平坦面をもつ。大型の礫は、中央部から東側に配される。この土坑はV層上面からの掘り込みで、埋土は黒褐色土である。またこの土坑の床面及び周辺はガチガチにしまった状態である。土坑内からの遺物の出土はなかったが、周辺から塞ノ神式土器が出土した。

(3)土坑（第32図）

土坑は、3基検出した。この土坑は形態から、2種類に分けられる。それは、円形の小型の土坑と大型で長方形の土坑で、床面に小穴をもつものである。これらの土坑はすべて調査区の南側半分で検出された。

以下、遺構ごとに説明を加えていきたい。

1号土坑（第32図）

遺跡中央の最高部から、東側に傾斜する地点で検出された。直径0.65mの円形の土坑で、VI層で確認した。床面はVII層（シラス）である。土坑内には、小穴をもつ。土坑の埋土は、IV層を基本とした暗褐色土で、小穴内は褐色である。

2号土坑（第32図）

南側で検出した土坑で、1.65m×0.58m、深さ0.4mの長方形の形態をとる。土坑床面には、7個の小穴を検出した。この小穴は、直径約10cmで深さは30cm以上である。土坑は、VII層（シラス）に掘り込まれている。埋土は、3枚に分けられる。①暗黄褐色土で、1mm以下の微細な砂粒を含み、フカフカした土である。②黄褐色土で、上層より粒子がやや粗くザラザラしている。微細な炭化物をわずかに含んでいる。③暗灰白色土で、シラスのブロック塊を含み、上層の①・②より粒子は大きく粗くなる。

3号土坑（第32図）

2号土坑の南側で検出された土坑で、1.7m×0.51m、深さ0.84mの長方形の形態をとり、土坑と類似する。また土坑床面には、7個の小穴が確認された。そのうち南側壁面に掘り込まれた小穴は、斜めに土坑内に傾くように掘られている。小穴の直径は約10cmで、深さは15cm～0cmである。埋土は、2枚に分けられる。上層は、暗黄褐色土で1mm以下の微細な砂粒を含みフカフカとしている。下層は、黄褐色土で1～2mmの砂粒を含み粒子がやや粗くザラザラとしている。

(4)土器の出土状態 (第33図)

東側斜面部において、良好な状態で土器の集中部を検出した。出土状態は、1.0m×0.7m、深さ0.15mの楕円形の浅い土坑内に、押し潰された状態で検出された。また底部は、床面直上で検出された。出土した土器は1個体で、その器形はラッパ状に開く口縁で、胴部は円筒形を呈する「塞ノ神式土器」である。文様は、凹線文により幾何学的に区画し、凹線文間に捺糸文を充填している。口縁部では、頸部近くに区画した凹線文を施文し、その中に捺糸文を充填する。埋土は、暗褐色土で1mm程度の炭化物を含んでいる。

2. 遺物とその分布

(1)土器

縄文時代早期に属する土器は、10,056点検出された。その種類には、吉田式土器1点、円筒形の条痕文土器6点、押型文土器45点、手向山式土器51点、塞ノ神式土器1,871点及び破片が小さく文様が確認できないため、上記の類別認定に含まれなかったもの8,082点がある。その分布の中心は、北側の凹部と北東側の谷部及び東西の斜面部、南側の斜面部に集中部がみられる。しかしこれらの集中部は、北側と北東側の凹部及び谷部に偏在する傾向がみられる。このような遺物のあり方は、狸谷遺跡では「生活廃棄物の投棄」された状態として考えられており、白鳥平A遺跡でも同様の状態として捉えることができる。

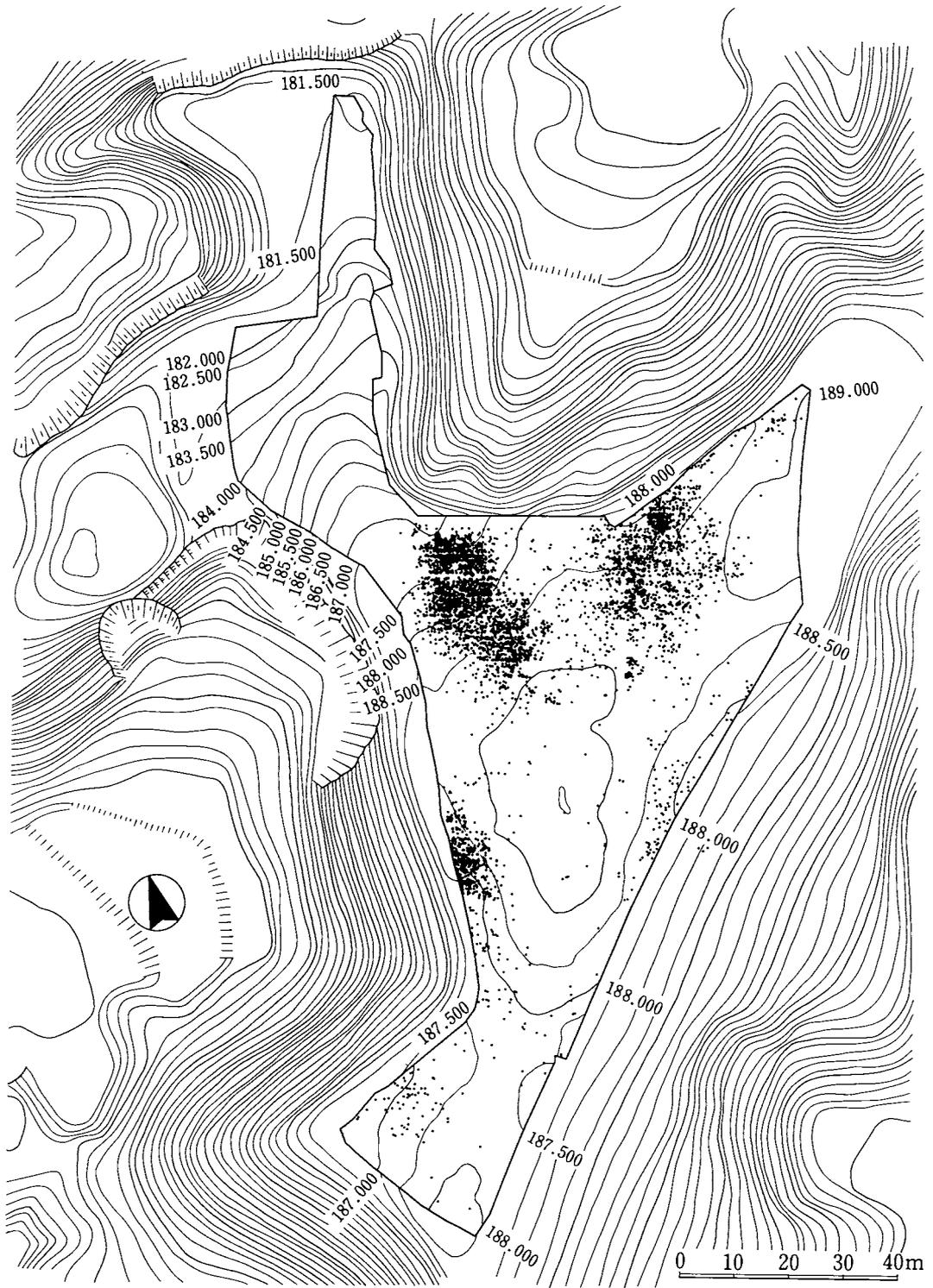
吉田式土器 (第36図1)

吉田式土器は、東側斜面部で検出した (第35図)。口縁部を欠失している、口縁部近くの胴部破片である。この資料は、吉田式土器の特徴である貼り付けによる楔形凸帯文はみられず、貝殻腹縁の連続押引により楔形に隆起させている。また下半部に横方向の4本の沈線が施文されている。この沈線は、施文原体を止めた部分が確認でき、その状態から施文具は上部文様と同様に貝殻である。胎土には、長石や石英の砂粒を含む。器面の色調は、内外面とも褐色で、焼成は良好である。器厚は、1.1cmである。内面は、丁寧なナデ調整である。

円筒形条痕文土器 (第36図2～6)

円筒形条痕文土器は、口縁部付近に文様帯をもつ土器で、貝殻による条線文や押引文が施文される一群の土器である。この種の土器は、5点検出された。その分布は、すべて西側斜面部に集中する。部位の内訳は、口縁部1点 (2、3)、口縁部に近い胴部4点 (316、307、237) である。3は、口縁部の形態は直口する。口唇部は、丸みをもって作り出されている。施文は、貝殻腹縁による丁寧な押引で、それぞれが単独に近い状態でみられる。胎土は、黒雲母や長石の粒子を含む。器面の色調は、外面が明褐色、内面が暗褐色である。内面は、丁寧なナデ調整である。5は、外面は繊維質のものでナデ調整を行い、その上から施文原体により横方向に、

第3節 縄文時代早期の遺構と遺物



第34図 遺物分布図(土器)

沈線を施文している。胎土には、黒雲母や長石の粒子を含んでいる。器面の色調は、内外面とも明褐色である。内面は、ナデ調整によっている。2は、口縁部の形態は直口し、口唇部は平滑に作り出されている。施文は、横方向に沈線を施す。またこの沈線間の稜上に、先行する施文の凹が観察される。このことから6、4と同様に横方向の沈線の下に縦方向の沈線が施文されるものである。このことから3点の土器は、縦方向に施文原体によって沈線を施文し、その沈線の一部重なるように横方向の沈線を施文している。胎土には、長石の粒子を含む。器面の色調は、内外面とも褐色である。内面は、ナデ調整によっている。6、4は、胴部の破片である。施文、胎土、器面の色調及び内面の調整は、2と同様である。器厚は、3点とも0.9cmである。

押型文土器（第38図7～13）

押型文土器は、45点検出した。その文様ごとの内訳は、楕円文20点、山形文25点である。しかし、山形押型文土器はすべて小破片であるため実測図及び拓本の掲載はできなかった。

楕円文の押型文土器（7～13）

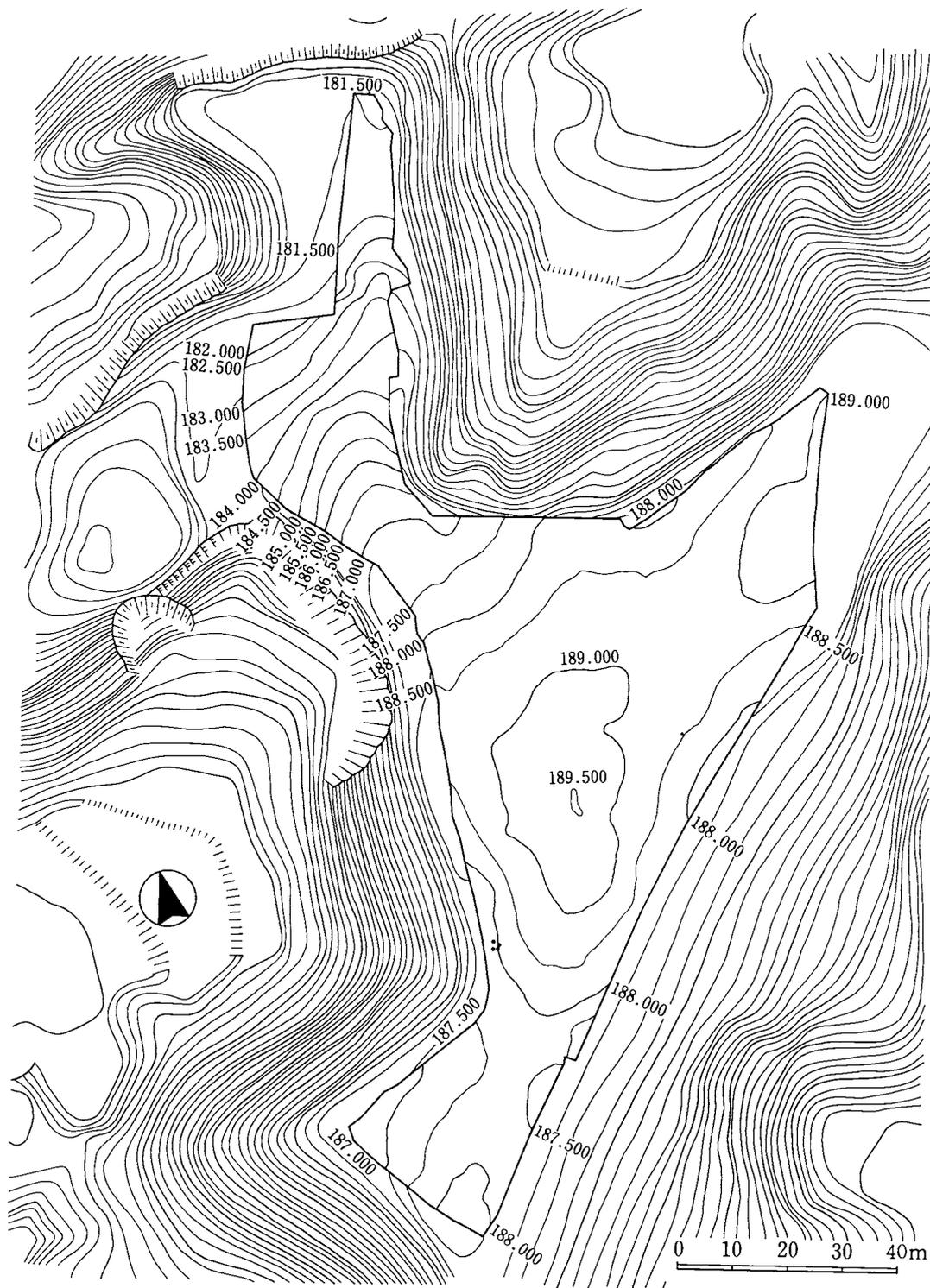
楕円押型文土器は、20点出土した。その分布は、大きく北側凹部と北東側谷部及び西側斜面部の3つの集中部に分けられる。

土器の器形は、深鉢形をなすものと考えられるが、口縁部の資料は13のみであるため詳細は不明である。7、8、10は、粗い大きめの楕円文を施文する。破片の断面が上部より下部で器厚が厚くなることから底部に近い部分の可能性もある。胎土は、3点とも黒雲母や長石の粒子を含んでいる。器面の色調は、12が内外面とも暗褐色、8は内外面とも褐色、10が内外面とも明褐色である。内面は、ナデ調整である。焼成は、ともにやや不良である。9、7、13は、横走する細かな楕円押型文を施文する。13は、口縁部がやや外傾する資料である。口縁端部は、平滑に作り出され内面は、丁寧なナデ調整を施す。また外面の押型文は、口縁部から、3.5cmの無文帯をあけて施文されている。胎土は、長石の粒子を含んでいる。器面の色調は、内外面とも褐色である。焼成は、良好である。器厚は、1.0cmである。12、9についても、胎土は同様である。器面の色調は、外面では13と同様であるが、内面は9が黒褐色を呈し、12が褐色である。焼成は良好で、器厚は9が0.8cm、12が0.9cmである。

手向山式土器（第39図14～第40図51）

手向山式土器は、51点検出した。その器形は、胴部が屈曲し内湾しながら外反する口縁部へ続くもの（1類）と壺形を呈するもの（2類）がある。これらの土器は、その文様の特徴によって山形押型文を施文するもの（a）、凸帯文を横位にめぐらし凸帯上に施文原体による刺突を施すもの（b）、押型文と凸帯文を併せて施文するもの（c）、凸帯文と撚糸文・縄文を施文するもの（d）、凸帯文と凹線文を施文するもの（e）がある。

第3節 縄文時代早期の遺構と遺物



第35図 遺物分布図(吉田式土器、円筒形条痕文土器)

以下、類別ごとに説明を加えていく。

1 a 類 (第38図14~15)

1 a 類は、2点検出された。14は、粗い山形押型文を縦走させている胴部破片である。器厚は、薄く10mmである。胎土は、微細な砂粒を含む。器面の色調は、外面が黒褐色、内面が淡茶褐色である。焼成は、良好である。15は、粗い山形押型文を横走させる胴部破片である。胎土は、1mm以下の微細な角セン石・石英・長石の粒子を多量に含む。器面の色調は、内外面とも淡茶褐色である。器厚は11mmで、焼成は良好である。

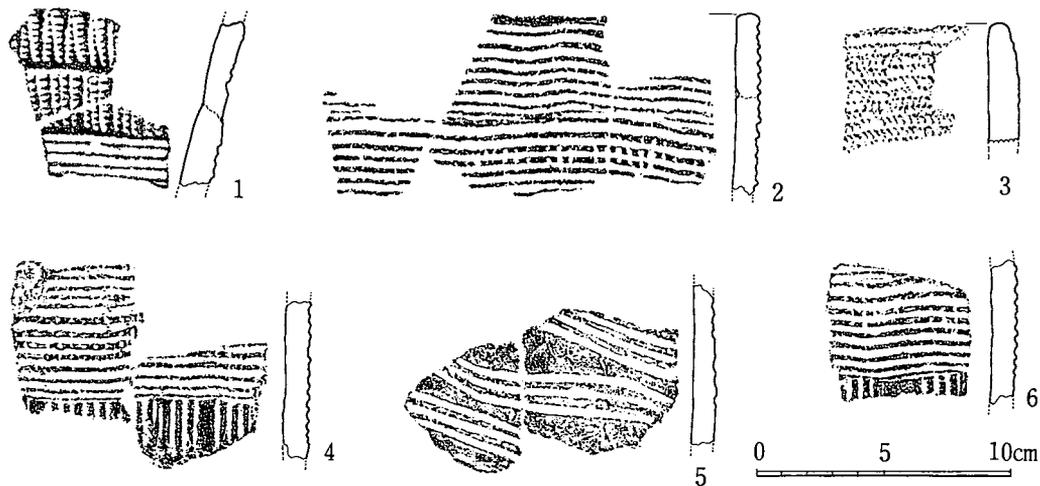
1 b 類 (第38図16、18、22~24、26、29、31、34、38)

1 b 類は、10点検出された。この資料は、数条まわした凸帯文の上に、施文原体によって刺突を施すもので口縁部近くの破片である。凸帯文以下の状況が分からないため、1 c ~ 1 e 類との関係は不明である。16は、4条の凸帯文を横位に貼りつけ、その上に施文原体によって刺突文を施している。口縁部は外反する。胎土は、微細な黒雲母、角セン石、石英をわずかに含んでいる。器面の色調は、外面が淡茶褐色、内面が淡褐色である。また内面には、煤の付着が認められる。器厚は、8mmである。18は、口縁部の小破片である。2条の凸帯文が横位に貼付され、口縁端部は、やや肥口している。胎土は、石英、長石の細粒を含んでいる。器面の色調は、内外面とも暗赤褐色である。器厚は13mmで、焼成は良好である。19は、2条の凸帯文を横位に貼りつけ、その上を施文原体によって刺突している。口縁部は外反し、口唇部に施文原体で刻み目を施している。胎土は、微細な角セン石や石英をわずかに含んでいる。器面の色調は、内外面とも淡褐色であり、器厚は10mmを測る。焼成は良好である。18は、3条の凸帯文を横位に貼りつけ、施文原体による刺突が施される。口縁部は、外反する。口唇部に、施文原体によって刻み目が施されている。胎土は、角セン石や石英の細粒を多量に含んでいる。器面の色調は、外面が褐色、内面が明褐色である。器厚は14mmで、焼成は良好である。23は、口縁部の小破片である。口唇部は、施文原体によって刻み目が施され平滑に作り出されている。凸帯文は、2条が横位に貼り付けられ棒状の施文原体によって刺突が施されている。胎土は、微細な石英や長石の粒子を多量に含んでいる。器面の色調は外面が淡褐色、内面が褐色である。器厚は14mmで、焼成は良好である。22は、口縁部の小破片で外反する資料である。凸帯文は、1条横位に貼りつけ、棒状の施文原体により刺突が施されている。胎土は、1mm以下の角セン石を多量に、また1mm大の石英をわずかに含む。器面の色調は、外面が黄褐色で内面が淡褐色である。器厚は9mmで、焼成は良好である。24は、3条の凸帯文を横位に貼りつけ、施文原体によって刺突文を施している。胎土は、1mm以下の石英や長石を多量に含んでいる。器面の色調は、内外面とも淡褐色である。器厚は13mmで、焼成は良好である。26は、口縁部である。口唇部の内面より、施文原体による沈線が、また外面より施文原体による押し引きが施されている。胎土は、1mm以下の石英を多量に含んでいる。器面の色調は外面が淡赤褐色、内面が淡褐色である。

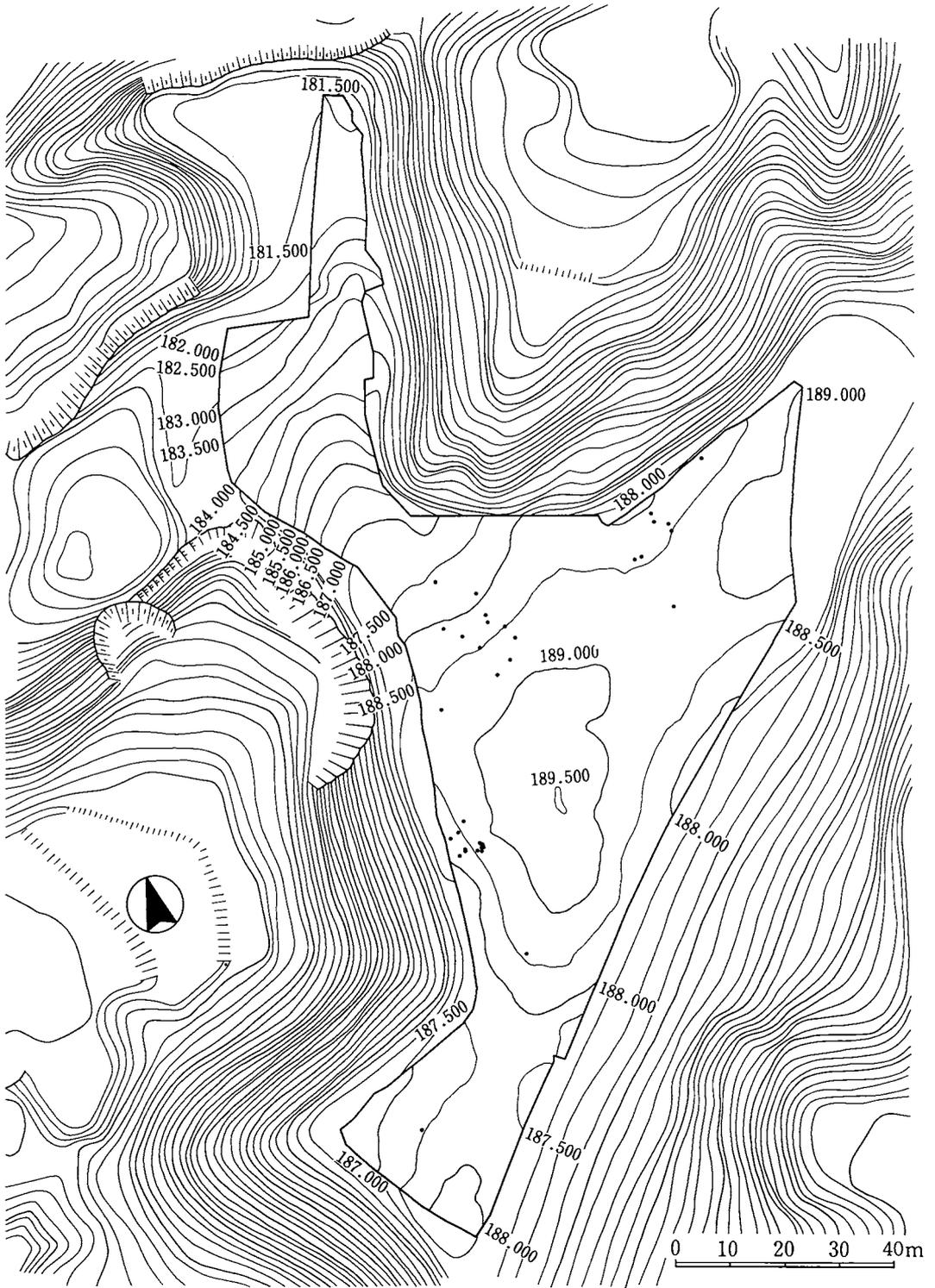
器厚は9mmで、焼成は良好である。31は、口縁部が外反する資料である。凸帯文は横位に2条貼りつけ、施文原体によって刺突文を施している。胎土は1mm以下の石英を多量に含んでいる。器面の色調は外面が黄褐色、内面が淡褐色である。器厚は15mmで、焼成は良好である。28は、口縁部がやや外反する資料である。凸帯文は横位に1条貼りつけ、施文原体によって刺突文を施す。胎土は、微細な石英や長石、角セン石をわずかに含んでいる。器面の色調は、内外面とも黒褐色である。器厚は12mmで、焼成は良好である。29は、口縁部である。凸帯文を横位に3条貼りつけ、施文原体により刺突文を施す。胎土は、1mm大の石英や長石を多量に含んでいる。器面の色調は、外面が暗褐色、内面が褐色である。器厚は10mmで、焼成は良好である。34は、口縁部が外反する資料である。凸帯文は、横位に4条貼りつけ施文原体による刺突文を施す。胎土は、1～2mm大の砂粒を多量に含んでいる。器面の色調は、外面が暗褐色、内面が褐色である。器厚は11mmで、焼成は良好である。38は、口縁部がやや外反ぎみの資料である。凸帯文は横位に5条貼りつけ、刺突文を施す。胎土は、1mm以下の石英を多量に含んでいる。器面の色調は、外面が明褐色で内面が褐色である。器厚は12mmで、焼成は良好である。

1d類 (第38図32、36、37、39、41～43、46、48、49)

1d類は、10点検出した。32は、凸帯文を横位に3条貼りつけ、刺突文を施す。その下に燃糸文を縦位に施している。口縁部は、外反する。また口唇部に、棒状の施文原体により刻み目を施している。胎土は、1mm以下の角セン石や石英を多量に含んでいる。器面の色調は、内外面とも暗褐色である。器厚は12mmで、焼成は良好である。36は、凸帯文を横位に4条貼りつけ、その上から刺突文を施す。口縁部は、外反する。また、口唇部にも棒状の施文原体で刻み目を施している。胎土は、角セン石や黒雲母、石英を多量に含んでいる。器面の色調は、内外面と

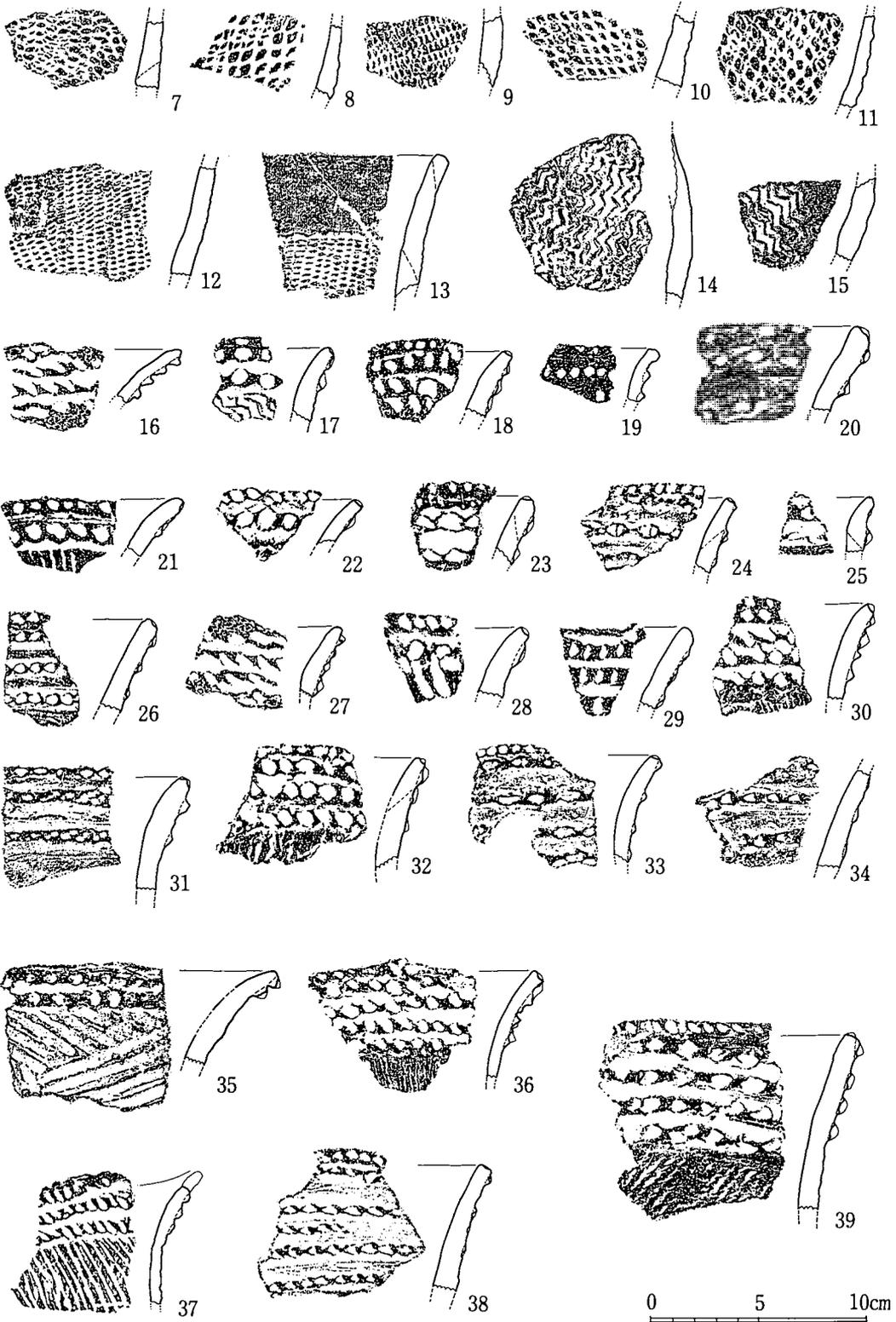


第36図 土器実測図

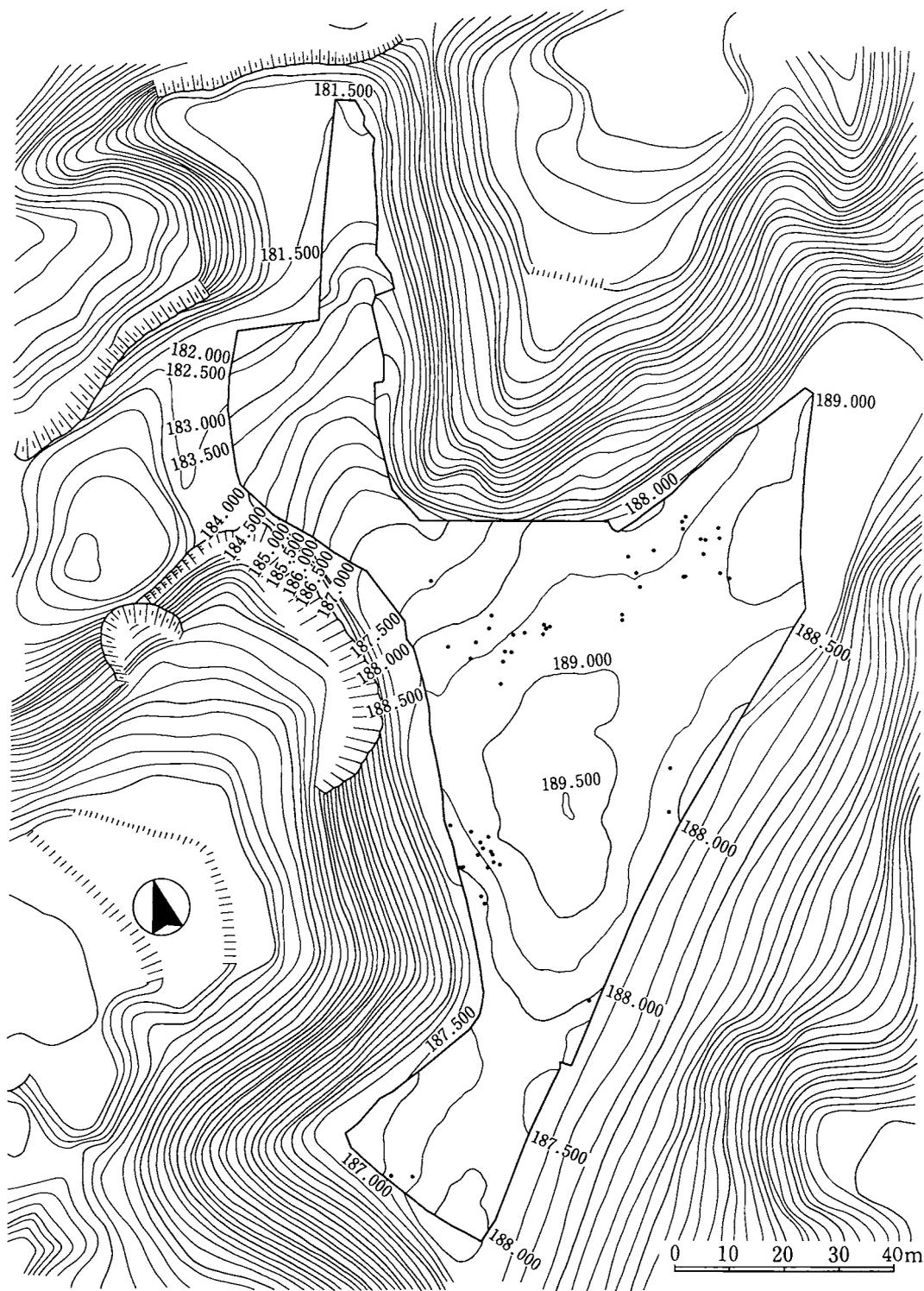


第37図 遺物分布図(押型文土器)

第3節 縄文時代早期の遺構と遺物

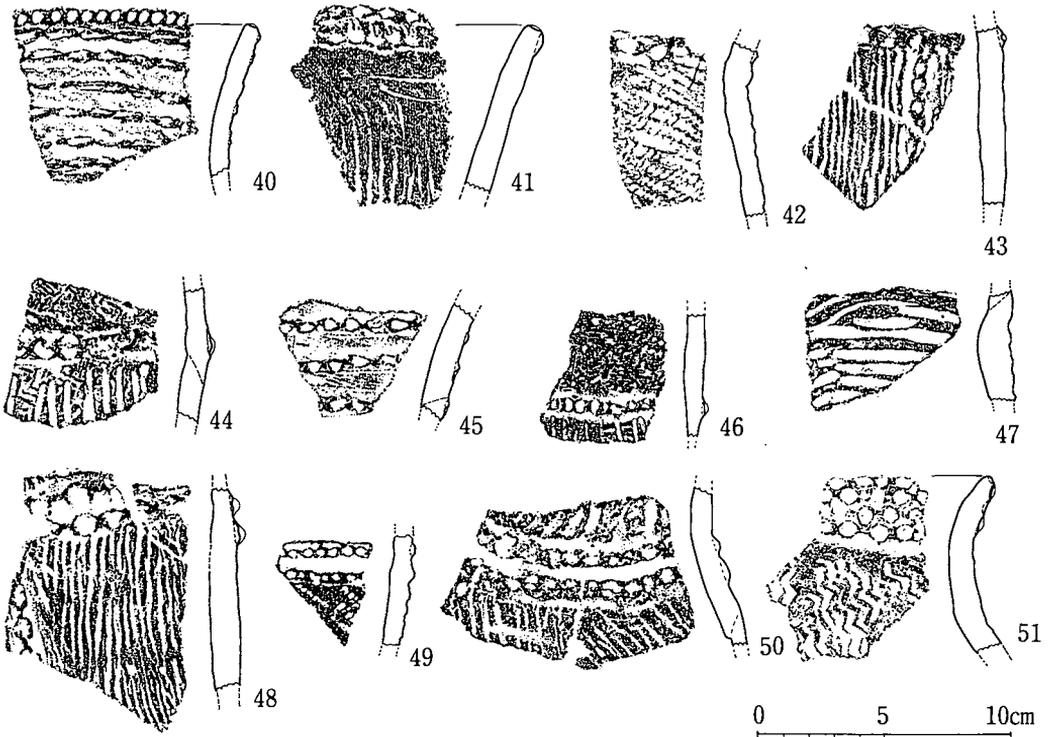


第38図 土器実測図



第39図 遺物分布図(手向山式土器)

も明褐色である。器厚は9mmで、焼成は良好である。37は、口縁部が外反し山形を呈する。凸帯文は、口唇部から3条横位に貼りつけ、施文原体により刺突文を施している。その凸帯文より下に、斜めに撚糸文を施文する。胎土は微細な砂粒を多量に含んでいる。器面の色調は、内外面とも黒褐色である。器厚は9mmで、焼成は良好である。39は、口縁部がやや外反する資料である。凸帯文は、横位に4条貼りつけ刺突文を施す。その凸帯文以下は、斜めに撚糸文を施文している。胎土は、1mm以下の石英や長石の粒子をわずかに含んでいる。器面の色調は、外面が暗褐色、内面が赤褐色である。器厚は12mmで、焼成は良好である。41は、口縁部直下に、横位に1条凸帯文を貼りつけ、その上から刺突文を施している。凸帯文以下は、押し引き状に縦位の撚糸文を施文する。口唇部には、棒状の施文原体によって刻み目が施される。胎土は、1mm以下の石英を多量に含んでいる。器面の色調は、内外面とも淡褐色である。器厚は10mmで、焼成は良好である。42は、胴部破片である。凸帯文を横位に1条貼りつけ、その上から施文原体による刺突文を施している。また凸帯文以下は、LRの縄文を斜めに施文する。器形は、凸帯文より上は緩やかに外反する。胎土は、1mm大の石英をわずかに含んでいる。器面の色調は、内外面とも褐色である。器厚は9mmで、焼成は良好である。43、49は、胴部破片である。2点とも、横位と縦位に直交する形で凸帯文を貼りつけ、その上から施文原体による刺突文を施し



第40図 土器実測図

ている。また、凸帯文以外の部分には縦方向に、押し引き状に燃糸文を施文している。両者の先後関係は、燃糸文→凸帯文→刺突文である。46は、胴部破片である。凸帯文を横位に1条貼りつけその上から刺突文を施している。また、凸帯文の上下で文様の構成に違いがみられる。上部では、燃糸文を回転させ下部では、同じ施文原体を押し引き状に施している。胎土は、1mm大の石英をわずかに含んでいる。器面の色調は、内外面とも黄褐色である。器厚は8mmで、焼成は良好である。48は、胴部破片である。凸帯文を横位に2条貼りつけ施文原体による刺突文を施している。凸帯文より下部には、RLの縄文を斜方向に回転施文している。

1 e類 (第38図35)

1 e類は、1点だけ検出した。35は、口縁部の資料である。口唇部下に2条の凸帯文を貼りつけ刺突文を施している。凸帯文以下は、右下がりと左下がりの2方向の凹線文を直交する形で施文している。口縁部の器形は、外反する。胎土は、1mm以下の石英を多量に含む。器面の色調は、内外面とも明褐色である。器厚は11mmで、焼成は良好である。

1 f類 (第40図47)

1 f類は、1点検出された。47は、胴部破片である。横位に、6条の凹線文を施している。破片が小さいため、1 e類の資料との関係は不明である。胎土は、1mm以下の黒雲母を多量に含んでいる。器面の色調は、外面が黒褐色で内面が褐色である。器厚は12mmで、焼成は良好である。

2類 (第40図17、44、50、51)

2類は、手向山式土器の中でも器形が壺形を呈する一群である。文様は、全資料とも凸帯文を貼りつけ、その上から刺突文を施す。しかし、凸帯文施文以外の部分の文様には、2種類がある。ひとつは凸帯文+山形押型文(c)、もうひとつは凸帯文+燃糸文(d)である。

以下、類ごとに説明を加えていく。

2 c類 (第38図17、51)

2 c類は、2点検出した。器形は、口縁部が外反する。胴部下半が欠失しているため、全体の器形は想定できないが、緩やかな肩をもって底部に移行する形態をなすものと考えられる。

17、51は、口縁部の資料である。口唇部下に横位に凸帯文を貼りつけ、刺突文を施す。この凸帯文以下の胴部には、粗い山形押型文を斜走させている。17、51とも胎土は、1mm前後の角セン石や石英、長石をわずかに含んでいる。器面の色調は、内外面とも黄褐色である。焼成は良好である。

2 d類 (第40図44、50)

2 d類は、2点検出した。50、51とも胴部破片である。両者とも横位に凸帯文を貼りつけ、刺突文を施している。50は、胴部の内湾する部分に凸帯文を施し44は、凸帯文を肩部に施文している。その他の部分には、押し引き状の燃糸文を施文している。胎土は両者とも、1mm以

下の角セン石や石英をわずかに含んでいる。器面の色調は、50は、外面が褐色で内面が暗褐色である。51は、外面が褐色で内面が黄褐色である。器厚は、50が11mm51が12mmで、焼成は両者とも良好である。

塞ノ神式土器（第42図53～第56図235）

塞ノ神式土器は、1,871点出土した。その器形は、ラッパ状に開く口縁部からバケツ状の胴部へ続くものである。これらの土器は、器形は同様であるが施文の違いから第1類～第3類に分類できる。以下、類別に説明を加えていく。

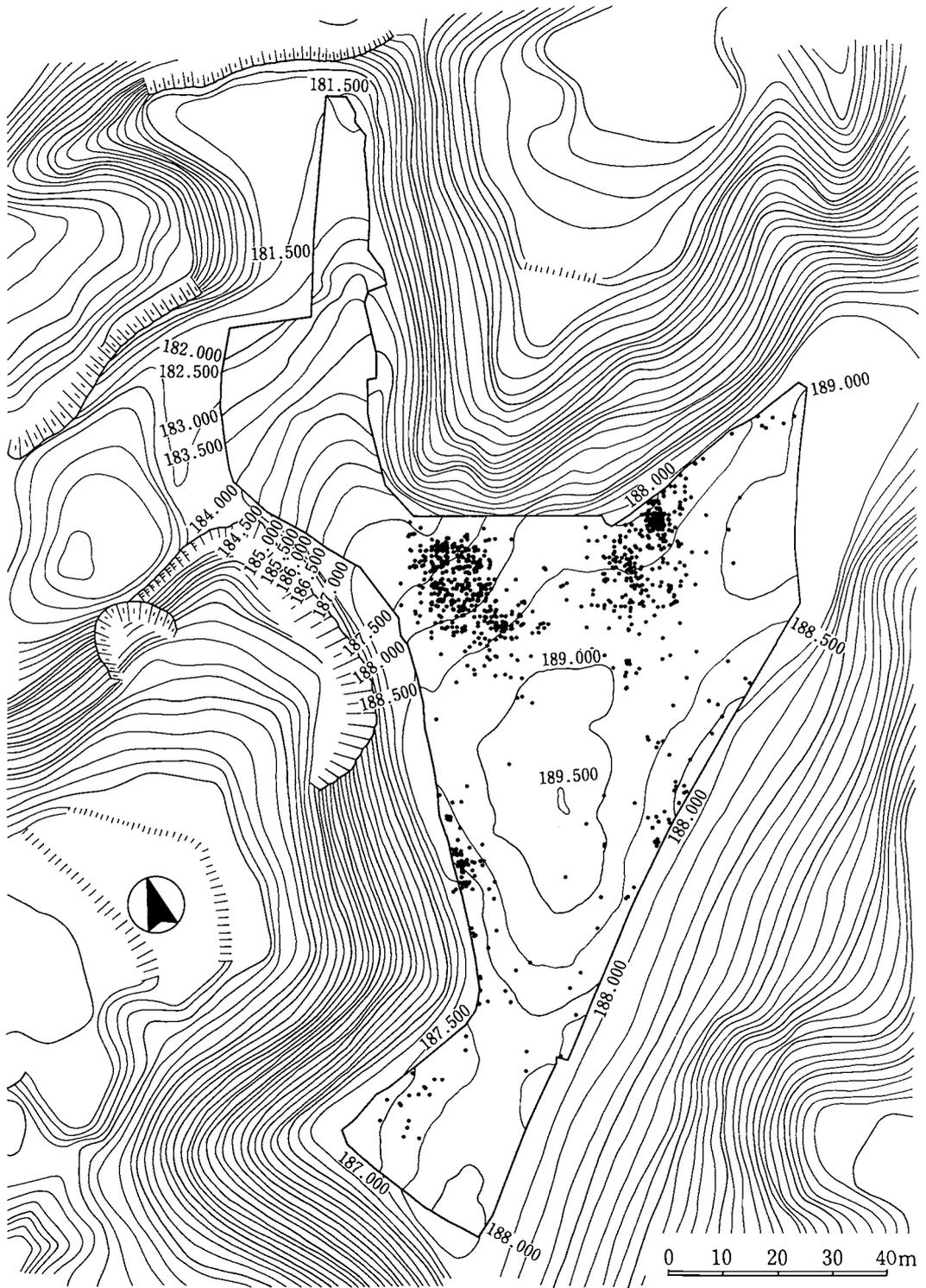
第1類（第42図53～第50図165）

1類は、器形はラッパ状に開く口縁で、胴部は円筒形を呈する。施文は、頸部から口縁部にかけては、貝殻による連続刺突文を横位・山形に施文するもの（a）と、その文様に加えて頸部近くに凹線文間に縄文・捺糸文が充填されるもの（b）がある。また胴部では、凹線文間に縄文・捺糸文を充填し、幾何学的な文様を構成するもの、胴部にも口縁部同様貝殻による連続刺突文で幾何学的文様を構成する（c）土器群である。以下、それぞれの類ごとに説明を加えていきたい。

1 a類（第42図55、57、59、62、第43図64、67、第44図72～77、79～81、84～88、92、95～98、第45図99、101、102、第46図105）

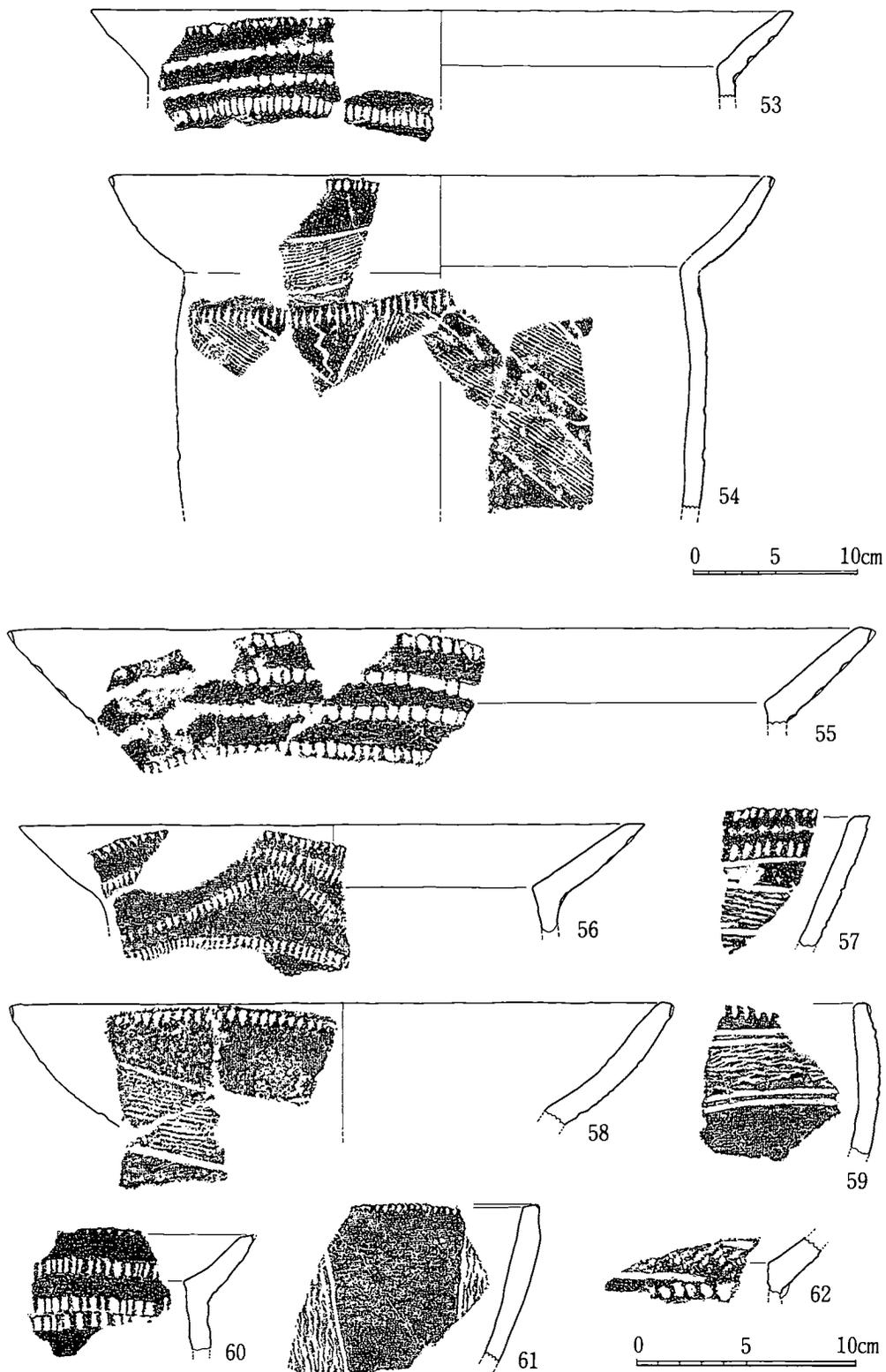
1 a類は口縁部～頸部の文様が、貝殻による連続刺突文を横位・山形に施文し、胴部は凹線文間に捺糸文・縄文を充填させるものである。しかしこの胴部は、1 b類と同様であるため一括して説明を加える。ここでは、口縁部～頸部の資料の説明を加えていく。

55は、口縁部～頸部の資料である。口縁部に横位に貝殻による連続刺突文を施している。口縁部は直線的に立ち上がり、口唇部近くでわずかに段をもつ。口唇部は、平滑に作り出す。胎土は、1mm以下の石英や長石を多量に含んでいる。器面の色調は、外面が暗褐色で内面が明褐色である。器厚は12mmで、焼成は良好である。内面は丁寧な、ナデ調整である。57は、口縁部は直線的に立ち上がり、貝殻による連続刺突文を横位・山形に施文する。口唇部は、平滑に作り出されている。胎土は、微細な砂粒を多量に含んでいる。器面の色調は、内外面とも明褐色である。器厚は9mmで、焼成は良好である。内面は丁寧な、ナデ調整による。59は、口縁部は直線的に立ち上がり、横位に貝殻による連続刺突文を施文する。口唇部は、平滑に作り出し、貝殻による刻み目を施している。胎土は、1mm以下の石英や長石を多量に含んでいる。器面の色調は、内外面とも明褐色である。器厚は9mmで、焼成は良好である。内面は丁寧な、ナデ調整である。62は、口縁部はやや内湾ぎみに立ち上がり、横位に貝殻による連続刺突文を施す。口唇部は平滑に作り出し、貝殻による刻み目を施す。胎土は、微細な石英や長石を多量に含んでいる。器面の色調は、内外面とも暗褐色である。器厚は11mmで、焼成は良好である。64は、口縁部は直線的に立ち上がり、横位に貝殻による連続刺突文を施文する。口唇部は、丸みをもつ

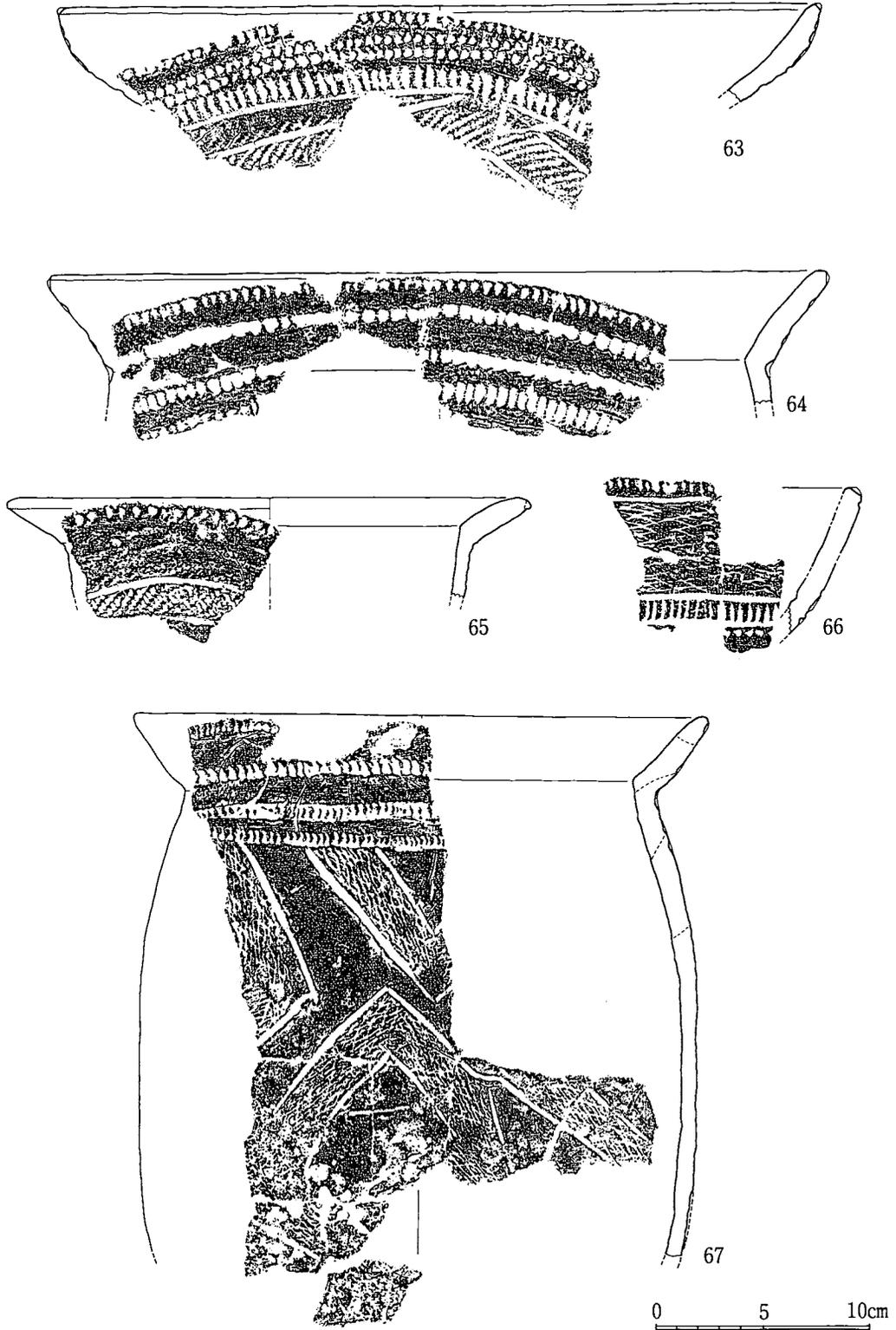


第41図 遺物分布図(塞ノ神式土器第1類)

第3節 縄文時代早期の遺構と遺物

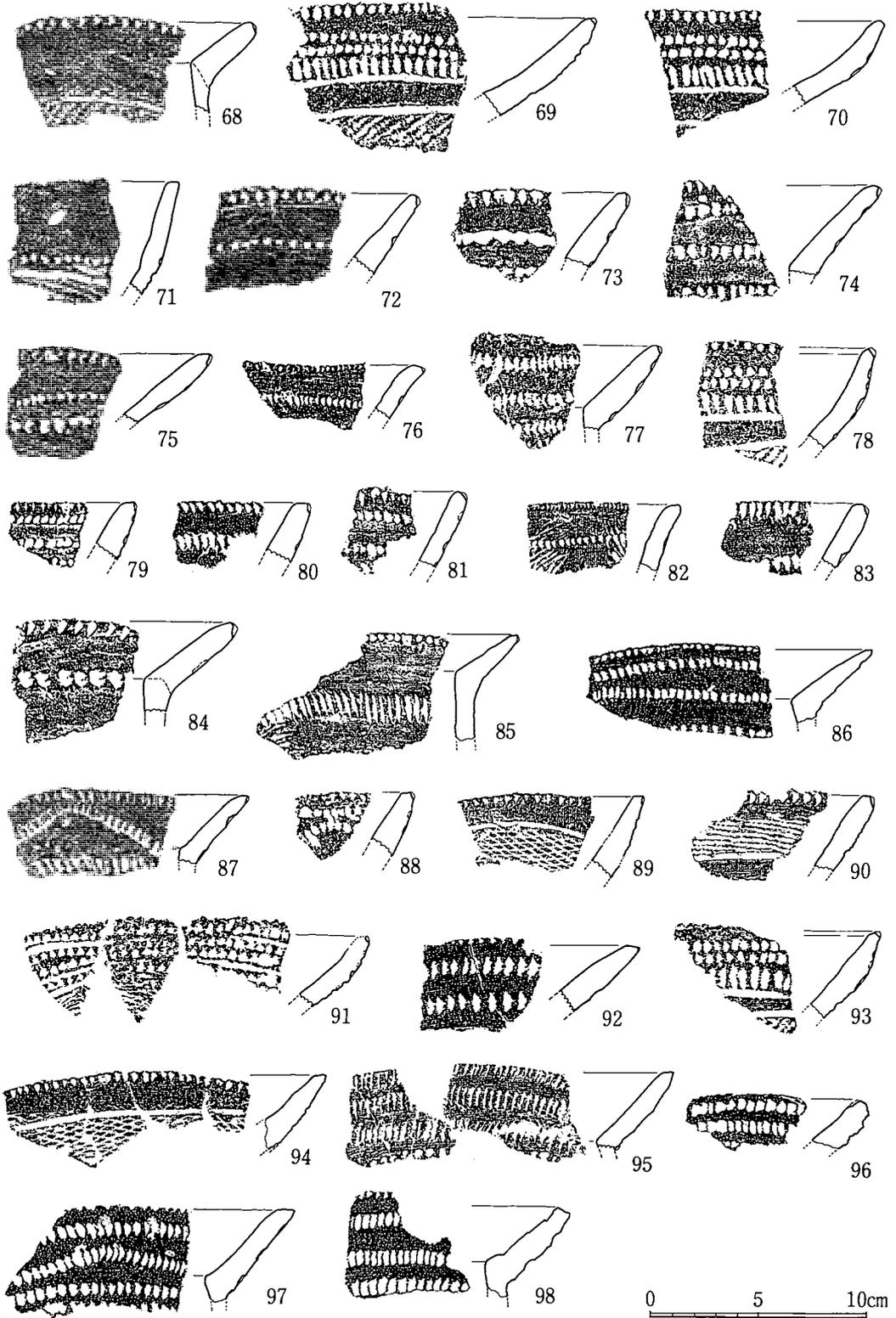


第42図 土器実測図

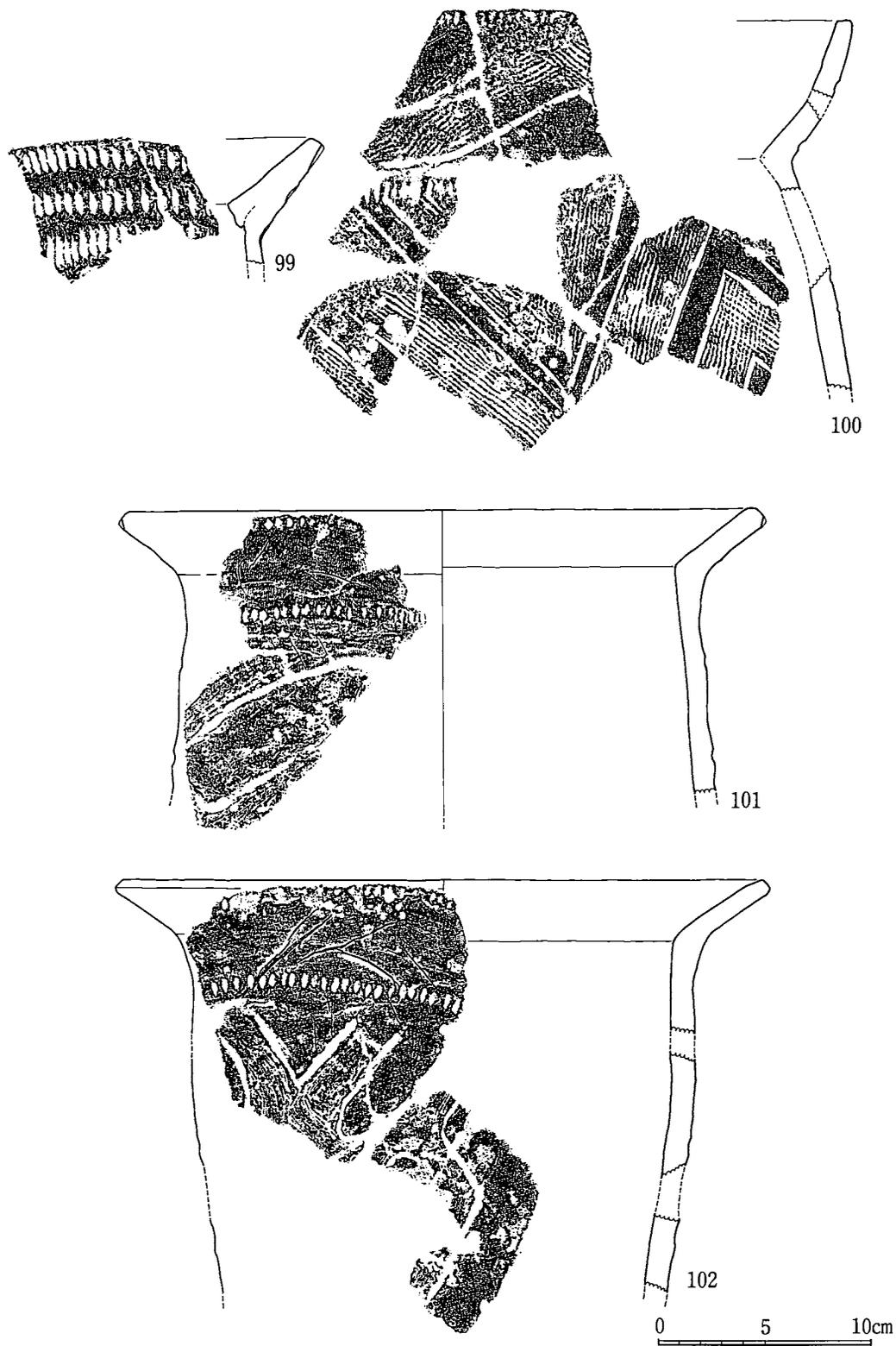


第43図 土器実測図

第3節 縄文時代早期の遺構と遺物



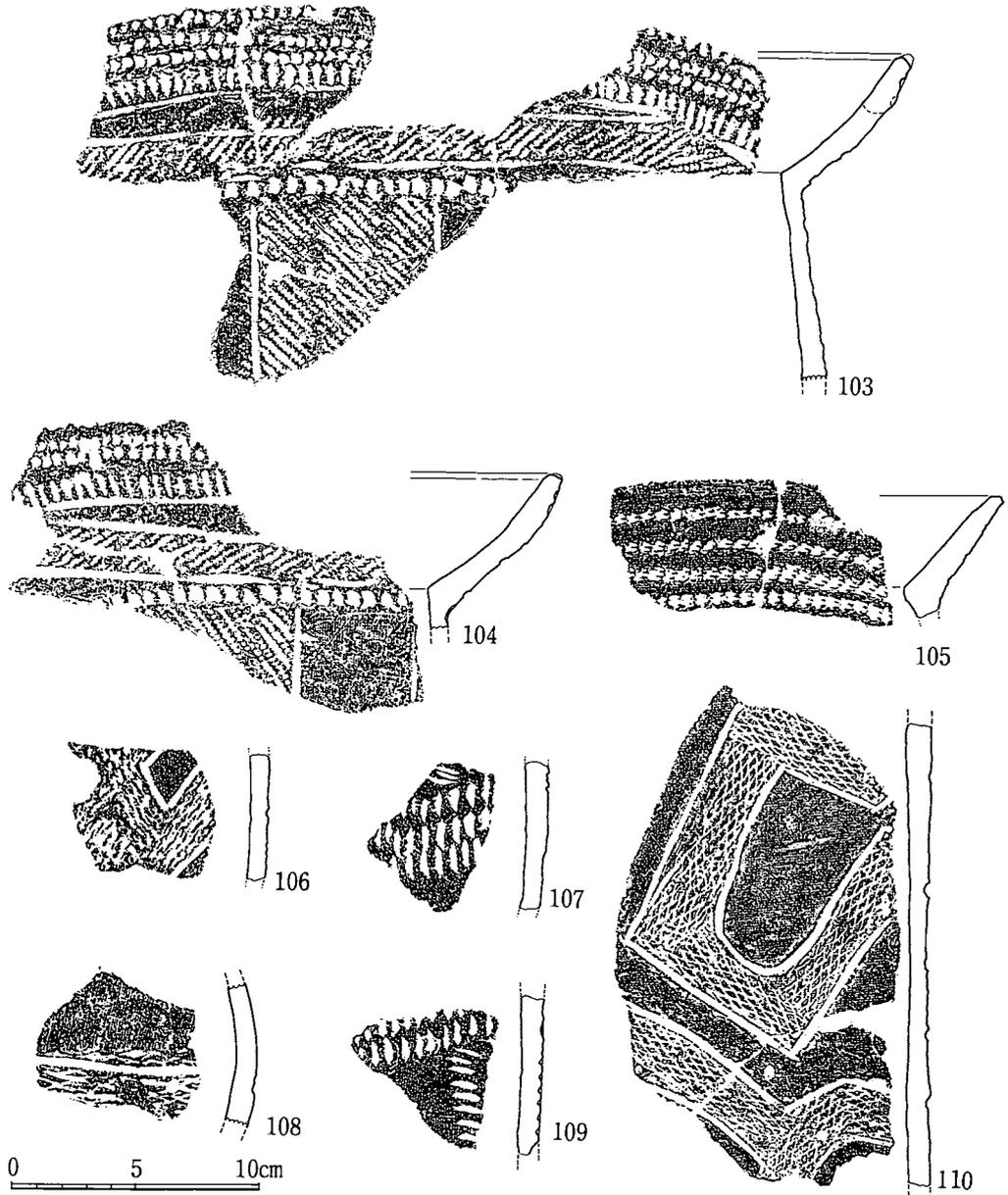
第44図 土器実測図



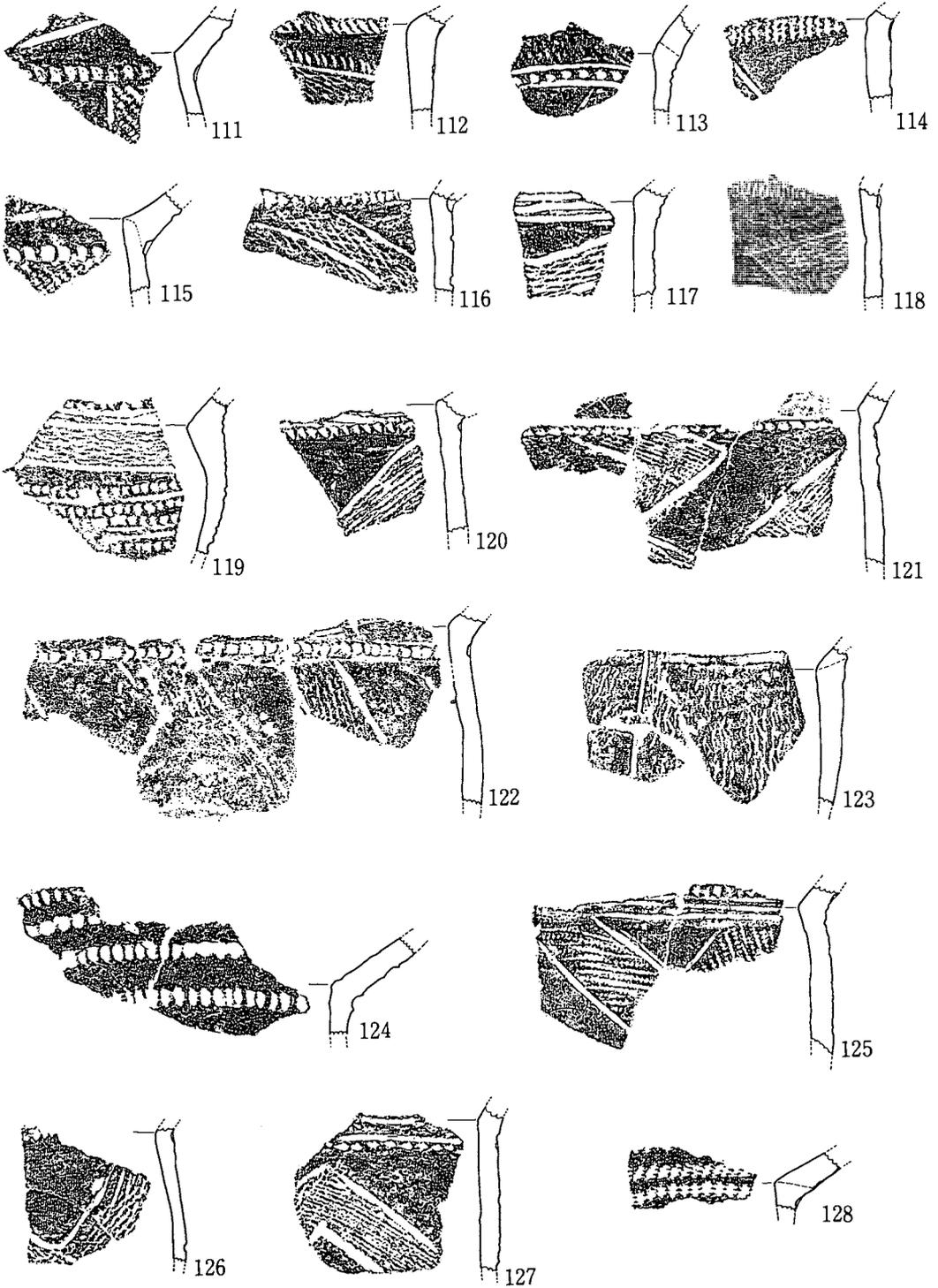
第45図 土器実測図

第3節 縄文時代早期の遺構と遺物

て作り出し、貝殻による刻み目を施している。胎土は、1mm以下の石英や長石を多量に含んでいる。器面の色調は、外面が暗褐色で内面が明褐色である。器厚は10mmで、焼成は良好である。内面は丁寧な、ナデ調整による。67は、底部を除いて器形を復元できる資料である。口縁部は短くラップ状に開き、胴部はやや膨らむ器形を呈する。口唇部は、丸みをもって作り出され、貝殻による刻み目を施している。胎土は、微細な砂粒を多量に含んでいる。器面の色調は、内外面とも暗褐色で、外面胴部にわずかに煤の付着が確認される。器厚は12mmで、焼成は良好で

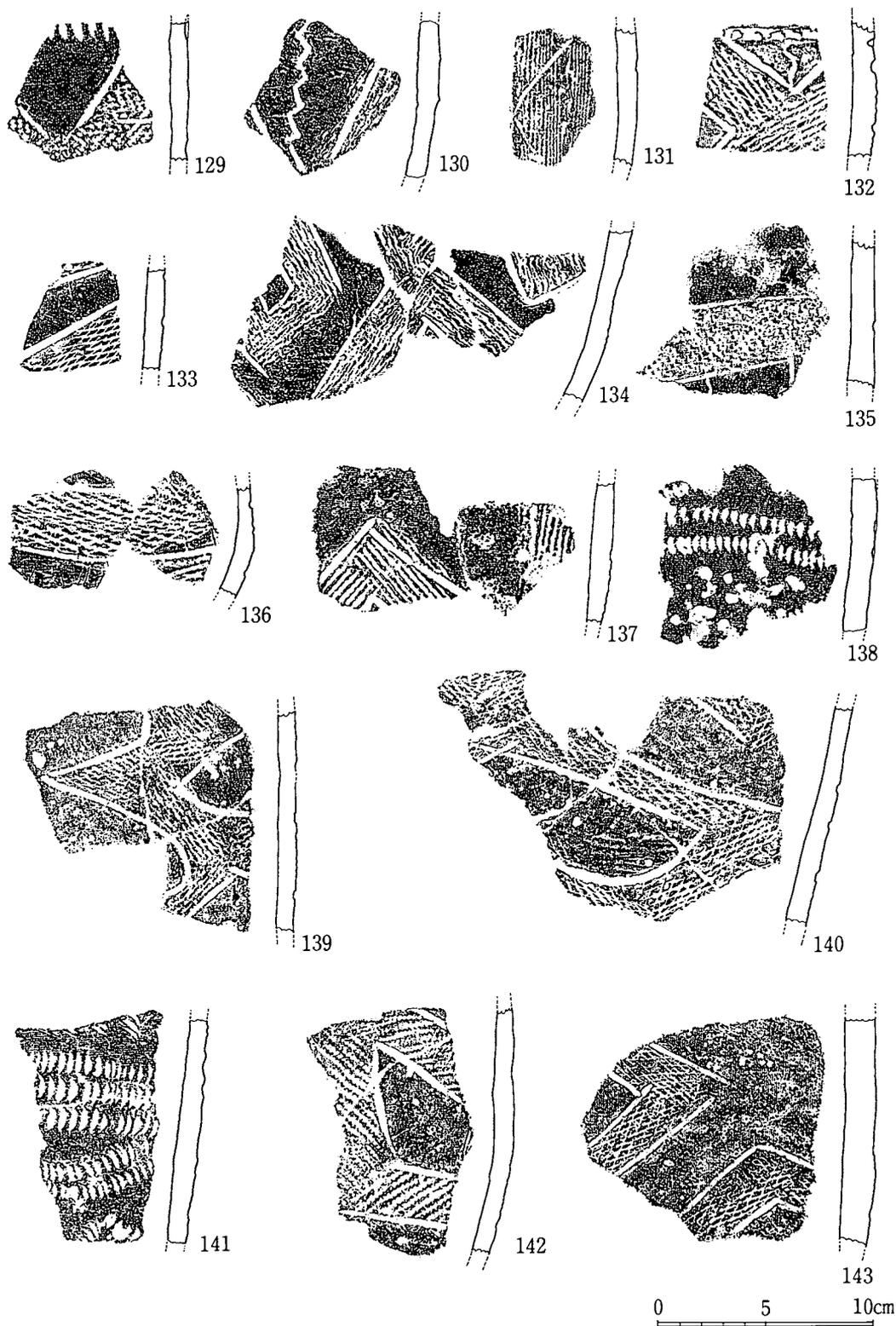


第46図 土器実測図

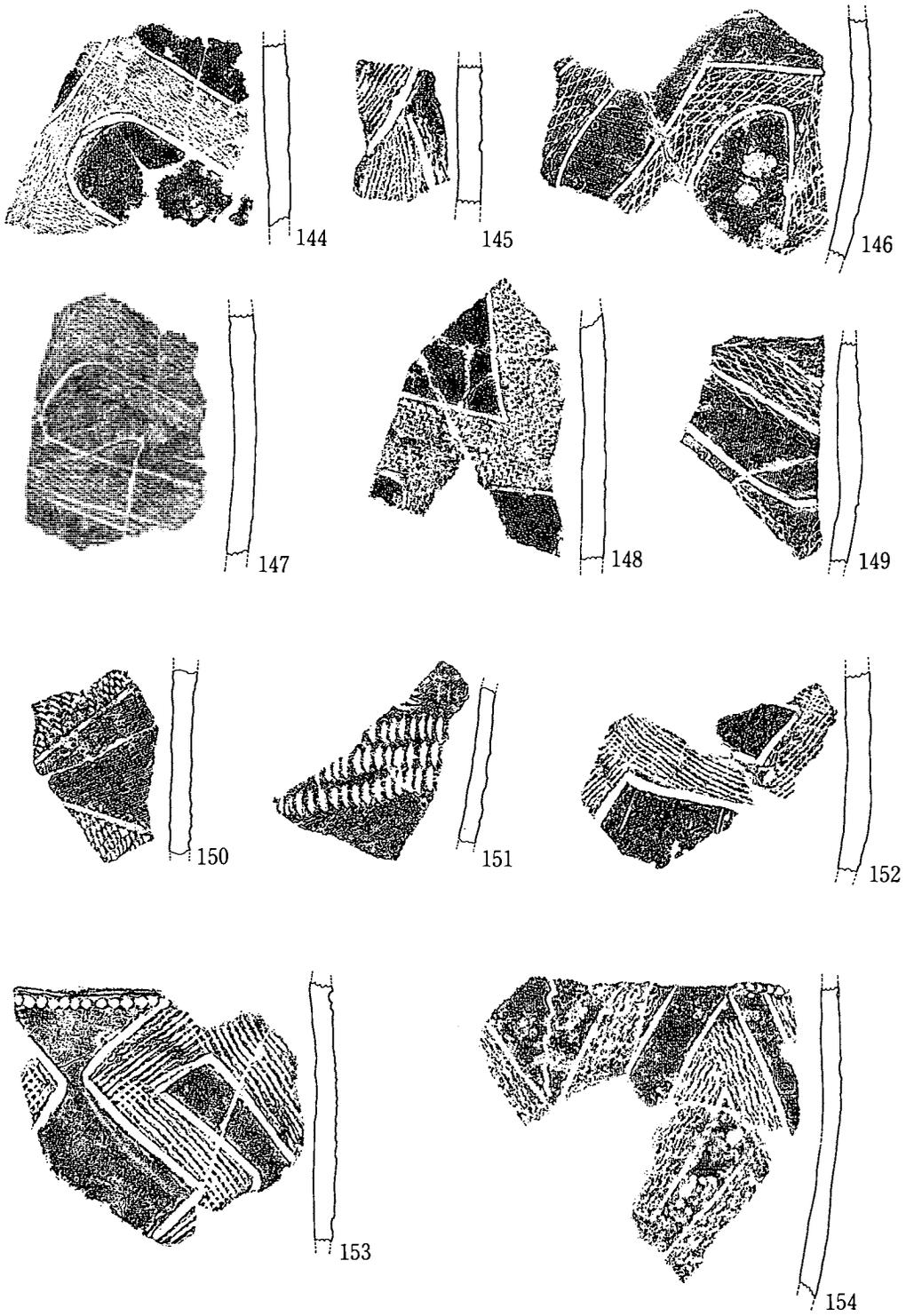


0 5 10cm

第47図 土器実測図

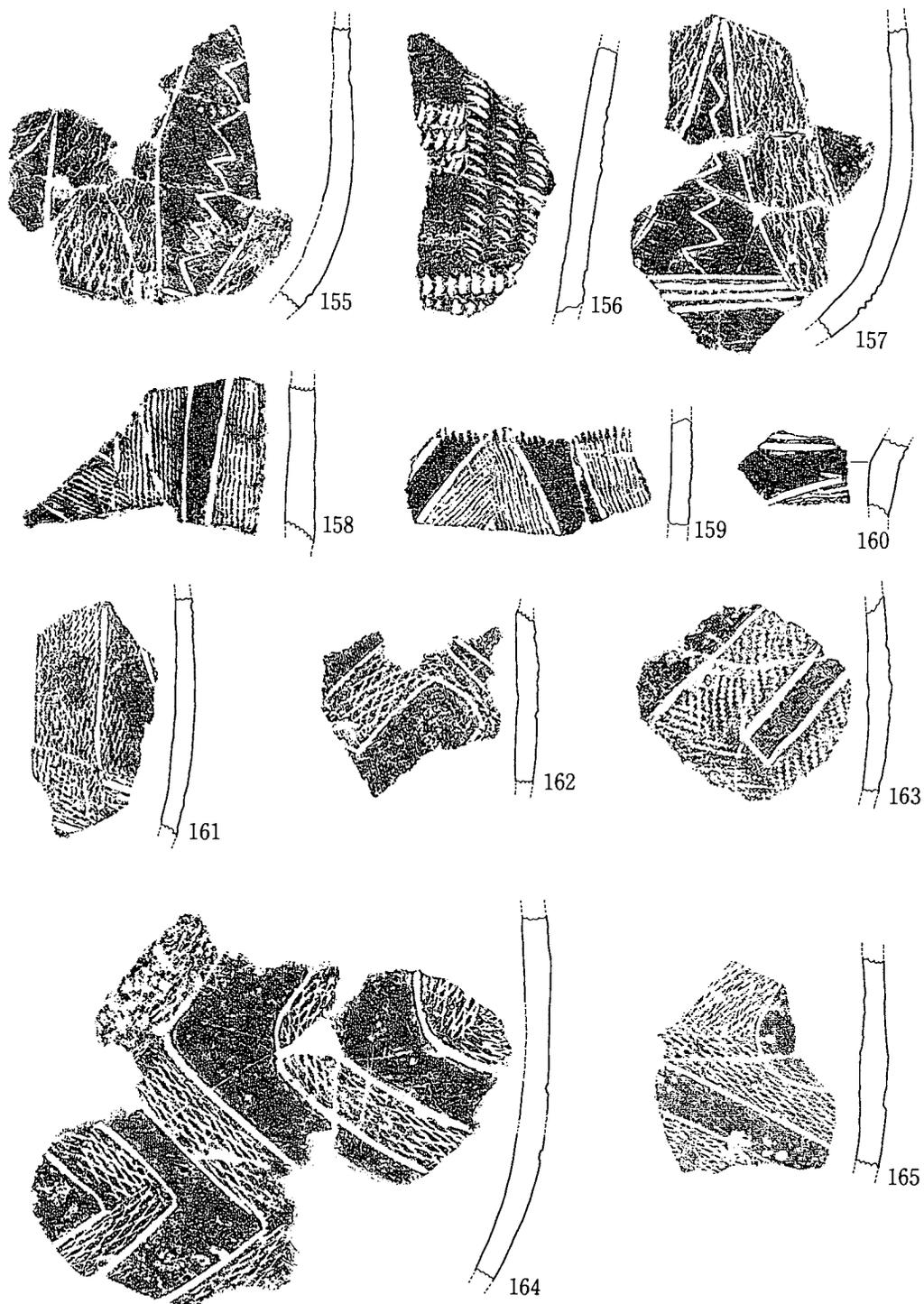


第48図 土器実測図



0 5 10cm

第49図 土器実測図



0 5 10cm

第50図 土器実測図

ある。内面は丁寧な、ナデ調整である。72～77は、口縁部が直線的に立ち上がり、貝殻による連続刺突文を施文する。また口唇部は、やや丸みをもち刻み目を施している。72は、胎土に1mm大の石英を多量に含み、また1mm以上の角セン石を少量含んでいる。器面の色調は、内外面とも褐色である。器厚は12mmで、焼成は良好である。73は、胎土に1mm前後の長石、角セン石をわずかに含んでいる。また、1mm大の石英を多量に含んでいる。器面の色調は、外面が褐色で内面が明褐色である。器厚は12mmで、焼成は良好である。内面は丁寧な、ナデ調整である。74は、口縁部が直線的に立ち上がり、横位に貝殻による連続刺突文を施文する。口唇部は、やや丸みをもち貝殻による刻み目を施す。胎土は、1mm大の石英粒をわずかに含んでいる。器面の色調は、外面が明褐色で内面が黒褐色である。器厚は11mmで、焼成は良好である。内面は丁寧なナデ調整による。75は、直線的に立ち上がる口縁部である。しかし頸部～口唇部へ徐々に肉厚になる。口唇部は、平滑に作り出し貝殻による刻み目を施す。胎土は、1mm以下の石英や長石を多量に含み、角セン石をわずかに含んでいる。器面の色調は、外面が褐色で内面が明褐色である。焼成は良好で、内面は丁寧なナデ調整である。76は、口唇部が平滑に作り出された資料である。口唇部には、貝殻により細かく刻み目が施されている。胎土は、1mm以下の石英や長石を多量に含んでいる。器面の色調は、内外面とも褐色である。焼成は良好で、内面は丁寧なナデ調整である。77は、口唇部がやや丸みをもって作り出され、貝殻による刻み目を施している。口縁部の形態は、やや内湾気味に立ち上がる。胎土は、1mm以下の石英や長石を多量に含んでいる。器面の色調は、外面が褐色で内面が明褐色である。焼成は良好で、内面は丁寧なナデ調整である。79は、口唇部がやや丸みをもって作り出され、貝殻による刻み目を施している。胎土は、1mm以下の石英を多量に含んでいる。器面の色調は、内外面とも淡褐色である。焼成は、良好である。80は、口唇部が平滑に作り出され、貝殻による刻み目が施されている。内面は丁寧なナデ調整で、やや煤の付着が確認される。胎土は、1mm大の石英や長石を多量に、また1mm以下の角セン石をわずかに含んでいる。器面の色調は、内外面とも褐色である。焼成は良好である。81は、直線的に立ち上がる口縁部で、口唇部はやや丸みをもって作り出されている。1～2mmの石英や長石を多量に含んでいる。器面の色調は、外面が明褐色で内面が褐色である。焼成は良好で、内面は丁寧なナデ調整による。84は、直線的に立ち上がる口縁部で口唇部は平滑に作り出され、貝殻による刻み目が施されている。胎土は、1mm以下の石英をわずかに含んでいる。器面の色調は、内外面とも淡褐色で、焼成は良好である。85は、比較的口縁部が短い資料である。頸部の屈曲部は内面ではしっかりと「くの字」を呈するが外面では緩やかに内湾しながら胴部へ移行する。口唇部は平滑に作り出され、貝殻による刻み目が施されている。胎土は、微細な石英粒を含んでいる。器面の色調は、内外面とも明褐色である。焼成は良好である。86は、頸部～口唇部へと徐々に細く作り出されている。胎土は、微細な雲母や長石をわずかに含んでいる。器面の色調は、内外面とも明褐色で焼成は良好である。87は、

直線的に立ち上がる口縁部で、口唇部は平滑に作り出されている。また口唇部に貝殻による刻みを施す。88、92、95は、口唇部が平滑に作り出され、口縁部はやや内湾気味に立ち上がる。胎土は、微細な砂粒を多量に含んでいる。器面の色調は、内外面とも褐色である。内面は丁寧なナデ調整で、焼成は良好である。96は、口縁部の小破片である。胎土は、微細な石英や長石をわずかに含んでいる。器面の色調は、内外面とも明褐色で焼成は良好である。97は、口唇部が平滑に作り出されている。胎土は微細な石英や長石の粒子を多量に含んでいる。器面の色調は、外面が暗褐色で内面が明褐色である。内面は丁寧なナデ調整で、焼成は良好である。98は、内面の状態に凹凸がみられる。胎土は、微細な石英や長石の粒子をわずかに含んでいる。器面の色調は、外面が暗褐色で内面が褐色である。焼成は、良好である。99は、口唇部が平滑に作り出されている。頸部の屈曲部以下胴部では、急激に器厚が薄くなる。胎土は、1mm以下の石英や長石を多量に含んでいる。内面は、丁寧なナデ調整である。器面の色調は、内外面とも褐色で焼成は良好である。101、102は、胴部中央～口縁部の資料である。底部の形態は不明であるが、全体形が想定できる資料である。2点とも頸部から小さくラップ状に開く口縁部をもつ。また口唇部は、平滑に作り出され、口唇部に貝殻による刻みを施す。胎土、器面の色調とも同様で、胎土は1mm大の石英粒を多量に含んでいる。器面の色調は、内外面とも明褐色で焼成は良好である。105は、直線的に立ち上がる口縁部で、口唇部には貝殻よって刻みを施す。胎土は、微細な砂粒を多量に含み、器面の色調は内外面とも明褐色である。焼成は良好である。

1 b類 (第42図54、57、58、59、61～第43図63、65、66、第44図68、69、71、82、89、91、93、94、第45図100、第46図103、104)

1 b類は、胴部の文様は1 a類と同様であるが、口縁部に凹線文間に撚糸文・縄文を充填させるという胴部文様と同じ文様が施文されるものである。

54は、胴部中央～口縁部まで復元できた資料である。口縁部は、湾曲しながら外に開き、口唇部に貝殻による刻みを施している。口縁部の文様は、横位の凹線文間に撚糸文を充填している。頸部には、貝殻による連続刺突文を施文する。胴部は、幾何学的に区画した凹線間に撚糸文を充填している。また、施文空白部に沈線による波形文を縦位に施文している。このような胴部の沈線による波形文縦位施文は、他に資料中5点(130、132、154、155、157)検出した。この5点は、底部に近い胴部片が2点、胴部中央が3点である。その器形は、底部に近い胴部片からすると、湾曲しながら底部へすぼまりながら移行するものと考えられる。5点とも胎土、器面の色調等は類似し、155と157は同一個体の可能性がある。胎土は1mm以下の角セン石をわずかに、石英を多量に含んでいる。器面の色調は、内外面とも明褐色で焼成は良好である。57は、直線的に立ち上がる口縁部で、口唇部は平滑に作り出し貝殻による刻みを施す。口縁部文様は、貝殻による連続刺突文施文と横位に区画した凹線文間に撚糸文を充填している。胎土は、微細な砂粒を多量に含んでいる。器面の色調は、内外面とも暗褐色で焼成は良好であ

る。58は、口径が復元できる資料である。口縁部は湾曲しながら外に開き、口唇部には貝殻による刻み目を施す。口縁部の文様は、横位に区画した凹線文間に撚糸文を充填している。胎土は、1mm大の石英や長石を多量に含んでいる。器面の色調は、内外面とも明褐色で焼成は良好である。また、内面は丁寧なナデ調整による。59は、内湾ぎみの口縁部資料である。口唇部は、やや丸みをもち貝殻による刻み目を施す。口縁部の文様は、横位に区画した凹線文間に撚糸文を充填する。胎土は、微細な砂粒を多量に含み、焼成は良好である。器面の色調は、内外面とも暗褐色である。61は、やや湾曲しながら外に開く口縁部で、口唇部に貝殻による刻み目を施す。口縁部の文様は、縦位に区画した凹線文間に撚糸文を充填する。胎土は、1mm大の石英や長石の粒子をわずかに含み、焼成は良好である。器面の色調は、外面が黒褐色で内面が黄褐色である。62は、屈曲部のみの資料である。文様は、横位に区画した凹線文間に撚糸文を充填する。胎土は、1mm以下の石英や角セン石を多量に含んでいる。器面の色調は、内外面とも淡褐色である。焼成は、良好である。63は、口径が復元できる資料である。口縁部は、湾曲しながら外に開き、貝殻による連続刺突文を横位に施文し、また横位に施文された凹線文間にLRの縄文を充填する。胎土は、1mm大の石英や長石を多量に含んでいる。器面の色調は、外面が褐色で内面が黒褐色である。焼成は良好で、内面は丁寧なナデ調整による。65は、12号集石から検出した資料で口縁部は、朝顔形に開き口唇部に刻み目を施す。また、横位に区画した凹線文間にLRの縄文を充填する。胎土は、1mm大の石英や長石、雲母をわずかに含み、焼成は良好である。器面の色調は、外面が明褐色で内面が褐色である。66は、湾曲しながら外に開く口縁部で、口唇部は貝殻による刻み目を施す。胎土は、1mm以下の石英や長石、角セン石をわずかに含んでいる。器面の色調は、内外面とも褐色である。焼成は、良好である。68は、直線的に外に開く口縁部で、口唇部は丸みをもつ。また、口唇部には貝殻による刻み目が施されている。横位に区画された凹線文間にRLの縄文を充填する。胎土は、1mm以下の石英や長石の粒子を多量に含んでいる。器面の色調は、外面が褐色で内面が明褐色である。焼成は良好で、内面は丁寧なナデ調整である。69は、湾曲しながら外に開く口縁部破片である。口唇部は、貝殻による刻み目を施し、口縁部の文様は貝殻による連続刺突文を施文する。また、横位に区画された凹線文間にRLの縄文を充填する。胎土は、2mm程度の石英や長石の粒子を多量に含んでいる。器面の色調は、外面が褐色で内面が黒褐色である。焼成は良好で、内面は丁寧なナデ調整による。71は、湾曲ぎみにそとに開く口縁部破片である。口唇部の刻み目は施されず、口縁部中位に棒状の施文原体による連続刺突文を施す。口唇部は、平滑に作り出される。文様は、横位に区画された凹線文間に撚糸文を充填している。胎土は、1mm以下の石英や長石、角セン石の粒子を多量に含んでいる。器面の色調は、外面が褐色で内面が淡褐色である。焼成は良好で、外面に煤の付着が確認される。82は、やや外反ぎみに外に開く口縁部破片である。口唇部はやや丸みをもち、貝殻による刻み目を施す。口縁部の文様は、横位に棒状の施文原体による連続刺

突文を施文し、以下に区画の凹線文を施文せず斜方向に撚糸文を施文している。胎土は、微細な石英や雲母の粒子を多量に含んでいる。器面の色調は、内外面とも淡褐色で、焼成は良好である。89は、やや湾曲しながら外に開く口縁部破片である。口唇部は、平滑に作り出し貝殻による刻み目を施す。口縁部の文様は、横位に区画された凹線文間に編目状の撚糸文を充填する。胎土は、1mm以下の石英や長石を多量にふくんでいる。器面の色調は、内外面とも明褐色で焼成は良好である。90は、直線的に外に開く口縁部破片である。口唇部はやや平滑に作り出し、貝殻による刻み目を施す。口縁部の文様は、上部に凹線文がなく下部のみに横位に凹線文を施し、同方向に撚糸文を施文している。胎土は、1mm大の石英をわずかに含んでいる。器面の色調は、内外面とも褐色である。焼成は良好である。91は、湾曲しながら外に開く口縁部破片である。口唇部は丸みを持ち、貝殻による刻み目を施す。また、口縁部の文様は他の資料とは違い、横位の凹線文を3本施文し、その上下に棒状の施文原体による連続刺突文を施す。この文様は、塞ノ神式土器第3類に類似する。しかし、下部の文様が区画した凹線文間に撚糸文を充填しており、ここでは第1b類に分類した。胎土は、1mm以下の石英をわずかに含んでいる。器面の色調は、内外面とも黄褐色である。焼成は、良好である。93は、直線的に外に開く口縁部破片である。口縁部は中位でやや肉厚になり、湾曲した形状にみえる。文様は口唇部に貝殻による刻み目を施し、横位に貝殻による連続刺突文を3条施文する。また、下部には区画した凹線文間に撚糸文を施文する。胎土は、1mm以下の雲母や角セン石の粒子をわずかに含み、また2mm程度の石英や長石を多量に含んでいる。器面の色調は、外面が明褐色で内面が黄褐色である。焼成は、良好である。94は、直線的に外に開く口縁部破片である。口唇部は、平滑に作り出し貝殻による刻み目を施す。また、横位に区画した凹線文間に編目状の撚糸文を施文する。胎土は、微細な石英の砂粒を多量に含んでいる。器面の色調は、内外面とも褐色である。焼成は良好で、内面は丁寧なナデ調整による。100は、胴部中位～口縁部にかけての接合資料である。口縁部は、湾曲しながら外に開き、頸部で大きく「くの字」に屈曲する。胴部は、丸く膨らむ器形を呈する。頸部の屈曲部に、貝殻による連続刺突文が施文され、口縁部には波形に区画された凹線文間に撚糸文が充填される。胎土は、1mm大の石英や長石を多量に含み、わずかに雲母を含んでいる。器面の色調は、内外面とも明褐色である。焼成は良好である。103は、湾曲しながら外に開く口縁部破片である。口唇部はやや丸みを持ち、貝殻による刻み目を施す。また、口縁部には貝殻による連続刺突文を3条施文し、頸部近くに横位に区画した凹線文間にLRの縄文を充填する。胴部文様は、残存部分が小さく全体については不明であるが、縦位に区画した凹線文間に同様に縄文を施文している。胎土は、1mm以下の雲母や砂粒を多量に含んでいる。器面の色調は、外面が黄褐色で内面が褐色である。焼成は良好で、内面は横方向の粗いケズリがみられる。104は、湾曲しながら外に開く口縁部破片である。口縁部の文様は、上部が貝殻による3条の連続刺突文を横位に施文し、下部に横位に区画した凹線文間にLRの縄

文を充填する。胎土は、1mm大の石英や長石を多量に含んでいる。器面の色調は、外面が淡褐色で内面が黒褐色である。焼成は良好で、63と同一個体の可能性がある。

1 c 類 (第46図107、109、第48図141、第49図151、第50図156)

1 c 類は、貝殻による連続刺突文を口縁部～胴部に幾何学的に施文する一群の土器である。口縁部の資料は、1 a 類のなかに含まれている可能性がある。ここでは、胴部破片を中心に個別に説明を加えていく。

107は、横位に3条の貝殻による連続刺突文を施文し、縦位に1条を同様に施文する。胎土は、微細な砂粒を多量に含んでいる。器面の色調は、外面が褐色で内面が明褐色である。焼成は、良好である。109は、破片が小さく文様帯の一部しか見えていない。貝殻による連続刺突文は、横位と縦位に施文されている。胎土は、微細な砂粒を多量に含んでいる。器面の色調は、外面が褐色で内面が明褐色である。焼成は、良好である。141は、横位と縦位に貝殻による連続刺突文を施文する。横位は3条と2条の2列、縦位は3条以上を単位とする。胎土は、微細な砂粒を多量に含んでいる。器面の色調は、内外面とも褐色である。焼成は、良好である。151は、横位と縦位に貝殻による連続刺突文が施文される。横位は3条を単位とし、縦位は1条以上を施文する。胎土は、微細な石英や長石の粒子を多量に含み、焼成は良好である。器面の色調は、内外面とも明褐色である。156は、横位と縦位に貝殻による連続刺突文を、それぞれ2列と1列施文する。横位は上段で3条、下段で2条以上を単位とする。縦位は、3条以上を単位とする。胎土は、微細な砂粒を多量に含み、焼成は良好である。器面の色調は、内外面とも明褐色である。

第1類の胴部 (106、108、111～129、131、133～137、139、140、142～150、152～154、158～165)

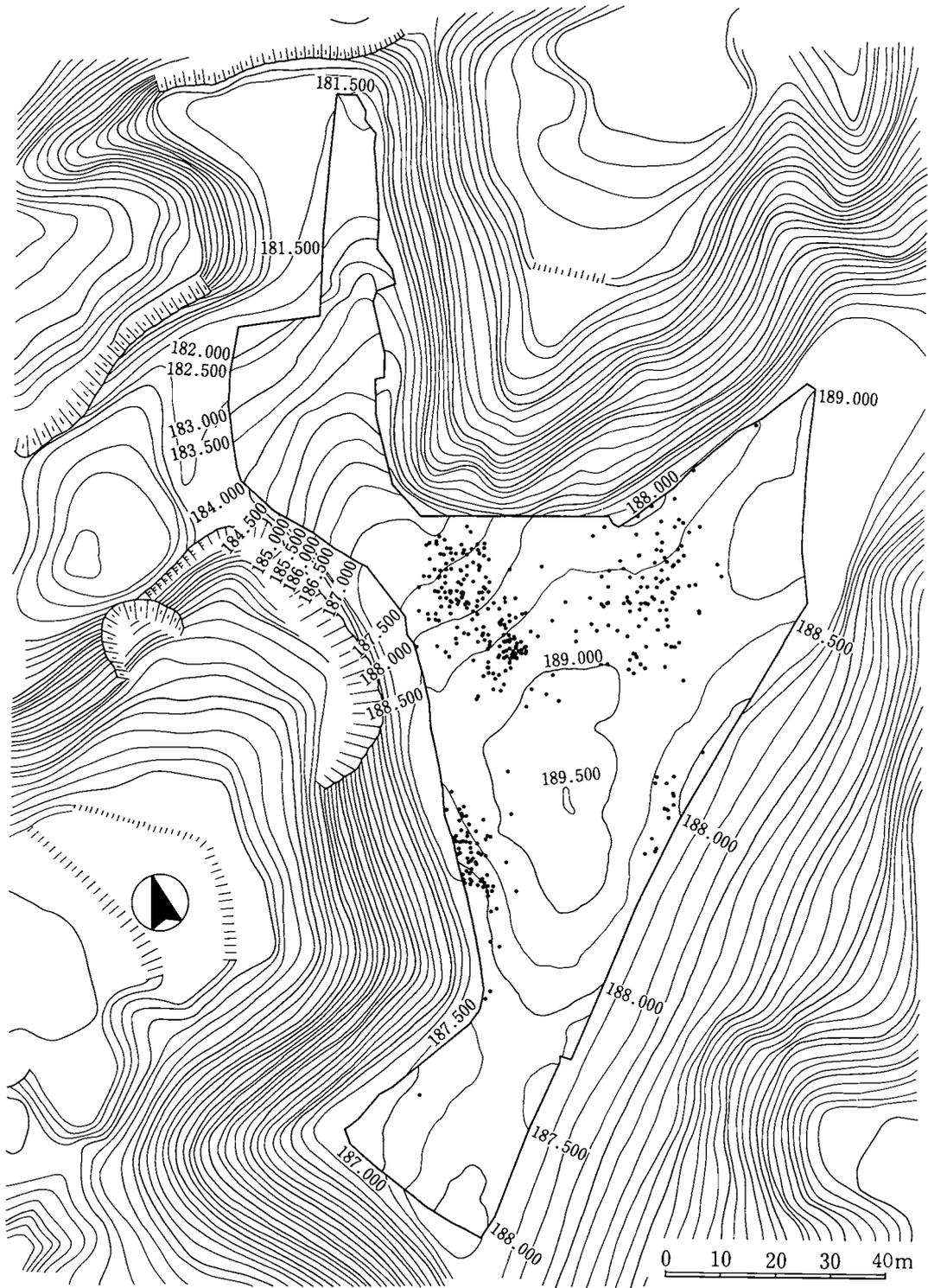
以上の1 a 類～1 c 類に該当しないか、ないしは1 a 類と1 b 類のどちらかに該当する胴部破片を一括してみたい。

これらの資料の中で、文様から大きく2つに細分できる。1つは、幾何学的に区画した凹線文間に撚糸文を充填するもの(106、108、112、116～118、120～122、126、127、133、134、136、137、139、140、14～147、149、152、153)、もうひとつは同様の状態に施文された凹線文間に縄文を充填するもの(111、115、125、129、135、142、148)である。また器形では、胴部が直線的なもの(106、118、122、125、126、134、136、142、146、152)とがある。

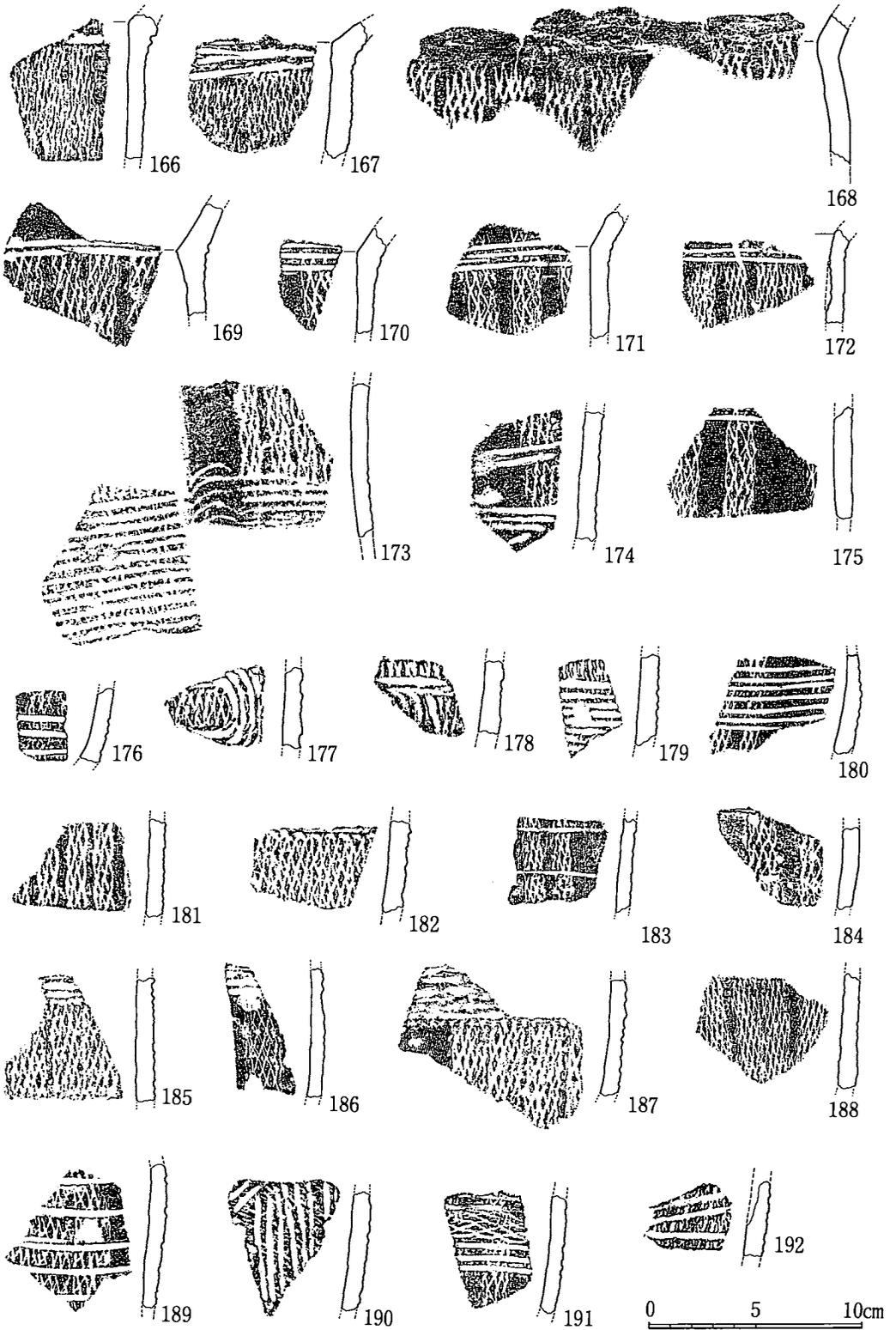
第2類 (第52図116第53図196)

2類は、器形上は1・3類と同様である。施文は、口縁部から頸部にかけて曲線や直線の凹線文によって幾何学的に構成する。胴部の文様では、縦位に施文された撚糸文帯と無文帯を交互に施文し、その上から凹線文帯を横位に施文する土器群である。

166～172は、頸部から胴部にかけての資料である。166は、撚糸文を施文し、頸部の屈曲部に横方向の凹線文を施す。胎土は、微細な石英や長石を多量に含み、焼成は良好である。器面

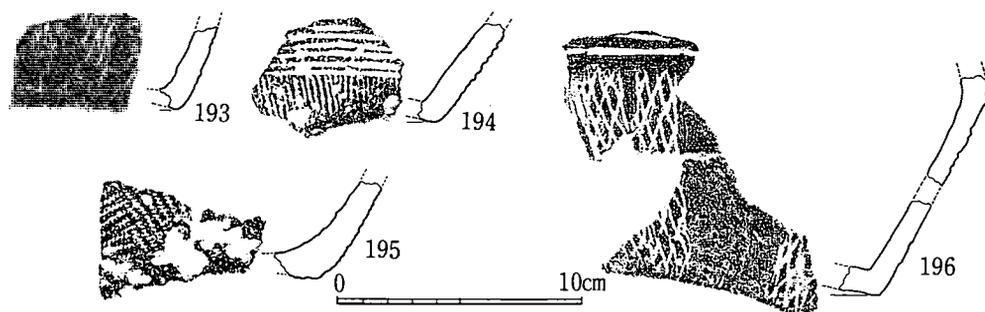


第51図 遺物分布図(塞ノ神式土器第2類)



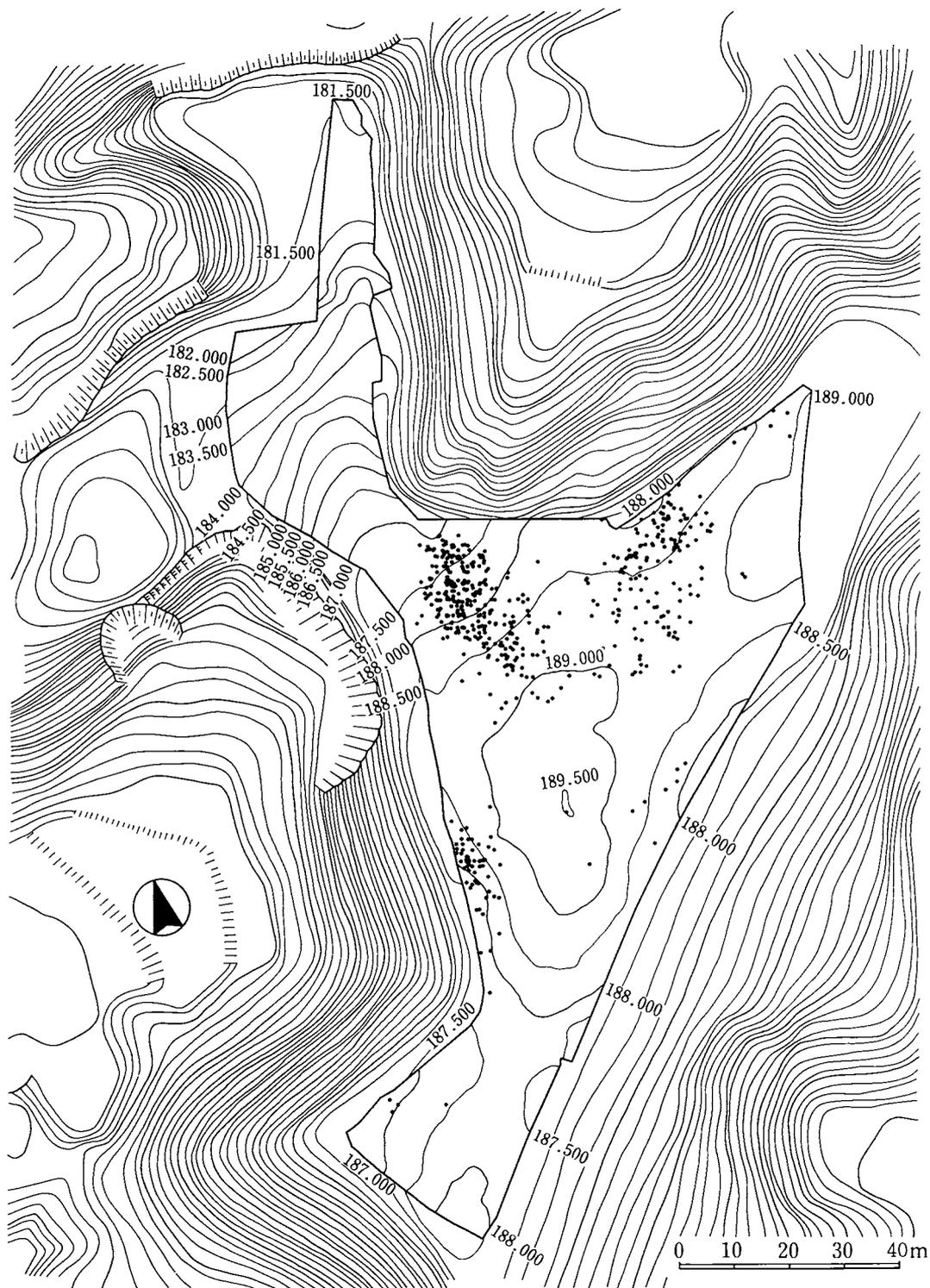
第52図 土器実測図

の色調は、外面が褐色で内面が暗褐色である。167は撚糸文を縦位に施文し、頸部の屈曲部に4本の凹線を施す。胎土は、微細な石英や長石を多量に含み、焼成は良好である。器面の色調は、内外面とも淡褐色である。168は、頸部以下にわずかに無文帯を挟みながら縦方向の撚糸文を施文する。胎土は、1mm以下の石英を多量に含んでいる。器面の色調は、外面が褐色で内面が黄褐色である。焼成は良好である。169は、頸部の屈曲部に2本の凹線文を施し、胴部にはわずかな無文帯を挟みながら縦方向の撚糸文を施文する。胎土は、微細な石英を多量に含み、焼成は良好である。器面の色調は、外面が明褐色で内面が暗褐色である。170は、胴部に縦方向の撚糸文を施し、屈曲部ではその上から3本以上の凹線文を施す。胎土は、1mm大の石英を多量に含み、焼成は良好である。器面の色調は、内外面とも明褐色である。171は、頸部から胴部にかけてわずかな無文帯を挟みながら、縦方向の撚糸文を施文する。また屈曲部には、その上から4本の凹線文を施す。胎土は、微細な石英や長石を多量に含み、焼成は良好である。器面の色調は、内外面とも淡褐色である。172は、胴部にわずかな無文帯を挟みながら縦方向の撚糸文を施文する。屈曲部には、その上から2本以上の凹線文を施す。胎土は、微細な石英や長石を多量に含んでいる。器面の色調は、外面が黒褐色で内面が褐色である。焼成は良好である。173は、胴部破片である。縦方向の撚糸文を施文し、その上から12本以上の凹線文を施す。胎土は、微細な石英を多量に含み、焼成は良好である。器面の色調は、内外面とも淡褐色である。174は、縦方向の撚糸文を施文し、その上から2～3本の凹線文を施文している。胎土は、微細な石英の粒子を多量に含み、焼成は良好である。器面の色調は、内外面とも褐色である。175は、ややしっかりとした無文帯をもって、縦方向の撚糸文を施文している。その上から横位に1本以上の凹線文を施す。胎土は、微細な石英を多量に含んでいる。焼成は良好で、器面の色調は外面が暗褐色で内面が褐色である。176は、縦方向に撚糸文を施文し、その上から横位の凹線文を3本以上施す。胎土は、微細な石英を含み、焼成は良好である。器面の色調は内外面とも明褐色である。177、178は、縦方向に撚糸文を施文し、その上から凹線文を円形に施す。胎土・器面の色調は2点とも同様である。胎土は、微細な石英の粒子を多量に含んでいる。器面の色調は、内外面とも明褐色である。179は、縦方向に撚糸文を施文し、凹線文を

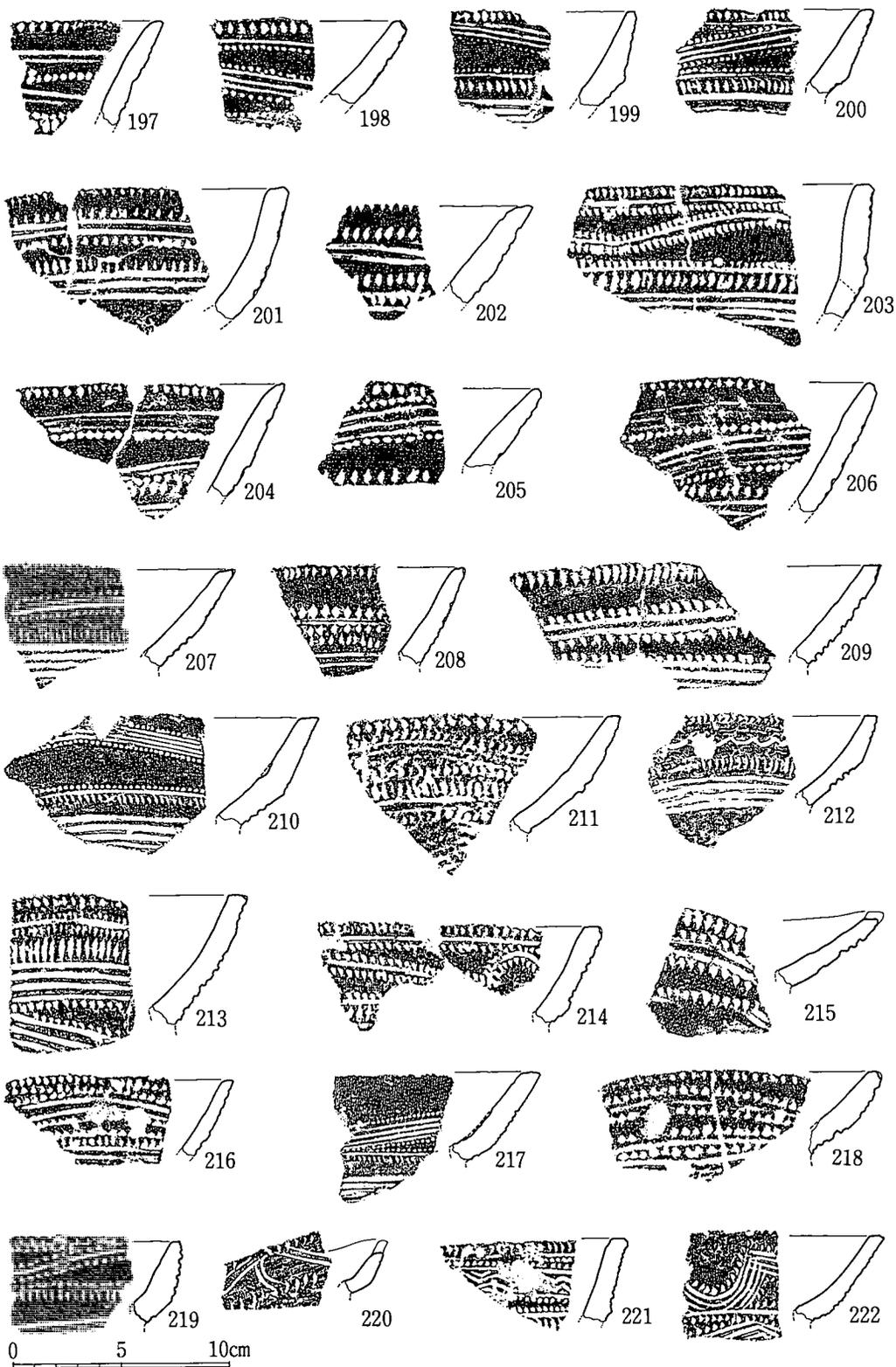


第53図 土器実測図

横位に8本以上施す。胎土は、微細な石英の粒子を含んでいる。器面の色調は、内外面とも褐色で焼成は良好である。180は、縦方向にわずかな無文帯をもちながら捺糸文を施文し、その上から横位に7本の凹線文を施す。胎土は、雲母の粒子をわずかに含んでいる。器面の色調は内外面とも褐色で、焼成は良好である。181は、縦方向にわずかな空白をもちながら捺糸文を施文する。胎土は、微細な石英の粒子を多量に含んでいる。器面の色調は、内外面とも褐色である。182は、縦方向に空白をもたず捺糸文を施文し、横位に凹線文を施している。胎土は、微細な石英や長石の粒子を多量に含んでいる。器面の色調は、外面が明褐色で内面が褐色である。183は、縦方向に空白をもちながら捺糸文を施文し、横位に間延びした状態で1本ずつ凹線文を施す。胎土は、長石の細粒を多量に含み、焼成は良好である。器面の色調は、内外面とも暗褐色である。184は、縦方向に無文帯をもちながら捺糸文を施文している。胎土は1mm大の石英を多量に含んでいる。器面の色調は、外面が暗褐色で内面が褐色である。185は、縦方向の編目状の捺糸文を密接に施文し、3本以上の凹線文を横位に施す。胎土は、微細な石英や長石を多量に含んでいる。器面の色調は内外面とも明褐色で、焼成は良好である。186は、縦方向の捺糸文が施文され、4本以上の横位の凹線文を施す。胎土は、石英の砂粒を多量に含んでいる。器面の色調は、外面が明褐色で内面が褐色である。焼成は良好である。187は、縦方向に捺糸文を幅広く施文し、6本以上の凹線文を横位に施す。胎土は、微細な石英や長石を多量に含んでいる。器面の色調は、外面が暗褐色で内面が明褐色である。焼成は良好である。188は、縦方向にわずかに空白をもちながら、捺糸文を施文する。胎土は、1～2mmの石英を多量に含んでいる。器面の色調は、内外面とも明褐色である。焼成は良好である。189は、縦方向に捺糸文を施文し、その上から横位に間延びした凹線文を5本ほどこす。胎土は、石英や角セン石の砂粒を多量に含んでいる。器面の色調は、外面が暗黄褐色で内面が明褐色である。焼成は良好である。190は、捺糸文を施文した上から、斜方向や縦方向に凹線文を施す。胎土は、石英や黒雲母の粒子を多量に含んでいる。器面の色調は、外面が明褐色で内面が暗褐色である。焼成は良好である。191は、縦方向に捺糸文を施文し、その上から横位に凹線文や捺糸文を施している。胎土は、石英の砂粒を多量に含んでいる。器面の色調は、内外面とも褐色である。192は、縦方向に捺糸文を施文し、その上からやや間延びした横位の凹線文を施している。胎土は、石英の砂粒を多量に含んでいる。器面の色調は、外面が暗褐色で内面が明褐色である。焼成は良好である。193、194、195、196は、底部に近い胴部の資料である。193は、縦方向にやや空白をもちながら編目状の捺糸文を施文する。胎土は、石英の砂粒をわずかに含んでいる。器面の色調は内外面とも明褐色で、焼成は良好である。194は、縦方向に密接な捺糸文を施文し、横位に6本の凹線文を施している。胎土は、石英や長石の砂粒を多量に含んでいる。器面の色調は、内外面とも明褐色で、焼成は良好である。196は、底部から胴部中心にかけての資料である。縦方向に無文帯をもちながら、編目状の捺糸文を施文し、胴部中心に2本以上の横位の



第54図 遺物分布図(塞ノ神式土器第3類)

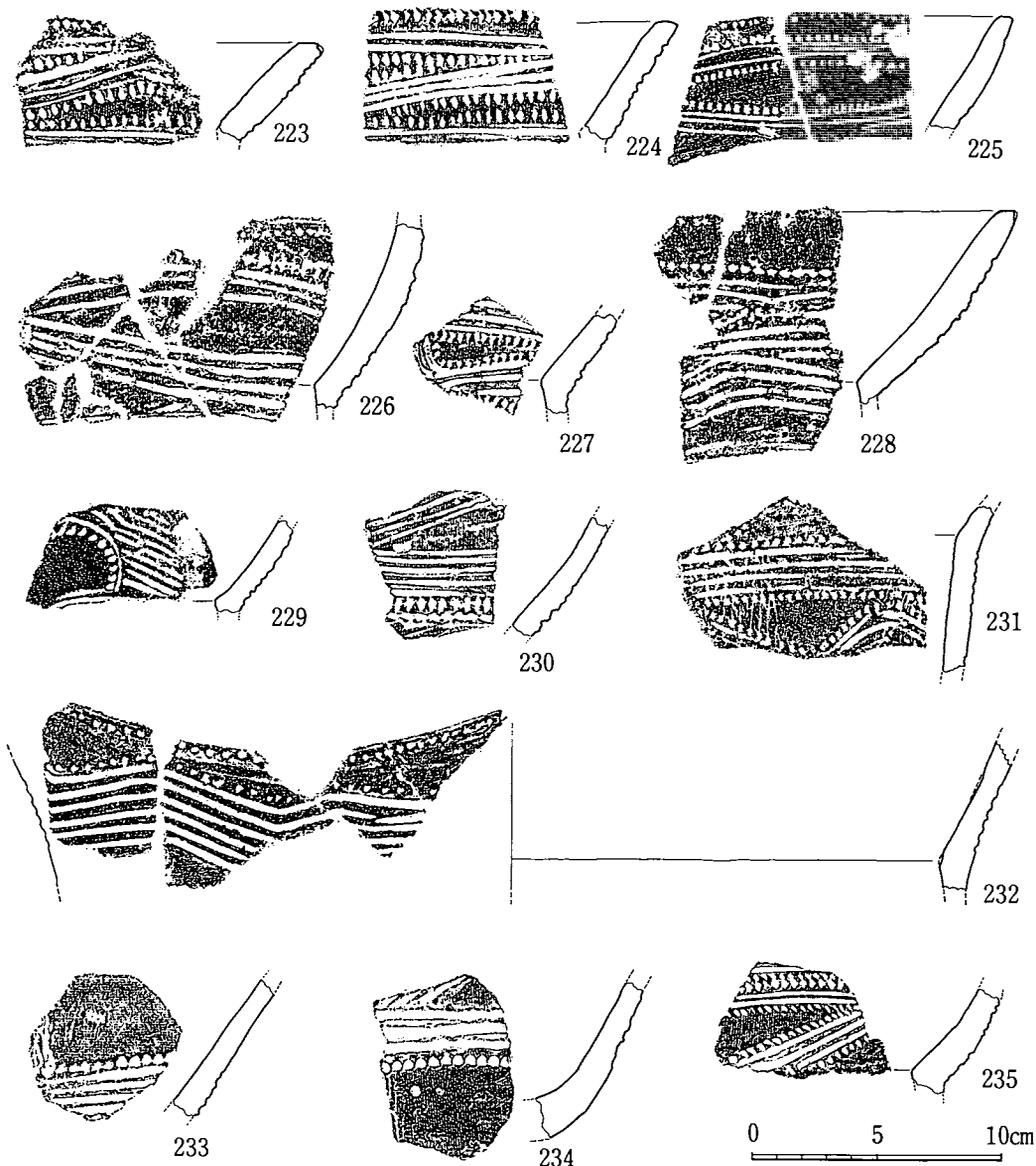


第55図 土器実測図

凹線文を施す。胎土は、石英の砂粒を多量に含んでいる。器面の色調は、外面が明褐色で内面が黒褐色である。焼成は良好である。

第3類 (第55図197～第56図235)

3類は、器形上は同様であるが、施文において口縁部から頸部にかけて、数条の凹線文を横位もしくは山形に施文し、その凹線文の上下に連続刺突文を施文する。胴部では、凹線文間に縄文・撚糸文を充填し、幾何学的な文様用を構成する。この場合、1類胴部との違いは凹線文によって曲線的な文様を施文する点にある。197は、口縁端部に貝殻による刻み目を施す。口



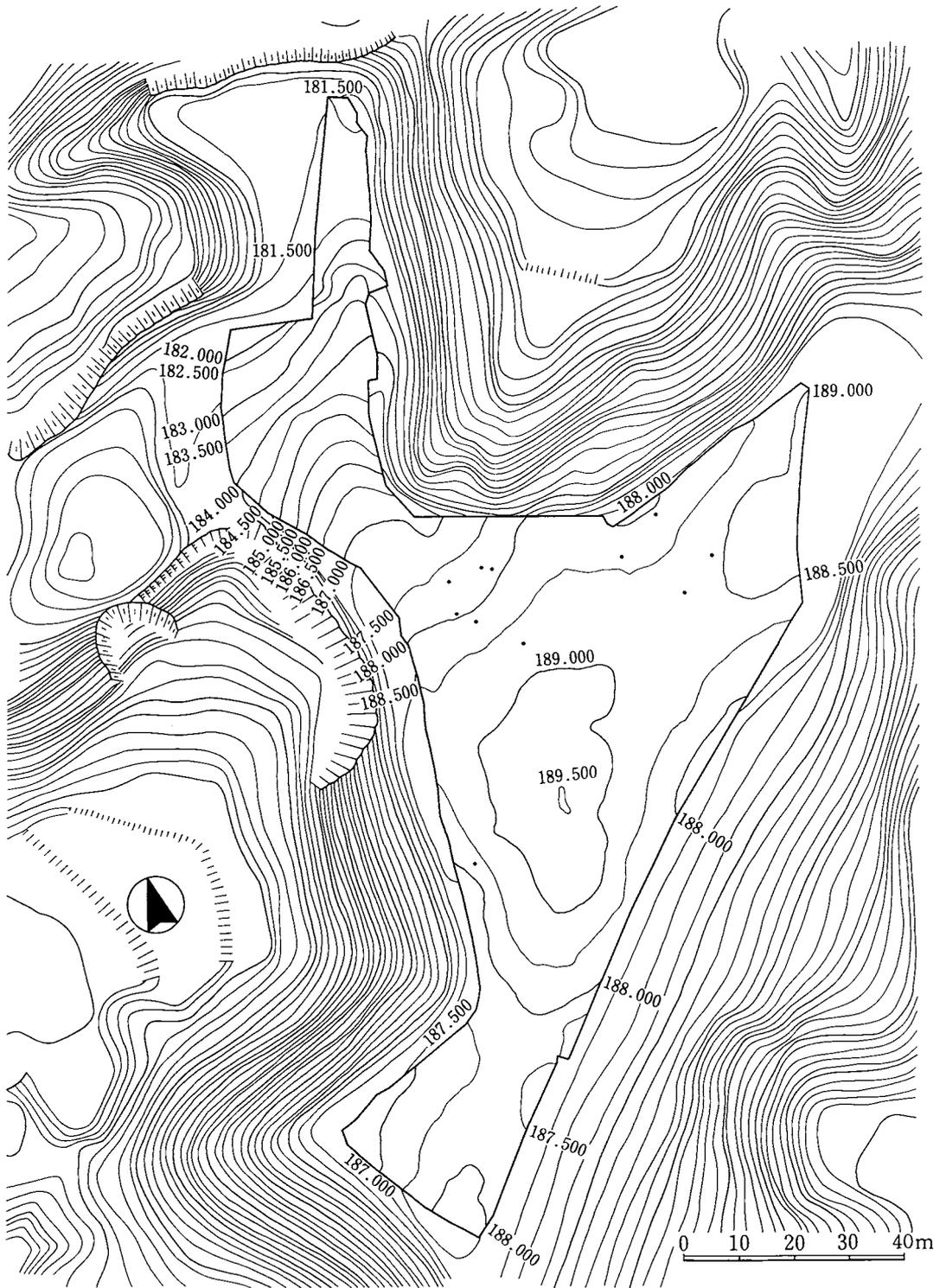
第56図 土器実測図

縁部には、2条の凹線文を2列施文し、その上下に施文原体による連続刺突文を施す。胎土は、石英や雲母の砂粒をわずかに含んでいる。器面の色調は内外面とも褐色で、焼成は良好である。198は、口縁端部に貝殻による刻み目を施す。口縁部には、1～3条の凹線文を施文し、その上下に施文原体による連続刺突文を施している。胎土は、石英や長石の砂粒を多量に含んでいる。器面の色調は、外面が暗褐色で内面が褐色である。焼成は良好である。199、200は、口縁端部に貝殻による刻み目を施し、1～3条を単位とする凹線文を横位や斜方向に施文する。その上下には、施文原体による連続刺突文を施す。口縁部の器形は、中位で肥厚し「逆くの字」に屈曲する。199の胎土は、石英や長石の砂粒を多量に含んでいる。器面の色調は内外面とも明褐色で、焼成は良好である。200の胎土は、石英や長石、雲母の砂粒を含んでいる。器面の色調は内外面とも明褐色で、焼成は良好である。201は、湾曲しながら外に開く器形を呈する。口縁端部には、貝殻による刻み目を施す。口縁部の文様は、2～3条の横位の凹線文を施し、その上下に施文原体による連続刺突文を施文している。胎土は、細かい砂粒を多量に含んでいる。器面の色調は内外面とも明褐色で、焼成は良好である。202は、口縁部が直線的に外に開く器形を呈する。口縁端部には、貝殻による刻み目を施し、横位の2条を単位とする凹線文を2列施文し、その上下に施文原体による連続刺突文を施している。胎土は、石英や雲母の砂粒を多量に含んでいる。器面の色調は内外面とも褐色で、焼成は良好である。203は、口縁部が湾曲しながら外に開く器形を呈する。口縁端部に貝殻による刻み目を施す。口縁部には、横位や斜方向の1～4条を単位とする凹線文を施し、その上下に施文原体により連続刺突文を施文している。胎土は、石英や長石の砂粒を含んでいる。器面の色調は内外面とも暗褐色で、焼成は良好である。204は、口縁端部に貝殻による刻み目を施す。口縁部の文様は、2～3条の凹線文を単位とし横位に施文し、その上下に施文原体による連続刺突文を施す。胎土は、石英や長石の砂粒を多量に含んでいる。器面の色調は内外面とも褐色で、焼成は良好である。205は、口縁端部に貝殻による刻み目を施し、3条の横位に施文した凹線文の上下に連続刺突文を施している。胎土は、細かな砂粒を多量に含んでいる。器面の色調は、外面が褐色で内面が黒褐色である。焼成は良好である。206は、口縁端部に貝殻による連続刺突文を施し、3～4条の横位に施文した凹線文の上下に連続刺突文を施す。胎土は、細かな砂粒を多量に含んでいる。器面の色調は、内外面とも暗黄褐色である。焼成は良好である。207は、口縁端部には、貝殻による細かな刻み目を施す。また2～4条の横位に施文した凹線文も上下に連続刺突文を施す。胎土は、細かな石英の粒子を含んでいる。器面の色調は内外面とも褐色で、焼成は良好である。208は、口縁端部による貝殻による刻み目を施し、横位の凹線文は2条を単位とし、その上下に施文原体による連続刺突文を施す。胎土は、石英や雲母の細かな粒子を含んでいる。器面の色調は、内外面とも褐色で、焼成は良好である。209は、口縁部の器形が直線的に外に開き、口縁端部は平滑に作り出し貝殻による刻み目を施す。横位に施文された凹線文は2～4条を単

位として施文され、その上下に施文原体による連続刺突文を施している。胎土は、細かな石英の粒子を多量に含んでいる。器面の色調は、外面が褐色で内面が明褐色である。焼成は良好である。210は、口縁部の器形が中位で緩く「くの字」に屈曲する。口縁端部は、平滑に作り出されている。1～4条の横位に施文した凹線文の上下に施文原体による連続刺突文を施している。胎土は、石英や雲母のこまやかな粒子を含んでいる。器面の色調は内外面とも褐色で、焼成は良好である。211は、口縁部の器形は、湾曲しながら外に開く。口縁端部は、平滑に作り出し貝殻による刻み目を施す。凹線文は、横位に2条以上を施文しその上下に施文原体による連続刺突文を施している。胎土は、石英の細かな粒子を多量に含んでいる。器面の色調は内外面とも褐色で、焼成は良好である。212は、湾曲しながら外に開く口縁部の器形を呈している。口縁端部は、平滑に作り出し貝殻による刻み目を施す。また波形の凹線文や横位の凹線文を施し、その中間に施文原体による連続刺突文を施す。胎土は、石英の砂粒をわずかに含んでいる。器面の色調は内外面とも褐色で、焼成は良好である。213は、口縁部の器形は湾曲しながら外に開く。口縁端部は平滑に作り出し、貝殻による刻み目を施す。凹線文は、横位や斜方向に施し、その上下に施文原体による連続刺突文を施文する。胎土は、長石や雲母の細やかな粒子を含んでいる。器面の色調は内外面とも褐色で、焼成は良好である。214は、直線的に外に開く器形を呈し、口縁端部は平滑に作り出し、貝殻による刻み目を施す。凹線文は、横位の直線や曲線が施され、その上下に施文原体による連続刺突文が施文される。胎土は、石英の砂粒を多量に含んでいる。器面の色調は内外面とも明褐色で、焼成は良好である。215は、直線的に大きく開く器形を呈し、口縁部はやや山形をなすものと考えられる。口縁端部は、平滑に作り出し貝殻による刻み目を施す。横位に凹線文を施し、その上下に施文原体による連続刺突文を施文する。胎土は、石英の砂粒を含んでいる。器面の色調は、外面が暗褐色で内面が明褐色である。焼成は良好である。216は、直線的に外に開く器形を呈し、口縁端部は平滑に作り出され貝殻による刻み目を施す。横位に施文した凹線文は上下に施文原体による連続刺突文を施している。胎土は、石英の砂粒を含んでいる。器面の色調は内外とも暗褐色で、焼成は良好である。217は、湾曲しながら外に開く器形を呈し、口縁端部は平滑に作り出す。横位に施文した凹線文の上下に施文原体による連続刺突文を施す。胎土は、長石や雲母の細やかな粒子を含んでいる。器面の色調は内外面とも褐色で、焼成は良好である。218は、やや湾曲しながら外に開く器形を呈し、口縁端部には貝殻による刻み目を施す。横位に施文した凹線文の上下に交互に連続刺突文を施している。胎土は、石英の細かな粒子を多量に含んでいる。器面の色調は内外面とも褐色で、焼成は良好である。219は、湾曲しながら外に開く器形で、口縁部中位でやや屈曲する。口縁端部は、やや丸みもち貝殻による刻み目を施す。横位に施した凹線文の上下に施文原体による連続刺突文を施文する。胎土は、石英の細かな粒子を含んでいる。器面の色調は内外面とも明褐色で、焼成は良好である。220は、口縁部の高さが比較的小さい資料で、わ

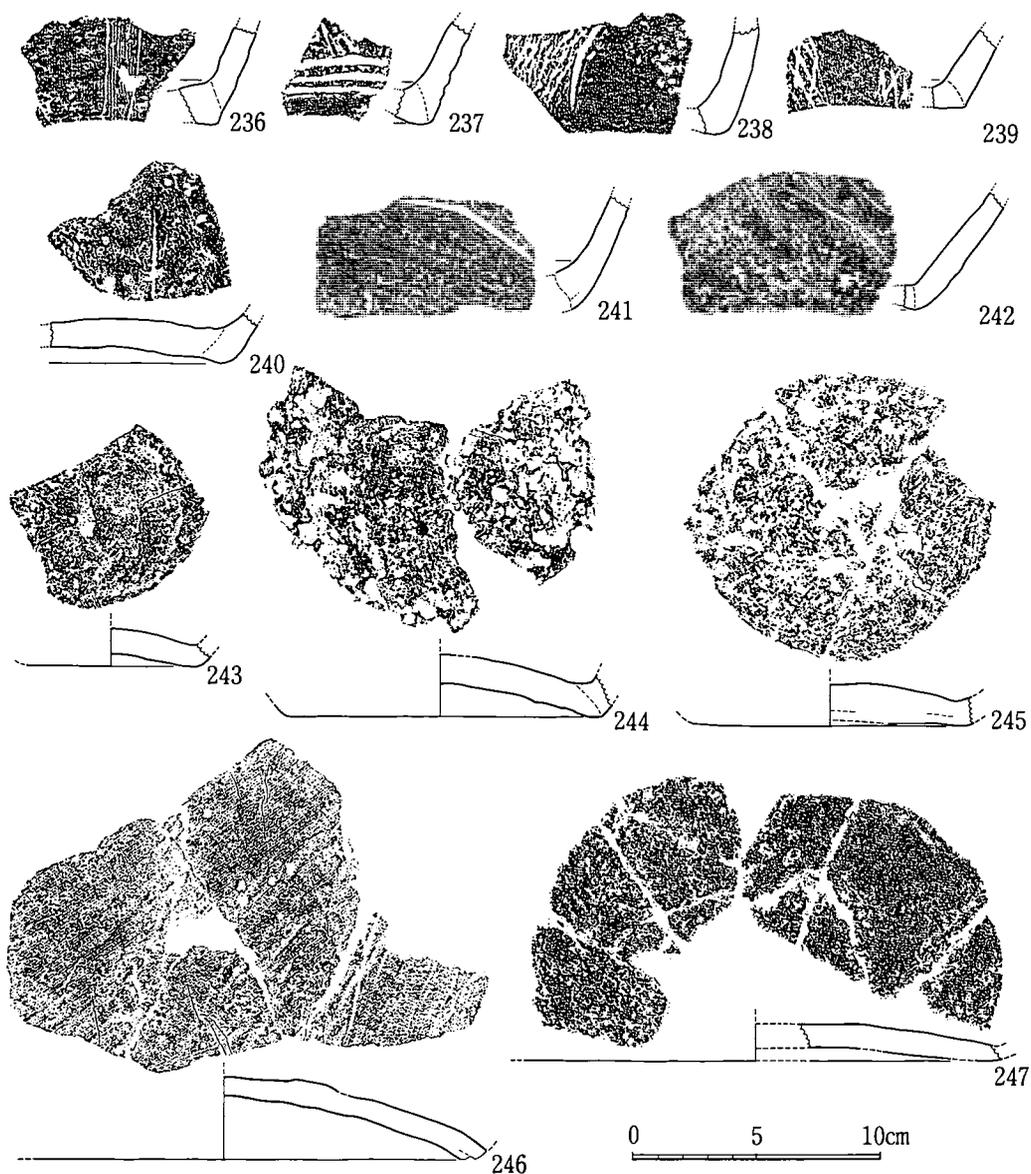
ずかに山形を呈する。口縁端部は丸みを持ち、貝殻による刻み目を施す。凹線文は、曲線的に施しその下に施文原体による連続刺突文を施している。胎土は、石英の細かな粒子を含んでいる。器面の色調は内外面とも褐色で、焼成は良好である。221は、直線的に外に開く器形を呈し、口縁端部は平滑に作り出し貝殻による刻み目を施す。凹線文は横位の直線や波形に施文している。その上下に施文原体による連続刺突文を施している。胎土は、石英や長石の細かな粒子を含んでいる。器面の色調は、内外面とも褐色で、焼成は良好である。222は、湾曲しながら外に開く器形を呈し、口縁端部は平滑に作り出されている。凹線文は横位の直線や曲線に施文しその上下に施文原体による連続刺突文を施している。胎土は、長石や雲母の細やかな粒子を含んでいる。器面の色調は内外面とも明褐色で、焼成は良好である。232は、直線的に外に開く器形を呈し、口縁端部は平滑に作り出され貝殻による刻み目を施す。凹線文は斜方向か横位に施文し施文原体による連続刺突文がその上下に施されている。胎土は、石英や長石の細かな粒子を含んでいる。器面の色調は、内外面とも褐色で、焼成は良好である。224は、直線的に外に開く器形を呈し、口縁端部は平滑に作り出され貝殻による刻み目を施している。凹線文は、横位や斜方向に施文し、その上下に施文原体による連続刺突文を施す。胎土は、長石の砂粒と雲母の細かな粒子を含んでいる。器面の色調は、外面が褐色で内面が暗褐色である。焼成は良好である。225は、やや湾曲しながら外に開く器形を呈し、口縁端部は平滑に作り出され、貝殻による刻み目を施している。凹線文は、横位に施しその上下に施文原体による連続刺突文を施している。胎土は、1mm大の石英や長石を多量に含んでいる。器面の色調は内外面とも明褐色で、焼成は良好である。226は、頸部から口縁部にかけての資料で、口縁端部は欠失している。斜方向に施文された凹線文と一部その上に施文原体による連続刺突文が確認される。胎土は、石英の細かな粒子を含んでいる。器面の色調は外面が明褐色で内面が暗褐色である。焼成は良好である。227は、頸部から口縁部にかけての資料で、直線や曲線による凹線文を施文し、その上下に施文原体による連続刺突文が施されている。胎土は、石英や長石の砂粒を多量に含んでいる。器面の色調は、内外面とも暗褐色で、焼成は良好である。228は、湾曲しながら外に開く器形を呈し、口縁端部は平滑に作り出されている。凹線文は、横位に施しその上下に施文原体による連続刺突文を施している。胎土は、石英や長石の細かな粒子を含んでいる。器面の色調は、外面が褐色で内面が暗褐色である。焼成は良好である。229は、頸部から口縁部にかけての資料で、口縁端部は欠失している。凹線文は曲線により区画をしてその中に比較的短い直線を施文している。その区画をなす曲線による凹線文の外に施文原体による連続刺突文を施している。胎土は、石英の細かな粒子を多量に含んでいる。器面の色調は内外面とも褐色で、焼成は良好である。230は、口縁部の資料で口縁端部を欠失している。凹線文は、斜方向に施文されその上下に施文原体による連続刺突文が施されている。胎土は、石英の細やかな粒子を多量に含み、わずかに雲母の粒子を含んでいる。器面の色調は内外面とも褐色で、焼成

第3節 縄文時代早期の遺構と遺物



第57図 遺物分布図(底部)

は良好である。231は、胴部から頸部にかけての資料である。凹線文は、頸部では直線で胴部では曲線に施文されている。その上下に施文原体による連続刺突文を施文している。また直線による凹線文の下と胴部に縦方向に撚糸文を施文している。胎土は、石英の細かな粒子を含んでいる。器面の色調は内外面とも暗褐色で、焼成は良好である。232は、胴部から口縁部にかけての資料で口縁端部は欠失している。頸部には、やや波形の横位の凹線文を施文し、その上下に施文原体による連続刺突文を施している。胎土は、1mm以下の石英をわずかに含んでいる。器面の色調は内外面とも暗褐色で、焼成は良好である。233、234は、底部に近い胴部破片であ



第58図 土器実測図

る。両方とも横位に凹線文を施し、その上下に施文原体による連続刺突文を施している。また233は、縦方向に撚糸文を施文している。233、234の胎土は石英の細かな粒子を含んでいる。器面の色調は内外面とも明褐色で、焼成は良好である。235は、頸部から口縁部にかけての資料で、口縁端部は欠失している。凹線文は、直線的に横位や斜方向に施文し、その上下に施文原体による連続刺突文を施している。胎土は、石英や雲母の細やかな粒子を含んでいる。器面の色調は内外面とも明褐色で、焼成は良好である。

底部（第58図236～246）

底部の資料は、12点検出した。その分布は、北側凹部から北東谷部に集中する。236～242は、胴部から底部にかけての資料で、胴部文様から上記の類別が可能な資料である。

236は、区画をもたず縦位の撚糸文を施文する。このことから第2類に分類できる資料である。底部は、やや上げ底ぎみになると考えられる。237は、縦位に施文した撚糸文の上から横位の凹線文を施文している。このことから、第2類の資料である。底部の形態は、上げ底を呈する。238は、縦位に撚糸文を施文し、その上にややかかるように曲線的な凹線文を施文する。第2類に分類できる。239は、縦位に編目状の撚糸文を施文しており、第2類の資料である。240、242は、文様が確認できず類別は不可能である。241は、凹線文が施文されている資料であるが、凹線文と他の文様との関係が不明であるため、類別はできなかった。243～247は胴部破片との接合ができなかった、底部の資料である。形態はすべて上げ底である。中でも244、246は周辺部と底部の中心部ではかなりの比高差がある。

(2)石器

縄文時代早期に属する石器は、8005点検出された（第6表）。その内訳は、石器1055点、石核・原石142点、剥片・碎片6808点である。またその中で、石器の器種ごとの内訳は、石鏃158点、尖頭器9点、石匙16点、削器31点、抉入石器5点、石錐7点、打製石斧1点、磨製石斧3点、環状石斧1点、楔形石器5点、磨石・敲石464点、石皿・台石281点、使用痕ある剥片74点である。石材ごとの内訳は、黒耀石125点、珪岩147点、安山岩57点、砂岩332点、凝灰岩392点である。

石器の分布は、北側凹部及び北東側谷部に集中している。

石鏃（第61図1～第69図157）

石鏃は、158点出土した。その石器組成に占める割合は、約15.0%である。その石材ごとの内訳は、黒耀石65点・珪岩74点・安山岩19点で、使用頻度では黒耀石・珪岩がともに高い比率を

第三章 調査の成果

第6表 縄文時代早期石器組成表

器 種	計 (%)	珉 岩	黒 耀 石	安 山 岩	砂 岩	凝 灰 岩	そ の 他
石 鏃	158(14.98)	74(46.84)	65(41.14)	19(12.03)	—	—	—
尖 頭 器	9(0.85)	8(88.89)	1(11.11)	—	—	—	—
石 匙	16(1.52)	11(68.75)	1(6.25)	4(25.00)	—	—	—
削 器	31(2.94)	14(45.16)	16(51.61)	1(3.23)	—	—	—
抉 入 石 器	5(0.47)	5(100.0)	—	—	—	—	—
石 錐	7(0.66)	1(14.29)	6(85.71)	—	—	—	—
打 製 石 斧	1(0.10)	—	—	—	1(0.10)	—	—
磨 製 石 斧	2(0.20)	—	—	—	2(0.20)	—	—
環 状 石 斧	1(0.10)	—	—	—	1(0.10)	—	—
楔 形 石 器	5(0.47)	4(80.0)	1(20.0)	—	—	—	—
磨 石 ・ 敲 石	464(43.98)	—	—	25(5.39)	270(58.19)	169(36.42)	—
石 皿 ・ 台 石	281(26.64)	—	—	—	58(20.64)	223(79.36)	—
使用痕ある剥片	74(7.01)	30(40.54)	35(47.30)	8(10.81)	1(1.35)	—	—
石 器 総 計	1055(13.17)	147(13.95)	125(11.86)	57(5.41)	332(31.50)	392(37.19)	—
石 核	139(1.74)	47(33.81)	84(60.43)	6(4.32)	—	—	2(1.44)
原 石	3(0.04)	—	—	3(100.0)	—	—	—
剥 片 ・ 碎 片	6808(85.05)	1931(28.36)	4310(63.31)	540(7.93)	16(0.24)	—	11(0.16)
総 計	8005	2125(26.55)	4519(56.46)	606(7.57)	349(4.36)	392(4.90)	13(0.16)

示している。石鏃の分布は、遺跡の最高部を囲む形で、大きく4つのまとまりに分けることができる。すなわち北側凹部・北東側谷部及び東西の斜面部である。その中でも、特に北側凹部及び北東側谷部で多く出土している（第60図）。

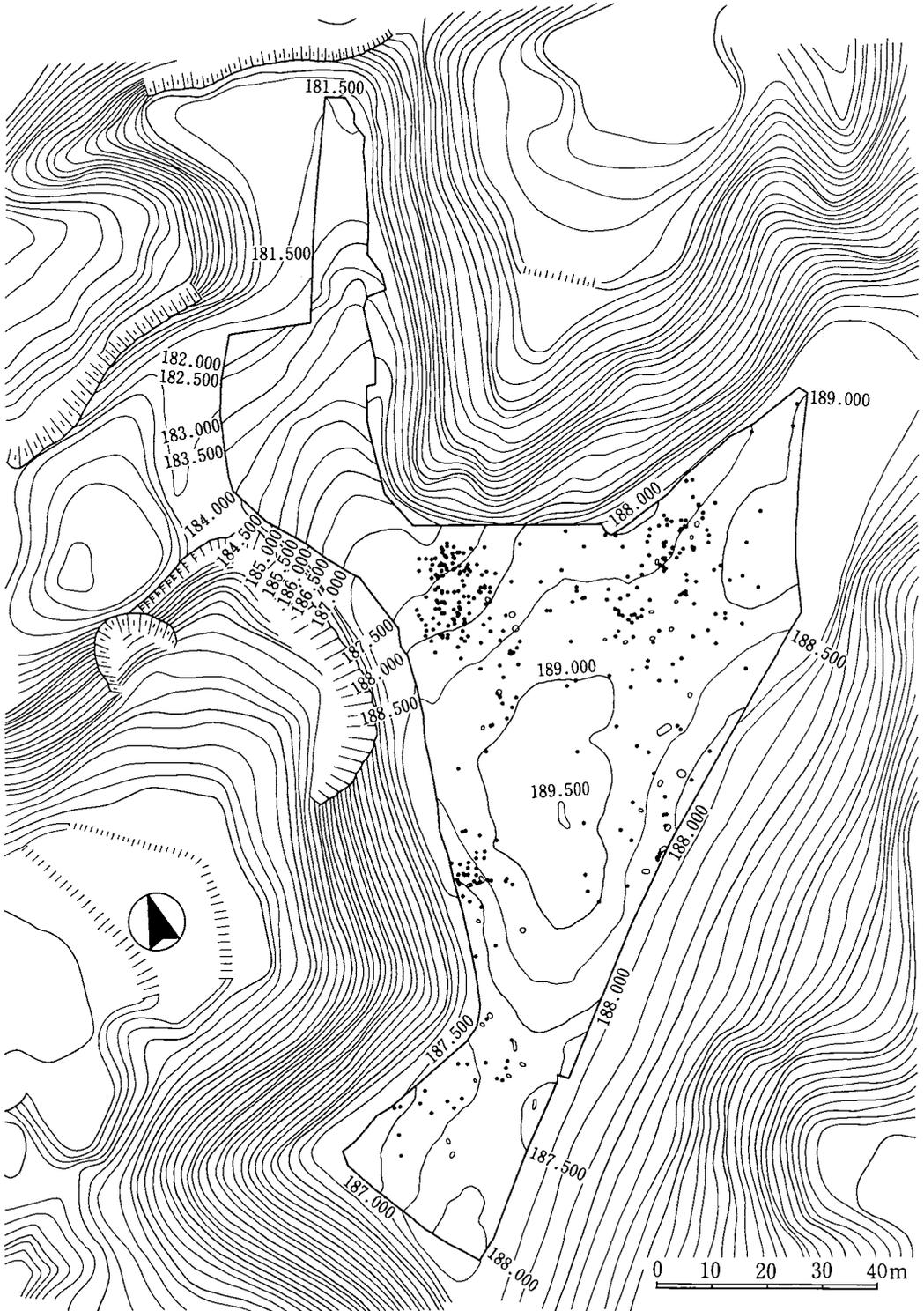
出土した157点の石鏃は、石器の形状において二等辺三角形（第1類）、三角形（第2類）異形（第3類）に分類できる。さらに第1類及び第2類は、その基部の作り出しの状況で、平基のもの（a）、浅く抉れるもの（b）、V字状に抉れるもの（c）、U字状に抉れるもの（d）の四つに細分される。以下類ごとに説明を加えていきたい。

第1 a類（1～5）

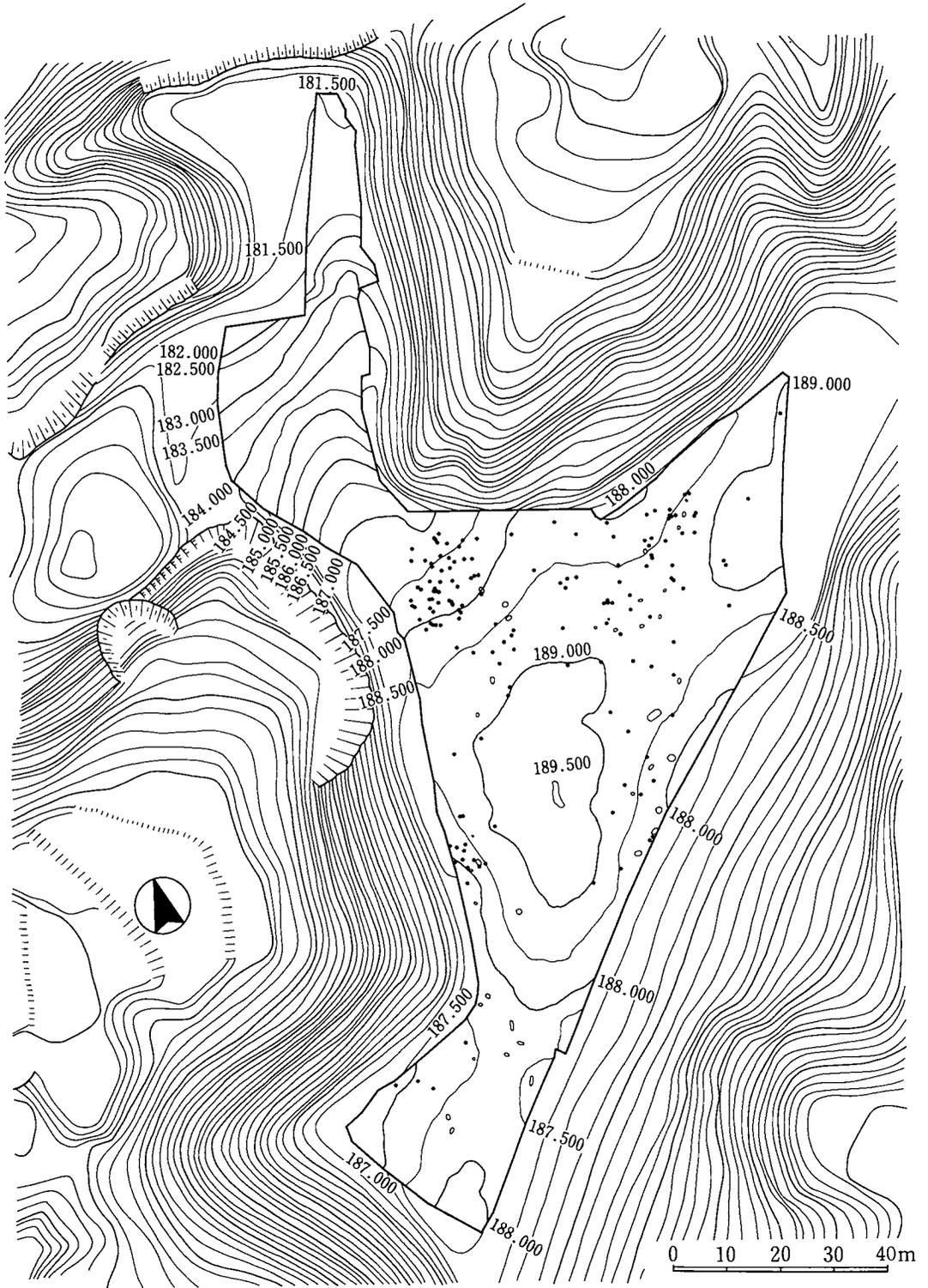
1 a類は、全体形が二等辺三角形を呈する平基の石鏃である。資料数は、5点である。出土地点は、北側凹部・東側斜面部でそれぞれ1点ずつ出土し、残りの3点は北東側谷部で出土した。形状では、2～4の石鏃のように左右対称をなすものと、1、5のように左右対称をなさず、右上がりに作り出されたものがある。また、5を除けば1.5cm×1.1cm前後の大きさである。

第1 b類（6～13）

1 b類は、全体形が二等辺三角形を呈する凹基（浅い抉り）の石鏃である。資料数は、8点である。出土地点は、北側凹部で5点、北東側谷部で3点出土した。形状では、最大幅が石器

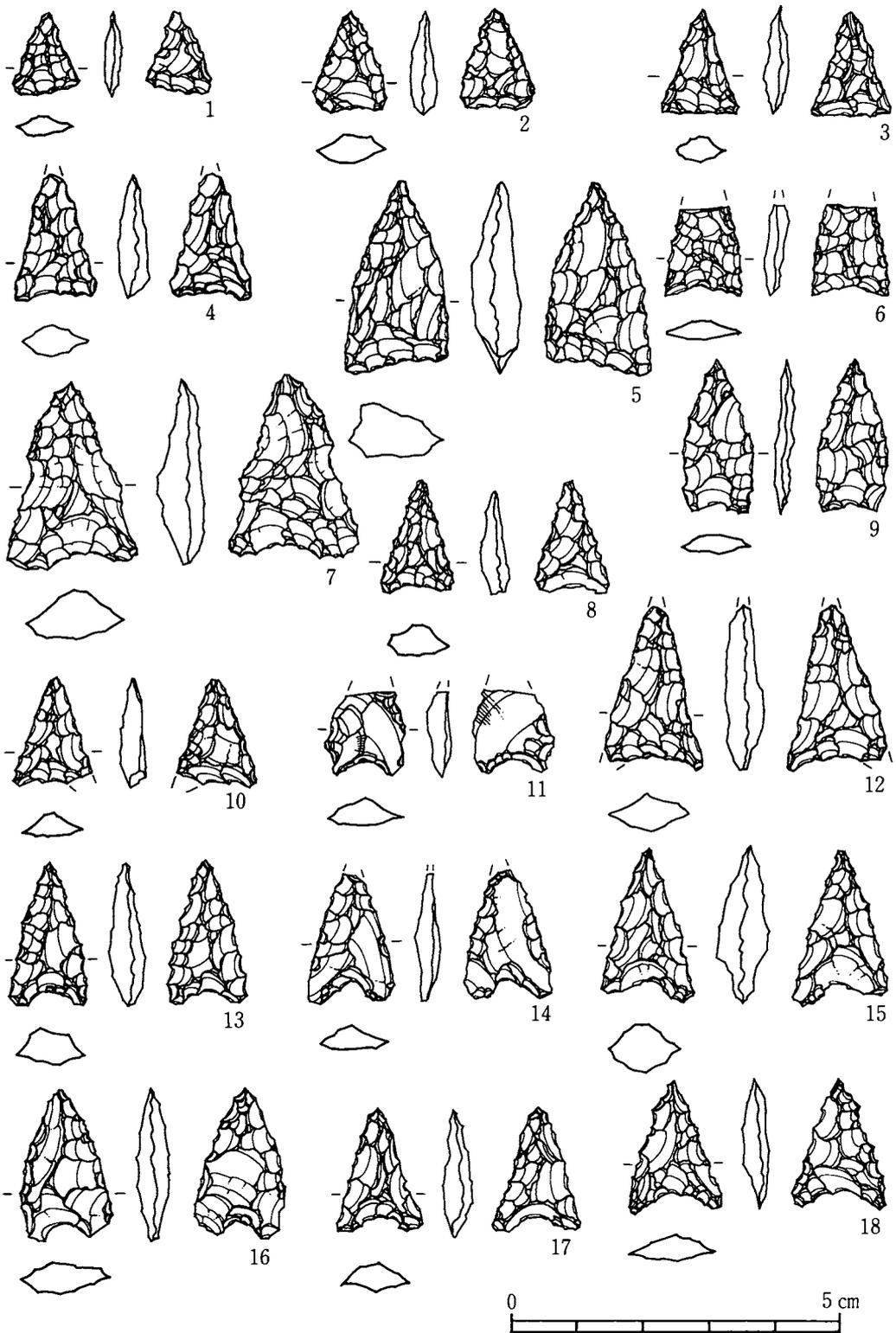


第59図 遺物分布図(石器)

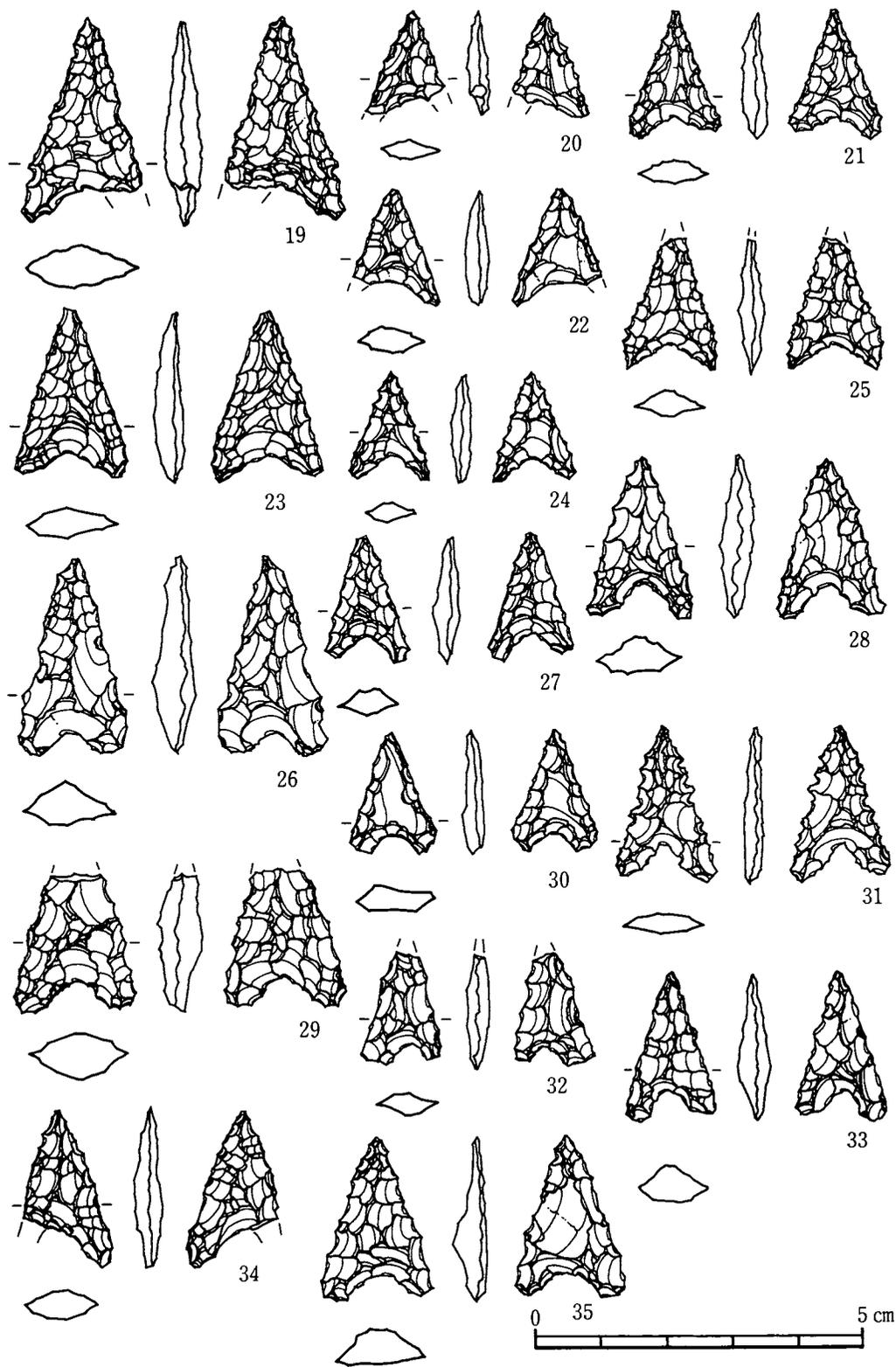


第60図 遺物分布図(石鏃)

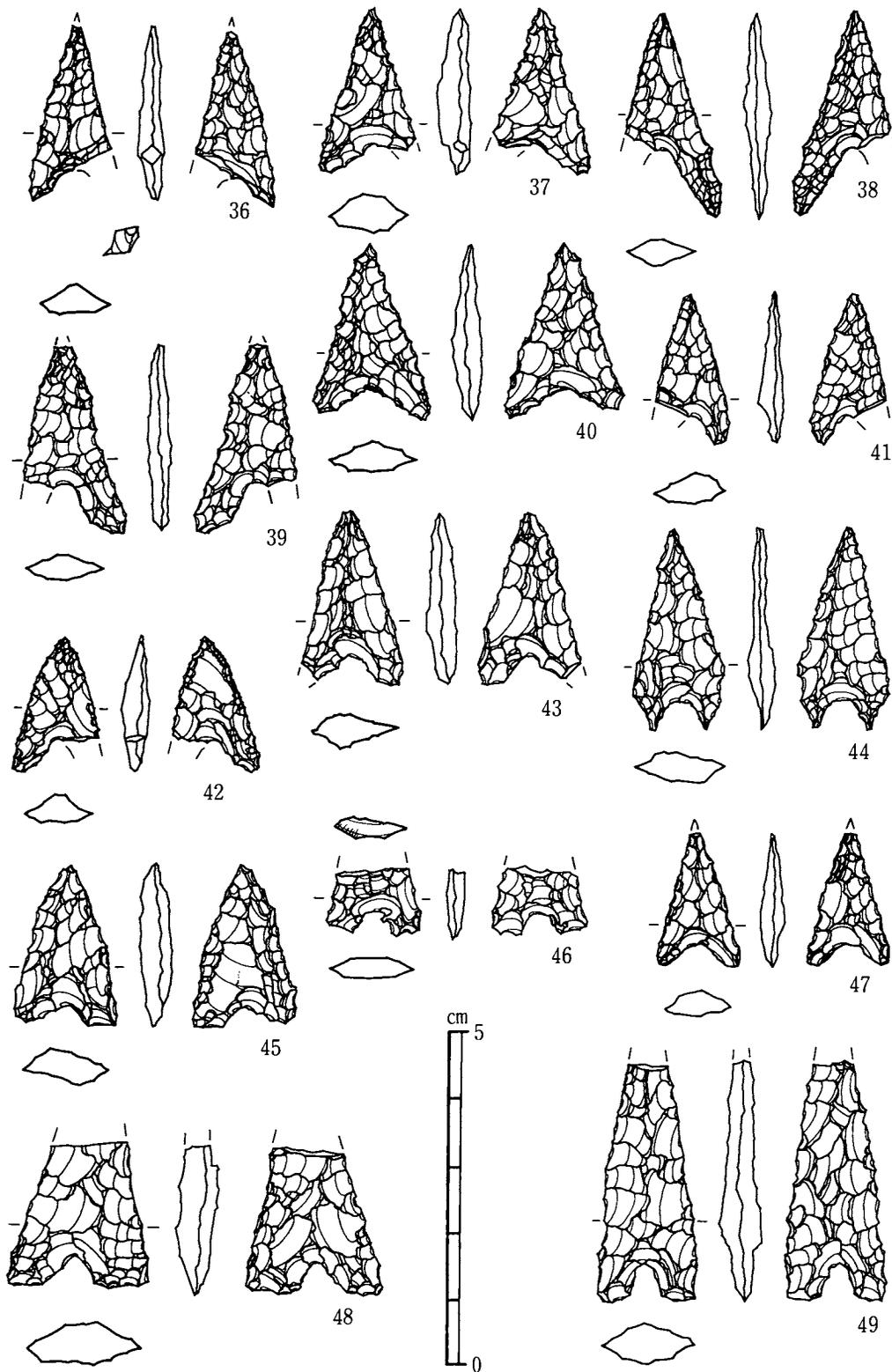
第3節 縄文時代早期の遺構と遺物



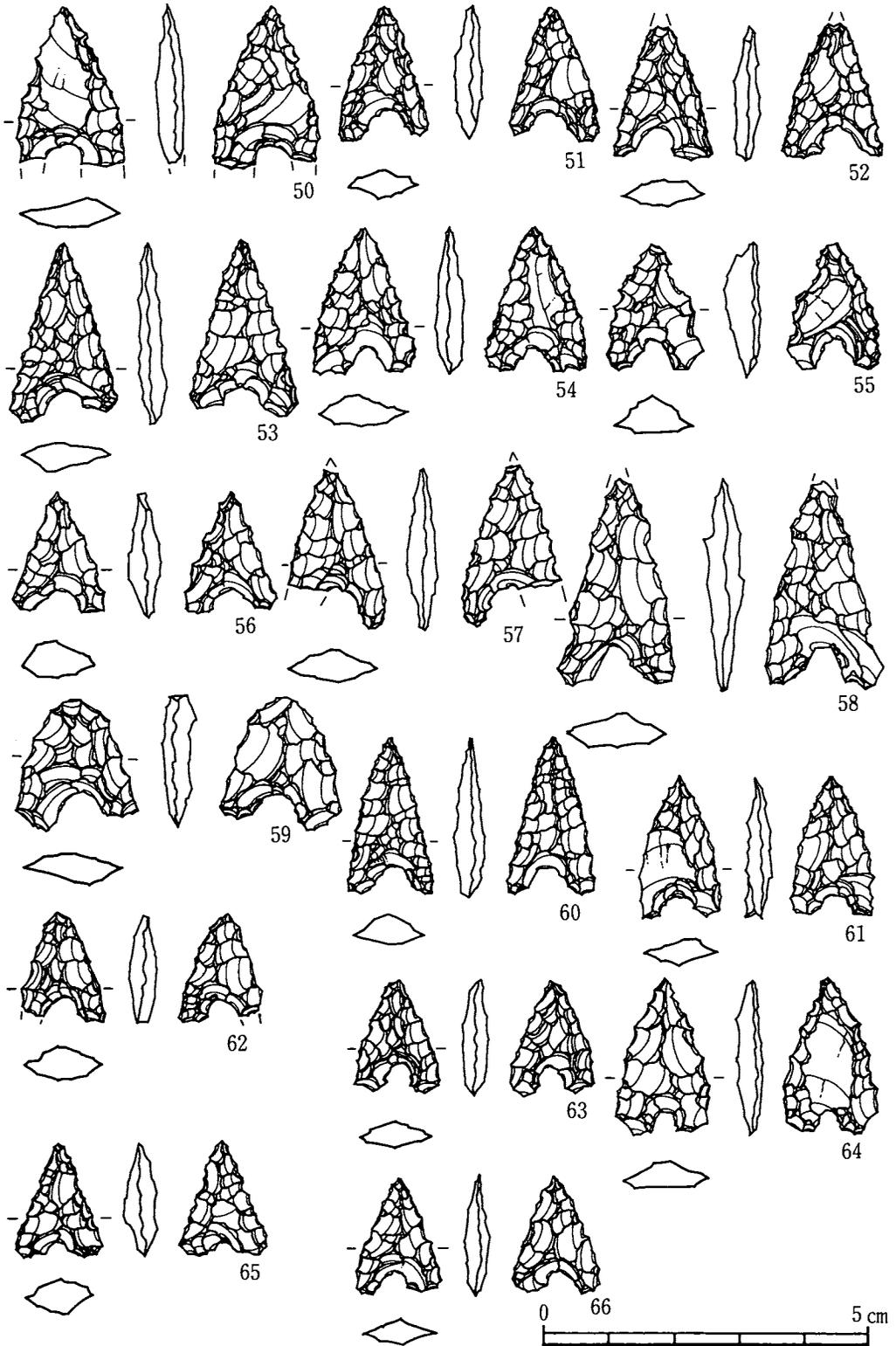
第61図 石器実測図



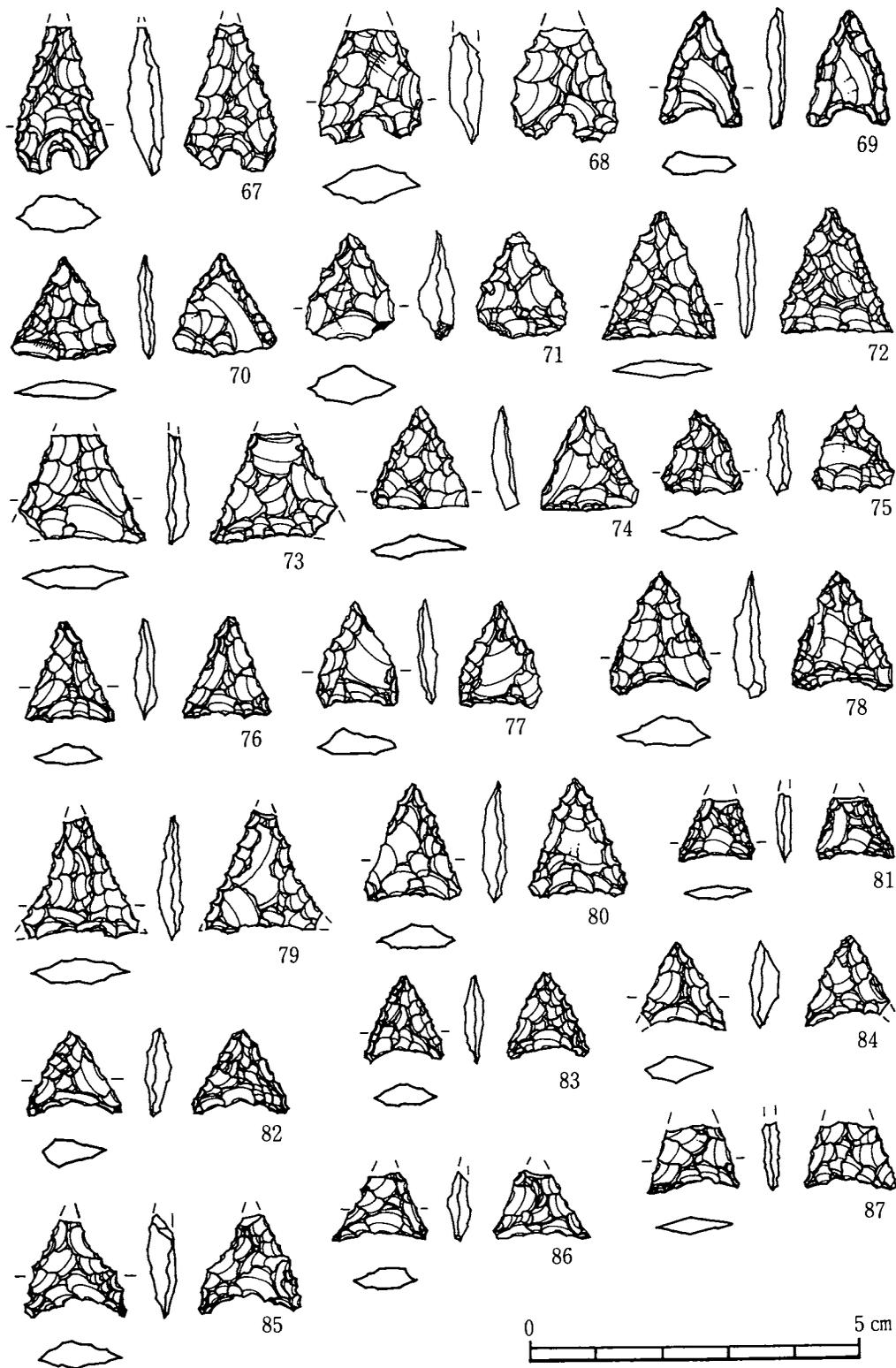
第62図 石器実測図



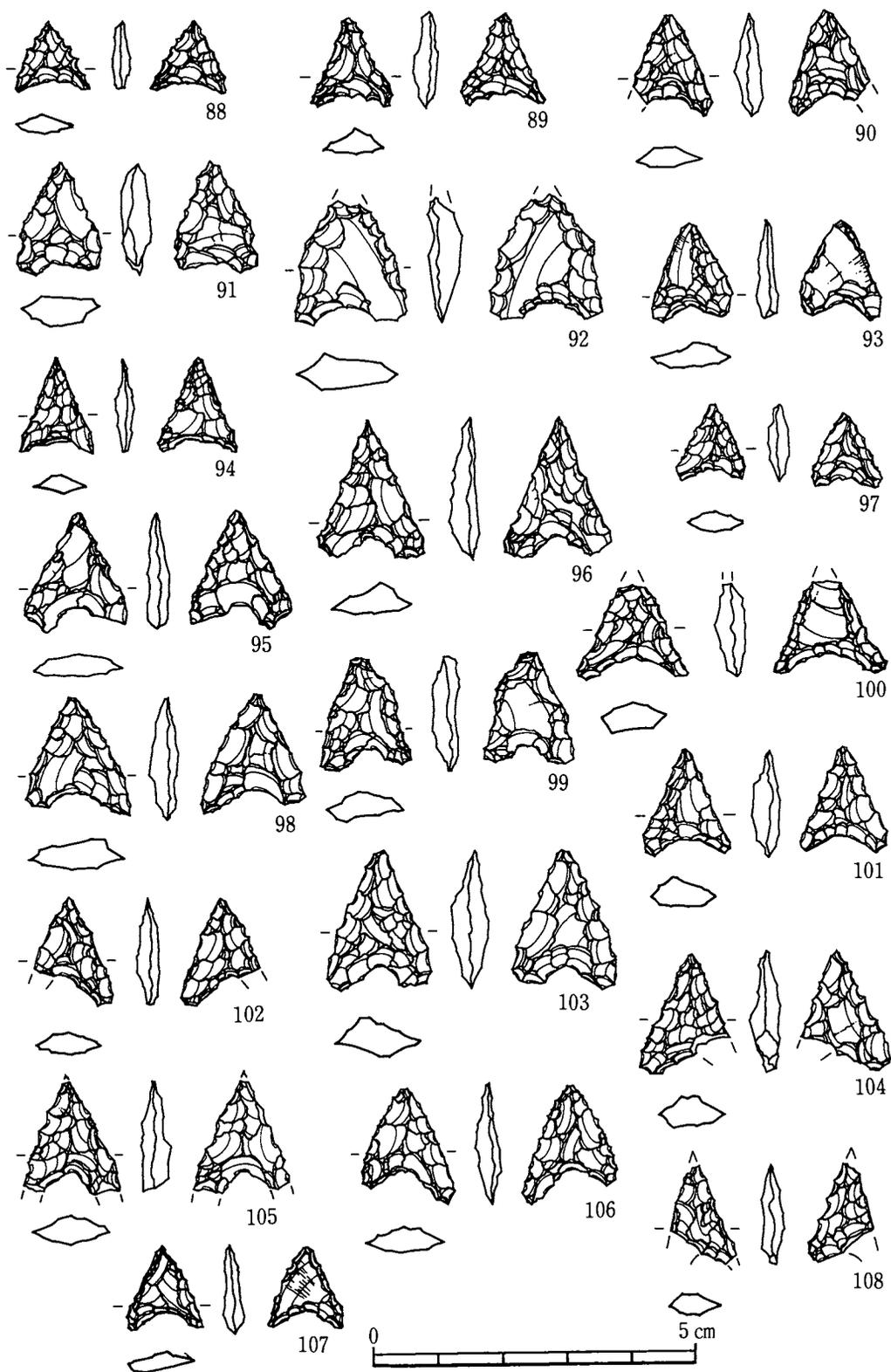
第63図 石器実測図



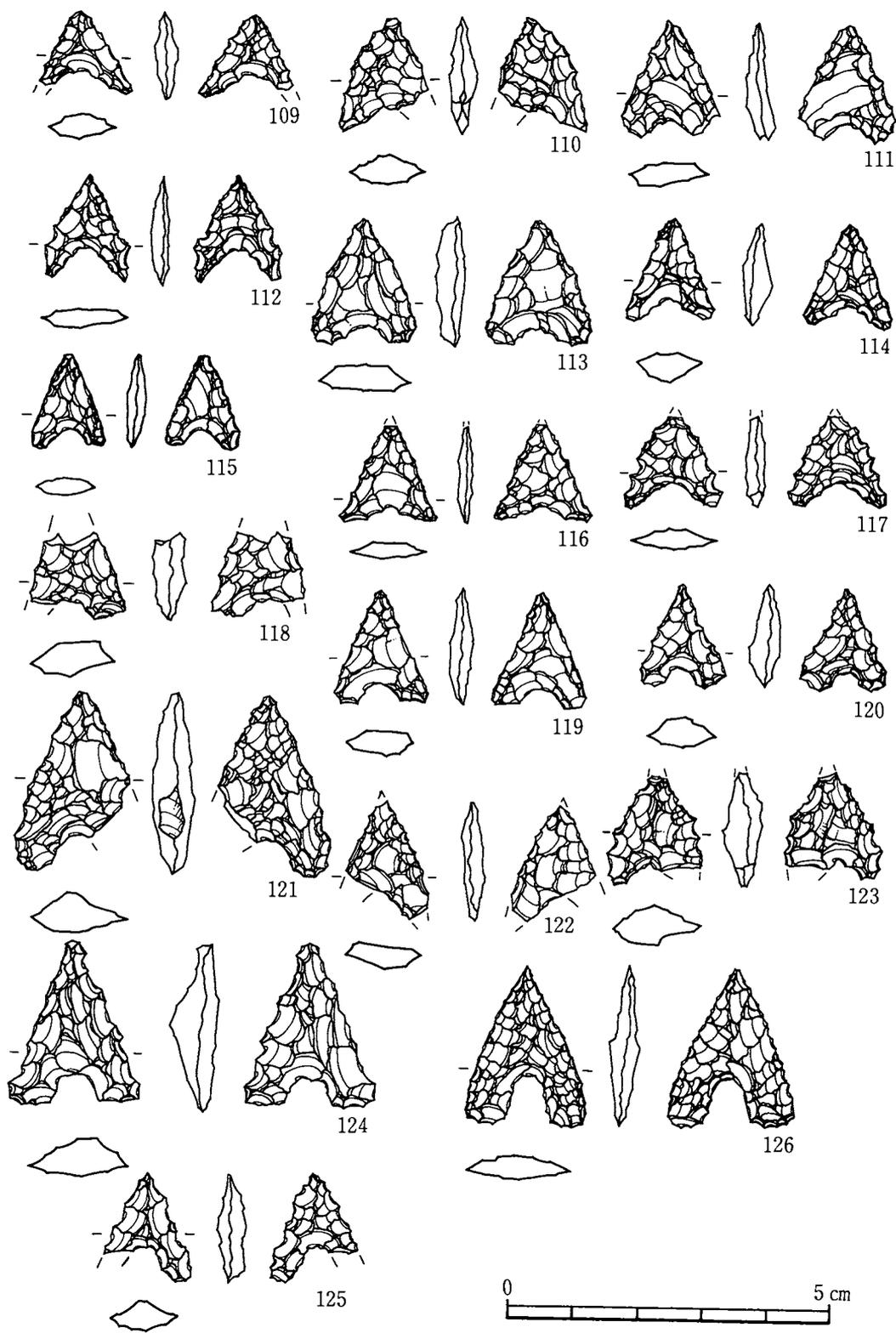
第64図 石器実測図



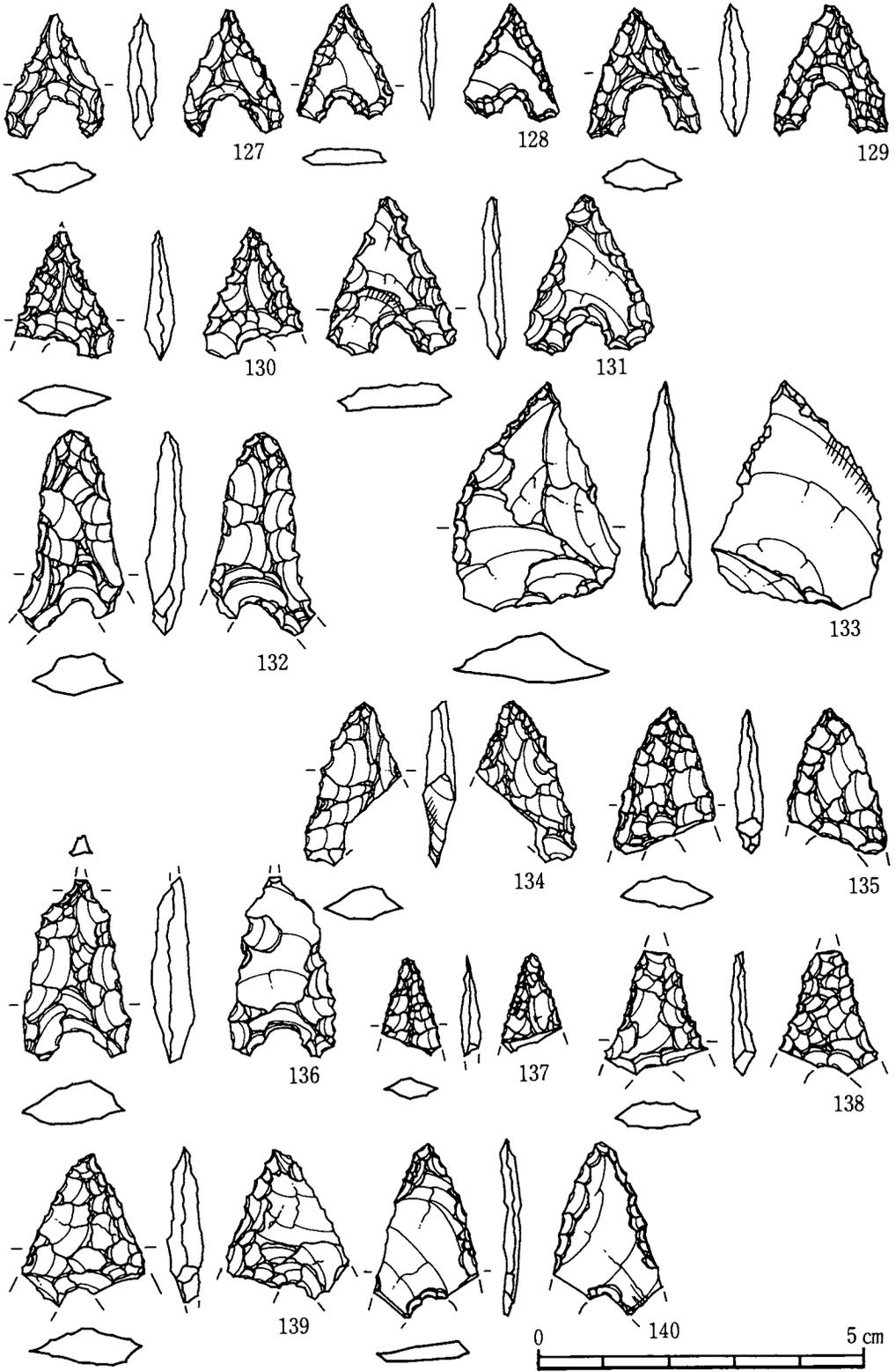
第65図 石器実測図



第66図 石器実測図

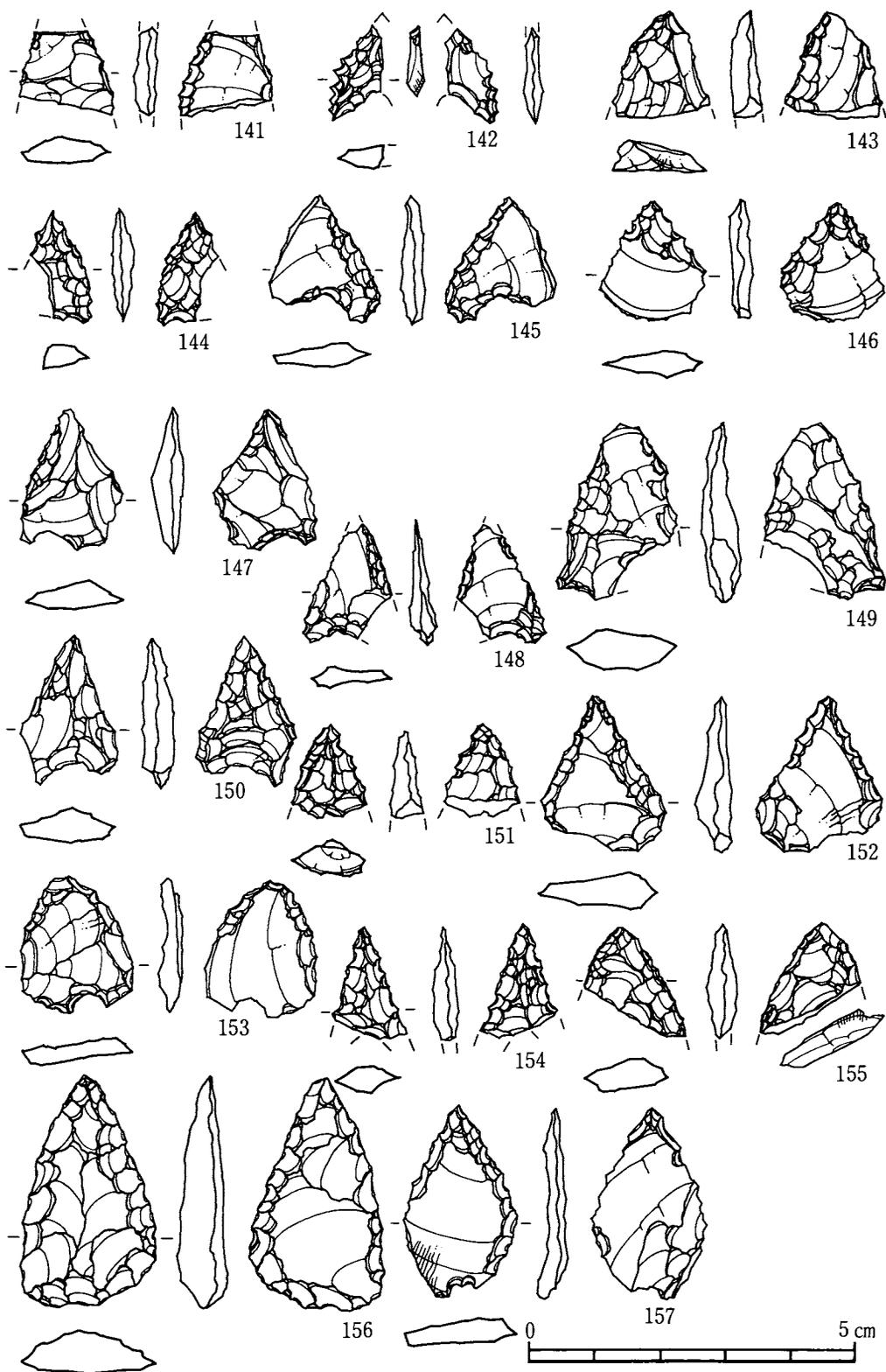


第67図 石器実測図



第68図 石器実測図

第3節 縄文時代早期の遺構と遺物



第69図 石器実測図

第三章 調査の成果

第7表 石器計測表

No	器種	石材	計測値				欠損部位	登録番号
			長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
1	石	鉄 黒耀石	1.25	1.05	0.22	0.30	—————	6738
2	”	”	(1.52)	(1.15)	0.41	(0.29)	—————	9514
3	”	”	1.59	1.20	0.36	0.45	—————	52
4	”	珪岩	(1.90)	1.26	0.41	(0.90)	—————	4775
5	”	”	2.91	1.59	0.71	2.71	—————	6973
6	”	黒耀石	(1.32)	1.17	0.29	(0.39)	先端部欠損	3777
7	”	”	2.88	2.03	0.70	2.55	—————	表採一括
8	”	珪岩	1.85	1.21	0.45	0.72	—————	9556
9	”	”	2.45	1.10	0.30	0.70	—————	983
10	”	”	(1.75)	(1.29)	0.40	(0.85)	左脚部欠損	11671
11	”	”	(1.80)	1.20	0.34	(0.35)	左端部欠損	1615
12	”	”	2.55	1.15	0.61	1.98	先端・右脚部欠損	5676
13	”	”	2.18	1.19	0.58	1.08	—————	7759
14	”	”	1.95	1.35	0.38	0.65	先端部欠損	10105
15	”	安山岩	2.38	1.45	0.48	1.41	—————	4236
16	”	”	2.30	1.36	0.48	1.36	—————	7号集石埋土
17	”	”	2.00	1.41	0.48	0.89	—————	12934
18	”	黒耀石	2.02	1.44	0.38	0.64	—————	1386
19	”	”	(3.08)	(2.79)	0.58	(2.08)	右脚部欠損	7888
20	”	”	(1.55)	(1.10)	0.29	(0.27)	両脚部欠損	12988
21	”	珪岩	1.95	1.40	0.38	0.68	—————	3719
22	”	黒耀石	1.75	(1.28)	0.38	(0.38)	左脚部欠損	13617
23	”	珪岩	2.75	1.80	0.45	0.48	—————	6927
24	”	黒耀石	1.65	1.28	0.30	0.29	—————	9893
25	”	”	(1.99)	1.45	0.39	(0.50)	先端部欠損	4260
26	”	珪岩	2.98	1.15	0.65	2.22	—————	15168
27	”	”	2.03	1.39	0.41	0.84	—————	6383
28	”	”	2.41	1.68	0.51	1.53	—————	7237
29	”	黒耀石	(2.08)	1.88	0.64	(2.05)	先端部欠損	3292
30	”	安山岩	1.90	1.36	0.35	0.46	—————	12127
31	”	黒耀石	2.36	1.54	0.30	0.71	—————	616
32	”	安山岩	(1.81)	1.34	0.35	(0.66)	先端部欠損	10928
33	”	珪岩	2.25	1.91	0.52	0.98	—————	4135
34	”	”	2.44	(1.23)	0.39	(0.81)	左脚部欠損	8656
35	”	安山岩	2.50	1.71	0.50	1.29	—————	14500
36	”	珪岩	2.60	(1.17)	0.40	(0.84)	先端・右脚部欠損	13853
37	”	黒耀石	2.48	(1.39)	0.51	(0.99)	右脚部欠損	9570

第3節 縄文時代早期の遺構と遺物

第8表 石器計測表

No	器種	石材	計測値				欠損部位	登録番号
			長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
38	石	鉄珪岩	3.10	(1.19)	0.39	(0.92)	左脚部欠損	1264
39	〃	黒耀石	2.75	(1.62)	0.36	(0.76)	先端・左脚部欠損	1395
40	〃	〃	2.54	1.79	0.45	0.72	—————	3603
41	〃	珪岩	2.36	(1.19)	0.40	(0.66)	左脚部欠損	11214
42	〃	黒耀石	2.00	(1.28)	0.43	(0.64)	右脚部欠損	326
43	〃	珪岩	2.60	(1.59)	0.46	(1.62)	左脚部欠損	4728
44	〃	〃	3.00	1.39	0.40	0.96	—————	12562
45	〃	黒耀石	2.41	1.56	0.44	0.47	—————	2172
46	〃	珪岩	(0.98)	1.48	0.28	(0.57)	先端部欠損	2809
47	〃	黒耀石	1.98	1.22	0.38	0.62	先端部欠損	15624
48	〃	珪岩	(2.35)	2.28	0.60	(2.81)	先端部欠損	5545
49	〃	〃	(3.60)	1.50	0.52	(2.63)	先端部欠損	1757
50	〃	〃	(2.39)	1.60	0.41	(1.30)	両脚部欠損	12873
51	〃	黒耀石	2.14	1.48	0.45	0.99	—————	9447
52	〃	安山岩	(1.95)	1.52	0.39	(0.80)	先端部欠損	4200
53	〃	珪岩	2.70	1.68	0.38	1.17	—————	10688
54	〃	〃	2.17	1.56	0.41	1.15	—————	14007
55	〃	安山岩	1.90	1.47	0.54	1.02	—————	12028
56	〃	珪岩	1.78	1.45	0.58	0.83	—————	12954
57	〃	〃	2.40	(1.55)	0.48	(1.02)	先端・左脚部欠損	1865
58	〃	黒耀石	(3.12)	1.81	0.59	2.07	先端部欠損	4284
59	〃	珪岩	(2.09)	1.99	0.45	(1.56)	先端部つぶれ	16754
60	〃	黒耀石	2.35	1.35	0.48	0.84	—————	5585
61	〃	珪岩	2.12	1.27	0.40	0.78	—————	5512
62	〃	〃	1.67	(1.19)	0.41	(0.81)	左脚部欠損	4083
63	〃	〃	1.81	1.39	0.41	0.80	—————	12224
64	〃	〃	2.35	1.42	0.35	1.22	—————	7800
65	〃	〃	1.75	1.35	0.49	0.76	—————	5957
66	〃	〃	1.81	1.38	0.38	0.55	—————	11096
67	〃	黒耀石	(2.15)	1.38	0.51	(1.21)	先端部欠損	7456
68	〃	安山岩	(1.69)	1.56	0.55	(1.31)	先端部欠損	14792
69	〃	黒耀石	1.71	1.25	0.24	0.41	—————	17301
70	〃	〃	1.50	1.57	0.19	0.45	—————	14627
71	〃	〃	1.56	1.45	0.55	0.69	—————	16100
72	〃	珪岩	1.88	1.68	0.29	0.65	—————	160
73	〃	〃	(1.58)	(1.72)	0.31	0.84	先端・左脚部欠損	15387
74	〃	〃	1.51	1.48	0.28	0.58	—————	1349

第三章 調査の成果

第9表 石器計測表

No.	器種	石材	計測値				欠損部位	登録番号
			長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
75	石	鉄 黒耀石	1.22	1.25	0.37	0.32	—————	12356
76	”	珪 岩	1.49	1.37	0.29	0.47	—————	17711
77	”	黒耀石	1.62	1.39	0.29	0.44	—————	13203
78	”	”	1.78	1.50	0.45	0.68	—————	8616
79	”	珪 岩	(1.78)	(1.79)	0.31	(0.85)	先端・左脚部欠損	13891
80	”	黒耀石	1.77	1.54	0.38	0.84	—————	5085
81	”	”	(0.90)	1.18	0.19	(0.21)	先端部欠損	17066
82	”	珪 岩	1.24	1.48	0.38	0.41	—————	17265
83	”	黒耀石	1.26	1.27	0.24	0.38	—————	159
84	”	”	1.35	(1.26)	0.41	(0.51)	左脚部欠損	17981
85	”	”	(1.48)	1.56	0.39	(0.73)	先端部欠損	3154
86	”	”	(1.07)	1.46	0.35	(0.30)	先端部欠損	9119
87	”	”	(0.98)	1.39	0.20	(0.40)	先端部欠損	10961
88	”	珪 岩	1.05	1.17	0.27	0.26	—————	12452
89	”	”	1.35	1.31	0.35	0.45	—————	17526
90	”	”	1.64	1.21	0.41	0.61	左脚部欠損	1552
91	”	”	1.70	1.28	0.45	0.94	—————	5714
92	”	”	1.90	1.71	0.45	1.47	先端部欠損	1542
93	”	”	1.50	1.25	0.34	0.37	—————	3704
94	”	黒耀石	1.43	1.21	0.21	0.36	—————	1305
95	”	珪 岩	1.82	1.58	0.31	0.65	—————	15262
96	”	黒耀石	2.21	1.75	0.49	1.04	—————	5546
97	”	”	1.13	1.08	0.30	0.26	—————	217
98	”	珪 岩	1.78	1.62	0.42	0.73	—————	4635
99	”	”	1.71	1.39	0.39	0.98	—————	8782
100	”	”	1.48	1.85	0.48	0.85	先端部欠損	2589
101	”	”	1.61	1.35	0.41	0.50	—————	15870
102	”	”	(1.65)	1.12	0.34	0.32	左脚部欠損	13747
103	”	”	2.25	1.71	0.59	1.46	—————	13513
104	”	黒耀石	1.78	1.26	0.45	0.75	右脚部欠損	3673
105	”	”	(1.69)	1.48	0.45	0.76	両脚部欠損	9488
106	”	”	1.68	1.39	0.38	0.61	—————	306
107	”	珪 岩	1.28	1.19	0.31	0.28	—————	1463
108	”	黒耀石	1.51	0.87	0.31	0.36	先端・両脚欠損	5847
109	”	珪 岩	1.28	1.40	0.35	0.45	左脚部欠損	3068
110	”	黒耀石	(1.73)	(1.79)	0.45	0.56	右脚部欠損	634
111	”	”	1.91	1.59	0.39	0.79	—————	14061

第3節 縄文時代早期の遺構と遺物

第10表 石器計測表

No	器種	石材	計測値				欠損部位	登録番号
			長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
112	石	鐵安山岩	1.79	1.46	0.29	0.51	—————	4637
113	〃	珉岩	1.95	1.68	0.43	1.24	—————	4594
114	〃	〃	1.68	1.48	0.48	0.63	—————	9500
115	〃	安山岩	1.54	1.23	0.30	0.37	—————	14478
116	〃	珉岩	1.47	1.55	0.21	0.34	—————	5218
117	〃	黒耀石	(1.48)	1.55	0.28	0.37	—————	5753
118	〃	〃	(0.91)	1.56	0.51	0.98	先端・左脚部欠損	2275
119	〃	珉岩	1.80	1.45	0.33	0.62	—————	14516
120	〃	黒耀石	1.63	1.35	0.46	0.58	—————	11206
121	〃	〃	2.79	1.58	0.68	2.08	右脚部欠損	10062
122	〃	〃	1.95	1.28	0.32	0.62	先端・左脚部欠損	7687
123	〃	〃	1.35	1.44	0.56	1.02	先端・右脚部欠損	17840
124	〃	安山岩	2.56	2.06	0.71	2.24	—————	4975
125	〃	黒耀石	(1.70)	(1.31)	1.41	0.51	左脚部欠損	17291
126	〃	珉岩	2.49	1.92	0.48	1.19	—————	8671
127	〃	黒耀石	1.87	1.50	0.32	0.62	—————	15755
128	〃	珉岩	(1.74)	1.51	0.22	0.63	—————	9497
129	〃	〃	1.88	1.76	0.44	0.76	—————	11833
130	〃	黒耀石	1.90	1.50	0.42	0.86	左脚部欠損	17450
131	〃	安山岩	2.34	1.99	0.39	1.21	—————	11951
132	〃	〃	(3.01)	(1.44)	0.58	2.08	両脚部欠損	2568
133	〃	珉岩	3.40	2.58	0.76	4.70	未完成品	13541
134	〃	黒耀石	2.44	1.24	0.48	1.20	右側基部欠損	6041
135	〃	〃	(2.15)	(1.46)	0.41	1.18	両脚部欠損	2674
136	〃	〃	2.27	1.63	0.59	2.26	基部欠損	10481
137	〃	〃	(1.41)	(0.89)	0.28	0.23	先端・両脚欠損	17272
138	〃	〃	(1.86)	(1.47)	0.35	0.62	両脚部欠損	14359
139	〃	〃	(2.10)	(1.87)	0.52	1.40	両脚部欠損	12646
140	〃	安山岩	2.62	1.60	0.21	0.81	先端・基部欠損	9183
141	〃	珉岩	(1.12)	(1.44)	(0.31)	0.58	右半部欠損	1183
142	〃	安山岩	(1.43)	(0.80)	(0.34)	0.26	基部欠損	5146
143	〃	黒耀石	1.64	1.50	0.44	0.98	左側基部欠損	11635
144	〃	〃	1.79	(0.81)	0.31	0.31	—————	454
145	〃	珉岩	1.89	1.68	0.31	0.93	—————	11307
146	〃	〃	1.78	1.51	0.30	0.82	—————	6687
147	〃	〃	2.14	1.56	0.5	1.31	先端・基部右欠損	13933
148	〃	〃	(1.75)	(1.28)	(0.40)	0.55	右側基部欠損	16999

第三章 調査の成果

第11表 石器計測表

No	器種	石材	計測値				欠損部位	登録番号
			長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
149	石	鉄珪岩	(0.98)	1.48	0.28	0.57	—————	2809
150	〃	〃	2.29	1.40	0.49	1.34	—————	14628
151	〃	〃	(1.39)	(1.20)	(0.51)	(0.64)	基部欠損	9129
152	〃	〃	2.33	1.87	0.53	1.61	—————	18023
153	〃	安山岩	2.09	1.71	0.36	1.16	—————	5083
154	〃	黒耀岩	(1.75)	(1.29)	0.41	0.65	基部欠損	11304
155	〃	珪岩	1.63	1.31	0.47	0.65	基部欠損	12297
156	〃	珪岩	3.50	2.09	0.79	5.20	—————	16772
157	〃	〃	2.90	1.74	0.29	1.84	—————	8663

の中央部にあるもの（9）と基部にあるもの（6～8、10～13）がある。また、11は、基部及び両側縁に部分的に調整加工がみられるだけで、先端部欠損である。

第1c類（14～47）

1c類は、二等辺三角形を呈する凹基（V字状の抉り）の石鏃である。資料は、34点である。出土地点は、北東側谷部で15点、北側凹部で11点、東側斜面部で5点、西側斜面部で3点出土した。

石器の形状では、基部末端が尖るもの（15、17～25、27、28、31、34、42～46、47）と、基部末端が平坦に作り出されるもの（14、16、26、29、30、32、35、43、45）がある。31は、両側縁とも鋸歯状の調整加工が施されている。

第1d類（48～69）

1d類は、二等辺三角形を呈する凹基（U字状の抉り）の石鏃である。資料数は、24点である。出土地点は、ほぼ遺跡の北半部に集中し、北側凹部、北東谷部、西側斜面部に分布している。その中でも、北側凹部では14点出土し、1d類の64%を占めている。またこれらの三つの集中部分とも検出地点は、その地点の比較的標高の高い地点から検出されている。形状では、石器本体の長さに比べて、深く抉入を施すものはなく、全体的に小さくU字状に抉入を施し基部を作り出している。その中でも49は、特に鏃身が長く作り出されている。50、57は、1d類の中で基部の抉入が深くU字状に施されるもので、鋏型鏃である。また58、67は縁辺の基部よりの部分に抉入状の調整加工を施している。

第2a類（70～77、79）

2a類は、正三角形を呈する平基の石鏃である。資料数は、9点である。出土地点は、北側凹部4点・北東谷部3点・東側斜面部2点である。形状では石器本体の大きさから、大きいもの（72、73、79）と小さいもの（70、71、74～77）とに分けられる。この中で72は、両側縁と

も直線的に作り出されているが、急激にすぼまる形で先端部が作り出されている。また71、75は、粗い調整加工を施し基部は円基を呈する。

第2 b類 (78、80～89、91)

2 b類は、正三角形を呈する凹基（浅い抉り）の石鏃である。資料数は、12点である。出土地点は、北側凹部5点・北東谷部3点・東、西斜面部それぞれ2点ずつ検出された。形状は、全体的に小型の石鏃が多くみられる。その中でも基部の作り出し方にやや差異がみられる。それは基部末端が尖るもの（81～89）と基部末端がやや丸みをもつもの（78、80、91）に分けることができる。そして基部末端が尖る一群は、鏃身が1 cm前後の小型の石鏃である。

第2 c類 (90、92～117)

2 c類は、全体形が正三角形を呈する凹基（V字状の抉り）の石鏃である。資料数は、27点である。出土地点は、遺跡全面に広がる傾向がみられ、北側凹部12点・北東谷部7点・東、西斜面部それぞれ2点ずつと南側斜面部で4点検出された。形状では、基部末端が尖るもの（93、94、97、98、100～102、106～110、112、114、116、117）と基部末端が丸みをもって作り出されたもの（92、95、96、98、99、103、104、111、113、115）がある。また基部末端が尖る一群の中にも、抉入が深く脚部が長いものと、抉入が浅く施されるものがある。92は、表裏両面に素材剥片の剝離面を大きく残し、基部の調整加工は表裏両面からわずかに施す。また両側縁とも表裏両面から調整加工を施し、全体形を作り出している。先端部には、潰れがみられることから未加工品とはせず、2 c類に加え分類をした。

第2 d類 (118～131)

2 d類は、全体形が正三角形を呈する凹基（U字状の抉り）の石鏃である。資料数は、14点である。出土地点は、遺跡の北半部に集中し北側凹部6点・北東谷部3点・東側斜面部1点・西側斜面部4点検出された。石器の形状では、抉入が深いもの（125～127、129）と浅いもの（118～124、128、130、131）に分けることができる。また抉入を深くU字状に施す一群は、鋏型鏃である。この中でも、126、129は、細かい調整加工によって作り出され、基部は整ったU字状を呈する。128、131は、表裏両面ともに素材剥離面を大きく残している。この資料から石鏃の素材剥片の形状と、調整加工の施し方が類推できる。この2点の石鏃は、ともに幅広の縦長剥片を素材とし、打点部を基部右側に置き、打瘤部を除去する形で調整を加え作り出している。

第3類 (132)

3類は、1、2類に分類した二等辺三角形や正三角形を呈さない、異形の石鏃である。これに該当するものは、1点出土した。132は、北側凹部で検出した、安山岩製の石鏃である。先端部は丸みをもつように、作り出されている。基部は、欠損して全体の形状は不明であるが、

基部左側の状態からすると、脚部は外反すると考えられる。上下逆にして雁又鏃として捉えるべきものかもしれない。

未加工品 (140、141、143、145～152、156)

出土資料の中に、未加工品と考えられるものが、12点あった。その石材ごとの内訳は、珪岩10点・黒耀石、安山岩がそれぞれ1点ずつである。出土地点は、北側凹部7点・北東谷部3点西側斜面部2点である。この12点の資料中に素材剥片の形状と、その調整加工の施し方が類推できるものが7例ある(140、145、146、148、151、152、156)。これらの資料からすると、素材となる剥片は、安山岩製の140を除けば、剥片の縁辺が先端部にくるように、打点部を左右どちらかの基部に置く。145、151の資料がその状態をよく残している。またこの2点から両側縁の調整加工を施し、先端部を作り出したあと打点部を除去する形で調整加工を加え基部を作り出していく。しかし147のように、基部に細かな調整加工を行い抉入状に作り出しているが、両側縁とも粗い調整を施した未加工品のまま残されたものもある。このことから、製作の手順には、統一した規範はなさそうである。

所属不明の石鏃 (134、135、137～139、142、144、153、154)

欠損によって石器の全体形を類推できず、分類できなかった資料である。資料数は、9点である。その出土地点は、北側凹部3点と北東谷部、東西斜面部でそれぞれ2点ずつ検出された。1類に属するもの5例(134、135、137、138、153)、2類に属するもの4例(139、142、144、154)がある。その他の資料は、不明である。また欠損部位は、基部のみ欠損しているもの(134、135、137、139、153、154)・基部及び先端部を欠損しているもの(138)・左右どちらか半分欠損しているもの(142、144)である。

尖頭器 (第71図158～166)

尖頭器は、9点が出土した。その石器組成に占める割合は、0.85%で、その石材ごとの内訳、珪岩8点・黒耀石1点である(第6表)。出土地点は、北側凹部4点・北東谷部3点・西側斜面部1点・南側斜面部1点である。9点の資料は、石器の形状から2類に分類できる。

以下、類ごとに説明を加えていく。

第1類 (158～163、165、166)

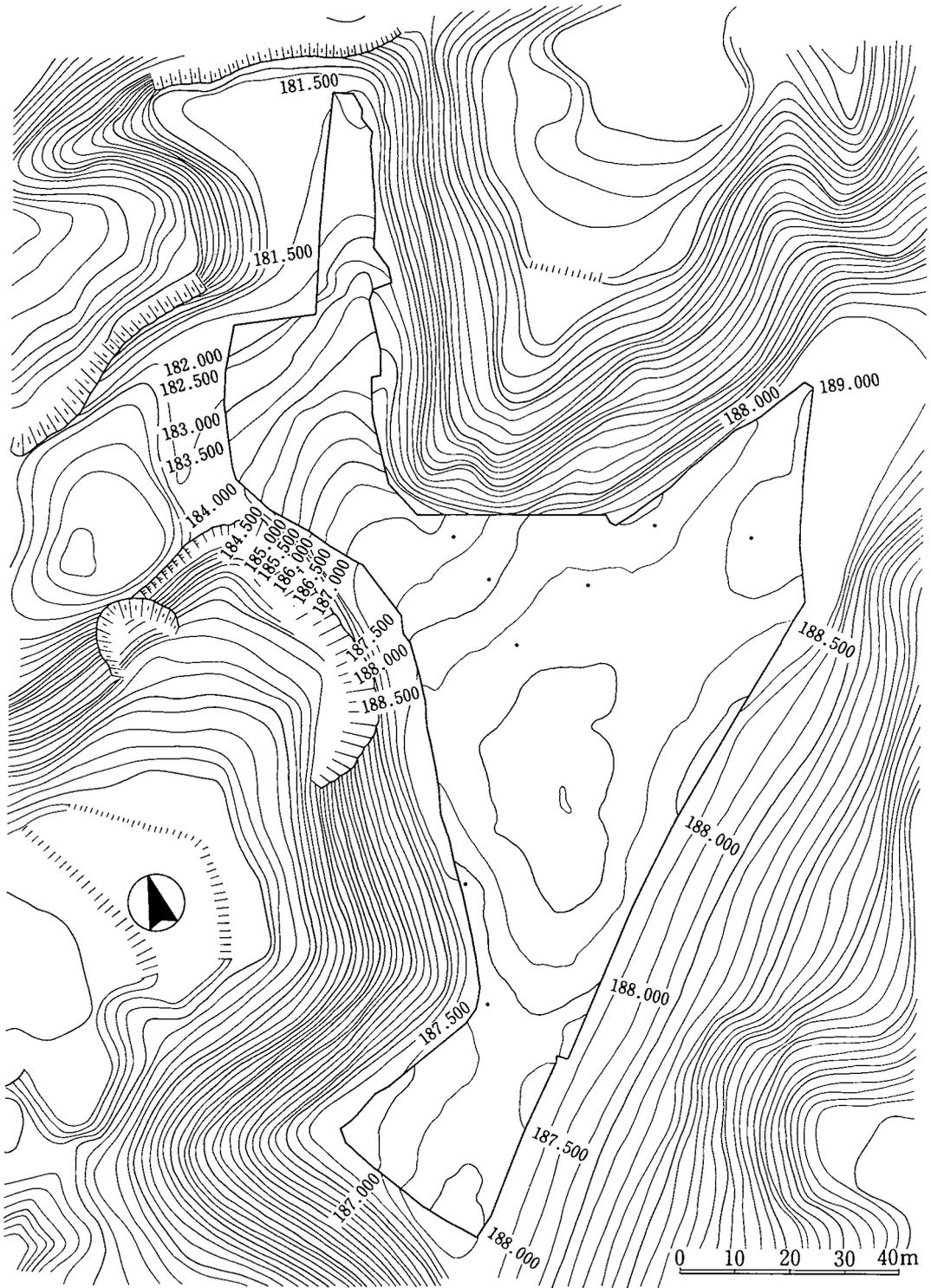
1類は、幅広の尖頭器である。縁辺からの粗い調整加工を施し、断面凸レンズ状に作り出している。この1類は、東九州で早期押型文土器群に伴う尖頭石器と呼称されているものに比定できる。重量は159を除き、3g以上である。このことから石鏃と分けて分類を行った。

第2類 (164)

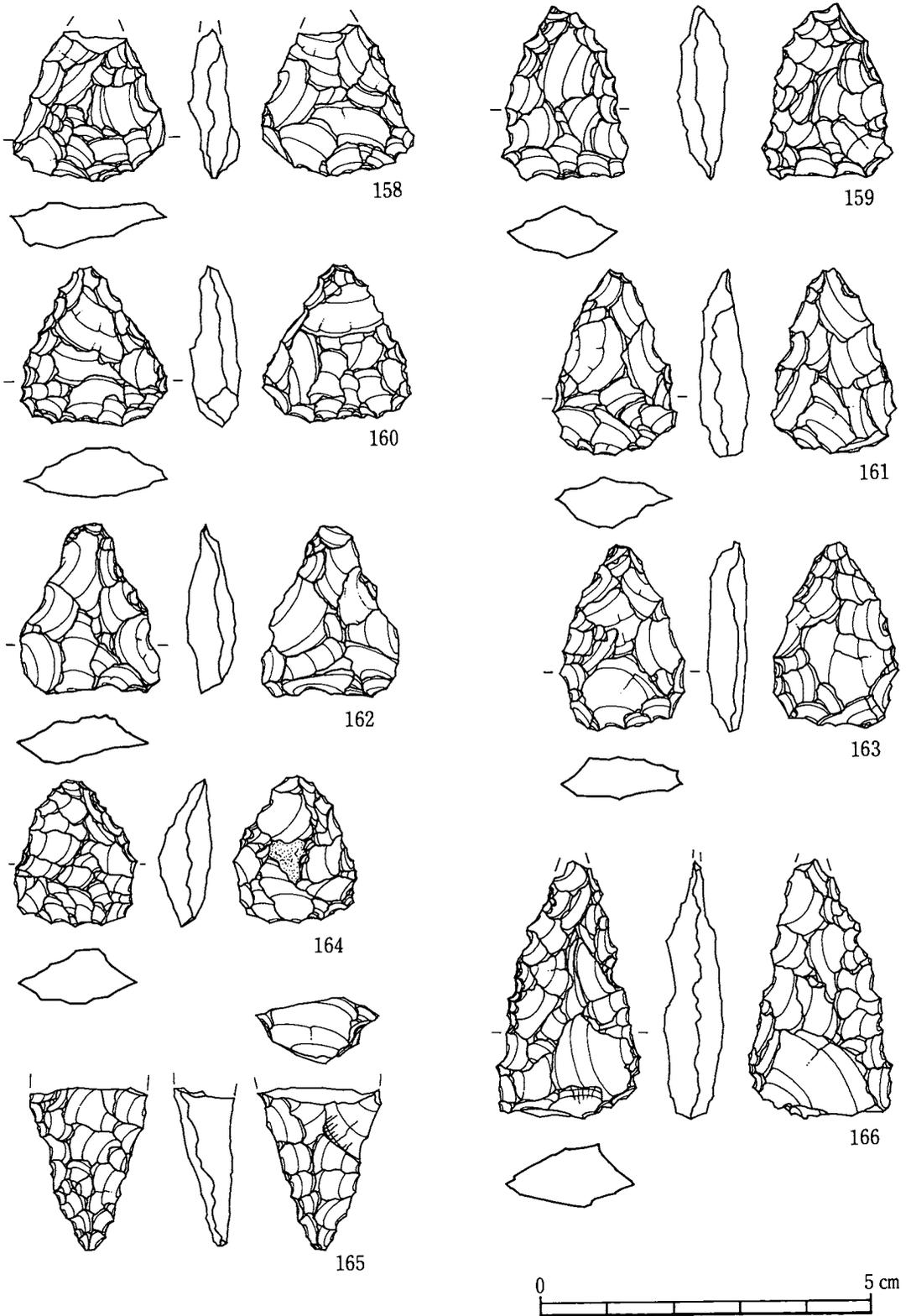
2類は、細身の柳葉形を呈する尖頭器である。164は、基部のみで胴部上半を欠失している。石材は、珪岩である。調整加工は表裏両面とも入念に施し、断面は凸レンズ状を呈する。

石匙 (第73図167～第75図178)

第3節 縄文時代早期の遺構と遺物



第70図 遺物分布図(尖頭器)



第71図 石器実測図

第3節 縄文時代早期の遺構と遺物

第12表 石器計測表

No	器種	石材	計測値				欠損部位	登録番号
			長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
158	尖頭器	珪岩	2.51	2.09	0.72	3.28	先端部欠損	2936
159	〃	〃	2.76	1.92	0.71	3.34	—————	一括
160	〃	黒耀石	2.18	1.81	0.75	2.49	—————	13201
161	〃	珪岩	2.38	2.24	0.71	3.43	—————	17178
162	〃	〃	(2.20)	2.31	0.59	(2.90)	—————	18041
163	〃	〃	2.58	1.96	0.75	3.76	—————	12764
164	〃	〃	2.81	1.88	0.58	3.65	—————	885
165	〃	〃	(2.42)	(1.81)	(0.96)	(2.55)	先端部欠損	10939
166	〃	〃	3.78	2.09	0.89	5.81	—————	82

石匙は、全部で16点出土した。その石器組成に占める割合は、1.52%である。石材ごとの内訳は、黒耀石1点、珪岩11点、安山岩4点である。

分布では、北側凹部5点、北東側谷部7点、東側斜面部1点、西側斜面部1点、南側斜面部1点である。

この資料中12点を図示した。またこの12点の資料は、その形状から2類に分類できる。すなわち横型（第1類）と縦型（第2類）である。

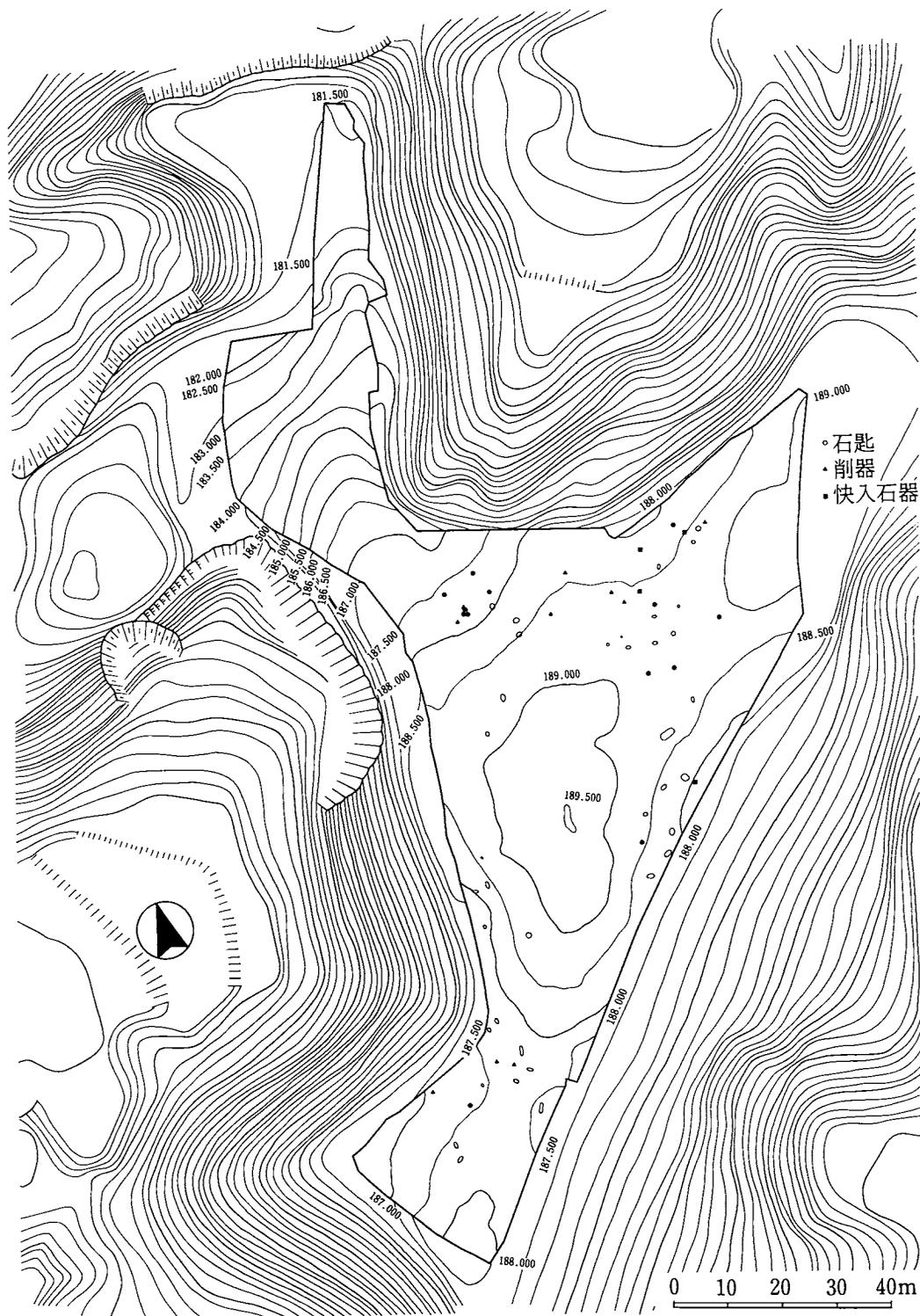
以下、類ごとに説明を加えていく。

第1類（167～169、171、172、174～178）

横型の石匙である。その石材ごとの内訳は、安山岩3点・珪岩5点・黒耀石2点である。つまみ部が、石器本体の中央部にくるもの（167～169、171、174、175、177、178）とそうでないもの（172、176）とがある。171は、石器本体に比べて、つまみ部の作り出しが大きい。174は、つまみ部を大きく作り出し、右側に抉入状の調整加工を施しつまみ部を作り出している。177、178は、調整加工がつまみ部を作り出す形で施されるのみである。素材剥片の形状を、残している。この2点から横型の石匙の素材剥片の形状と、その使い方を類推することができる。素材となる剥片は、横長剥片で打点部を上位つまみ部に置き、その剥片の縁辺を刃部に置く。その後つまみ部及び刃部を作り出す形で調整加工を施す。しかし167、169では、素材剥片の打点方向が石器上位のつまみ部側に置かれず、左右縁辺に位置していることから、製作の手順には、統一した規範はなさそうである。

第2類（170、173）

縦型の石匙である。資料数は、2点である。その石材は、2点とも珪岩製である。170は、下半部を欠失している。断面は、厚みのある凸レンズ状を呈する。173は、胴部が膨らむやや幅広の縦型である。裏面に、礫面を残す。断面は、凸レンズ状を呈する。



第72図 遺物分布図(石匙、削器、抉入石器)

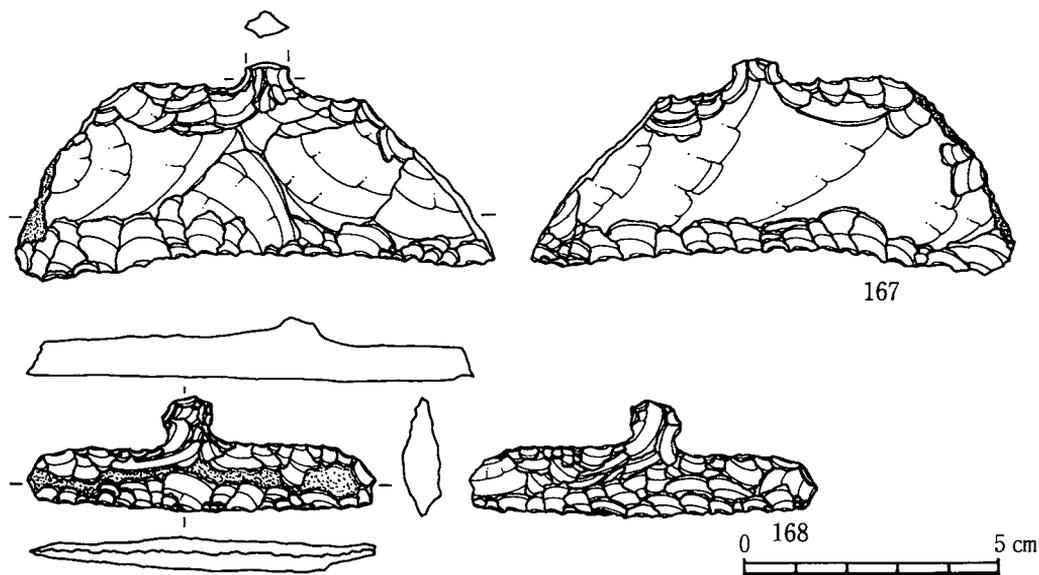
第13表 石器計測表

No	器種	石材	計測値				グリッド	登録番号
			長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
167	石	安山岩	2.52	6.10	0.80	38.35	VIB-17	13094
168	〃	〃	2.28	6.90	0.71	8.40	VIB-11	7139
169	〃	黒耀石	2.91	2.69	0.63	3.88	VIB-9	14378
170	〃	珪岩	4.42	2.28	1.19	10.15	VID-1	5842
171	〃	安山岩	2.20	2.82	0.41	1.65	VID-7	11062
172	〃	黒耀石	1.68	2.10	0.58	0.92	VB-10	9966
173	〃	珪岩	4.78	2.35	0.83	8.50	—————	一括
174	〃	〃	3.24	5.98	0.63	13.34	VID-7	5731
175	〃	〃	2.62	(3.71)	0.70	6.70	XD-9	3059
176	〃	〃	2.05	2.82	0.88	4.55	VD-14	8993
177	〃	〃	2.90	4.29	0.61	4.98	VB-8	320
178	〃	〃	2.22	3.49	0.47	2.27	VIB-19	4165

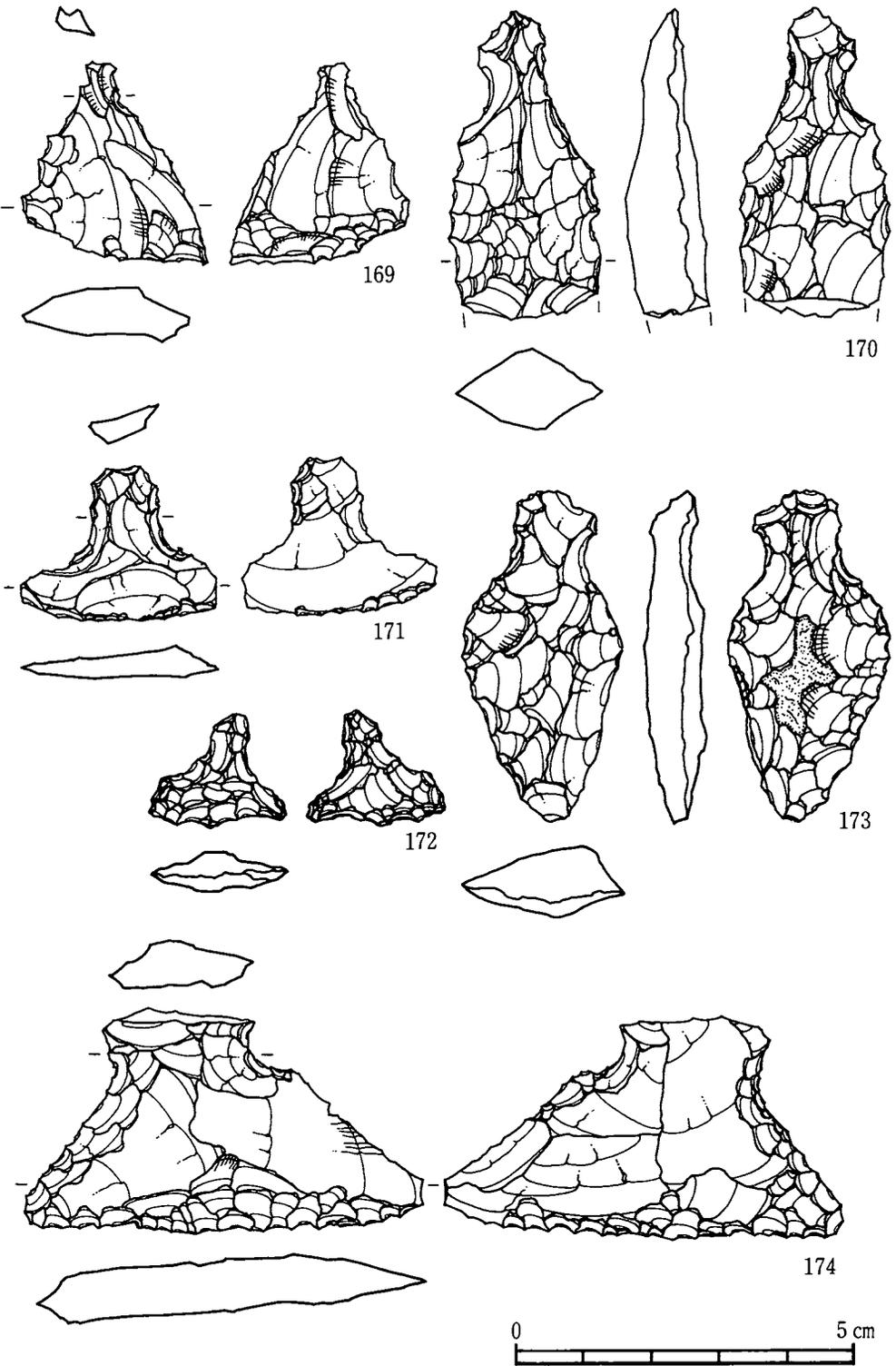
削器 (第76図179~第80図209)

削器は、31点出土した。その石器組成に占める割合は、2.94%である。石材ごとの内訳は、黒耀石16点、珪岩14点、安山岩1点である (第6表)。

石器の分布は、北側凹部17点、北東谷部7点、西側斜面部4点、東側斜面部1点、南側斜面部で2点出土した (第72図)。分布の状況は、他の遺物の出土状況と同様で、北側凹部・北東



第73図 石器実測図



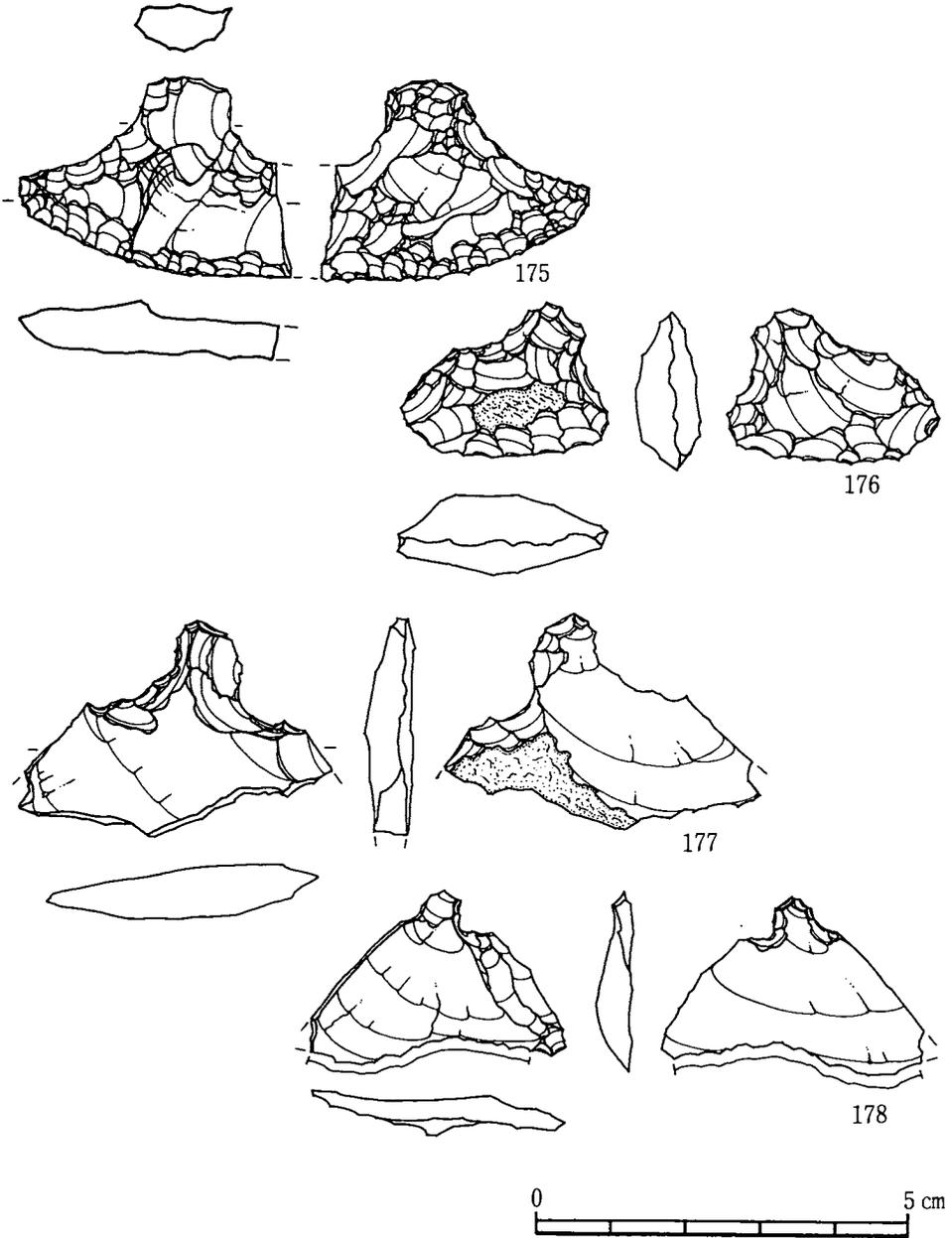
第74図 石器実測図

谷部に集中する傾向が窺える。

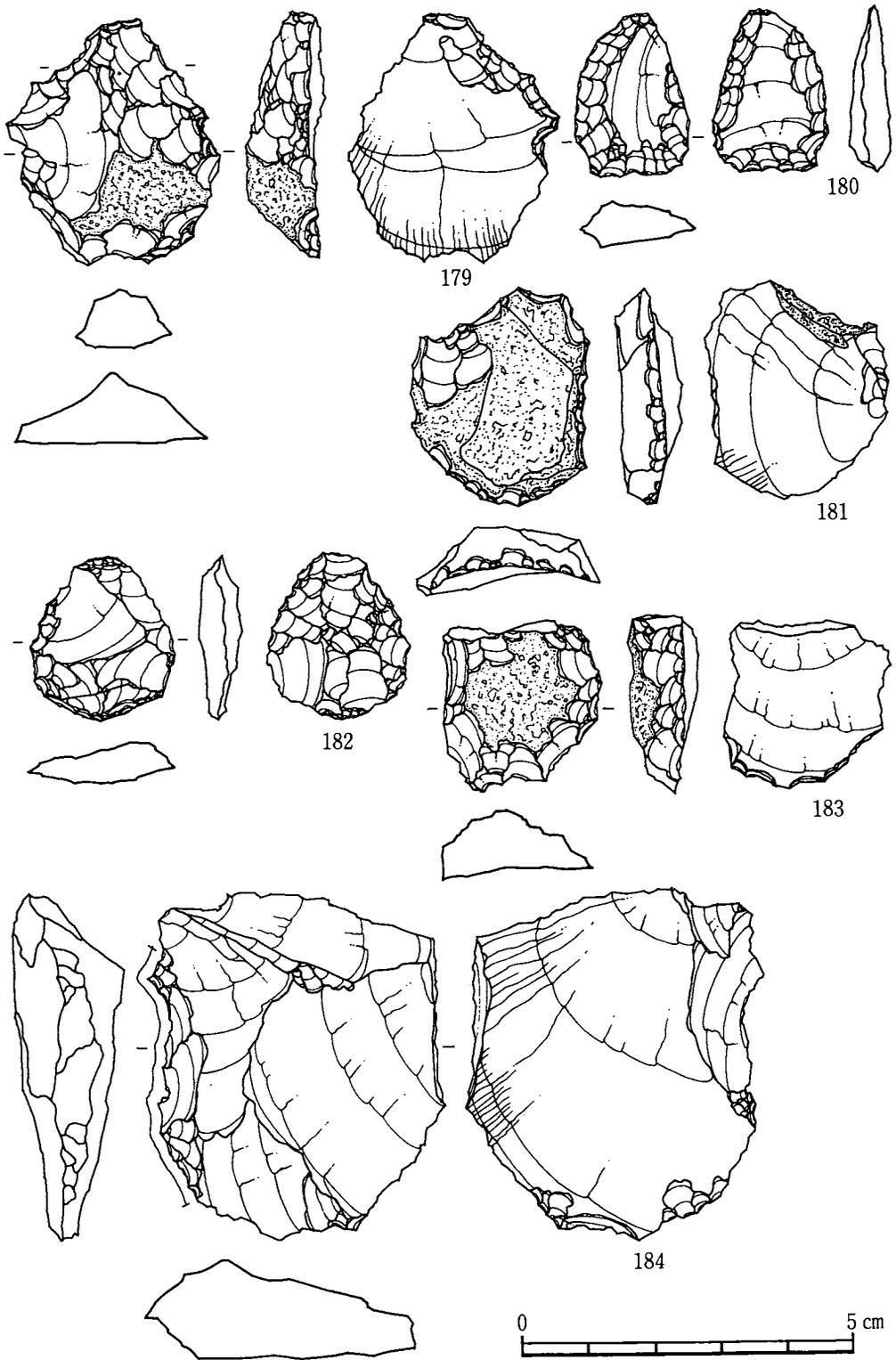
削器は、刃部の状態によって、第1類～第3類に分類される。以下、類ごとに説明を加えていく。

第1類 (184、186、187、189、190、192、194、199、200、207、208、209)

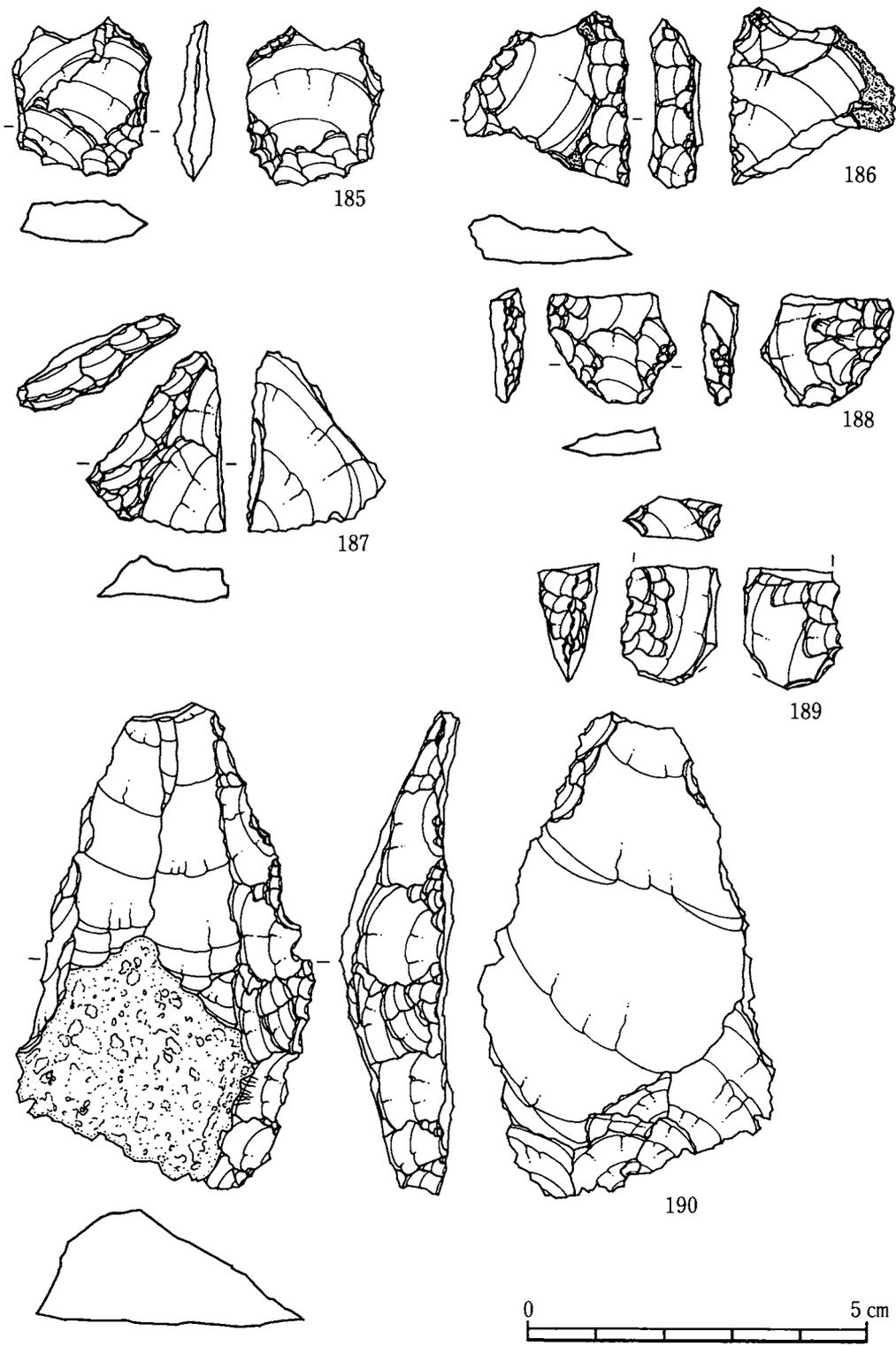
1類の削器は、素材となる剥片の一つの縁辺に刃部が設けられているものである。資料数は、



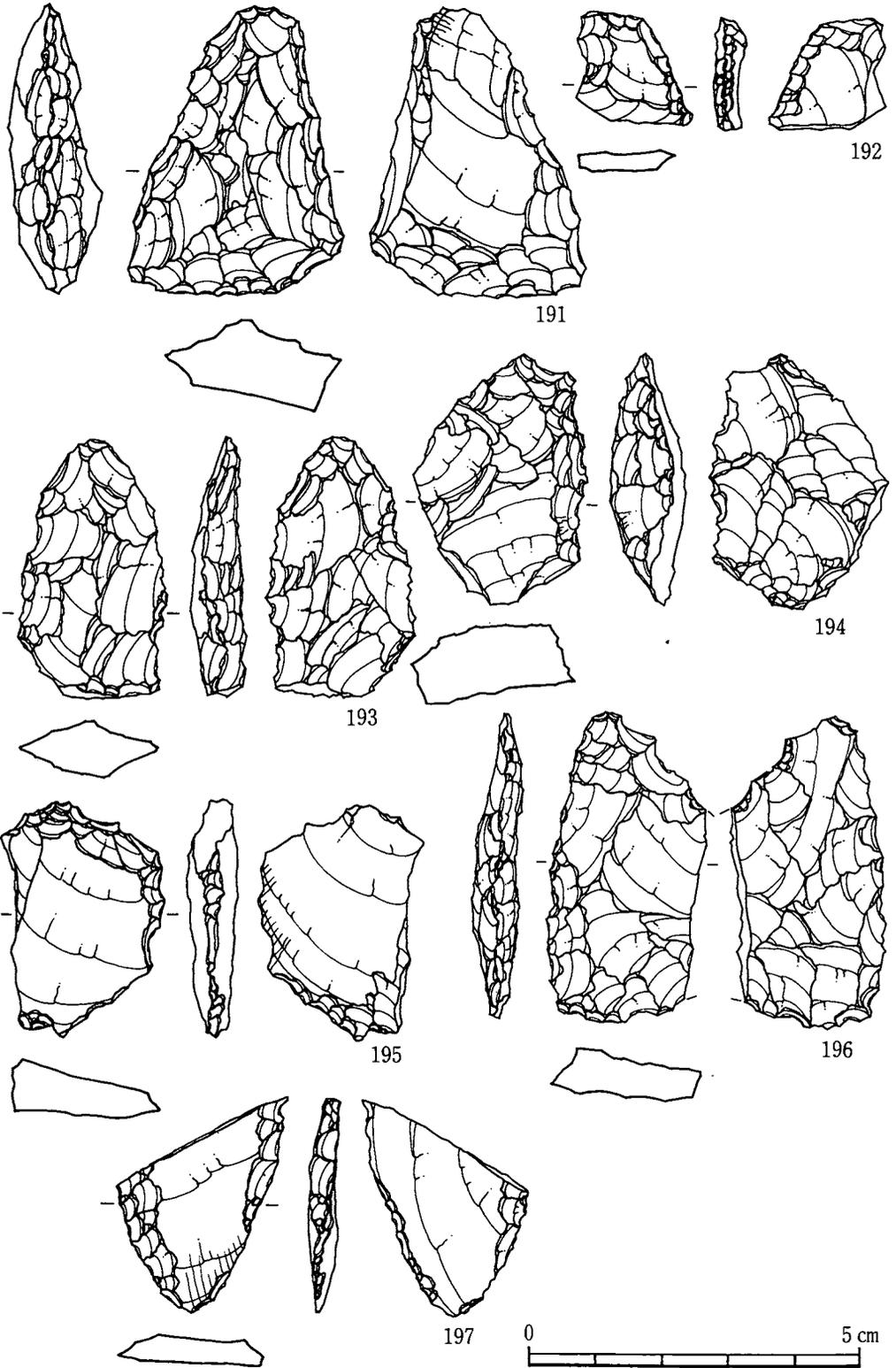
第75図 石器実測図



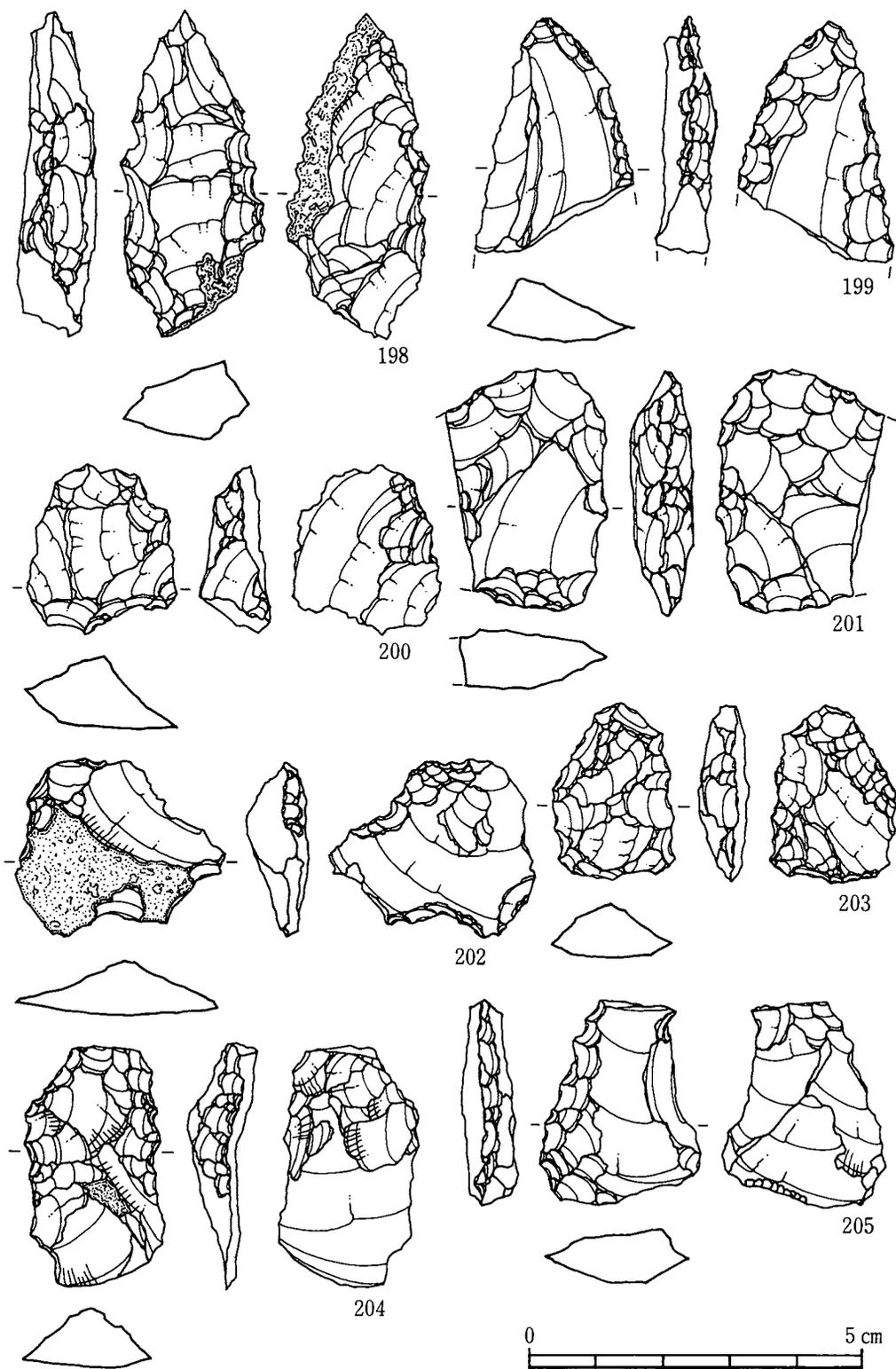
第76図 石器実測図



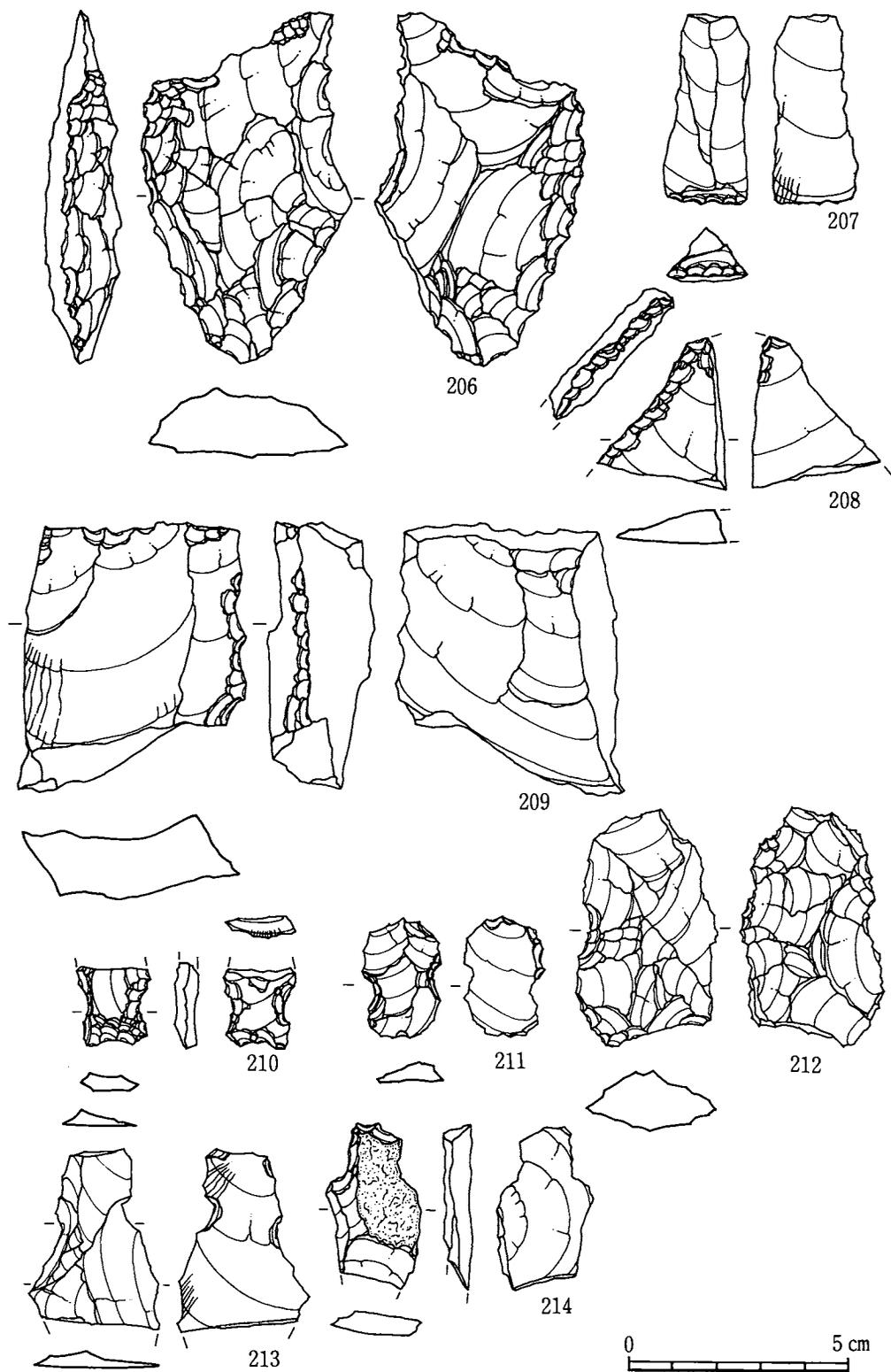
第77図 石器実測図



第78図 石器実測図



第79図 石器実測図



第80図 石器実測図

12点である。その出土地点は、北側凹部6点、北東谷部及び西側、南側斜面部でそれぞれ2点ずつ出土している。

これらの削器は、刃部の作り出しの状態から、さらに二つに細分される。片刃（184、186、187、190、194、200、207、208、209）と両刃（189、192、199）である。また、この刃部と素材となる剥片の打面との関係では、打面部と隣接する側縁に刃部を作り出すもの（186、190、192、208、209）と、打面部と対向する縁辺に刃部を作り出すもの（184、187、189、194、199、200、207）がある。

第2類（181、185、188、195、197、198、202～204、206）

2類の削器は、素材となる剥片の二つの縁辺に、刃部が作り出されたものである。資料数は10点である。その出土地点は、北側凹部3点、北東谷部3点、西側斜面部4点である。

この10点の削器は、刃部の位置関係によって、隣接する縁辺に刃部を設定するもの（181、185、195）と、対向する縁辺に刃部を設定するもの（188、197、198、202～204、206）である。また、刃部の種類では片刃（181、188、195、202～204、206）と、両刃（185、197、198）がある。

第3類（179、180、182、183、191、193、196、201）

3類の削器は、刃部が三つ以上の縁辺に作り出されるものである。資料数は、8点である。これらの出土地点は、北側凹部6点、北東谷部及び西側斜面部でそれぞれ1点である。刃部の種類には、片刃（179、183）と両刃（180、182、191、193、196、201）がある。

抉入石器（第80図210～214）

抉入石器は、全部で5点出土した。その石器組成に占める割合は、0.47%である。石材ごとの内訳は、すべて珪岩製である（第6表）。またその分布は、東側斜面部で1点出土している以外は、北東側谷部に集中している（第72図）。

210は、小型の縦長剥片を素材とし、その表面両側縁に裏面側からの細かな調整によって抉入を作り出している。抉入部の半径は、0.6cmである。211は、縦長剥片を素材とし、打点側を欠失している。抉入は、両側縁に表裏両面から細かい調整によって作り出されている。その半径は、0.8cmである。打点部と対向する縁辺にも表裏両面から細かな調整がみられる。212は、素材となった剥片の形状は、不明であるが表裏両面とも両側縁から石器中央部に向けて、剥離がみられる。抉入は、左側縁のみにみられ、その半径は、0.8cmである。213は、縦長剥片を素材とする。またその素材剥片先端部を欠失している。抉入部は、両側縁裏面側にみられ1枚の剥離面によって作り出されている。その半径は、0.5cmである。214は、横長剥片を素材とし、その表面一側縁に抉入部を作り出している。またその調整は、4枚の細かな剥離による。半径は、0.9cmである。

石錐（第81図215～221）

第III章 調査の成果

第14表 石器計測表

No	器種	石材	計測値				グリッド	登録番号
			長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
179	削	器 黒 輝 石	3.12	2.99	1.00	9.52	VI D-11	9532
180	〃	珪 岩	2.41	1.71	0.61	2.54	VI D-1	9275
181	〃	黒 輝 石	3.19	2.67	0.61	6.48	VI C-12	1643
182	〃	珪 岩	2.45	2.15	0.59	3.05	VI D-6	5773
183	〃	黒 輝 石	2.45	2.30	0.93	6.29	V B-14	6655
184	〃	〃	5.20	4.39	1.22	29.36	X D-18	3082
185	〃	〃	2.38	2.02	0.55	2.58	VII D-2	2775
186	〃	〃	2.52	2.41	0.62	3.58	VII B-11	1495
187	〃	〃	2.68	2.08	0.55	2.38	V D-10	7657
188	〃	〃	1.61	1.94	0.31	1.74	V B-14	3361
189	〃	〃	1.75	1.40	0.59	2.05	V A-25	117
190	〃	〃	7.20	4.30	1.60	45.11	X C-22	2882
191	〃	珪 岩	4.25	3.29	1.38	17.20	VI D-8	5525
192	〃	〃	1.69	1.79	0.28	1.42	V D-10	7581
193	〃	〃	3.80	2.17	0.79	7.08	VII D-9	1570
194	〃	黒 輝 石	3.75	2.82	1.12	9.65	VII C-21	11724
195	〃	〃	3.50	2.20	0.75	5.95	VII D-3	589
196	〃	珪 岩	4.59	2.30	0.70	8.24	VI D-6	17439
197	〃	安 山 岩	3.20	2.31	0.41	2.36	V B-15	3317
198	〃	黒 輝 石	4.85	2.15	1.10	10.20	IV B-3	175
199	〃	珪 岩	3.56	2.31	0.85	6.08	VI D-7	5695
200	〃	黒 輝 石	2.54	2.25	1.02	4.78	VI D-11	17070
201	〃	珪 岩	3.58	2.47	0.83	10.55	VI D-11	2233
202	〃	黒 輝 石	2.65	3.15	0.08	5.86	VI C-10	7528
203	〃	〃	2.61	1.80	0.71	3.53	VI C-24	2673
204	〃	珪 岩	3.55	2.12	0.89	6.05	VII D-9	16129
205	〃	〃	3.06	2.46	0.77	5.59	VI D-2	5812
206	〃	〃	5.26	3.09	0.90	17.06	VII C-22	11764
207	〃	〃	2.81	1.29	0.79	1.88	VI B-21	17893
208	〃	〃	2.19	2.02	0.51	2.12	V D-21	9024
209	〃	〃	4.00	3.38	1.53	23.42	X C-17	2860

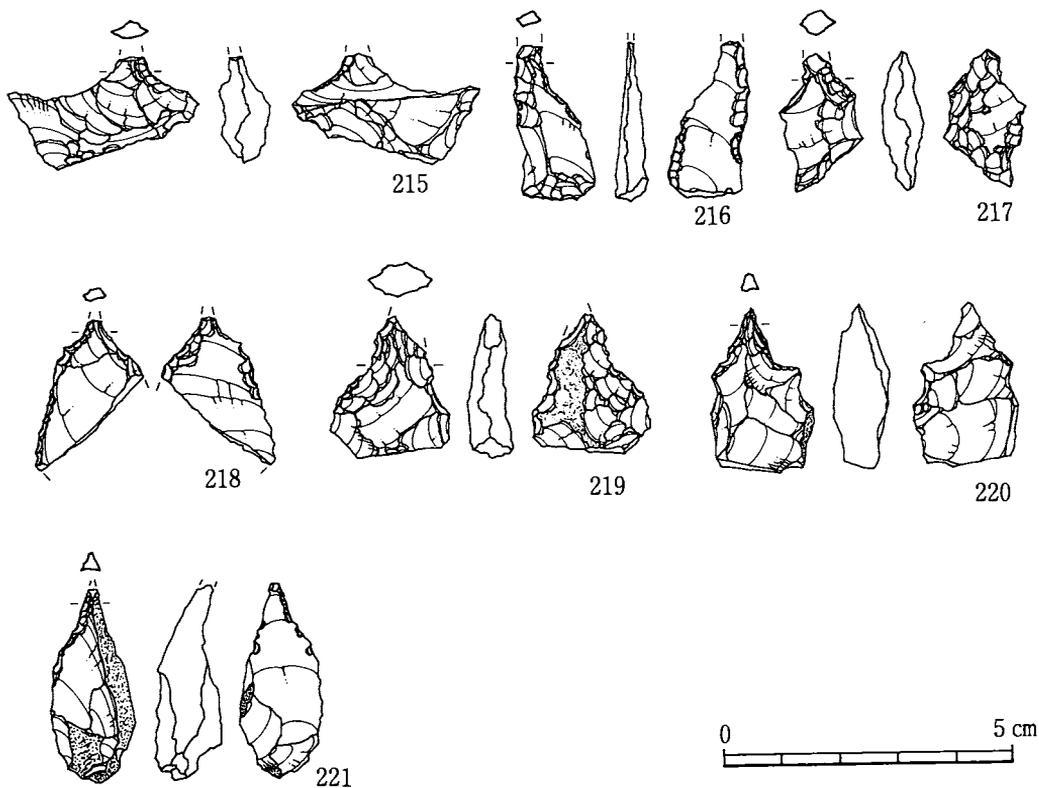
第15表 石器計測表

No	器種	石材	計測値				グリッド	登録番号
			長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
210	扶入石器	珪岩	1.79	1.19	0.25	0.65	VII B-4	12996
211	〃	〃	1.18	1.11	0.32	0.63	VI B-16	12636
212	〃	〃	3.31	2.01	0.87	7.25	VI B-9	14378
213	〃	〃	2.79	1.98	0.22	1.48	V B-19	14170
214	〃	〃	2.50	1.49	0.45	1.24	V B-8	6733

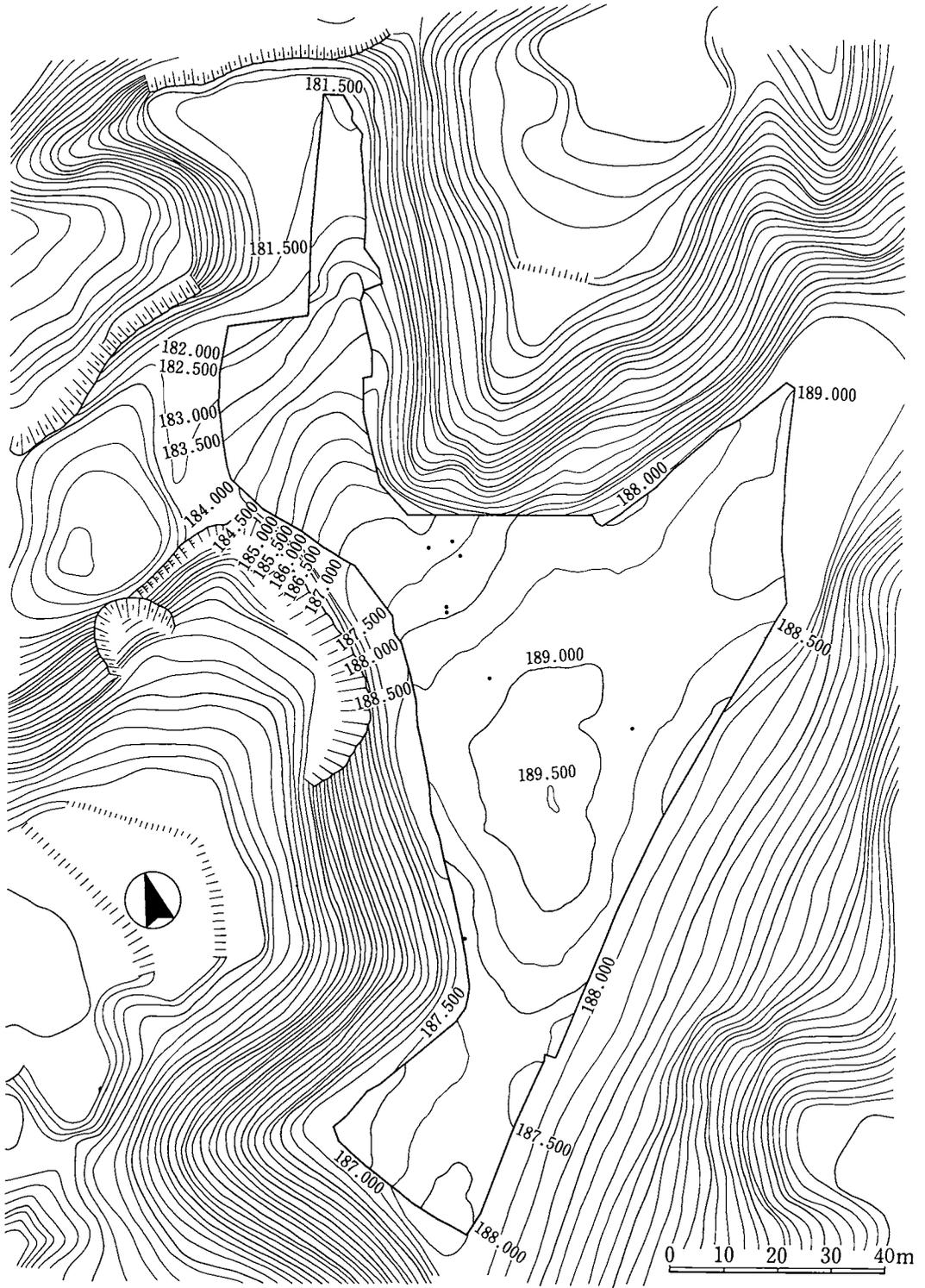
石錐は、全部で7点出土した。その石器組成に占める割合は、0.66%であり、石材ごとの内訳は黒耀石6点、珪岩1点である。またその分布は、東西斜面部でそれぞれ1点ずつ出土し、それ以外は北側凹部に集中する。これらの石器は、つまみ部の有無によって大きく2つに分けられる。ひとつは、錐部の作り出しによって、つまみ部と錐部が明瞭に区別されているものである(215、217~220)。もうひとつは、明瞭な錐部をもたないものである(216、221)。

打製石斧(第84図222)

打製石斧は、1点検出された。出土地点は、北側凹部である。石材は、砂岩である。横長裂

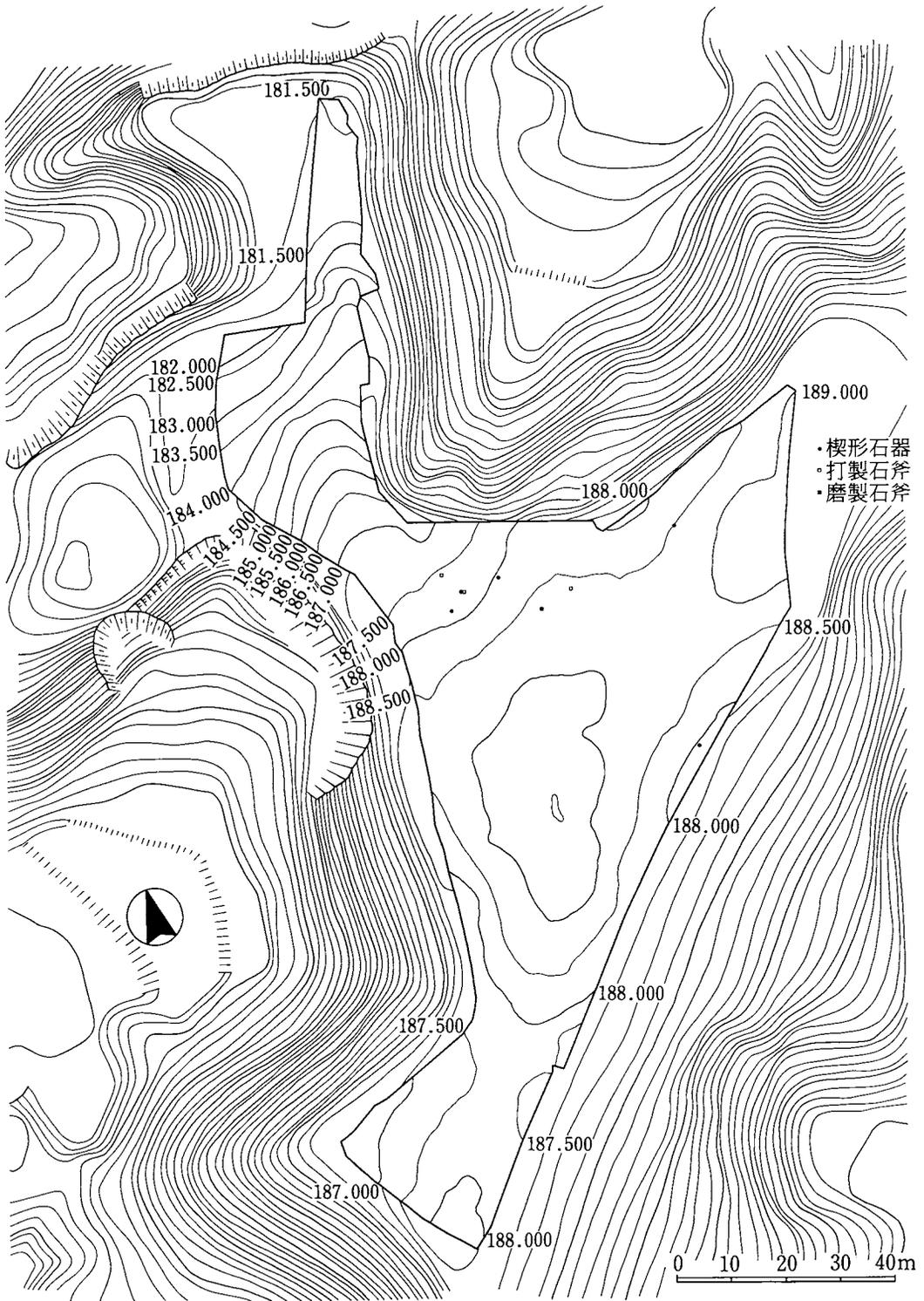


第81図 石器実測図



第82図 遺物分布図(石錐)

第3節 縄文時代早期の遺構と遺物



第83図 遺物分布図(打製・磨製石斧、楔形石器)

第16表 石器計測表

No	器種	石材	計測値				グリッド	登録番号
			長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
215	石	雑黒燧石	2.90	3.31	0.90	2.48	VD-14	7734
216	〃	〃	2.65	1.28	0.51	1.26	VD-9	10461
217	〃	〃	2.40	1.43	0.61	1.49	VD-10	10432
218	〃	珪岩	2.58	1.58	0.18	1.60	VID-7	8115
219	〃	黒燧岩	2.38	2.04	0.54	2.94	VIC-25	8684
220	〃	〃	2.80	1.79	0.92	3.50	VII B-13	1354
221	〃	〃	3.40	1.45	1.08	4.05	IXD-2	17931

片を素材とし、調整加工は階段状剥離で、全体形は短冊形を呈している。両刃の刃部をもつ。

磨製石斧 (第84図223~225)

磨製石斧は、3点検出された。その石器組成に占める割合は、0.28%である。石材ごとの内訳は、砂岩3点である。またその分布は、北側凹部に2点、北東側谷部に1点である。223は、表裏両面とも石器中央部を研磨されている。刃部は、両刃であるが表面側には、整形段階の剥離面が残る。研磨による刃部の作り出しは、裏面側のみみられる。224、225は、基部側を欠失し全体形は不明である。しかし2点とも研磨は、刃部のみみられ整形段階の剥離を縁辺に残す。刃部は、丸みを帯び両刃である。

環状石斧 (第84図226)

環状石斧は、1点検出された。その石器組成に占める割合は、0.10%である。石材は、砂岩ある。出土地点は、北東側谷部である。左半部を欠失している。表裏両面とも、整形剥離及び研磨はみられない。中央部の孔は、両面から穿たれている。刃部には、潰れ痕と擦痕がみられる。

楔形石器 (第84図227~231)

楔形石器は、全部で5点検出された。石器組成に占める割合は、0.47%である (第6表)。石材ごとの内訳は、黒燧石1点、珪岩4点である。出土地点は、北東側谷部及び東側斜面部でそれぞれ1点ずつ出土し、3点は北側凹部に集中する。227は、横長剥片を素材とし左右両側縁に、対向する小剥離痕が観察される。228は、縦長剥片を素材とし、上下両端に小剥離痕が観察される。229は、素材剥片の形状は不明である。上下両端及び左右両側縁に潰れ痕が観察される。230は、素材剥片の形状は不明であるが、上下両端に折れ面をもつ。また潰れ及び小剥離は全周に観察される。231は、表面に礫面を残し、裏面側上下両端からの剥離面をもつ。また上端は、表裏両面とも潰れによる小剥離が観察される。

磨石・敲石 (第86図232~第94図297)

第3節 縄文時代早期の遺構と遺物

第17表 石器計測表

No	器種	石材	計測値				グリッド	登録番号
			長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
222	打製石斧	砂岩	10.15	3.69	1.90	82.42	—	1645
223	磨製石斧	〃	7.71	4.90	1.32	59.40	—	14315
224	〃	〃	4.90	6.95	2.00	80.00	基部欠損	14103
225	〃	粘板岩	4.93	6.30	2.87	89.40	基部欠損	15317
226	環状石斧	砂岩	9.30	5.23	2.30	130.18	1/2残存	9817
227	楔形石器	黒耀石	2.71	1.85	0.72	3.38	—	4403
228	〃	珪岩	2.18	1.81	0.50	2.02	—	455
229	〃	〃	3.34	2.94	1.05	12.15	—	1836
230	〃	〃	2.40	1.44	0.62	2.74	—	6732
231	〃	〃	2.70	1.70	0.81	4.17	—	15956

磨石・敲石は、464点が出土した。その石器組成に占める割合は、43.98%で縄文時代早期の出土石器の中で、もっとも高い数値を示している。石材では、砂岩270点、凝灰岩169点、安山岩25点である（第6表）。

石器の分布は、遺跡全面に広がるが、集中部は大きく北側凹部、北東側谷部、東・西斜面部、南側斜面部の5つに分けられる（第85図）。この中で北側凹部と北東側谷部が特に集中する傾向がある。またこの分布のあり方は、石鏃や他の石器とも共通している。

出土した磨石・敲石は、その形状によって第1類～第4類に分類される。

以下、類ごとに説明を加えていく。

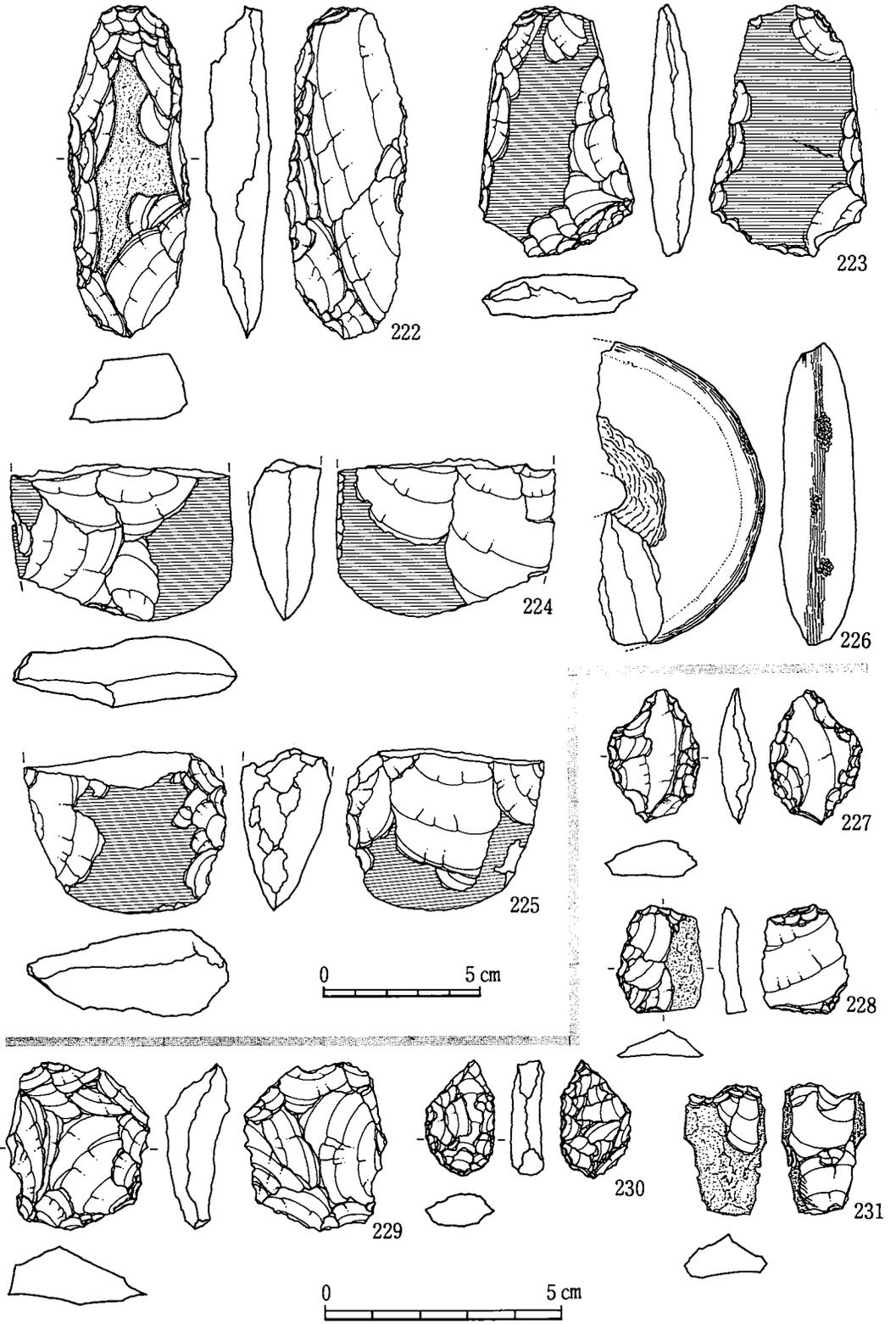
第1類（234、237、241、254、256、258、259、263、264、265、271、279、280、282、286、289、294）

1類に属するものは、石器の形状が扁平な楕円形を呈する磨石・敲石にあたり、その大きさにはバラツキがみられる。分布には、偏在の傾向はみられない。この類に属する石器は、その敲打痕の部位によって、3つに細分できる。それは、敲打痕が石器の縁辺部の全域で観察されるもの（234、259、263、265、271、282、286、289、294）、全縁辺と表裏面にあるもの（258、280）、縁辺の一部に認められるもの（237、254、256、264、279）である。

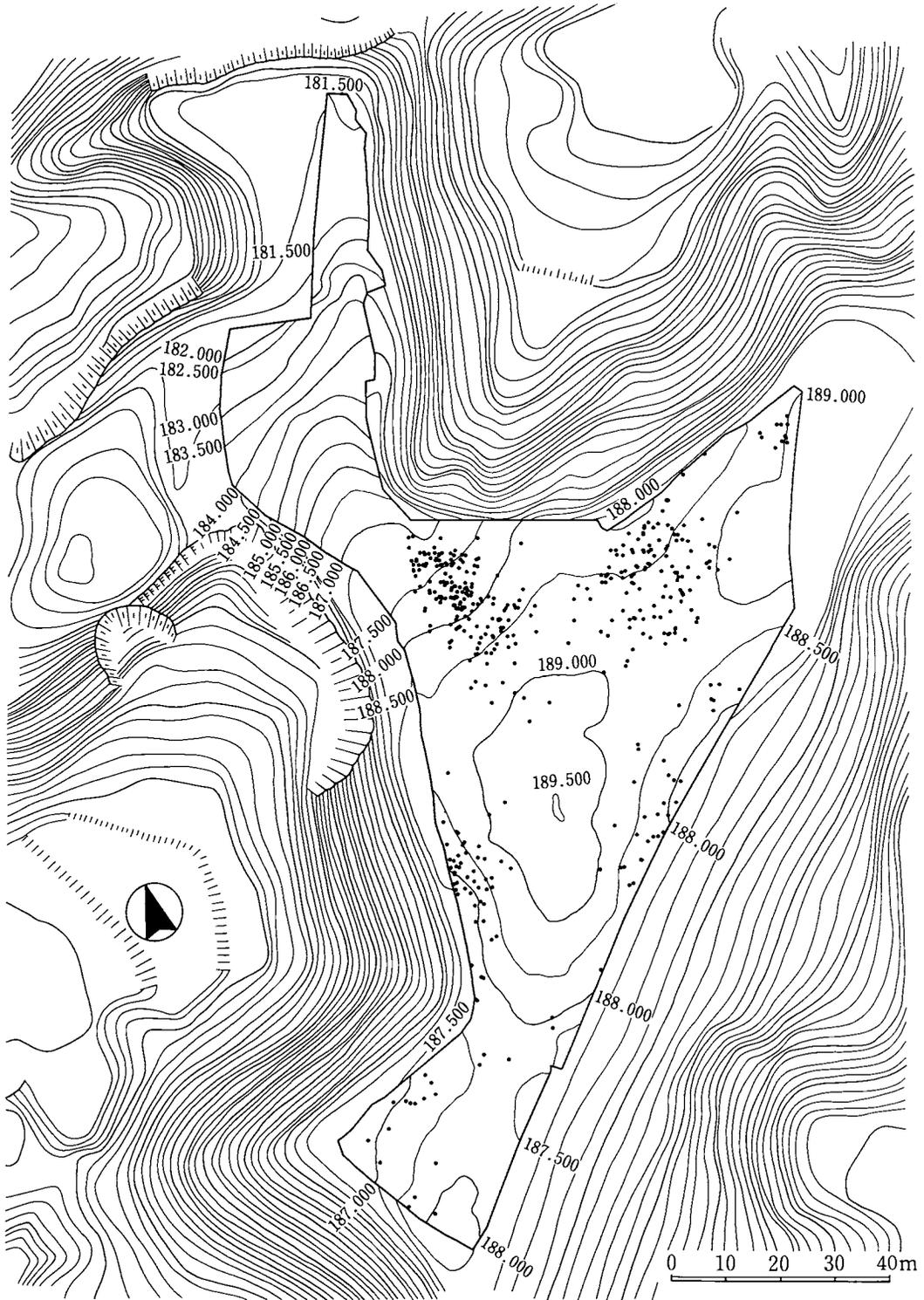
第2類（232、235、238、243、246、267、269、272、275、278、281、283、288）

2類に属する石器は、石器の形状が円形を呈する磨石・敲石である。大きさには、バラツキがある。分布には、偏在の傾向はみられない。この類に属する石器は、敲打痕の部位によって2つに細分できる。それは、敲打痕が石器の縁辺の全域に認められるもの（232、235、238、243、275、278、281、283、288）、全域と表裏面にあるもの（246、267、269、272）である。

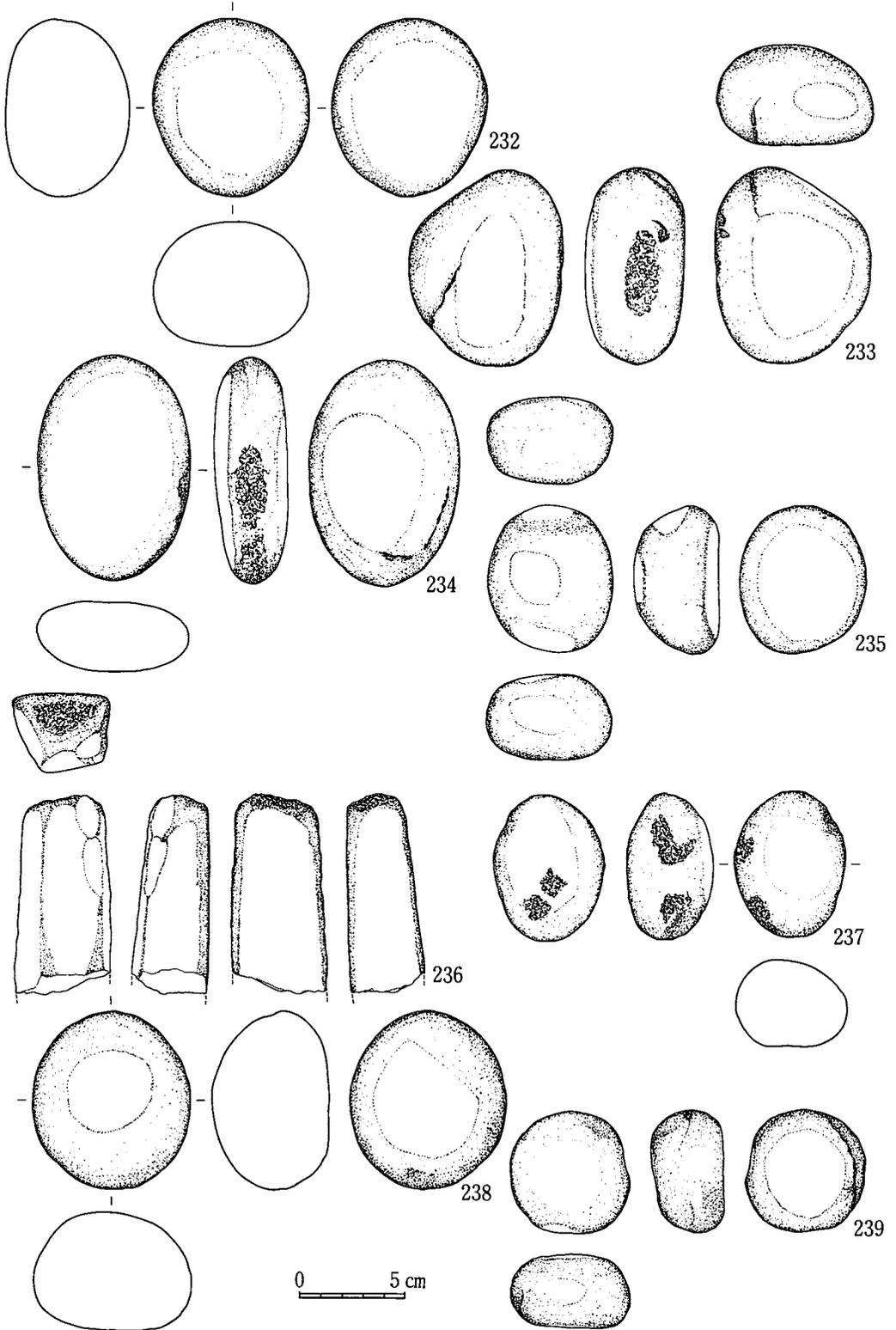
第3類（233、239、240、242、244、248～250、252、253、255、257、260、261、274、276、284、285、287、290、291、293、295、296）



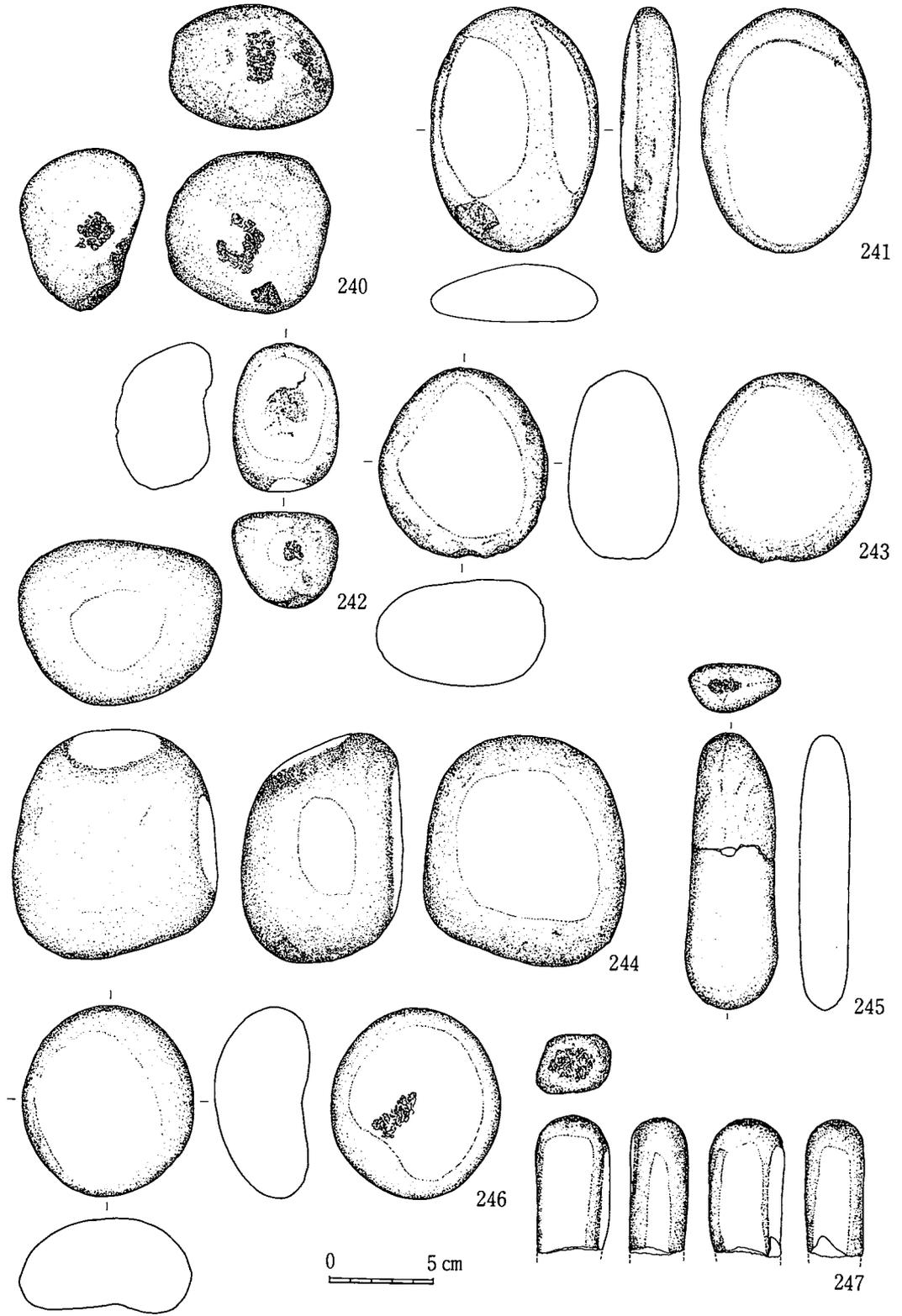
第84図 石器実測図(打製・磨製石斧、楔形石器)



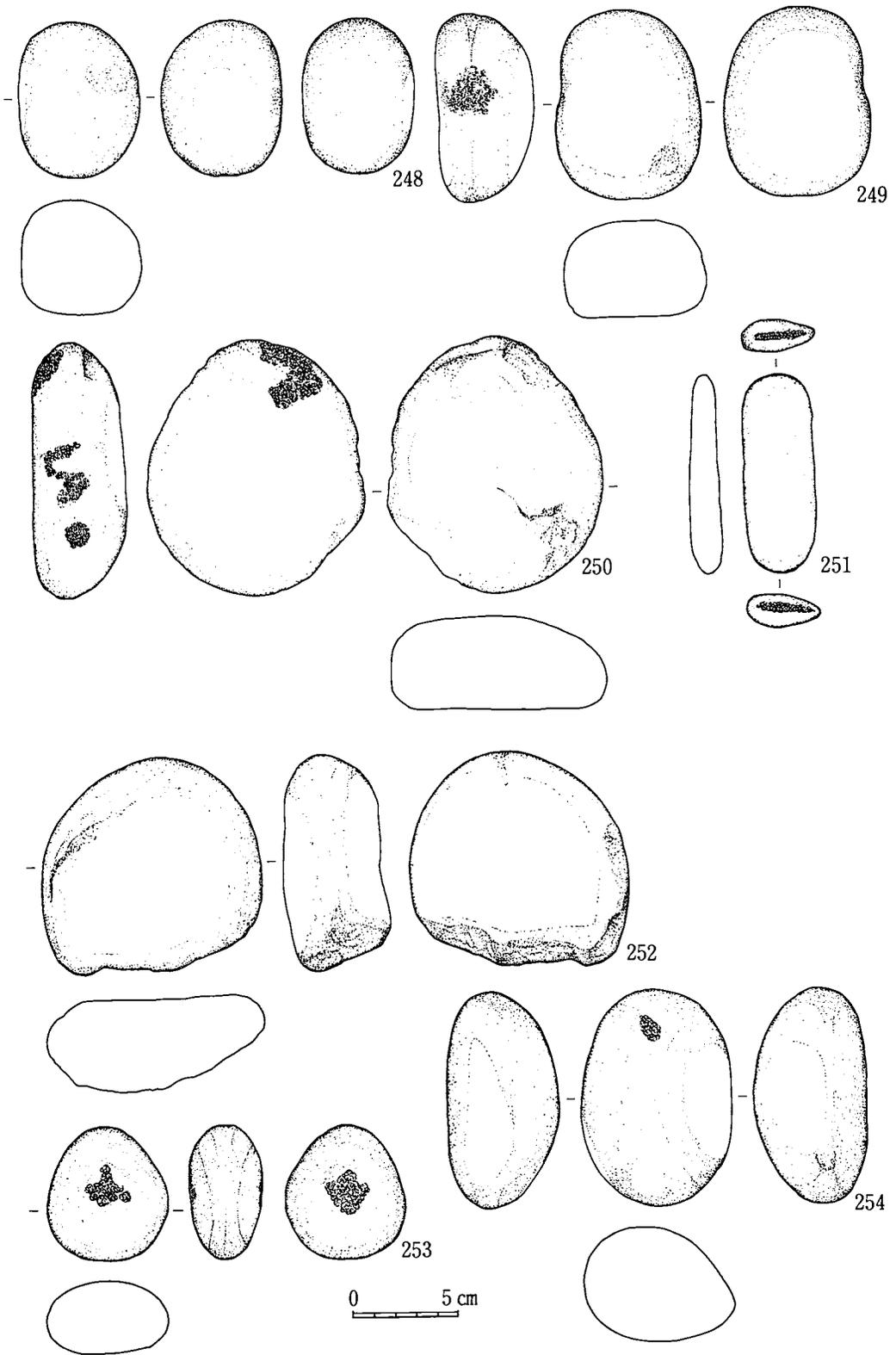
第85図 遺物分布図(磨石・敲石)



第86図 石器実測図

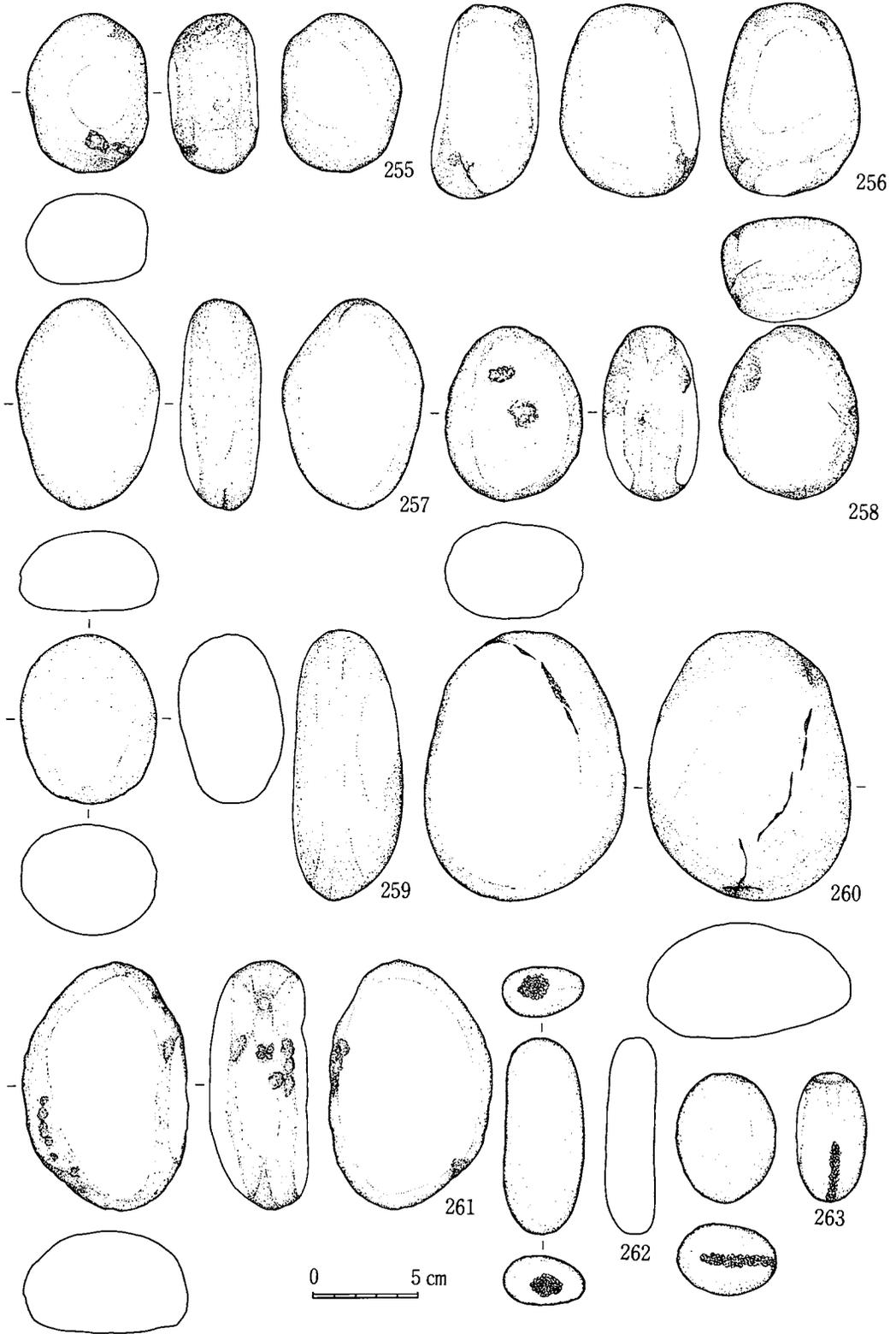


第87図 石器実測図

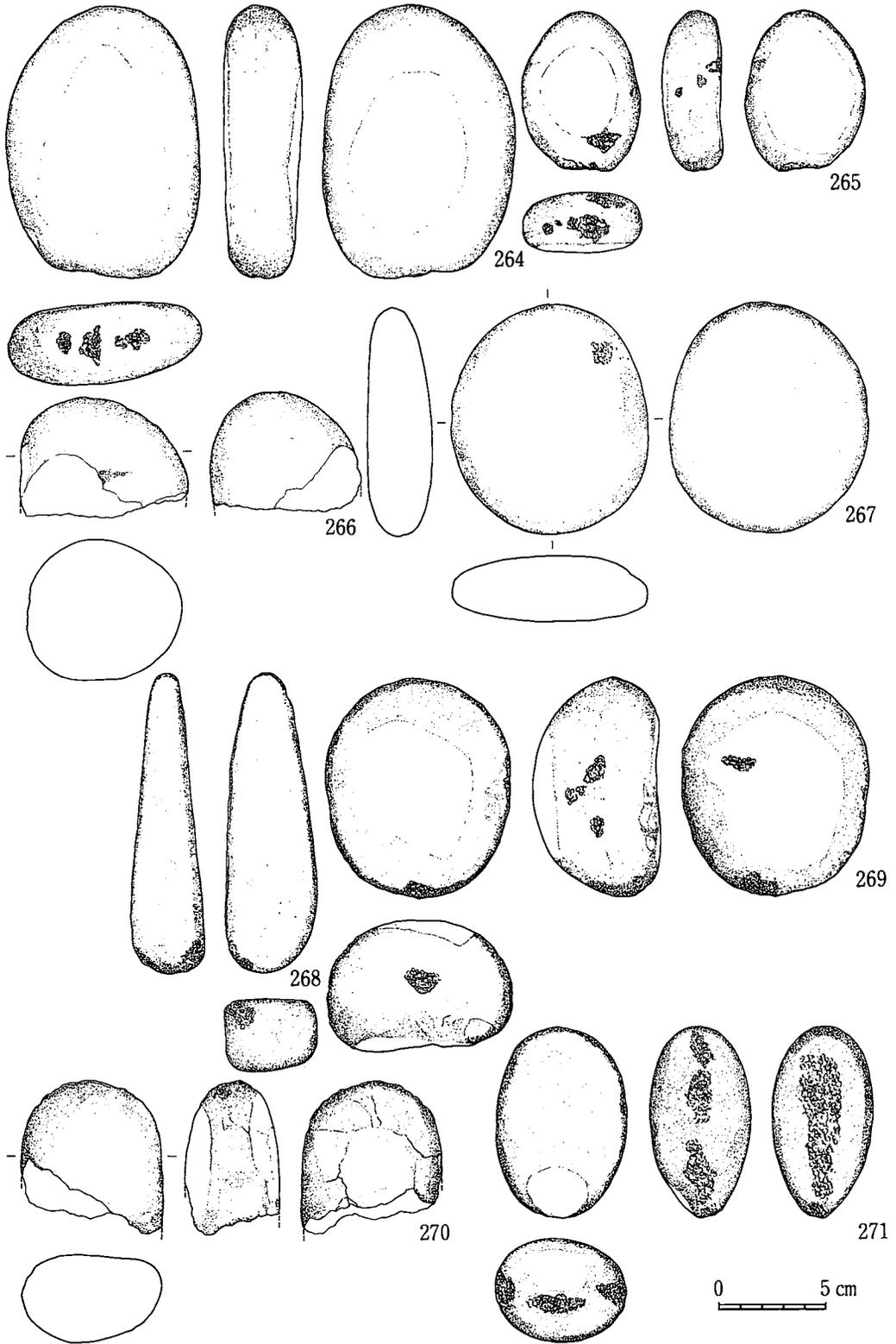


第88図 石器実測図

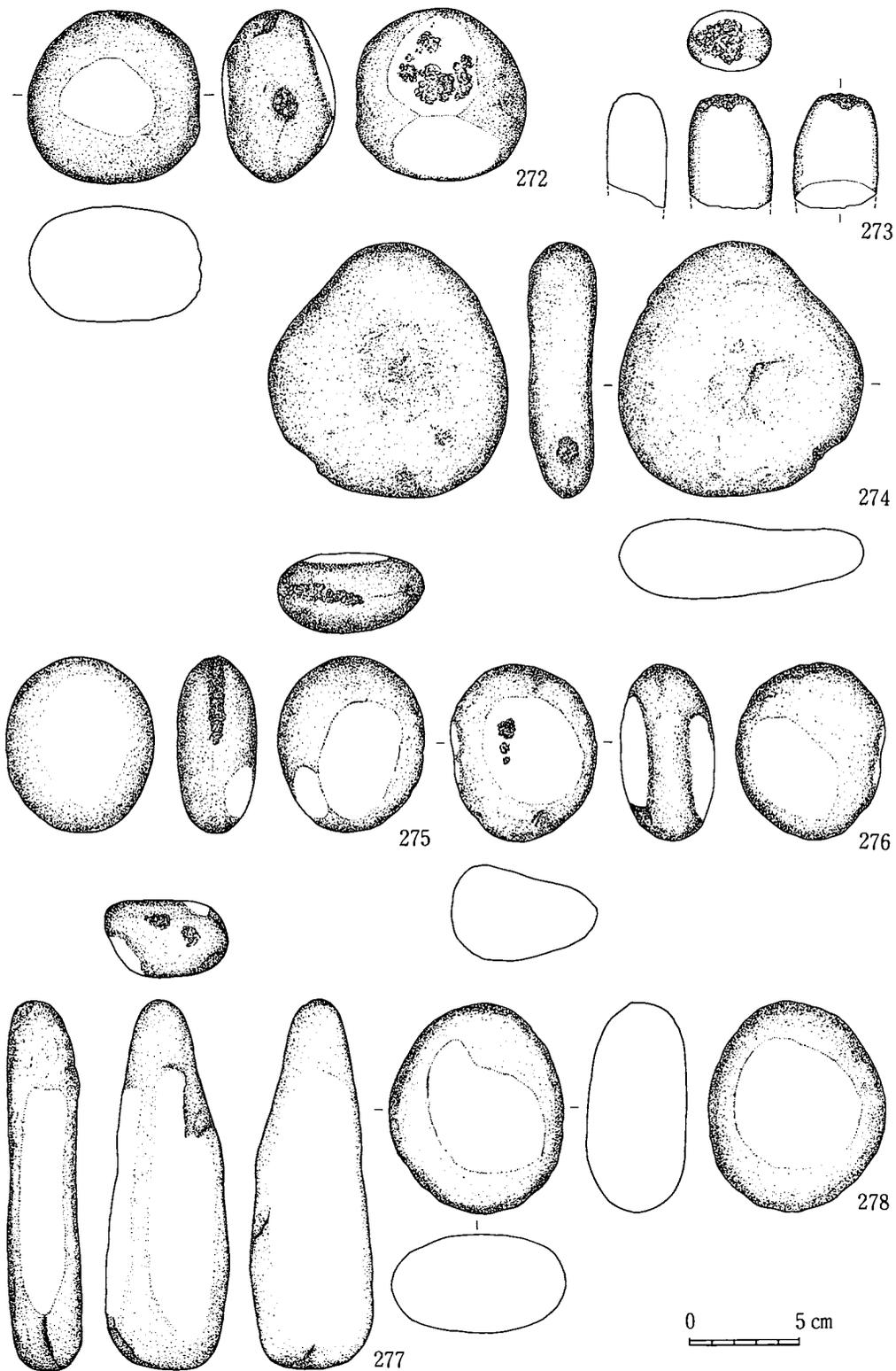
第3節 縄文時代早期の遺構と遺物



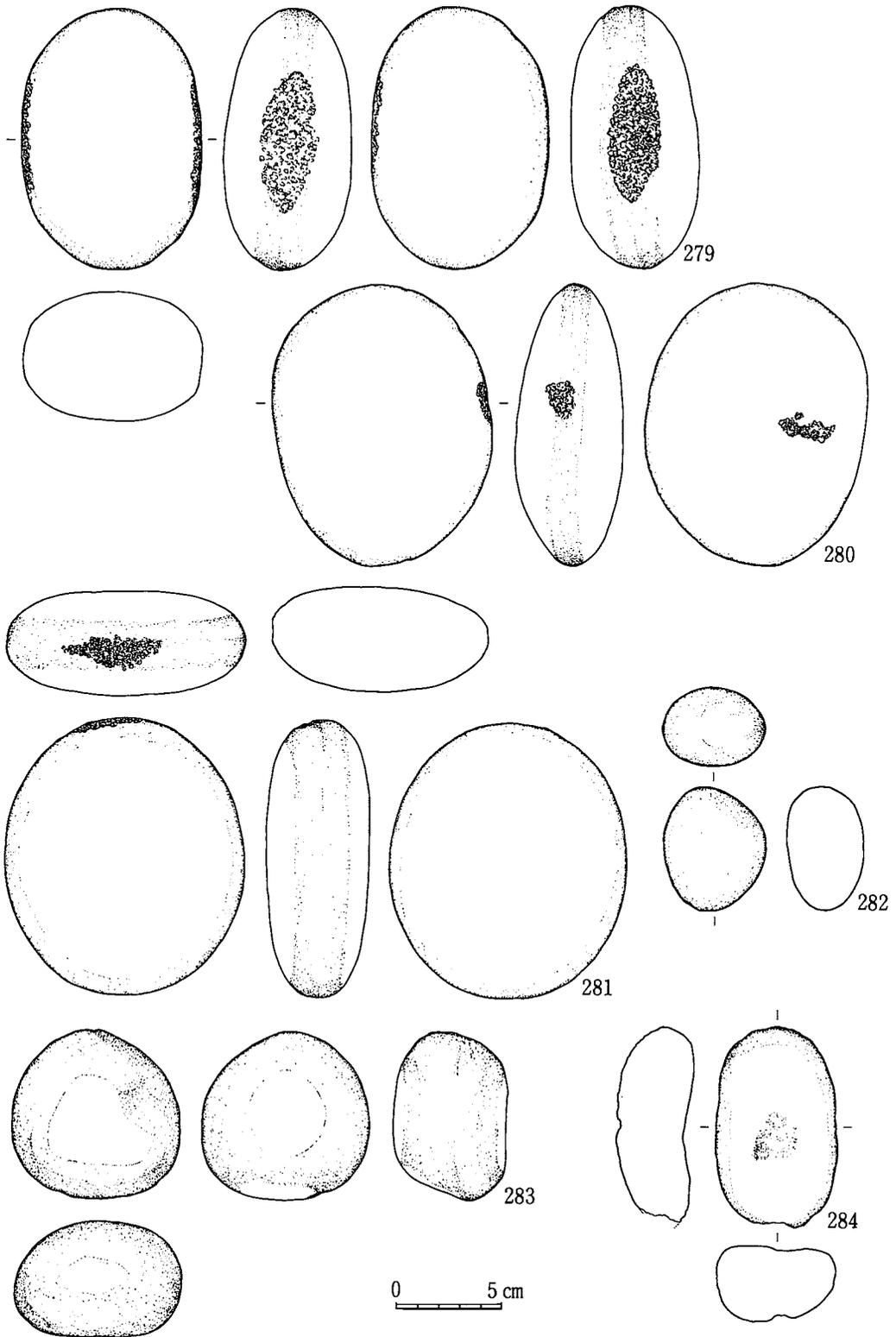
第89図 石器実測図



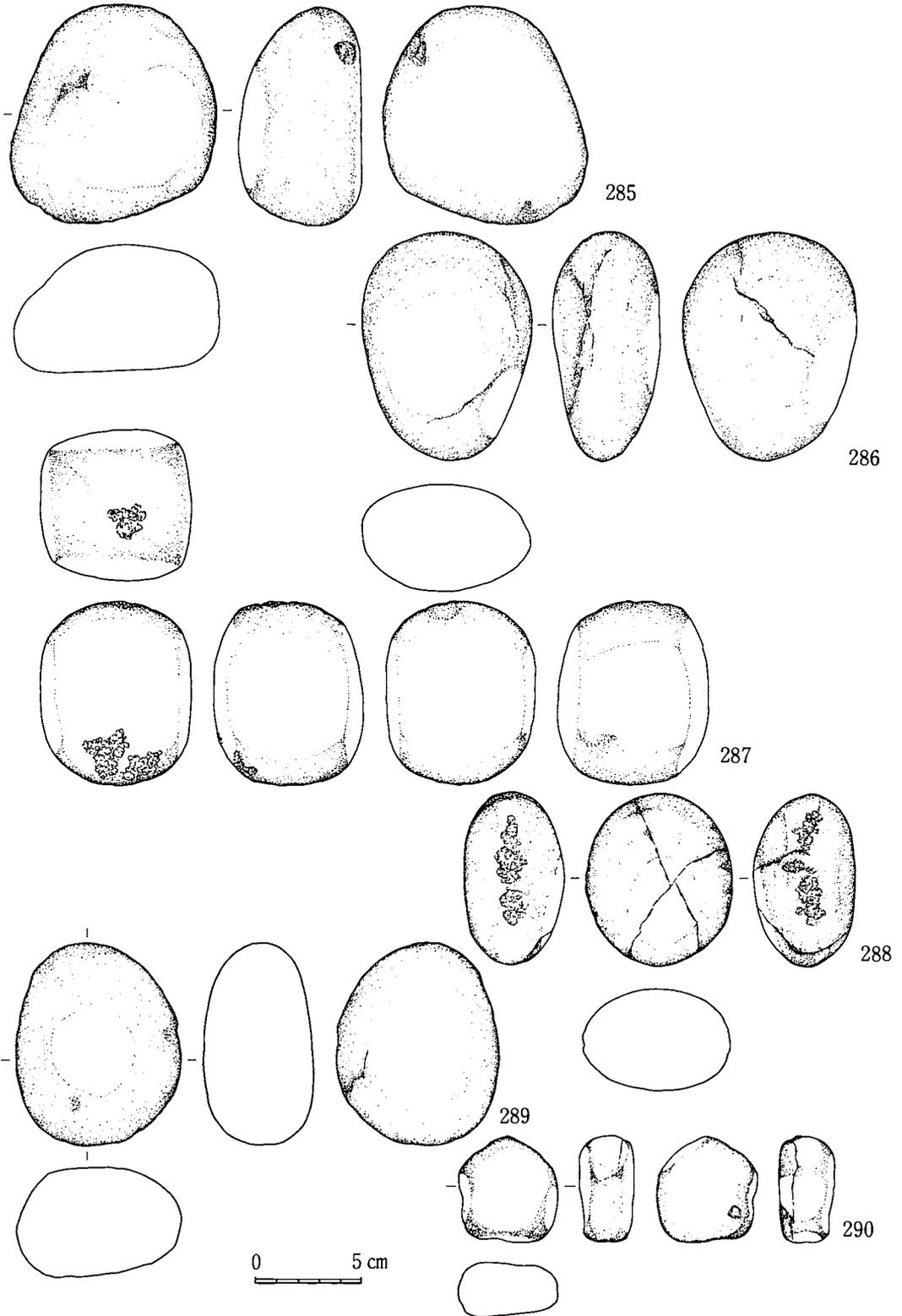
第90図 石器実測図



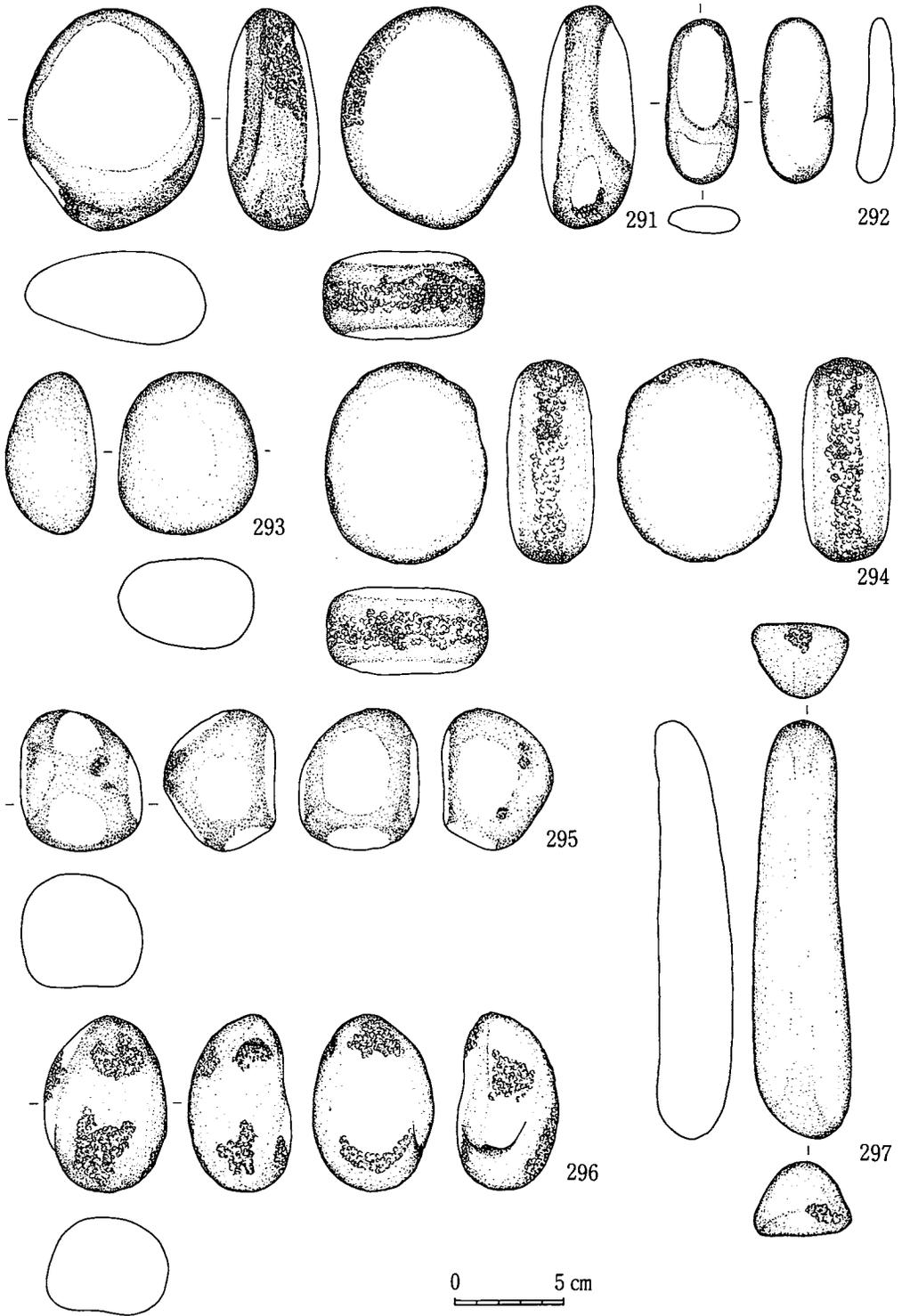
第91図 石器実測図



第92図 石器実測図



第93図 石器実測図



第94図 石器実測図

第3節 縄文時代早期の遺構と遺物

第18表 石器計測表

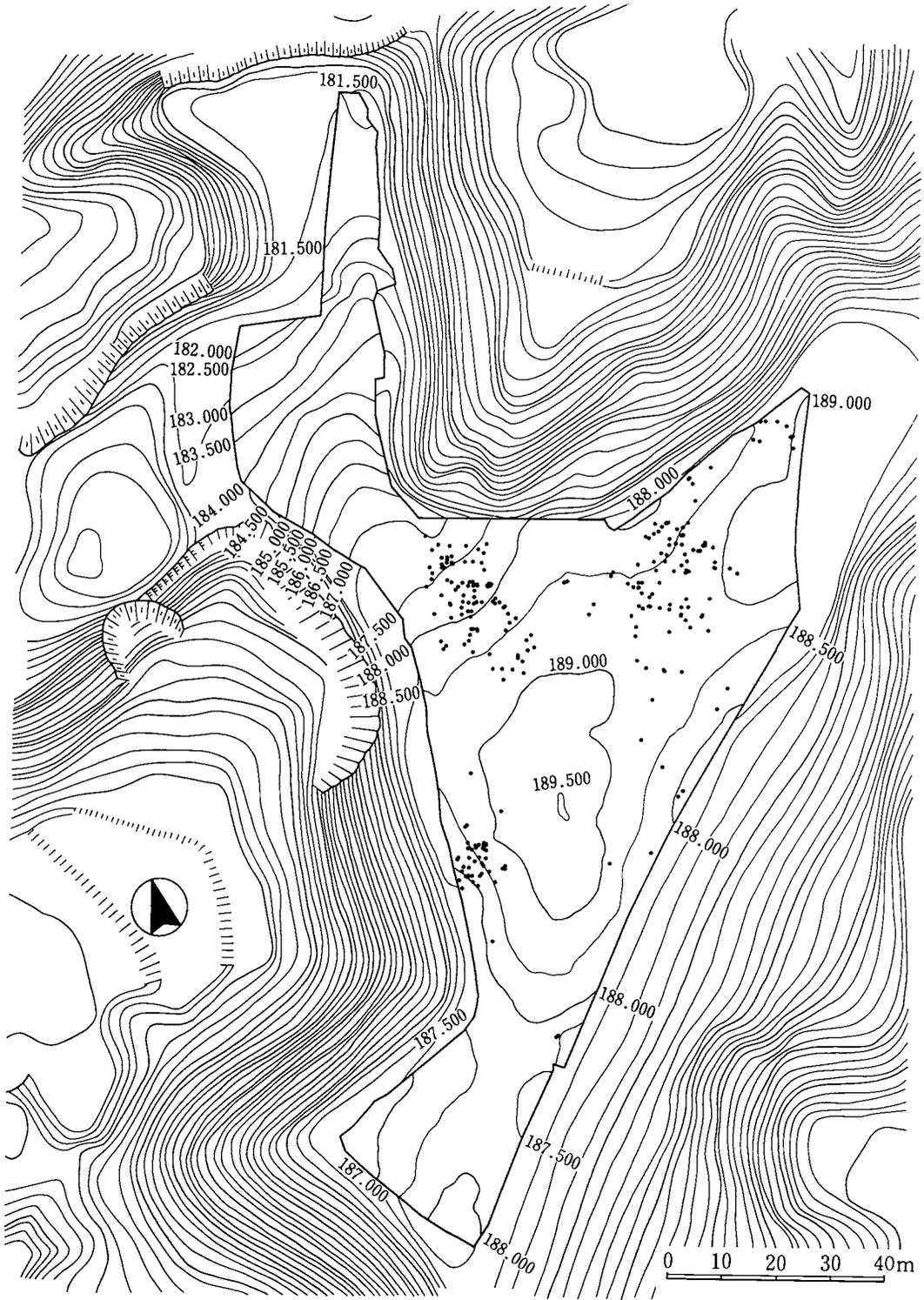
No	器種	石材	計測値				グリッド	登録番号
			長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
232	磨石・敲石	凝灰岩	8.20	7.30	5.70	467.2	VII B-19	1545
233	〃	砂岩	9.00	7.30	4.70	441.5	V B-20	7160
234	〃	〃	10.40	7.10	3.20	355.6	VI D-5	8752
235	〃	〃	6.80	5.90	4.00	234.8	VI D-11	8383
236	〃	凝灰岩	9.20	4.50	3.60	219.0	VI D-12	9575
237	〃	〃	6.70	5.20	4.00	189.7	V D-4	1846
238	〃	〃	8.20	7.40	5.50	454.2	VI B-22	3754
239	〃	〃	5.70	4.60	3.40	169.0	—	一括
240	〃	〃	7.60	7.20	5.80	411.0	V A-17	6583
241	〃	砂岩	11.40	7.90	2.70	364.2	VII D-5	4842
242	〃	凝灰岩	6.90	5.00	4.50	205.0	XI D-19	2952
243	〃	〃	8.80	8.00	5.10	443.4	VI B-8	4125
244	〃	〃	10.80	9.60	7.60	1217.0	VII B-9	1421
245	〃	砂岩	12.40	4.30	2.30	190.1	X D-14	4626
246	〃	凝灰岩	9.00	9.10	4.50	430.5	IX D-4	4554
247	〃	砂岩	6.50	3.50	2.70	109.6	VII D-8	16496
248	〃	凝灰岩	7.10	5.60	5.30	322.2	VII B-10	1438
249	〃	〃	8.70	6.80	4.40	419.0	VI B-1	1200
250	〃	〃	11.80	10.20	4.30	720.0	VI D-1	1965
251	〃	砂岩	9.10	3.30	1.50	69.5	VI B-6	7054
252	〃	凝灰岩	9.90	10.30	4.20	648.7	VII C-16	5157
253	〃	〃	6.20	5.70	13.40	164.7	V B-13	3368
254	〃	砂岩	10.00	7.10	5.30	518.0	IV A-8	3604
255	〃	凝灰岩	7.40	5.70	4.20	270.5	V 1 B-2	4096
256	〃	〃	7.00	6.50	5.20	412.1	VII B-10	1441
257	〃	〃	9.80	6.80	3.70	327.7	V A-25	6964
258	〃	砂岩	8.10	6.50	4.50	295.0	VI C-19	5383
259	〃	凝灰岩	7.80	6.40	5.00	285.3	VI B-19	4227
260	〃	砂岩	12.40	9.50	5.30	893.1	VI D-2	8154
261	〃	凝灰岩	11.50	7.80	4.70	565.6	IX C-16	10号集石埋土一括
262	〃	砂岩	9.10	3.80	3.40	144.6	VII B-13	17963
263	〃	凝灰岩	6.00	4.70	3.30	113.5	XI D-14	2945
264	〃	〃	12.50	9.10	3.70	653.1	VI C-23	11486
265	〃	〃	7.30	5.70	2.80	155.5	XI D-21	4654
266	〃	〃	5.60	7.90	6.40	389.0	IV A-9	10368
267	〃	砂岩	10.50	9.30	3.00	433.8	VI D-12	9585
268	〃	〃	13.70	4.30	3.30	263.0	VI D-8	2424

第三章 調査の成果

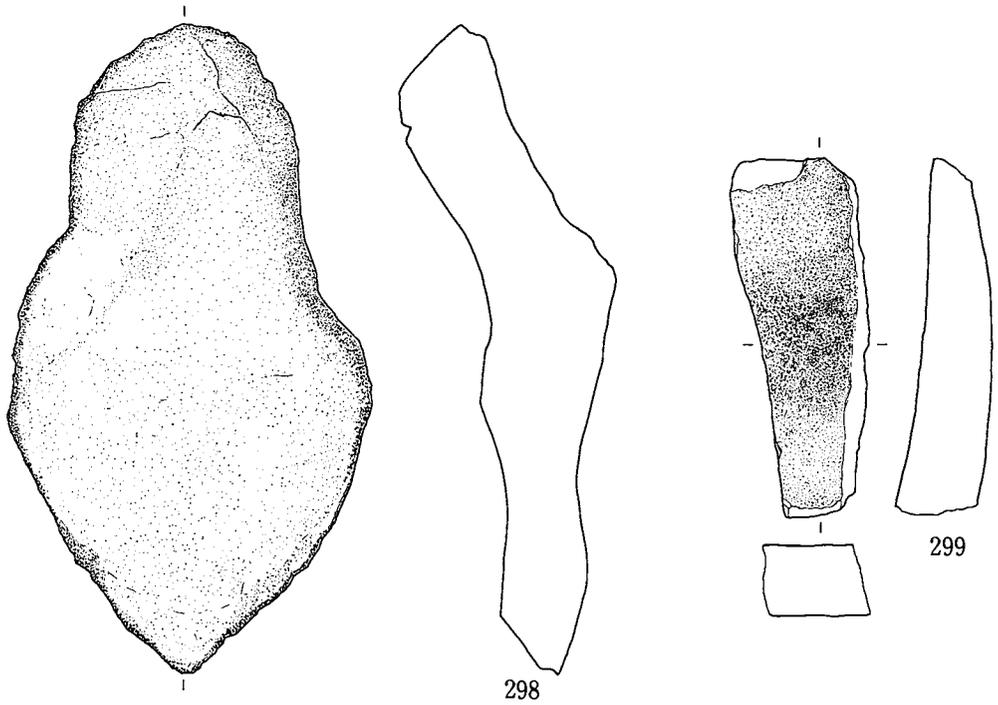
第19表 石器計測表

No	器種	石材	計測値				グリッド	登録番号
			長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
269	磨	石凝灰岩	10.00	8.80	6.00	733.4	VI D-6	5867
270	〃	〃	7.00	6.50	4.00	235.8	VI D-12	9574
271	〃	砂岩	8.70	6.10	4.70	347.6	VI B-8	4122
272	〃	凝灰岩	7.60	7.80	5.20	402.0	V B-14	9856
273	〃	砂岩	5.10	3.80	2.70	76.1	VII B-19	1544
274	〃	凝灰岩	11.40	11.10	3.60	190.1	X D-13	4626
275	〃	砂岩	7.90	6.70	3.60	273.7	VII B-22	1464
276	〃	凝灰岩	7.90	6.70	4.20	282.6	V B-13	6852
277	〃	砂岩	16.60	5.60	3.40	464.9	X D-13	3080
278	〃	凝灰岩	9.50	8.00	4.60	464.3	VI D-7	2302
279	〃	砂岩	12.00	8.40	5.90	890.7	VI C-23	8473
280	〃	〃	13.00	10.40	4.90	865.6	V B-8	6870
281	〃	凝灰岩	12.60	16.20	4.80	1065.6	V B-8	9821
282	〃	砂岩	5.60	4.30	3.60	128.0	IX D-5	4607
283	〃	凝灰岩	7.80	7.80	5.40	479.3	VI D-11	9594
284	〃	〃	9.00	5.60	3.60	253.4	VI A-25	4345
285	〃	〃	10.20	9.70	5.80	745.8	—	一括
286	〃	砂岩	10.70	8.10	5.00	575.9	VI B-13	19号集石埋土一括
287	〃	凝灰岩	8.60	7.00	7.00	719.5	VII D-8	16487
288	〃	砂岩	8.20	6.90	4.70	363.9	V A-17	6572
289	〃	凝灰岩	9.50	7.80	5.10	481.5	V A-25	111
290	〃	〃	5.00	4.70	2.70	90.3	VI D-6	9395
291	〃	砂岩	9.80	8.10	4.10	51.0	VI D-4	8614
292	〃	〃	7.30	3.20	1.70	44.3	VI D-7	9422
293	〃	〃	7.10	6.20	4.00	245.8	V B-13	12416
294	〃	〃	9.00	7.40	4.00	414.4	V B-7	300
295	〃	凝灰岩	6.30	5.50	5.00	262.0	—	一括
296	〃	砂岩	6.90	5.50	4.40	279.1	V B-24	736
297	〃	〃	18.50	4.40	3.40	383.8	V B-10	8982

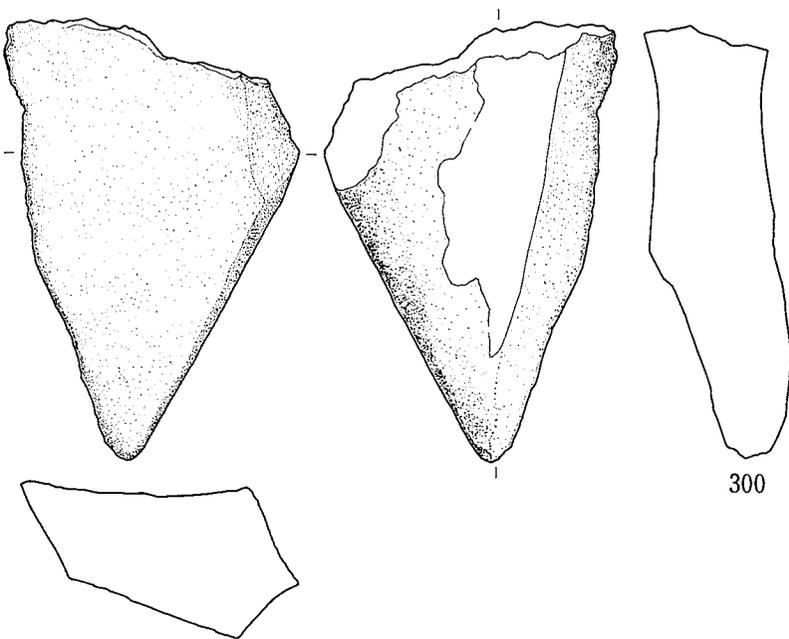
3類に属する石器は、その平面や断面の形状が不整形のもので、その形状には不整の三角形や四角形、不定形があり大きさに対して厚さがある。これらの石器は、その敲打痕の部位によって、縁辺の全域に敲打痕が観察されるもの(233、239、244、248、249、255、257、260、261、274、285、291、293、295)、縁辺の一部と表裏面に観察されるもの(240、242、253、276、284、296)、縁辺の一部に観察されるもの(250、252、287、290)に分けられる。



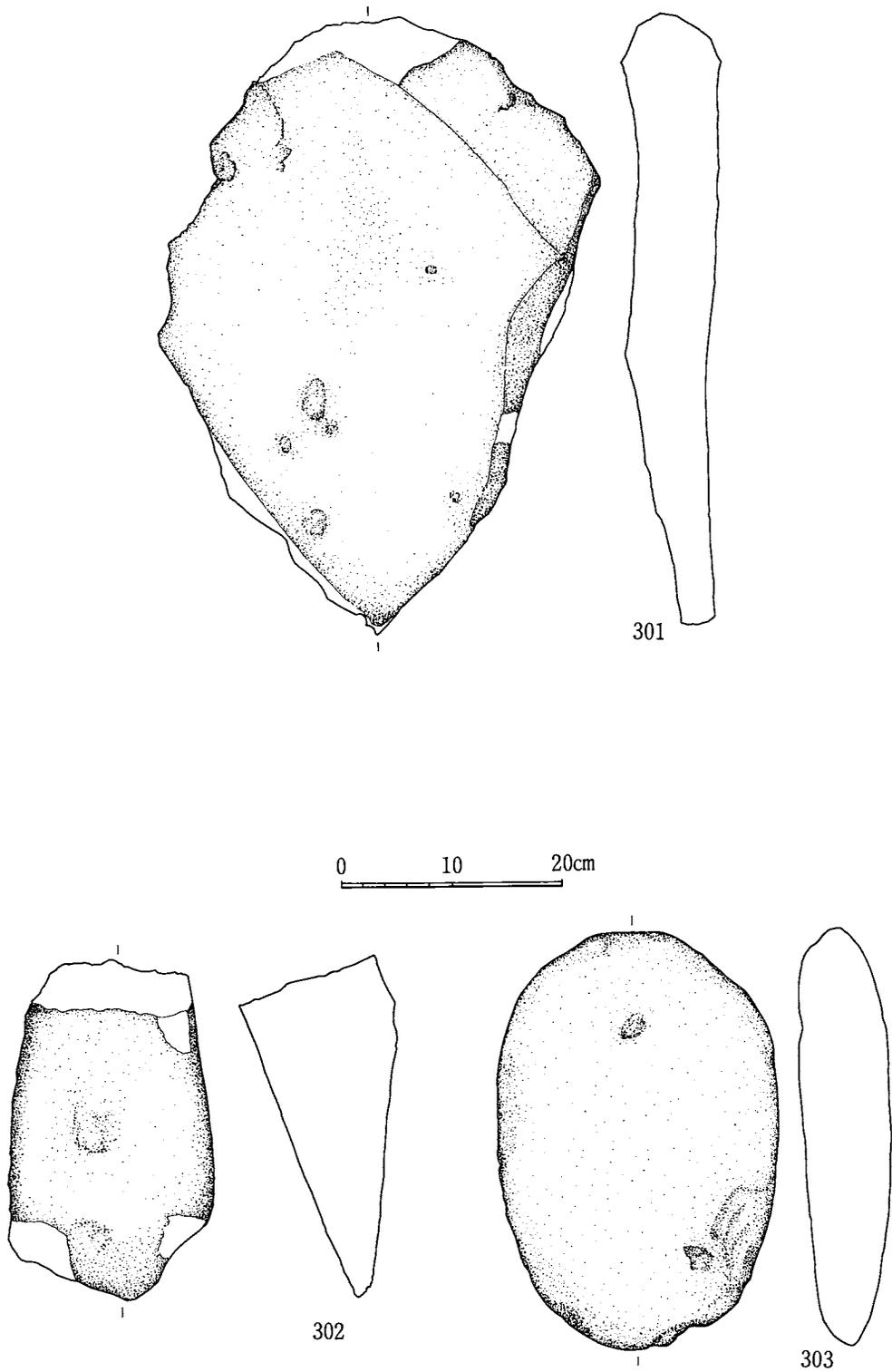
第95図 遺物分布図(石皿・台石)



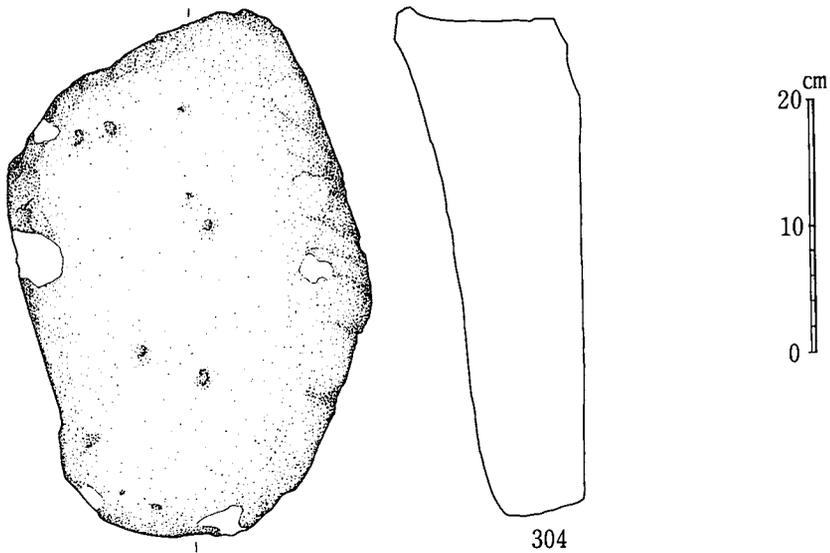
0 10 20cm



第96図 石器実測図



第97図 石器実測図



第98図 石器実測図

第4類 (236、245、247、251、262、268、273、277、292、297)

4類に属する磨石・敲石は、その形状が棒状(245、247、251、262、292、297)、直方体(236、268)を一括している。この類に属する資料は、敲打痕の部位によって両端にみられるもの(245、251、262、277)、一端にみられるもの(236、247、268、273、292、297)がある。

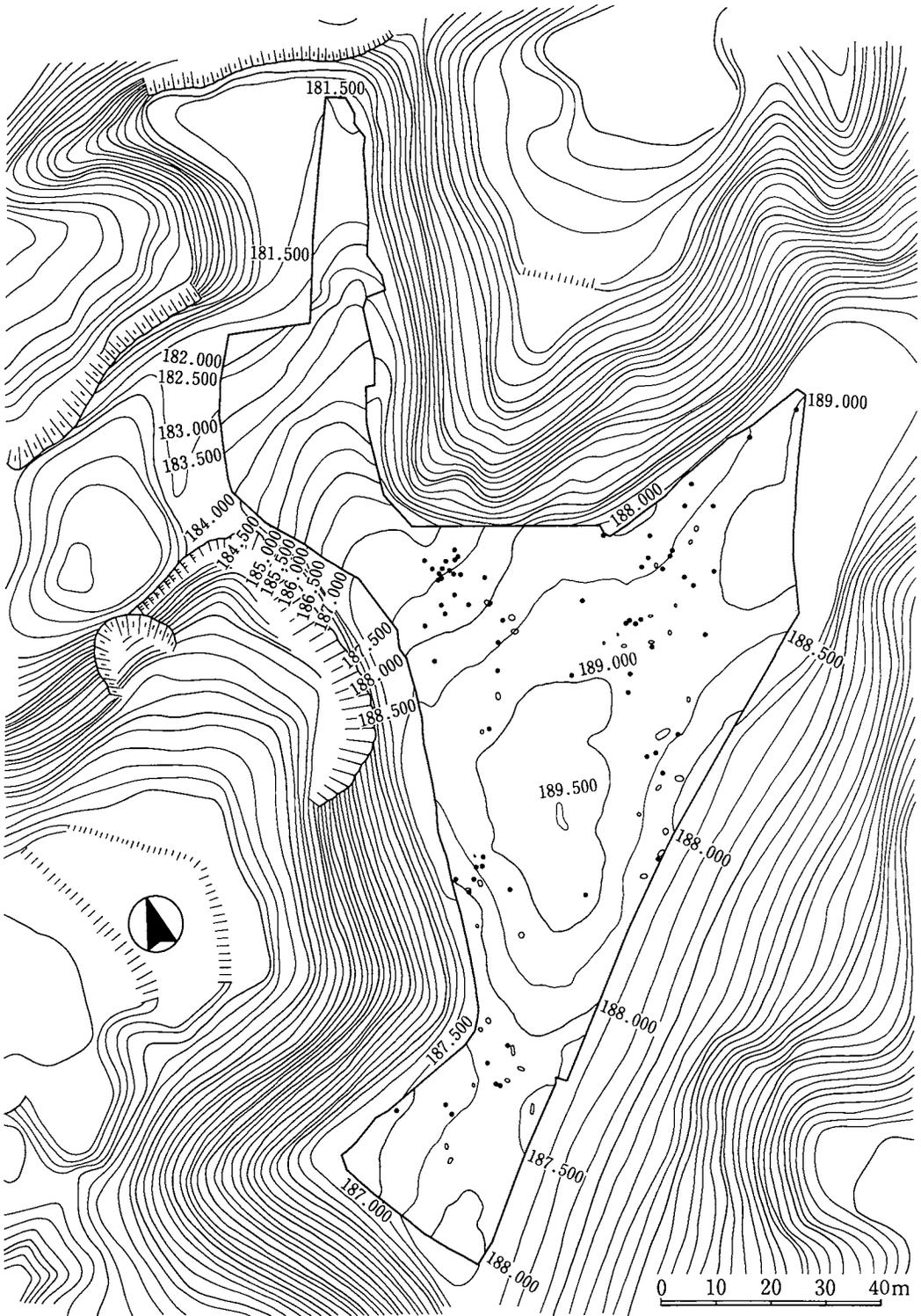
これらの全資料は、すべて表裏面に磨痕が観察される。

石皿・台石(第96図298～第98図304)

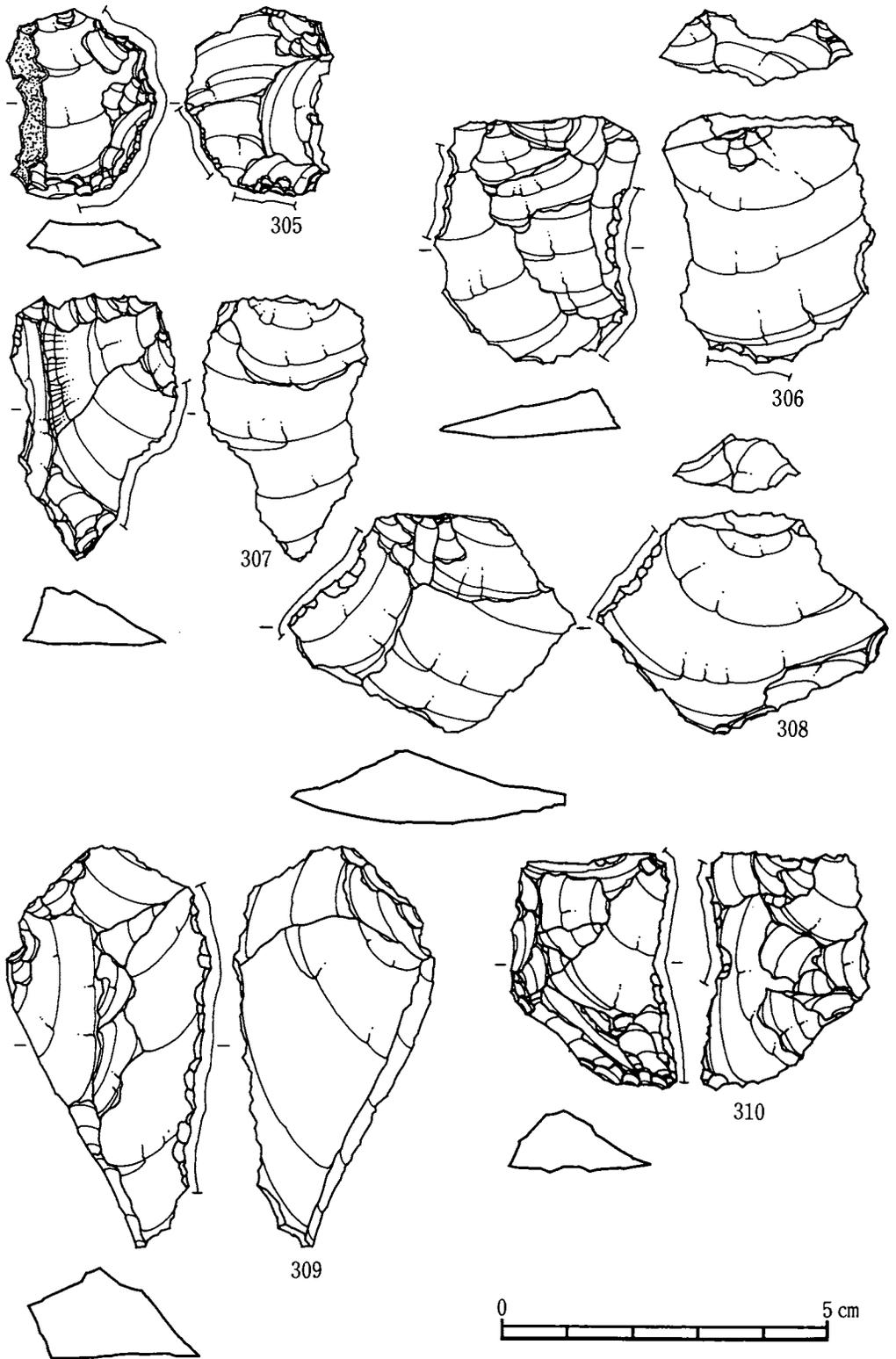
石皿・台石は、281点出土した。その石器組成に占める割合は、26.64%である。また石材で砂岩58点、凝灰岩223点である(第6表)。石器の分布は、磨石・敲石のあり方とほぼ類似しているが、東・南側斜面部での出土量がきわめて少ない点が異なる。また、石皿・台石と磨石・敲石との数量関係は、1:1.65の割合であり、単純には磨石・敲石が1～2個に対して、石皿・台石が1個という関係にある。このことは狸谷遺跡の3:1と、やや違う点である。

以下、石器ごとに説明を加えていく。

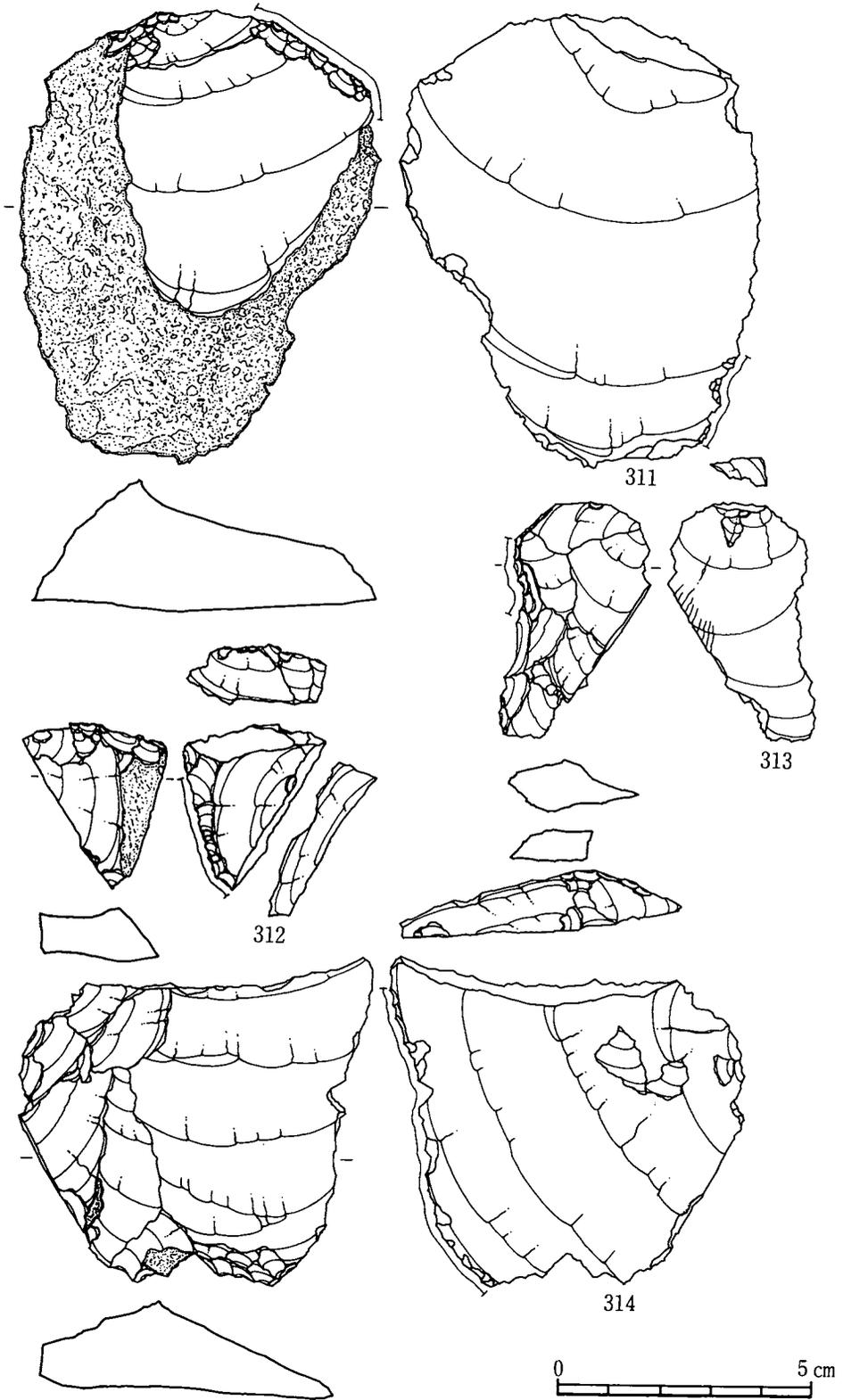
298は、加久藤溶結凝灰岩製台石で北東側谷部から出土した。重量は、0.8kgである。作業面は1面で、礫の窪みを利用している。299は、砂岩製の石皿で重量は、0.3kgである。作業面は1面で浅い窪みをもっている。300は、加久藤溶結凝灰岩製台石で、重量は1.5kgである。作業面は1面で、浅い窪みをもっている。301は、加久藤溶結凝灰岩製台石で重量は、1.85kgである。作業面は表裏両面とも浅い窪みが観察される。302は、加久藤溶結凝灰岩製台石で、重量は0.9kgである。作業面は、1面で中央部に敲打痕が観察される。303は、加久藤溶結凝灰岩製



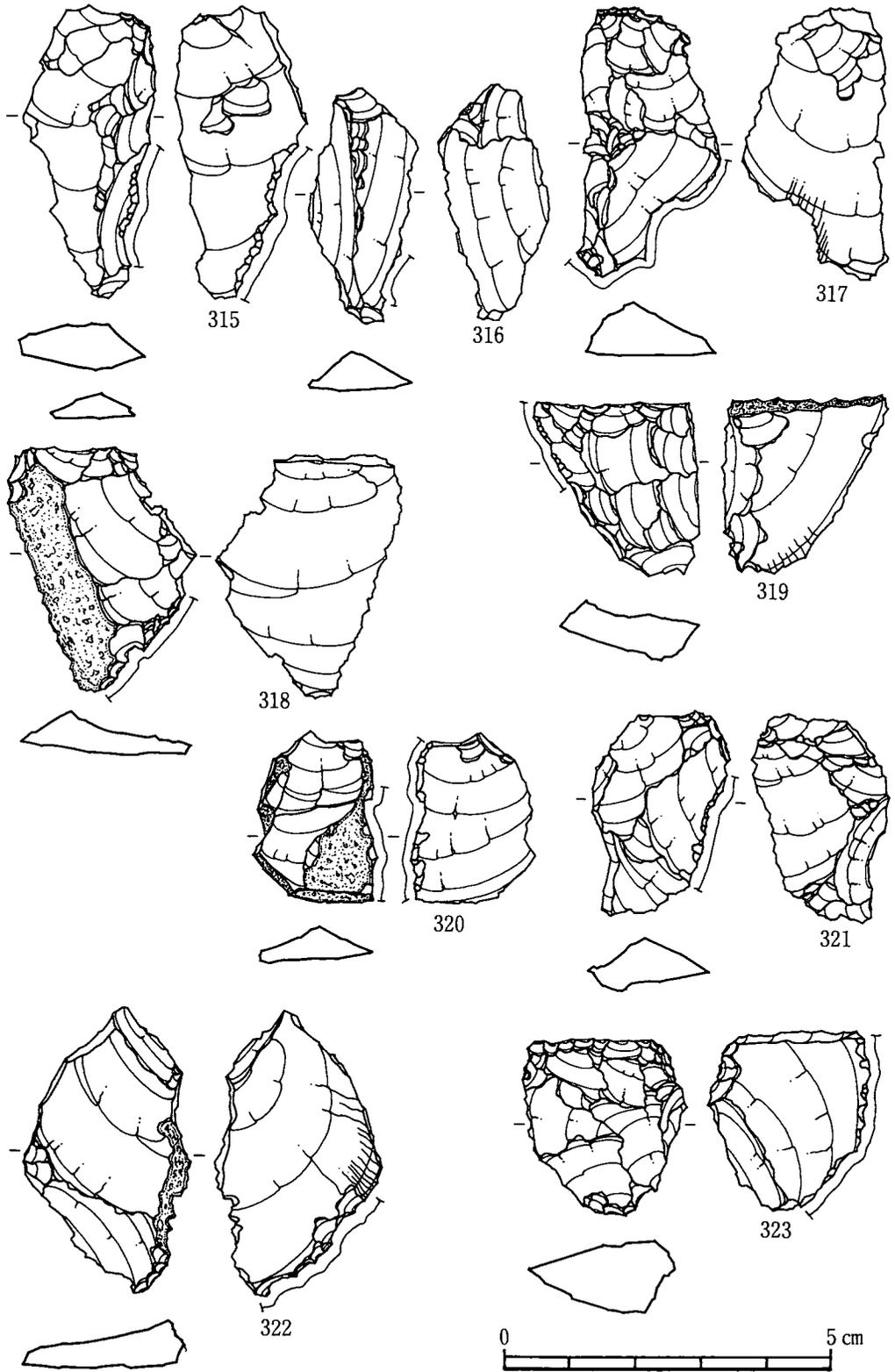
第99図 遺物分布図(使用痕ある剥片)



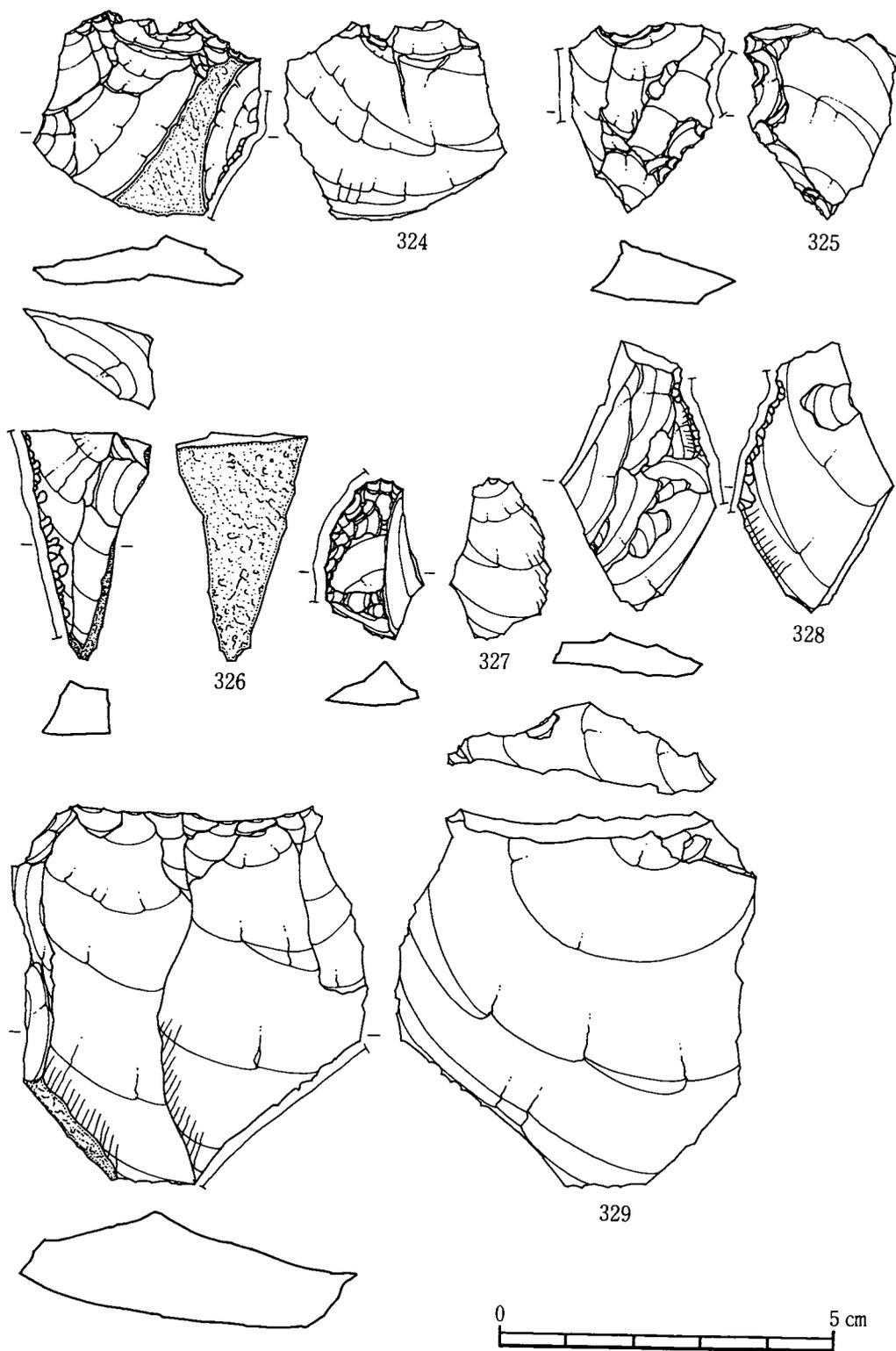
第100図 石器実測図



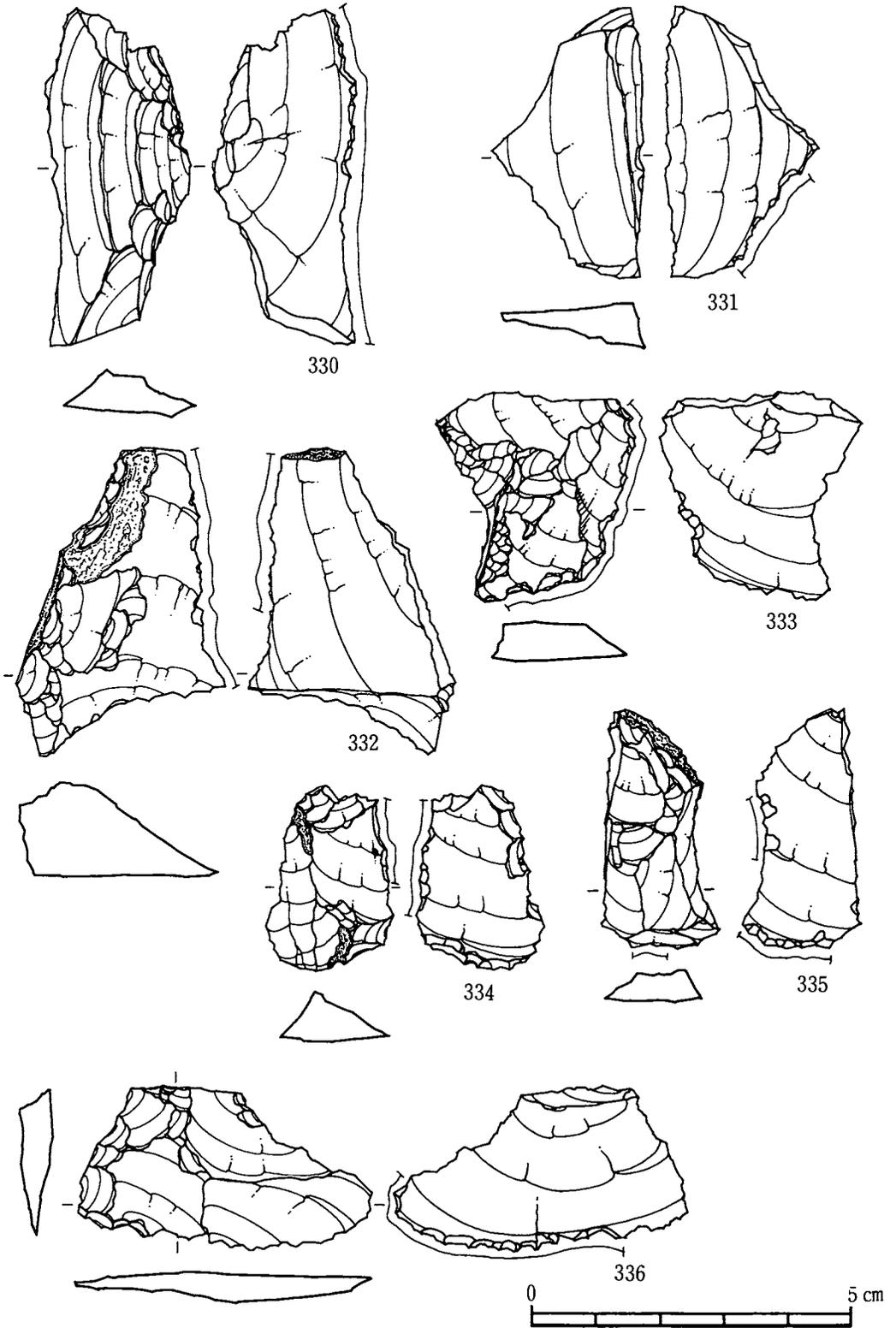
第101図 石器実測図



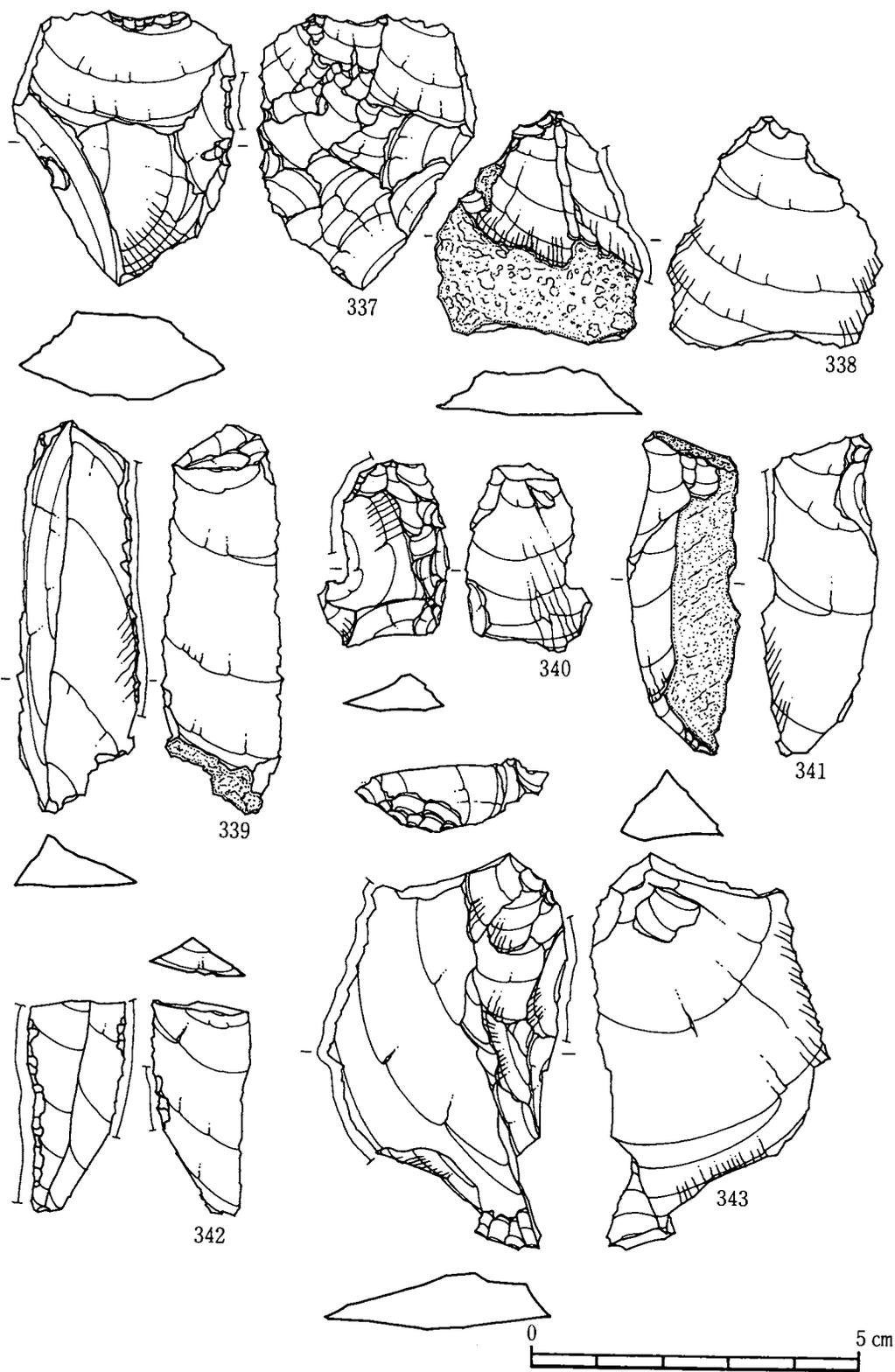
第102図 石器実測図



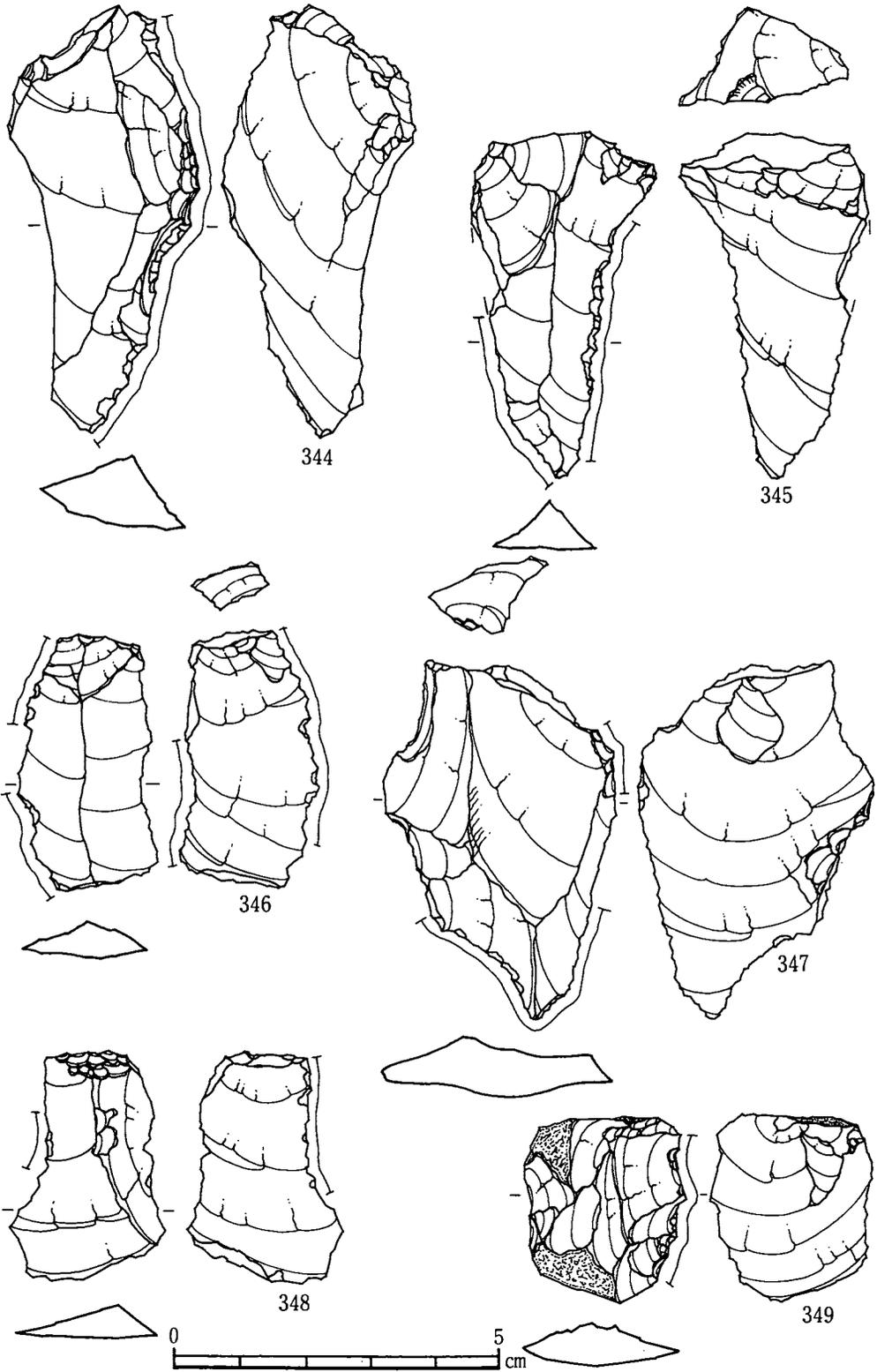
第103図 石器実測図



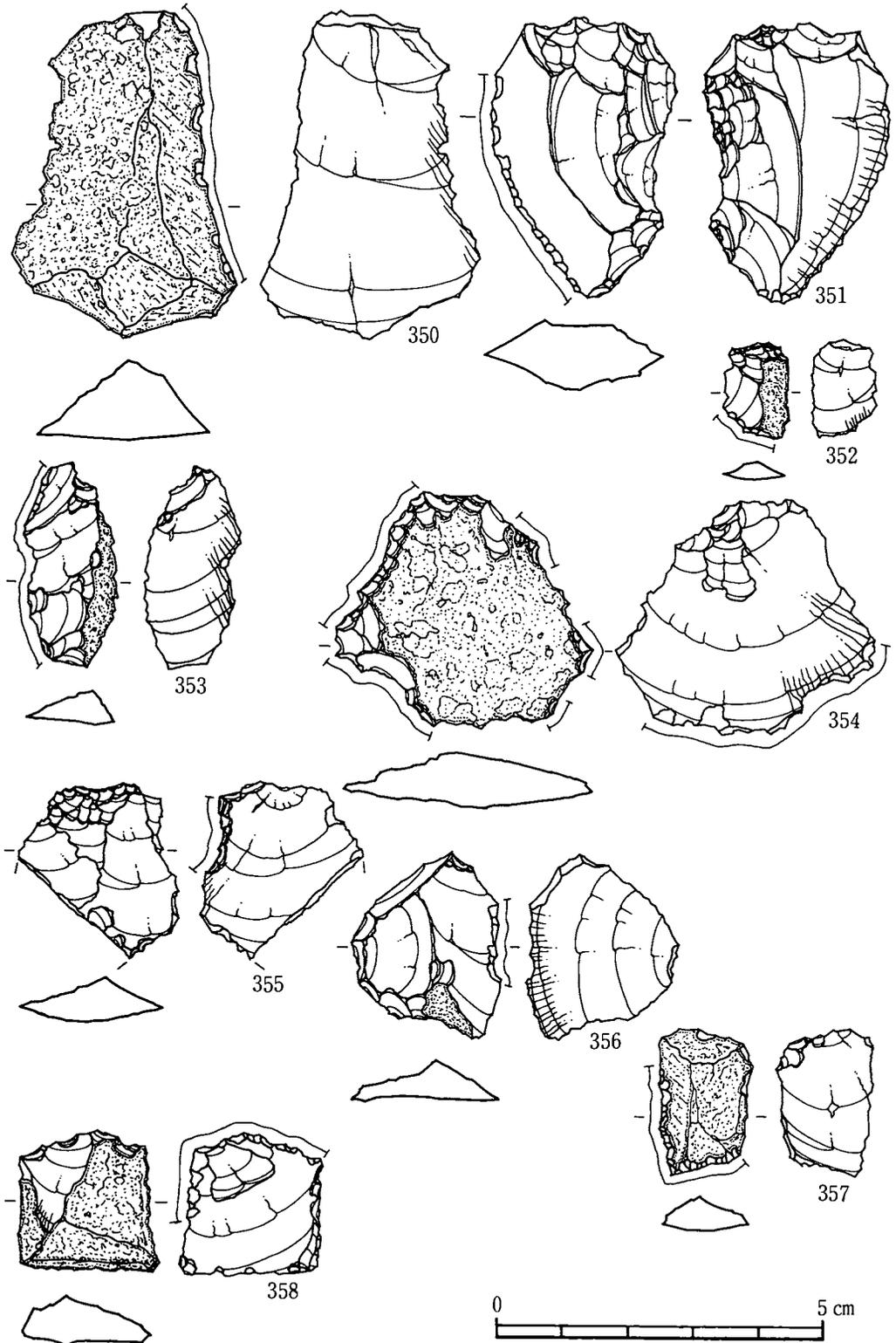
第104図 石器実測図



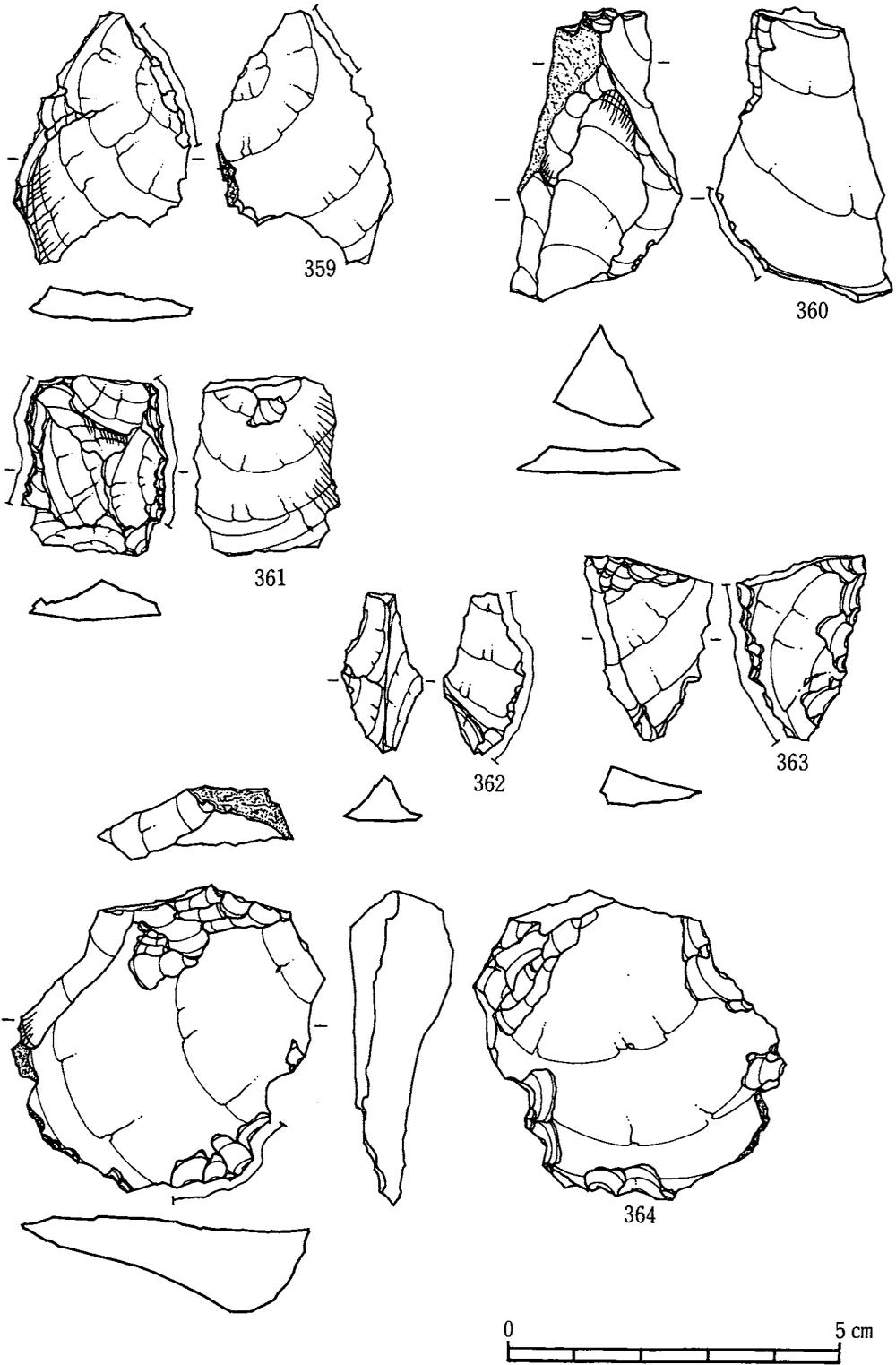
第105図 石器実測図



第106図 石器実測図



第107図 石器実測図



第108図 石器実測図

第3節 縄文時代早期の遺構と遺物

第20表 石器計測表

No	器種	石材	計測値				グリッド	登録番号
			長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
305	使用痕ある剥片	黒耀石	2.81	2.02	0.64	4.04	IV B-1	125
306	〃	珪岩	3.61	3.04	0.60	9.53	V D-15	6195
307	〃	〃	3.92	2.55	0.80	6.67	V D-9	10496
308	〃	〃	3.29	4.48	1.08	14.42	V D-15	7868
309	〃	〃	5.95	3.18	1.31	19.20	VI D-17	11310
310	〃	〃	3.49	2.21	0.85	8.79	VI D-14	11670
311	〃	黒耀石	8.82	7.03	2.47	153.35	VI B-17	1106
312	〃	珪岩	3.25	2.88	1.05	7.86	V A-25	9947
313	〃	〃	4.60	2.70	0.91	8.98	VI C-24	5339
314	〃	黒耀石	6.45	6.60	1.68	58.54	VI B-20	7498
315	〃	珪岩	4.39	2.00	0.70	—	V D-14	17010
316	〃	黒耀石	3.57	1.58	0.58	2.57	X D-24	3114
317	〃	〃	4.05	2.05	0.78	6.08	V D-5	6085
318	〃	〃	3.65	2.55	0.41	5.12	VII D-3	16378
319	〃	〃	2.65	2.50	0.56	3.81	VII D-9	16293
320	〃	〃	2.58	1.97	0.48	2.15	IV A-7	6504
321	〃	〃	3.00	2.00	0.67	2.96	V D-10	7686
322	〃	〃	4.31	2.59	0.55	5.66	VI B-17	14495
323	〃	〃	2.65	2.45	0.95	4.73	VII B-17	4428
324	〃	安山岩	3.10	3.35	0.60	5.18	VI B-3	14396
325	〃	珪岩	2.80	2.31	0.73	4.76	VI B-17	7314
326	〃	〃	3.41	1.93	1.12	5.25	VI D-12	8235
327	〃	黒耀石	2.41	1.50	0.68	1.62	VI C-9	1230
328	〃	〃	4.05	2.31	0.57	3.78	VI D-1	8009
329	〃	安山岩	5.68	5.35	1.54	42.44	X C-23	3039
330	〃	〃	5.14	2.42	0.60	7.18	VII D-3	16371
331	〃	珪岩	4.17	2.36	0.61	7.56	X D-9	3065
332	〃	黒耀石	2.85	2.05	0.75	4.34	X D-14	3074
333	〃	〃	3.20	3.20	0.55	6.38	V B-5	6983
334	〃	〃	3.45	3.20	0.60	4.18	VI C-1	3716
335	〃	〃	3.65	1.85	0.40	4.20	V B-9	6697
336	〃	珪岩	2.35	4.65	0.41	6.40	V B-14	874
337	〃	黒耀石	4.15	3.40	1.22	14.05	VI C-16	7234
338	〃	〃	3.45	3.20	0.65	7.29	VII D-9	16786
339	〃	〃	5.90	1.85	0.78	11.64	VI B-17	3809
340	〃	〃	2.79	1.93	0.52	—	VII B-14	17535
341	〃	珪岩	4.89	1.21	1.03	7.49	V D-15	13951

第三章 調査の成果

第21表 石器計測表

No	器種	石材	計測値				グリッド	登録番号
			長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
342	使用痕ある剥片	安山岩	3.20	1.51	0.50	2.21	VB-9	949
343	〃	珪岩	6.01	3.65	0.80	—	VD-15	14000
344	〃	〃	6.45	2.78	1.00	16.36	VI B-13	1294
345	〃	〃	5.15	2.80	0.70	11.14	VII D-2	2773
346	〃	〃	3.85	1.90	0.55	4.38	VD-15	15707
347	〃	〃	5.40	3.07	0.95	12.66	VID-11	5961
348	〃	黒耀石	4.75	2.28	1.40	12.98	VI B-19	12865
349	〃	黒耀石	2.30	2.45	0.55	4.55	IV A-19	6563
350	〃	〃	4.89	3.28	1.20	15.31	VB-13	12308
351	〃	安山岩	4.26	2.85	0.95	11.90	VID-6	9244
352	〃	黒耀石	1.47	0.93	0.25	0.38	VII B-13	17981
353	〃	〃	3.06	1.30	0.49	1.55	VB-15	14199
354	〃	〃	3.55	3.95	0.77	10.52	VIC-23	5297
355	〃	〃	5.15	2.15	0.60	3.35	VI A-17	13428
356	〃	珪岩	2.85	2.25	0.55	2.98	VII C-24	16967
357	〃	黒耀石	2.20	1.45	0.51	1.82	VB-23	695
358	〃	〃	2.18	2.15	0.72	3.29	VII C-4	1518
359	〃	〃	3.72	2.48	1.65	3.86	VB-20	7093
360	〃	珪岩	4.30	2.46	1.43	8.88	XC-23	3046
361	〃	黒耀石	2.60	2.05	0.55	3.28	VD-19	2540
362	〃	〃	2.34	1.21	0.65	0.99	VID-6	11012
363	〃	珪岩	2.75	1.85	—	—	VII D-3	4946
364	〃	〃	4.45	4.50	1.49	18.28	VI B-21	3930

台石で、重量は1.25kgである。作業面は、1面で敲打痕が観察される。304は、加久藤溶結凝灰岩製台石で、重量は1.65kgである。作業面は、1面で浅い窪みをもっている。

使用痕ある剥片 (第100図305～第108図364)

使用痕ある剥片は、74点出土した。その石器組成に占める割合は、7.01%である。また石材別の内訳は、黒耀石35点、珪岩30点、安山岩8点、砂岩1点である。

石器の分布は、北側凹部31点、北東側谷部29点、東側斜面部3点、西側斜面部3点、南側斜面部8点である。

これらの資料の中、裏面に素材剥片の形状を残さず、一部に平坦剝離を施している資料もみられる (310、337)。

以下、資料ごとに説明を加えていきたい。

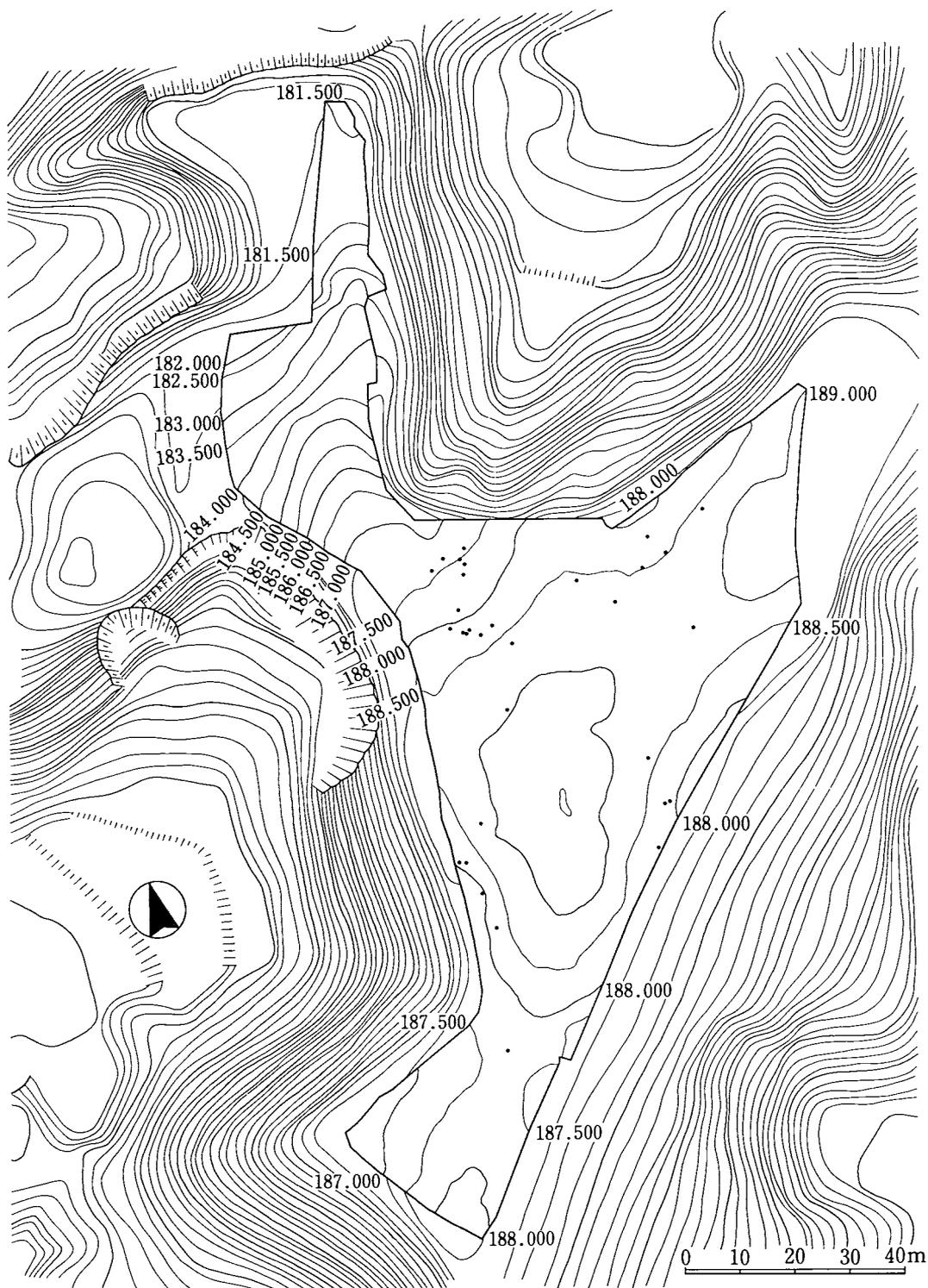
305は、縦長剥片である。右側縁に、表裏両面から微細な刃こぼれ状の剥離が観察される。表面には、礫面を残し右側縁には二次加工も観察される。306は、縦長剥片である。表面の左右側縁と裏面側の打点と対向する縁辺に刃こぼれ状の剥離が観察される。307は、縦長剥片の表面右側縁に使用痕を観察される。308は、やや幅広の縦長剥片であり、先端部を欠損している。表面右側縁、及び右側縁裏面側に微細な刃こぼれ状の剥離が観察される。309は、打点部が左上部におく剥片である。表面側右側縁に微細な刃こぼれ状の剥離が観察される。310は、横広の剥片である。裏面側には、平坦剥離を施す。右側縁に表裏両面から微細な刃こぼれ状の剥離が観察される。311は、黒耀石原石の礫面を大きく残す、やや幅広の縦長剥片である。表面の右側縁部と、左側縁の裏面側に微細な剥離が観察される。312は、横長剥片であり、表面に礫面をもつ。右側縁の裏面側に使用痕が観察される。313は、縦長剥片である。打面は、単打面である。側縁部に微細な剥離が観察される。314は、横広の剥片である。この剥片の一边は切断されてる。打点部と対向する縁辺の裏面側に使用痕が観察される。315は、縦長剥片で表面の右側縁に刃こぼれが観察される。316は、横長剥片で表面右側縁に使用痕が観察される。317は、縦長剥片で表面右側縁先端部より、使用痕が観察される。318は、表面に礫面を残す幅広の縦長剥片である。右側縁先端部より微細な剥離が観察される。319は、打面部は礫面、幅の広い剥片の左側縁上部に微細な刃こぼれが観察される。320は縦長剥片で、表面に礫面を残す。右側縁の表裏両面に微細な剥離が観察される。321は、縦長剥片で打点部側は削除されている。右側縁に微細な刃こぼれが観察される。322は、幅広の縦長剥片で打点部と対向する縁辺に、刃こぼれが観察される。323は、横広の剥片の一边に使用痕が観察される。324は、横広の剥片で表面に礫面を残す。右側縁に刃こぼれが観察される。325は、幅広の剥片の左右両側縁に使用痕が観察される。326は、礫面を残す縦長剥片の一边に微細な刃こぼれが観察される。327は表面に細かい剥離痕がみられる縦長剥片で、作業面整理剥片と考えられる。その表面の左側縁に、使用痕が観察される。328は、幅広の剥片の右側縁の表裏両面に微細な刃こぼれ状の使用痕が観察される。329は、幅広の大型剥片である。右側縁の表面に、使用痕が観察される。330、331は、横長剥片である。打面は、単打面である。打点部と対向する縁辺に微細な刃こぼれが観察される。332は縦長剥片の、右側縁に表裏両面とも微細な刃こぼれ状の使用痕が観察される。333は、幅広の縦長剥片である。表面右側縁に、刃こぼれ状の使用痕が観察される。334は、縦長剥片の左側縁に表裏両面とも微細な刃こぼれ状の使用痕が観察される。335は、礫面を打面とする縦長剥片である。使用痕は、右側縁の裏面側と打点部と対向する縁辺に微細な刃こぼれ状の剥離面として観察される。336は横長剥片であり、単剥離面を打面とする。打点部と対向する縁辺に微細な刃こぼれ状の剥離が観察される。337は、裏面側に平坦剥離がみられ本来の剥片の形状は不明である。使用痕は、表面右側縁に観察される。338は、表面に礫面を残す幅広の剥片である。表面右側縁に、使用痕が観察される。339は、縦長剥片

の表面右側縁に微細な刃ぼれ状の使用痕が観察される。340は、表面に細かい剝離痕がみられる縦長剥片で、作業面整理剥片と考えられる。使用痕は、表面左側縁上部に観察される。341は、表面に大きく礫面を残す、縦長剥片である。使用痕は、右側縁の裏面側に観察される。342は、縦長剥片である。その両側縁に、表裏両面とも刃こぼれ状の剝離が観察される。343は、幅広の縦長剥片である。使用痕は、表面の左右両側縁に観察される。344は、複剝離面を打面とする、縦長剥片である。使用痕は、表面の右側縁に微細な刃こぼれ状の剝離として観察される。345は、単剝離打面の縦長剥片である。使用痕は、表面の左右両側縁に観察される。346は、単剝離面を打面とする縦長剥片で、先端部を欠失している。使用痕は、左右両側縁とも観察され、右側縁では裏面側に左側縁では表裏両面に観察される。347は、幅広の縦長剥片である。打面は、単剝離面である。使用痕は、表面側の右側上部と先端部から左側縁にかけて観察される。348は、横長剥片で右側を切断されている。使用痕は、打点部と対向する縁辺に表裏両面とも観察される。349は、幅広の縦長剥片である。打面は、礫面である。使用痕は、表面右側縁に微細な刃こぼれ状の剝離として観察される。350は、表面全面に礫面を残す、縦長剥片である。使用痕は、その表面右側縁に微細な刃こぼれ状の剝離として観察される。351は、裏面側の打点部に大小の剝離痕がみられ、剥片本来の形状は不明である。使用痕は、表面左側縁に観察される。352は、表面に礫面を残す、縦長剥片である。剥片としては、小型である。使用痕は、打点部と対向する縁辺に微細な刃こぼれ状の剝離として観察される。353は、表面に礫面を残す縦長剥片である。使用痕は、表面の左側縁に観察される。354は、複剝離打面の幅広の剥片であり、表面に礫面を大きく残す。使用痕は、表裏両面ともみられる。表面では、ほぼ全周に刃こぼれ状の剝離が観察される。355は、縦長剥片で、先端部を欠失している。使用痕は、右側縁の裏面側に微細な刃こぼれ状の剝離として観察される。356は、幅広の剥片の、打点部と対向する縁辺表面側に使用痕が観察される。357は、表面に大きく礫面を残す縦長剥片である。その表面左側縁から打点部と対向する縁辺にかけて、微細な刃こぼれ状の使用痕が観察される。358は、幅広の剥片の裏面側に使用痕が観察され。その部位は、右側縁から打面部にかけて微細な刃こぼれ状の剝離として観察できた。359は、点状打面の幅広の縦長剥片である。使用痕は、表面の打点部周辺と左側縁の裏面側に観察される。360は、縦長剥片の右側縁裏面側に使用痕が観察される。また、打点部と対向する縁辺にわずかに折れが観察される。361は、縦長剥片である。使用痕は、その右側縁表面側に微細な刃ぼれ状の剝離として観察される。362は、小型の縦長剥片である。使用痕は、左側縁の裏面側に観察される。363は、幅広の剥片で右側縁の裏面側に微細な刃こぼれ状の剝離として観察される。364は、摂理面を打面とする幅広の剥片である。使用痕は、打点部と対向する縁辺の表面側に観察される。

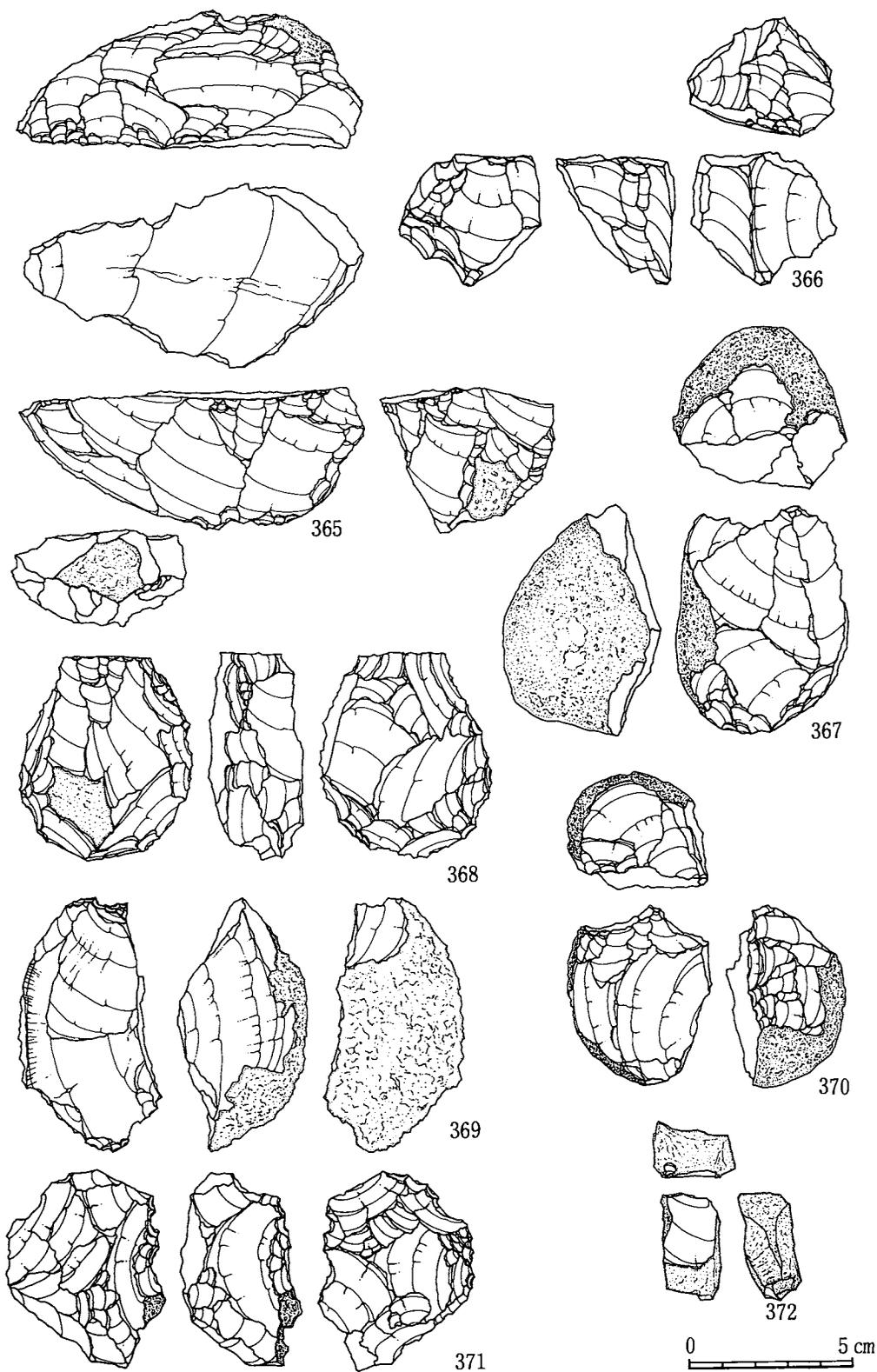
石核（第110図365～第114図390）

石核・原石は、全部で142点検出された。その全出土資料に占める割合は、1.74%である。

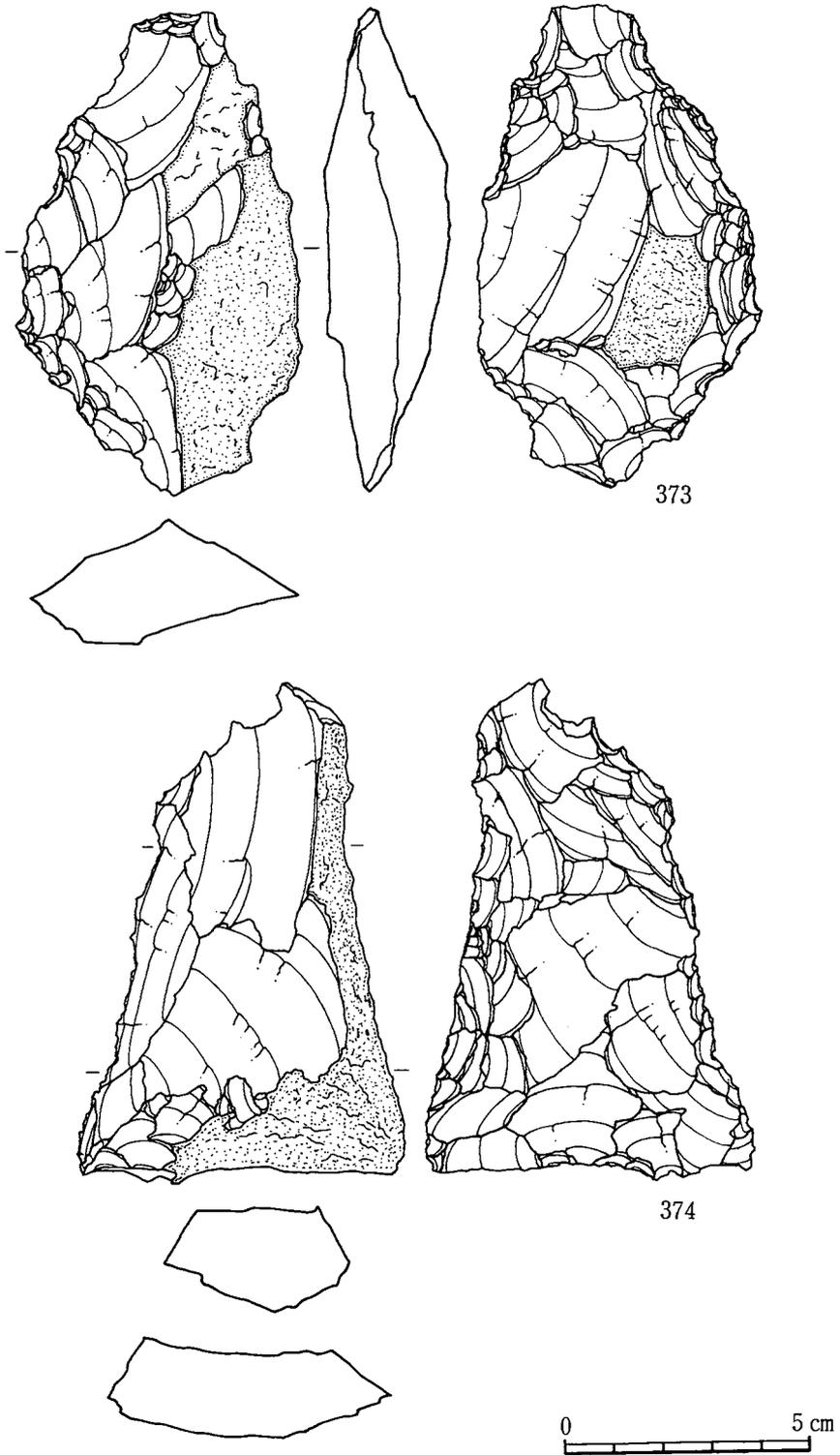
第3節 縄文時代早期の遺構と遺物



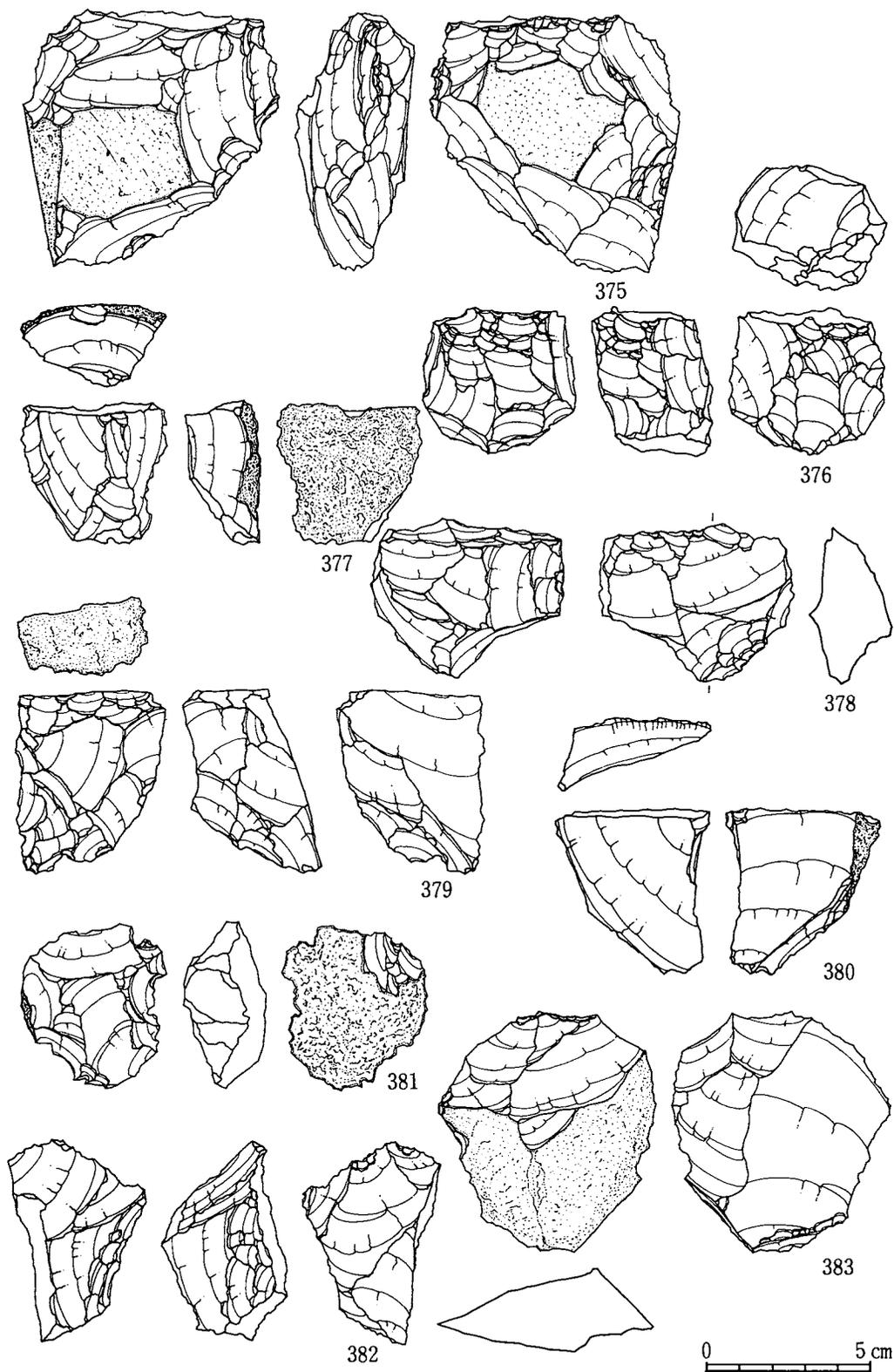
第109図 遺物分布図(石核)



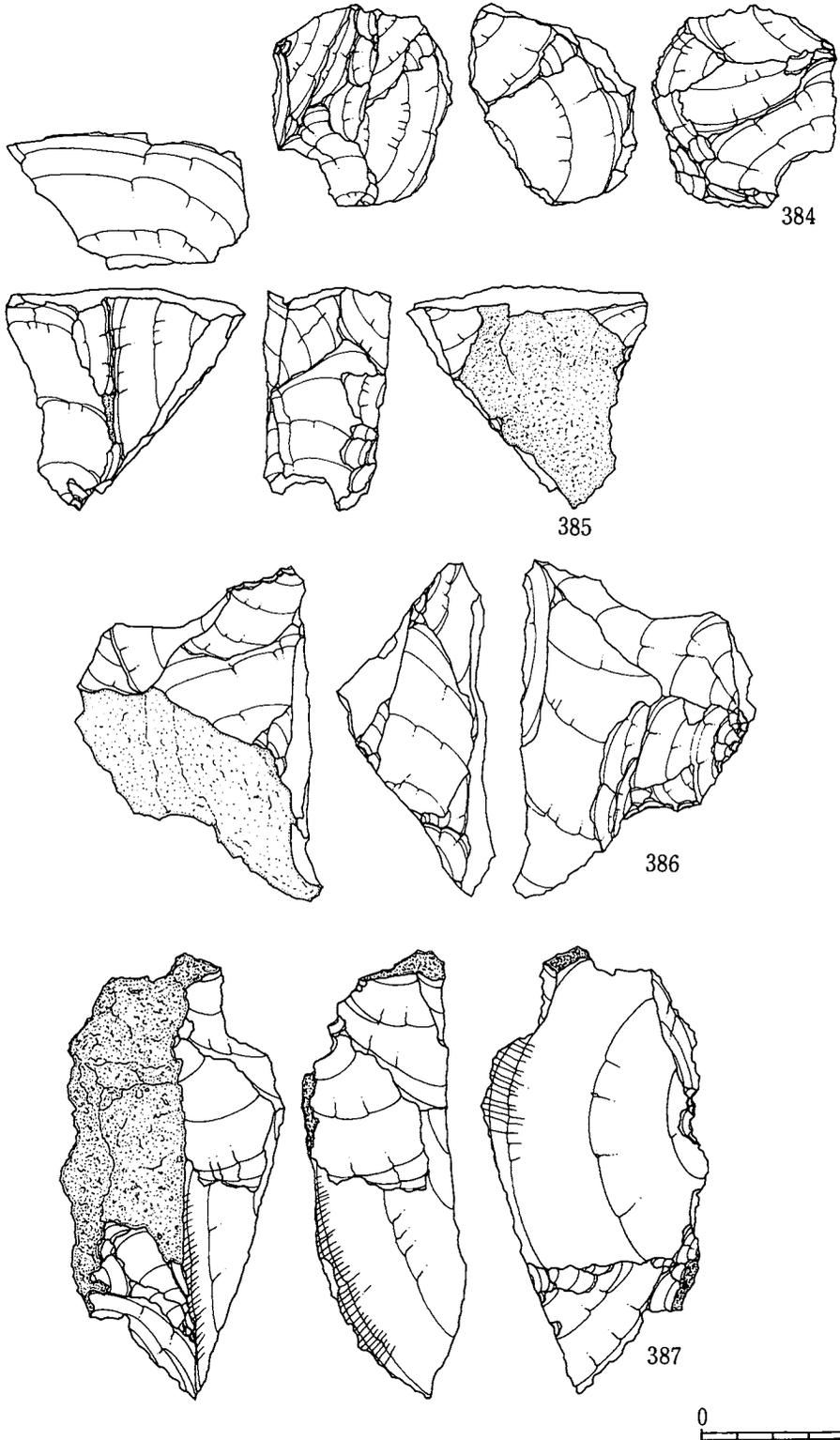
第110図 石器実測図



第111図 石器実測図



第112図 石器実測図



第113図 石器実測図

石材別の内訳は、黒耀石84点、珪岩47点、安山岩9点、その他2点である（第6表）。また石核の分布は、北側凹部71点、北東側谷部36点、東側斜面部16点、西側斜面部17点、南側斜面部2点である。出土した石核は、その剥片剥離の状態によって、第1類～第3類に細分される。以下それぞれの類別に説明を加えていきたい。

第1類 (368, 371, 373～376, 381, 390)

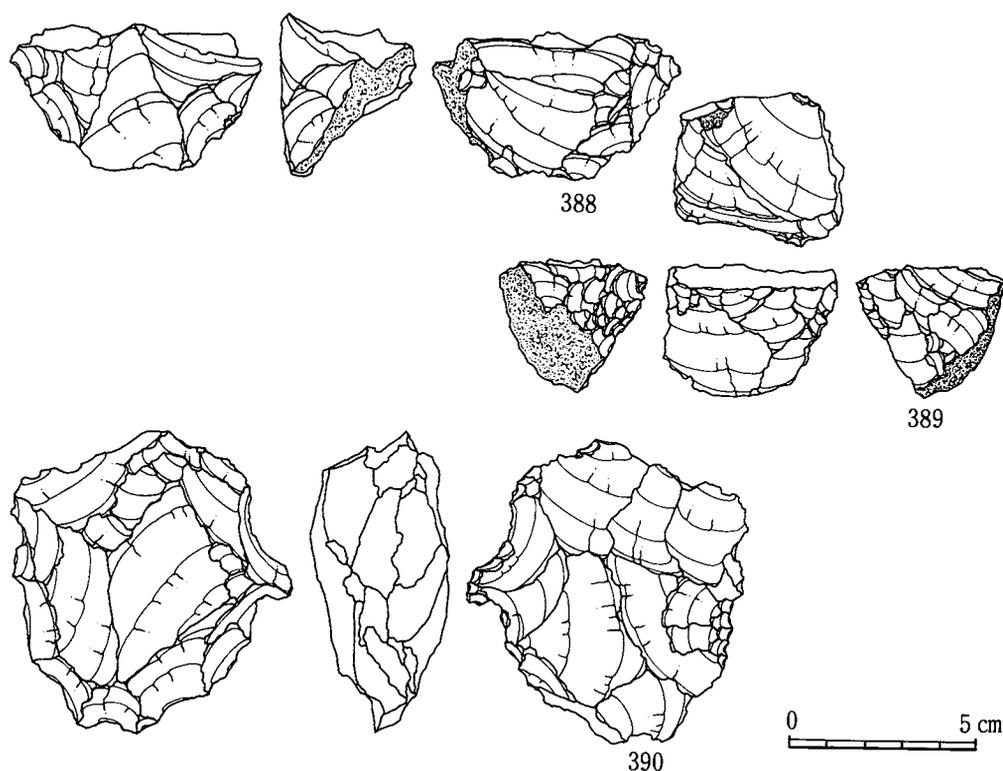
1類の石核は、剥片や分割礫素材の扁平な石核である。白鳥平A遺跡出土の石核では、もっとも検出量が多い。打面を縁辺に沿って頻りに転移するため、剥片剥離面には求心的な剥離痕がみられる。石材では、黒耀石3点、珪岩5点である。

第2類 (367, 369, 370, 372, 377, 389)

2類の石核は、円礫が素材となるものである。367は、打面が石核の一端にあり、打面転移は行わない。下端には、両極打法による小剥離が観察される。369は、分割礫素材で剥離面を打面として交互に剥離作業を行う。石材では、図示した6点すべてが黒耀石製である。

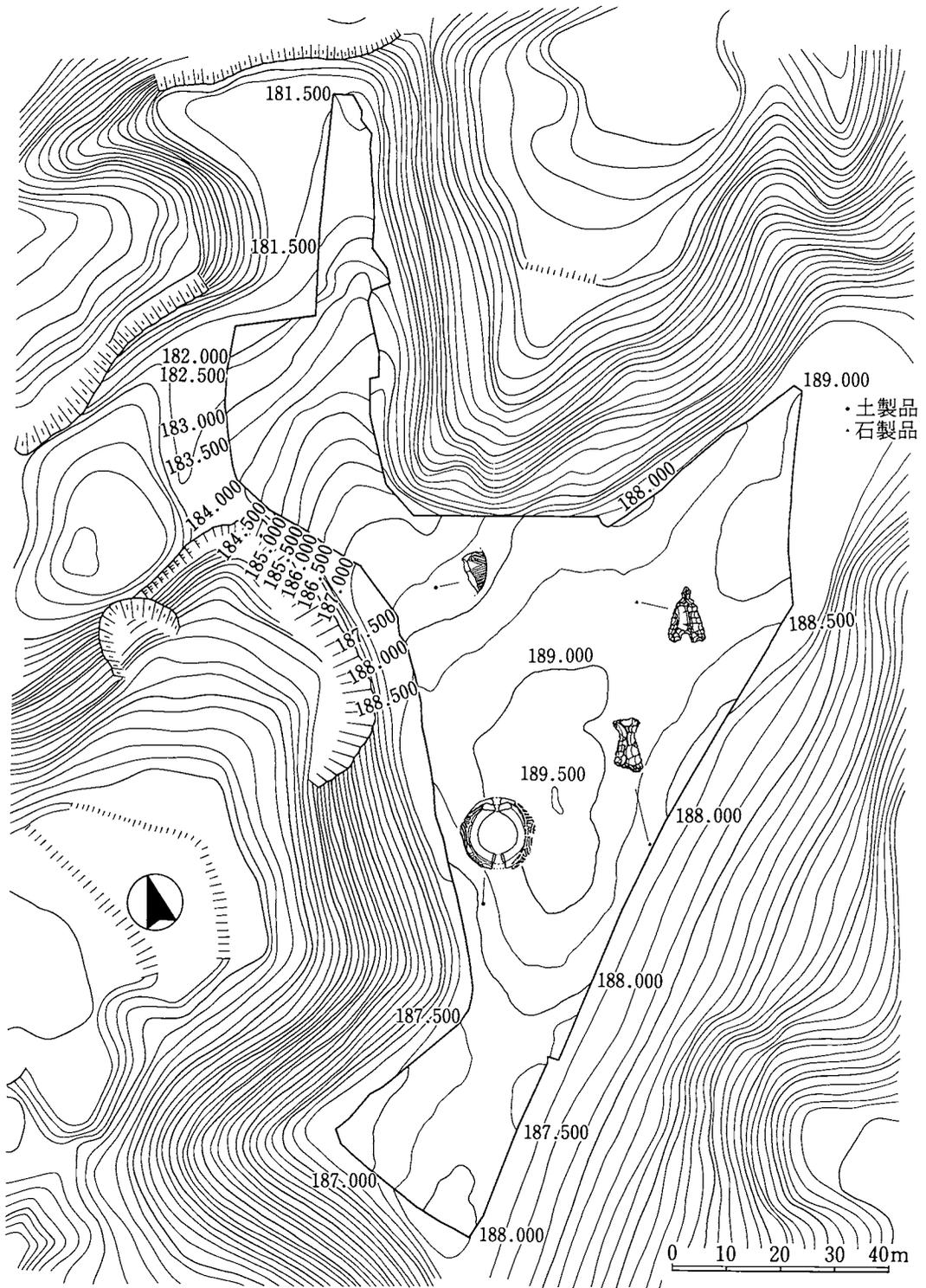
第3類 (365, 366, 378～380, 382～388)

1、2類に当てはまらないものを、一括して3類とした。365は、黒耀石製の分割礫素材の石核である。分割面を打面とし、剥片剥離作業を行っている。366は、珪岩製の石核で剥片剥



第114図 石器実測図

第3節 縄文時代早期の遺構と遺物



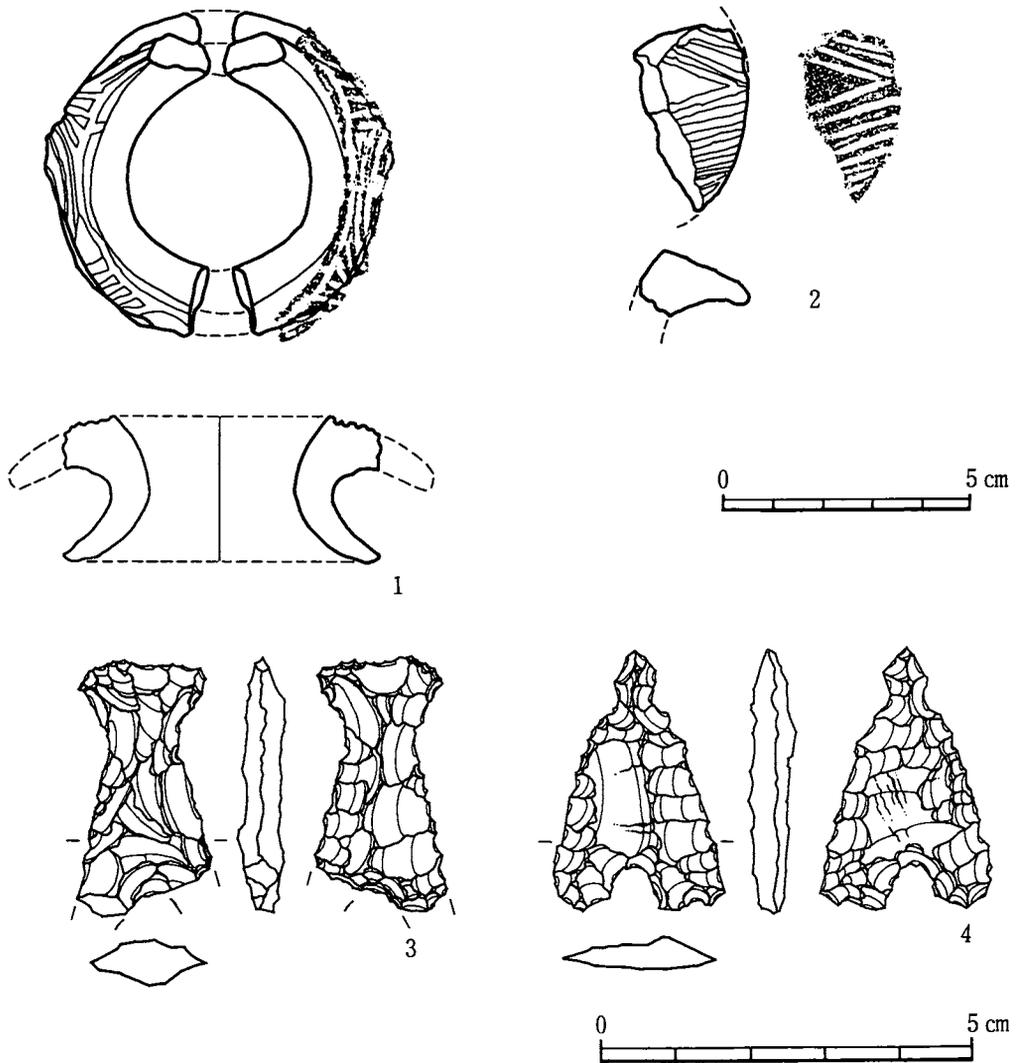
第115図 遺物分布図(石製品、土製品)

離作業は全面にみられる。剝離面を打面とし、打面転移は90~180度である。石材では、黒耀石5点、珪岩6点、安山岩1点である。

(3)土製品・石製品 (第116図1~4)

特殊な遺物として、土製品2点、石製品2点を検出した。以下、遺物ごとに説明を加えていきたい。

1、2は、耳栓である。1は、ほぼ $\frac{1}{2}$ が残存し口径が復元できる資料で、上端の文様帯縁部を欠失している。口径は、7cmである。胎土は、1mm大の石英や長石を多量に含んでいる。器面の色調は、内外面とも明褐色である。焼成は良好で、器面は調整段階の凹凸がみられる。文様は、凹線を曲線的に施文する。2は、大半を欠失し上端の文様帯縁部のみ資料である。文



第116図 土製品・石製品実測図

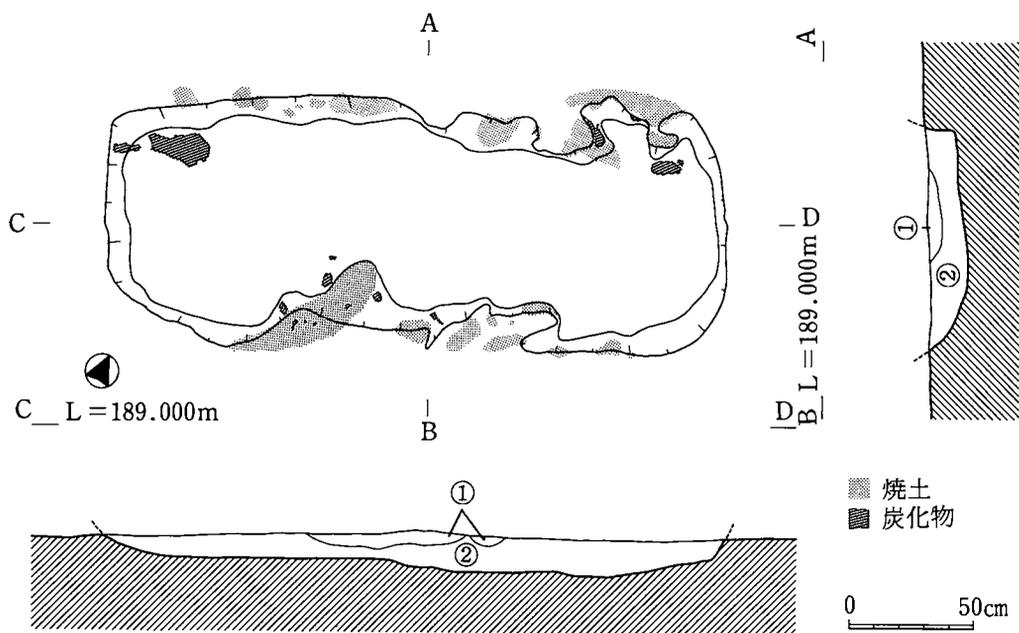
様は、直線的な凹線文を内一外に施文する。

3、4は、石製品である。3は、基部に脚をもつ資料で先端部の形態を除くと石鏃に類似している。しかし、縁辺は先端部近くで外反し尖らずに平坦に作り出されている。両脚とも欠失しており石器の全体形は不明であるが、挟入は深くV字形に施されている。安山岩製である。2は、全体形は石鏃と酷似する珪岩製の資料である。素材となる剝片の打点部を基部側におき、基部末端は平坦に作り出し、挟入はU字形に施す。しかしこの資料は、縁辺の加工に石鏃との差異がみられ、両側縁とも先端部近くが挟入状の調整加工によって作り出されている。

(4)不明土坑 (第117図)

時期不明の土坑として、VII B区で4号土坑を検出した。検出面は、V層である。しかしVII層(シラス)露出部分に近く、層の堆積は良好とはいえない。また、4号土坑は表土を剥いだ(III層下面)段階ですでに確認できたため、その掘り込み面はさらに上層になるものと考えられる。土坑内から遺物は出土せず、時期は不明である。埋土は、2層に分けられる。①、②とも色調は黒褐色であるが、①は微細な炭化物により構成され、②は1cm以上の炭化物を多量に含み中には、木炭状のものも床直上にみられる。方形・長方形と形態的には差異がみられるが、同様の土坑は白鳥平B遺跡、赤池永谷遺跡でも検出されている。

この土坑からは、以上のように時期を決定する遺物等が検出されなかったため、床直上から検出した炭化物を、京都産業大学に依頼して年代測定を行った。その結果660±20BPという測定結果を得た。またこの測定結果は、赤池永谷遺跡の2号土坑とほぼ同様である。



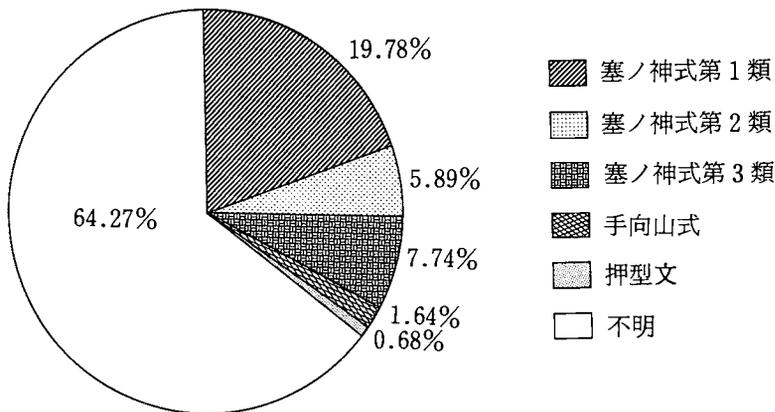
第117図 土坑実測図

3. まとめ

(1)遺構について

縄文時代早期は、アカホヤ火山灰層直下のIV～Vを包含層とする。この包含層からは、各種の遺構・遺物が検出された。これらの遺構は、遺跡中央の頂部を取り囲む形で検出された。頂部は、表土を剥いだ段階でVII層（シラス）が露出し、遺構・遺物の検出ができなかった。そのため、本来的に遺構・遺物の存在しない地点であるか不明である。遺構の立地は、凹部や谷部、斜面部に面した地点に作られ、このあり方は、狸谷遺跡の状況と類似している。

当該遺跡においては、集石遺構19基、配石土坑3基、土坑3基が検出された。これらの遺構のうち集石遺構の埋土は、すべてIV層を基本とした暗褐色土でありV層上面段階の遺構である。また、これらの集石遺構の埋土中から、検出した土器片は、1号集石で捺糸文施文の小破片、2号集石では破片が微細なため詳細は不明である。その他では、3、4号集石で、塞ノ神式土器の胴部が検出された。文様から塞ノ神式土器第1類である。12号集石では、塞ノ神式土器の胴部破片が検出され、土坑外に同一個体の口縁部が出土したことから、塞ノ神式土器第1b類である。配石土坑及び土坑からは、遺物は検出されなかった。しかし埋土の状態から、ほぼ同時期の遺構として捉えられる。この土坑の中で、約1.7m×0.6mの長方形を呈した深さ0.4～0.8mの遺構は、ともに床面に直径約10cmの小穴を7個検出した。このような土坑は九州では、検出例が少ない。近年では、大丸・藤の迫遺跡や狸谷遺跡で検出されている。しかしこの土坑の埋土は、自然に堆積したものと考えられ埋土中からは遺物等検出されなかった。このような遺構のあり方は、東日本で検出されている「Tピット」と呼称されているものと同様の状態で、陥し穴と考えられるものである。



①分析図(重量別)

第118図 土器分析図

(2)土器について

出土土器では、吉田式土器、円筒形条痕文土器、押型文土器、手向山式土器、塞ノ神式土器が検出され、早期の比較的古い段階から生活の場として利用されていたことが窺える。それらの土器の中で、塞ノ神式土器が全体の約34%を占めている（第118図）。

また塞ノ神式土器については、その文様の違いから第1類～第3類に分類をした。これらの土器は、新東氏の編年及び分類によれば第1類は、塞ノ神式（a）・鍋谷式（b）に、第2類は石坂上式・柁ノ原式、第3類は木佐貫原式にそれぞれ相当する。またこれらの土器の編年では、その系譜を2系統として考えられている。しかし白鳥平A遺跡出土の1～3類の土器の出土状況からは、類ごとの編年はできなかった。

(3)石器について

白鳥平A遺跡の石器のうち、磨石・敲石の占める割合は44.02%でもっとも高い数値を示す。石皿・台石は、26.64%を占めている。このことは石皿・台石1に対して磨石・敲石が1.65という数値である。このことは、単純には石皿・台石1個に対して、磨石・敲石が2個対応する計算になる。この結果は、狸谷遺跡の1：3とほぼ同様である。また石鏃の出土頻度も高く、14.98%を占める。このあり方は、狸谷遺跡の石器組成のあり方と類似することから、木崎氏が指摘しているように、石器組成中に東九州の様相と南九州の様相が窺える。またこのことは、土器の状況からも窺え、人吉・球磨地方の地理的環境を考える上で重要である。

石鏃の全資料の中で、完形品は88点と多く、56%を占めている。しかし石鏃の全資料の中で、接合資料は1点も確認できなかった。このような欠損し遺跡内で接合しない石鏃については、柏原F遺跡では使用時の欠損として捉えられ、再加工のための石鏃本体の回収や、獲物と共に遺跡内に搬入されたものである可能性が指摘されている。

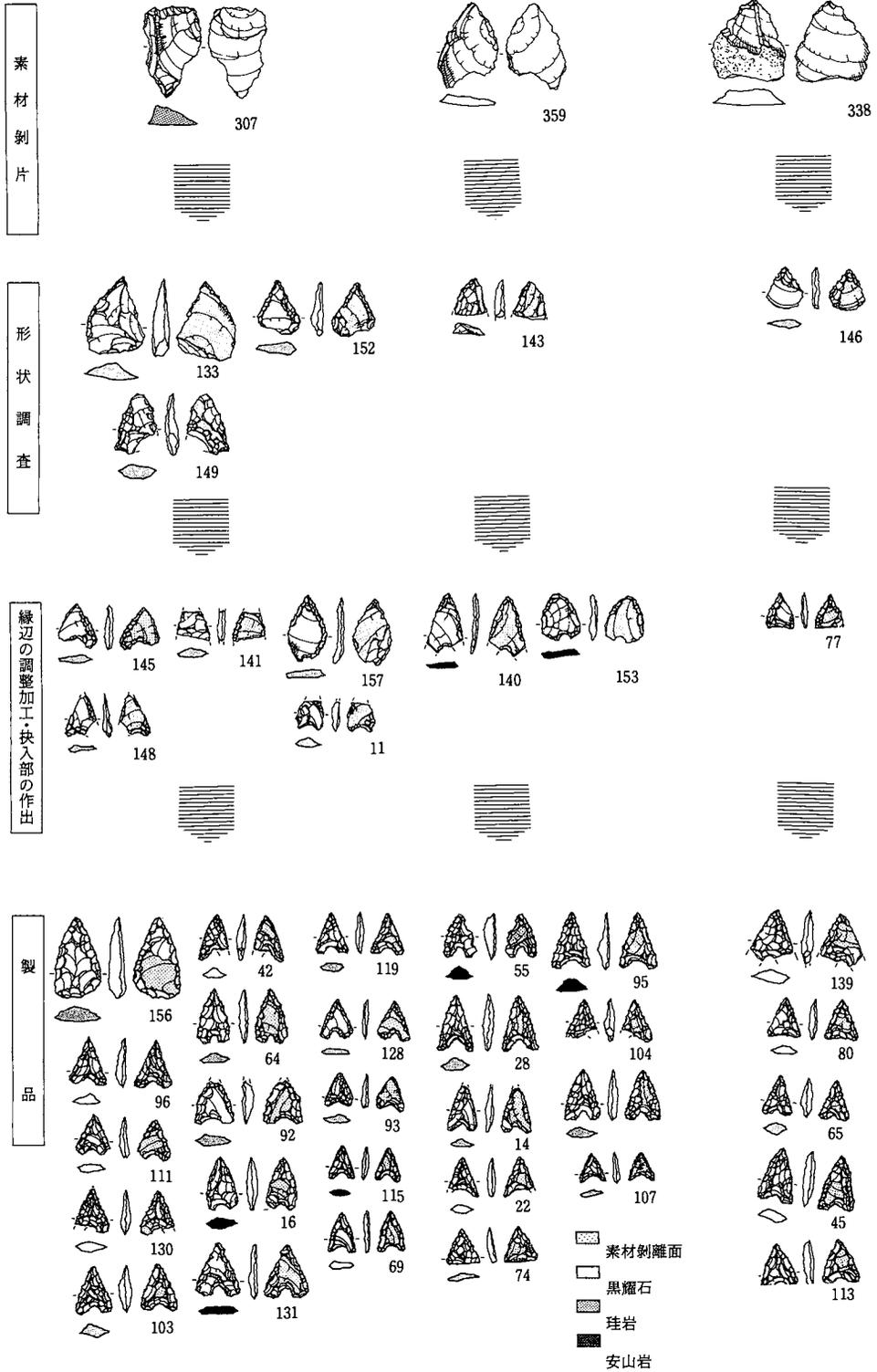
また欠損の部位別では、基部が34点、先端部が21点、先端部及び基部が14点で（第121図）、基部を欠損する資料がもっとも高い数値を示している。

(4)石鏃の製作工程について

石鏃の全資料（158点）のなかで、その素材剥片の剝離面を表、裏面に残す資料が51点存在した。以下、その素材剥片の形状と製作の工程を考えていきたい。

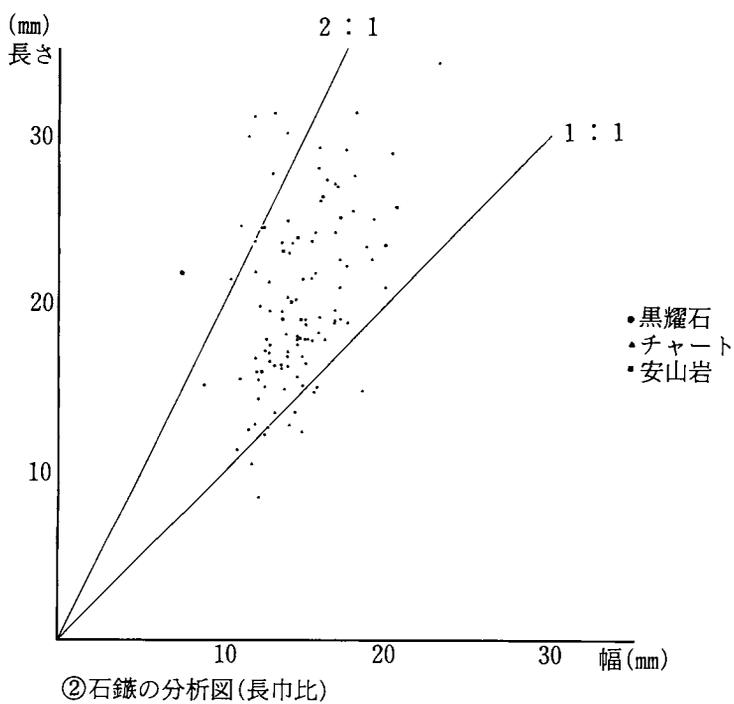
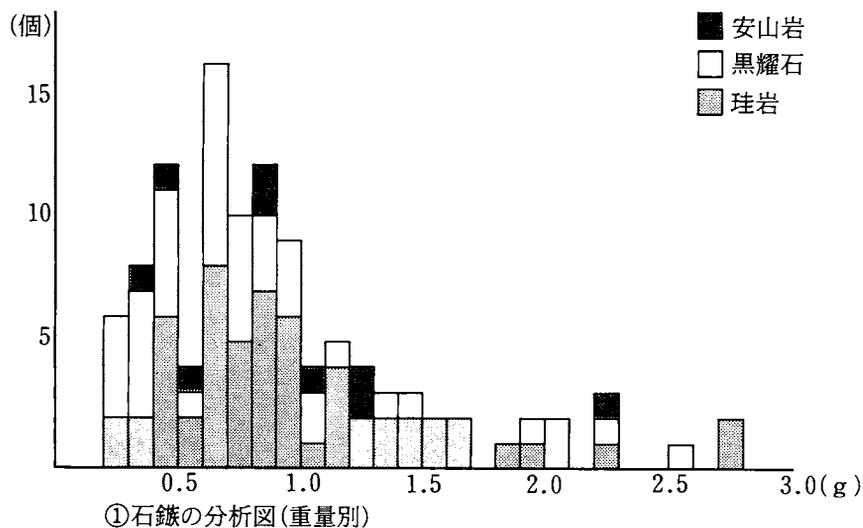
石鏃の工程を、考えるために資料中から未完成品と、製品で素材剥片の剝離面を残すものを抽出した。その結果、素材剥片の形状をそのまま残し縁辺にわずかに調整加工を施したもの2点、素材剥片の形状を大きく残し縁辺及び抉入部に細かな調整を加えたもの10点、完成品で素材剥片の剝離面を裏面に残すもの40点が確認された（第119図）。これらの資料から、石鏃の製作工程を次のように考えた。

〈素材剥片の獲得〉 → 〈形状調整〉 → 〈縁辺の調整加工・抉入部の作出〉 → 〈製品〉
の各段階である。

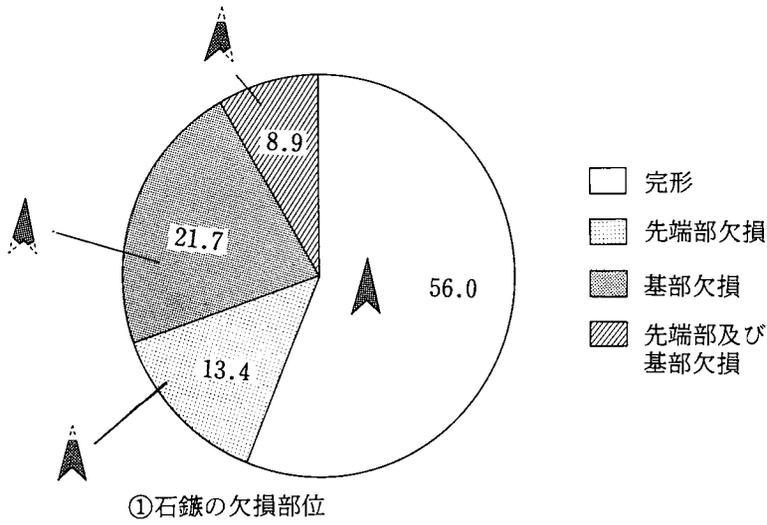


第119図 石鐮の製作工程図

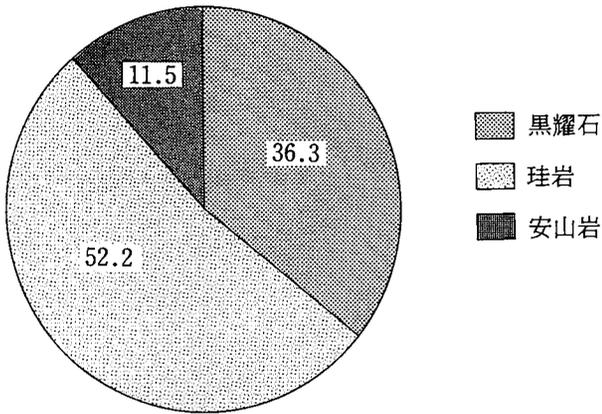
第3節 縄文時代早期の遺構と遺物



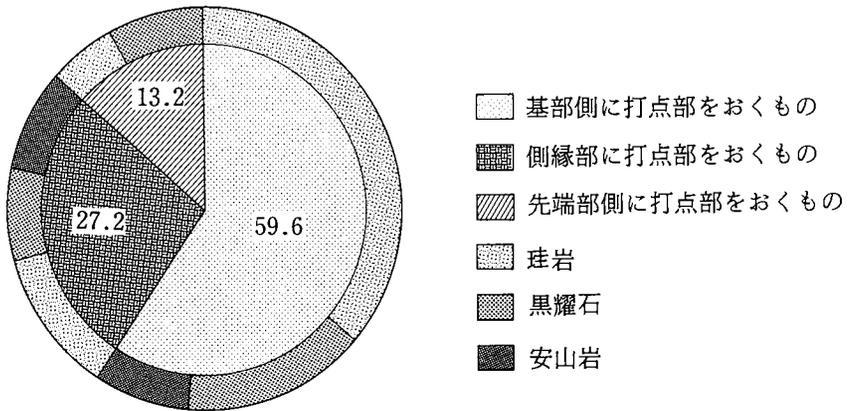
第120図 石鏃分析図①



①石鎌の欠損部位



②石鎌の石材別頻度



③石鎌の素材剥片の打点部の位置

第121図 石鎌分析図②

素材剥片の形状は、各段階の資料からいくつかのものに分けられる。それは、打点部（打瘤部）を基部側に置くもの（a）、打点部を左、右縁辺側に置くもの（b）、打点部を先端部側に置くもの（c）である。それぞれの素材剥片を、全資料からみいだすことができる。aのものは、370、369のように幅広の剥片で打点部が中央にくるものか、もしくは左、右どちらかに偏るものと考えられる。bは、341のような剥片が利用される。cは、345のように点状打面によって剥出された素材剥片を利用しているものと考えられる。またcの剥片のように、点状打面によって剥出された剥片を素材として利用することにより、打点部を石器本体の先端部に置いても、先端の厚みをおさえ尖らせることが可能であると考えられる。

形状調整段階の2点の資料は、ともに幅広の寸づまった形状をした剥片が素材として利用されている。この場合、素材剥片の表面には149のように裏面側と同方向の剝離痕をもつものと、133のように表面に同方向と異方向の剝離痕をもつものがある。後者の場合は、意図的に先細りの寸づまった剥片を獲得しようとしたものであるとも考えられ、重要である。しかしそれを示す資料が少ないため詳細な検討が必要である。

次に、縁辺の調整加工・挟入部の作出の段階の資料10点は、すべて表裏両面に素材剥片の形状を大きく残すものである。この中で6点は、素材剥片の剝離面の打瘤部が、基部の片側に置かれるものである。その場合基部の調整加工は、打瘤部を削除する形で施され、挟入部が作出されている。このような素材剥片の利用は、この段階の資料では、珪岩製だけである。この他に安山岩製の横長剥片を素材とするものに140、153がある。この場合調整加工は、縁辺の打瘤部側と素材剥片の縁辺側に施し形状を整えている。また挟入部の作出は、比較的小さい。しかし両者とも、素材剥片の先端部か、もしくは尖った部分を石器本体の先端にくるように利用する点で類似している。このように、獲得された素材剥片の形状が、石材ごとに違い、その素材剥片の利用そのものに大きく影響を与えていると考えることができる。

完成品の中で、素材剥片の剝離面を残す40点の資料からも上述したような状況が窺える。これらの資料の中、打瘤部を基部側に置くもの23点、打瘤部を左・右縁辺に置くもの11点、打瘤部を先端部に置くもの5点である。このように基部側に打瘤部を置くものが、59.6%を占める。また、剥片の先端かもしくは尖った部分が、石器の先端にくるように素材を利用しているものは、これらの資料中86.5%である。このことは、石器先端部の形状を意識したものである。

以上のことから、素材剥片には、比較的幅広の剥片を準備し、その剥片の形状にあわせて、打瘤部を削除するか、もしくは打瘤部が顕著でない素材剥片の場合は、その形状にあわせて打点部を、縁辺か先端部に置き調整加工を施し、石器を完成させるものと考えられるのではないだろうか。そのため全体的に、素材剥片の置き方とその利用にしっかりとした規範はみられないが、先端部の作り出しを意識した素材剥片の利用という点では、共通性がみられる。

第IV章 総括

発掘調査の結果、7枚の基本土層中アカホヤ火山灰（Ⅲ）層～入戸火砕流（Ⅶ層）との間のⅣ～Ⅵ層に、縄文時代早期と先土器時代の細石器文化、ナイフ形石器文化の3時期の遺物・遺構を検出した。包含層は上層からⅣ～Ⅴ層上部が縄文時代早期、Ⅴ層下部が細石器文化、Ⅵ層がナイフ形石器文化である。このことから白鳥平A遺跡は、先土器時代から縄文時代早期までの3つの時期の遺物や遺構が上下に重なり合って存在する複合遺跡である。

1. 先土器時代について

先土器時代の遺物としては、Ⅵ層からナイフ形石器を主体とした石器群を検出した。包含層は薄く、良好な状態では確認することができなかったが、東側斜面部で唯一集中部分を検出することができた。しかし、遺跡全体では一部縄文時代早期の包含層と混在し、また遺物の量としても70点と少ないため、検出した石器組成が当時の本来の状況であるか不明である。

石器組成としては、ナイフ形石器が15点ともっとも多く検出されている。

また、このナイフ形石器の形態から切り出し状のナイフ形石器と剝片尖頭器、台形石器の3つに分類できる。これらの石器は、ナイフ形石器4点と台形石器5点、剝片尖頭器4点で数量的にはほぼ同数である。またこの他に、三稜尖頭器4点が検出されている。

このような石器組成は小牧ⅢA石器文化（鹿児島県）、人吉・球磨地方では大丸・藤の迫遺跡に類似する。

2. 細石器文化について

細石器文化の遺物は、細石核11点、細刃器11点が検出された。これらの資料中細石核は、石材の特徴から飴色を呈するものと漆黒色を呈するものの2種類が存在する。このうち飴色を呈するものは、桑木津留川上流域で産する黒耀石である。この黒耀石は、川床や流域の露頭に転石や小角礫の状態で見ることができる。

白鳥平A遺跡の細石核は、原石の形状を強く反映したもので、素材となった原石の礫面を大きく残している。また、打面と剝出作業面の角度は、40～60度であり比較的鋭角に設定されている。このように石器石材（原石）の形状を反映する細石核は、城・馬場遺跡第2地点や島廻遺跡でも検出されている。

3. 縄文時代早期について

縄文時代早期の遺物・遺構は、Ⅳ～Ⅴ層上部にかけて検出した。早期の遺構としては、集石遺構19基、配石土坑3基、土坑3基が検出された。これらの遺構のうち土坑をもつ集石遺構や配石土坑の埋土は、Ⅳ層を基本とした暗褐色土であり共通している。また集石遺構のうち埋土中から塞ノ神式土器、手向山式土器を検出した遺構が存在するため、これらの遺構の時期は、塞ノ神式土器・手向山式土器の段階であると考えられる。このことは、白鳥平A遺跡で検出

された遺構（集石遺構及び配石土坑）は、比較的短期間のうちに使用された可能性が考えられる。しかし、遺跡内での遺構の分布は、丘陵の最高部の周辺で凹部や谷部、斜面部を取り囲むように存在する。これらのあり方と、共伴する土器型式から数時期に分けられる可能性があるが、その他の場の利用については、最高部が削平をうけ包含層が残っていないため不明である。

また、その他に検出した土坑の中に、「陥し穴」に類似する遺構が2基存在した。このような陥し穴遺構は、関東や東北地方で多数検出されている遺構で、西日本での検出例は少ない。この陥し穴遺構は、①埋土が自然堆積であり、②埋土中に遺物を含まない、③土坑の床面に小穴をもつ等関東・東北地方で「Tピット」と呼称されている遺構の特徴に極めて類似する。しかし、前述したように埋土中から遺物が検出されないため時期等については不明であるが、埋土が自然堆積でアカホヤ火山灰（III層）を基本とすることから早期の遺構として捉えた。

出土した土器形式では、吉田式土器や円筒形条痕文土器、手向山式土器、押型文土器、塞ノ神式土器等があり、編年上幅がみられる。このことは白鳥平A遺跡では、比較的長期間生活の場として利用されていたことが窺える。出土した土器の比率では塞ノ神式土器がもっとも多く33.41%を占めている。また、IV層下部から壺形を呈する「手向山式土器」と、それと近接する地点から耳栓が出土した。この耳栓が、どの土器型式の段階に属するのかわからないが、鹿児島県の出土例からすると、石坂上式土器（白鳥平A遺跡では塞ノ神式土器第2類）との共伴が考えられていることから、同様の時期を考えることができるのではないだろうか。

石器では石鏃・尖頭器・石匙・削器・石錐・楔形石器・打製石斧・磨製石斧・環状石斧・磨石・敲石・石皿・台石・使用痕ある剥片が検出された。この中で磨石・敲石は、石器組成の中心を成し、石器全体の44.02%を占めている。さらに石皿・台石を含めると、70.68%を占める。このことは、南九州の一般的状況といえる。しかし、これらの石器組成の中で石鏃の占める割合も高く、14.98%である。このことは東九州の様相と南九州の様相が対峙した状況として捉えることができ、土器の全出土量に占める各型式ごとの割合にも同様のことがいえる。

参考文献

- 木崎 康弘 『大丸・藤の迫遺跡』 熊本県文化財調査報告第80集1986
 木崎 康弘 『狸谷遺跡』 熊本県文化財調査報告第90集 1987
 西住 欣一郎 『鼓ヶ峰遺跡』 熊本県文化財調査報告第96集 1988
 西住 欣一郎 『天道ヶ尾(II)』 熊本県文化財調査報告第111集 1990
 長野 真一 「小牧III A 遺跡の紹介」 『指宿史談』 創刊号 1979
 肥後考古学会 『肥後考古』 第5号（特集：熊本県の旧石器文化） 1985
 清水 宗昭 「剥片尖頭器について」 『古代文化』 第25巻第11号 1973
 緒方 勉・古森政次 『下城遺跡II』 熊本県文化財調査報告第50集1980

第IV章 総括

- 江本 直 『熊本県旧石器時代調査報告書』 熊本県文化財調査報告第81集1986
- 大田幸博・下村 智 『里の城遺跡』 熊本県文化財調査報告第51集1980
- 九州旧石器文化研究会 『九州旧石器時代関係資料集成 I』(細石器文化編) 1992
- 宮田 栄二 『西丸尾遺跡』 鹿児島県文化財調査報告第64集 1992
- 大田幸博・松舟博満 『城・馬場遺跡』 熊本県文化財調査報告第110集 1990
- 新東 晃一 『中尾田遺跡』 鹿児島県文化財調査報告第15集 1981
- 新東 晃一 「早期九州貝殻系土器様式」 『縄文土器大観』 1 1989
- 新東 晃一 「塞ノ神・平椀式土器様式」 『縄文土器大観』 1 1989
- 米元史郎・小村美義 『下田遺跡』 志布志町埋蔵文化財調査報告(22) 1992
- 宮田 栄二 『奥木場遺跡』 枕崎市埋蔵文化財調査報告(3) 1987
- 鷹山遺跡群調査団・長門町教育委員会 『鷹山遺跡群 I』 1989
- 鶴嶋 俊彦 『村山閤谷遺跡』 人吉市教育委員会 1988
- 山崎純男・小畑弘巳 『柏原遺跡群 I』 福岡市埋蔵文化財調査報告書第90集 1983
- 町田 洋・新井房夫 『火山灰アトラス』 東京大学出版会 1993
- 今村 啓二 「陥し穴」 『縄文時代の研究』 第2巻 生業所収 1983

報告書抄録

書名	白鳥平 A 遺跡
副書名	九州縦貫自動車道（人吉～えびの）建設に伴う埋蔵文化財調査
シリーズ名	熊本県文化財調査報告
シリーズ番号	第127集
編著者名	宮坂孝宏
編集機関	熊本県教育委員会
所在地	〒862 熊本市水前寺 6 丁目18番 1 号
発行年月日	西暦1993年 3 月31日

所収遺跡名	所在地	コード	調査期間	調査面積	調査原因
白鳥平 A	人吉市赤池水無町	市町村：遺跡番号 ：	19900702－ 19910802	10,000	道路建設

主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
先土器時代		ナイフ形石器・三菱尖頭器・彫器・削器	
細石器文化		細石核・細刃器	
縄文時代早期	1～19号集石遺構 1～3号配石土坑 1～3号土坑	吉田式・押型文土器・手向山式・塞ノ神式土器・耳栓・石器	耳栓(2)は県内初

版 圖

図版1 遠景



上・遠景（南方より） 下・遠景（南上空より）

図版2 全景



▲遺跡全景（上空より）

図版 3 先土器時代の遺物



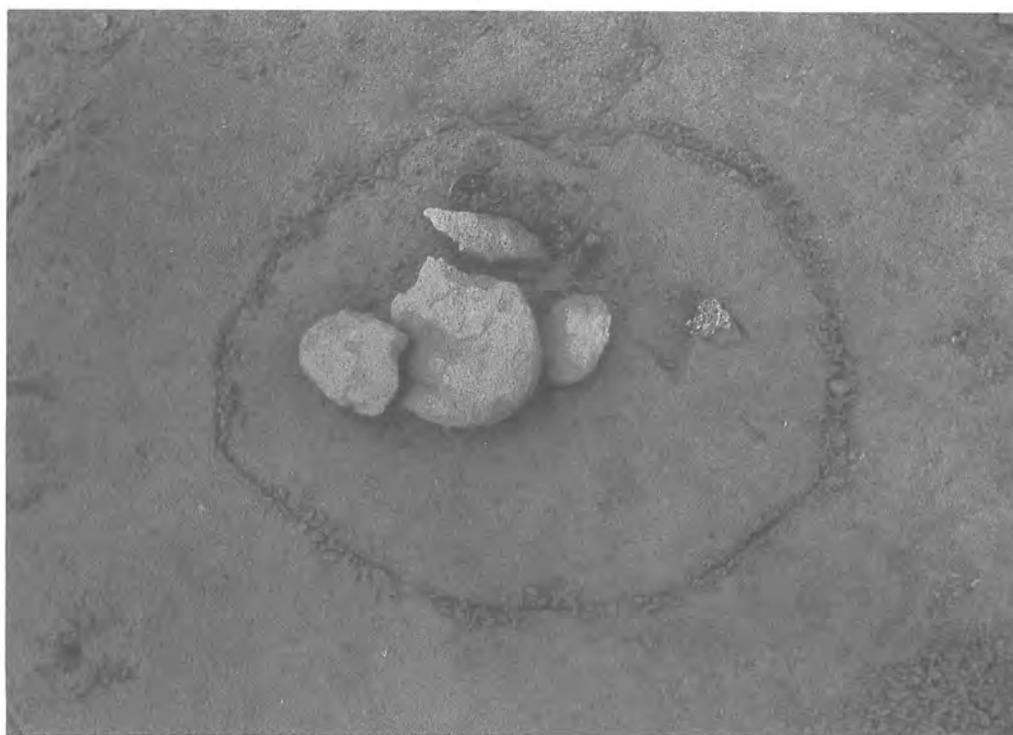
図版 4 細石器文化の遺物



図版 5 縄文時代早期の遺構

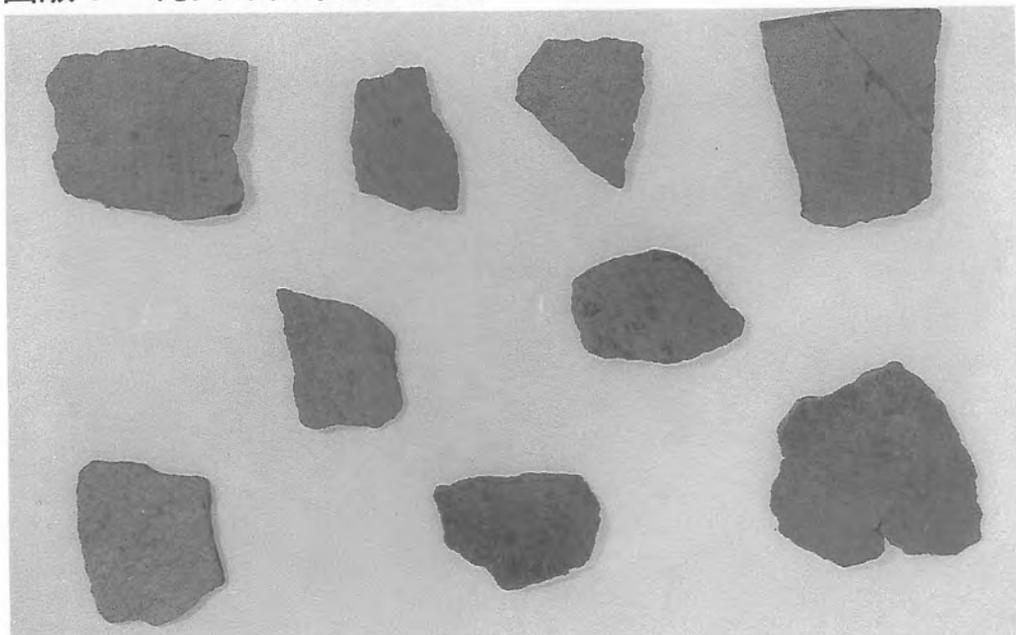


1、15号集石



2、1号配石土坑

図版 6 縄文時代早期の遺物

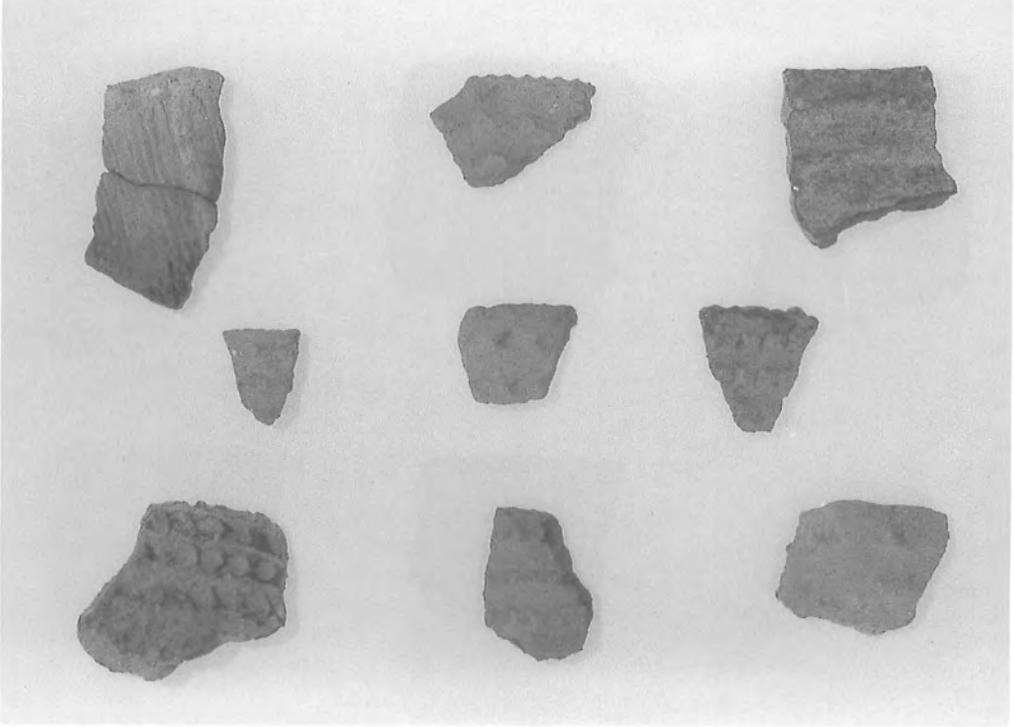


1、押型文土器



2、手向山式土器

図版 7 縄文時代早期の遺物

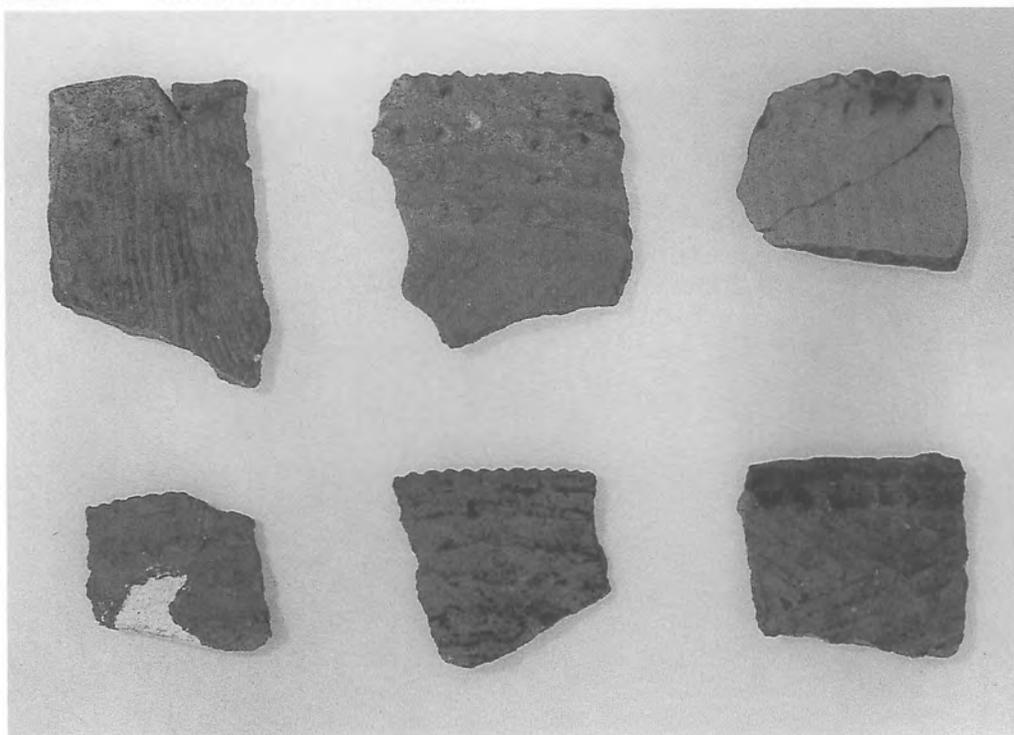


1、手向山式土器

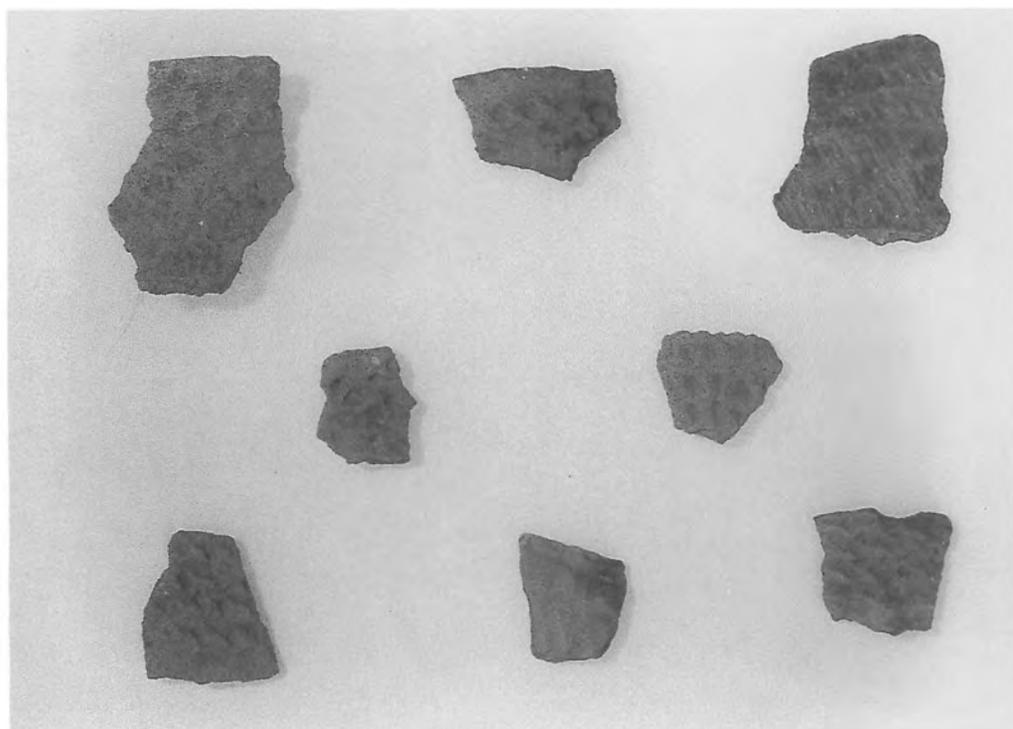


2、手向山式土器

図版 8 縄文時代早期の遺物

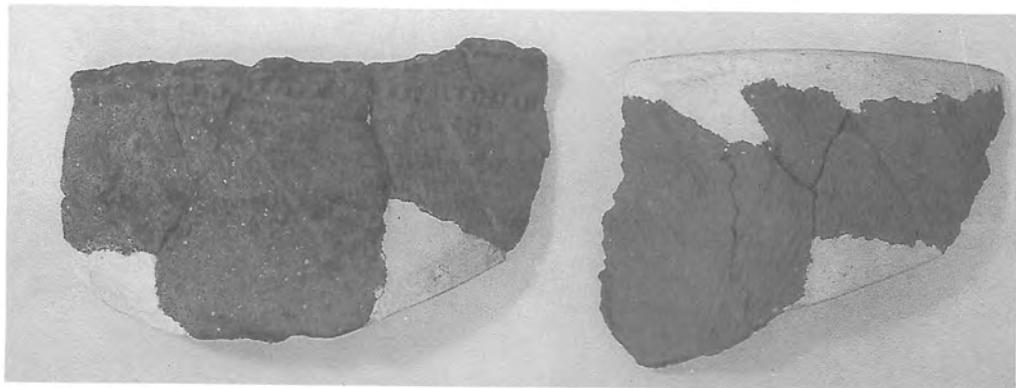


1、手向山式土器

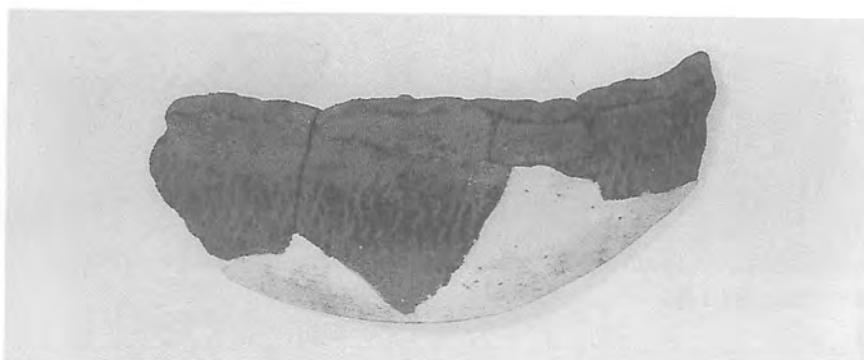


2、手向山式土器

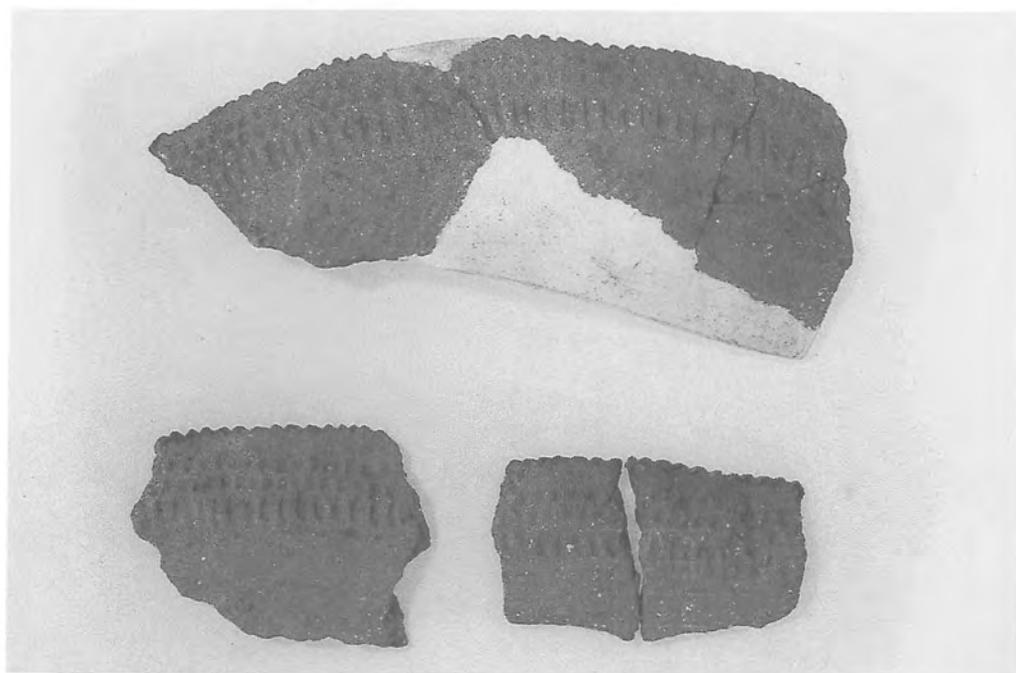
図版 9 縄文時代早期の遺物



1、塞ノ神式土器(1類)

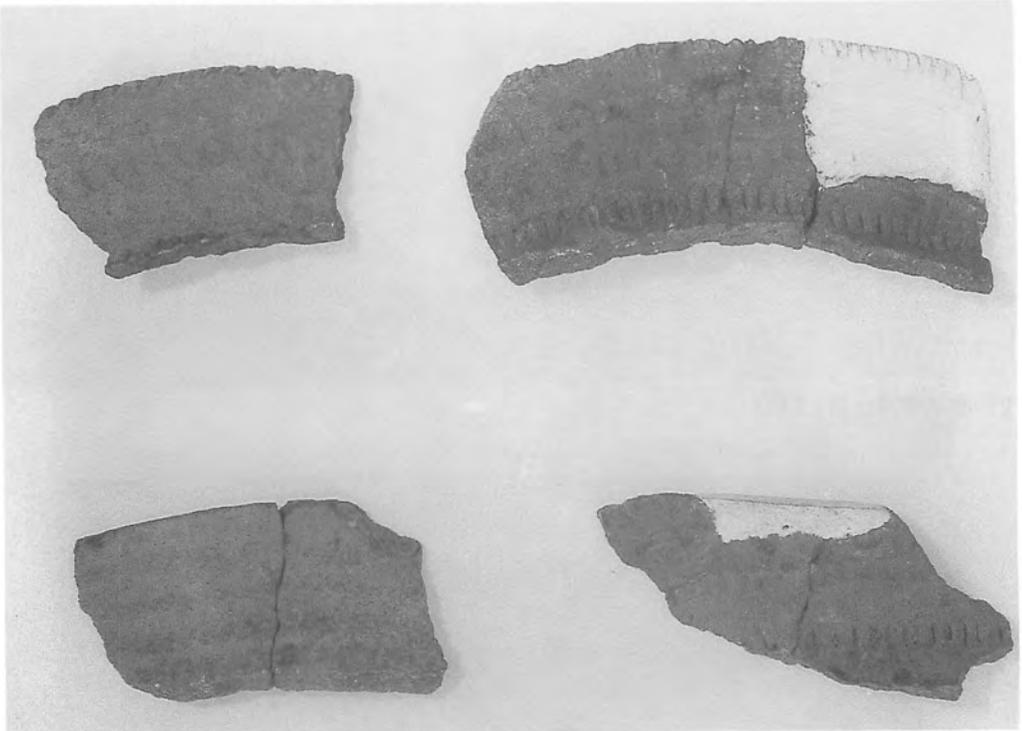


2、塞ノ神式土器(2類)

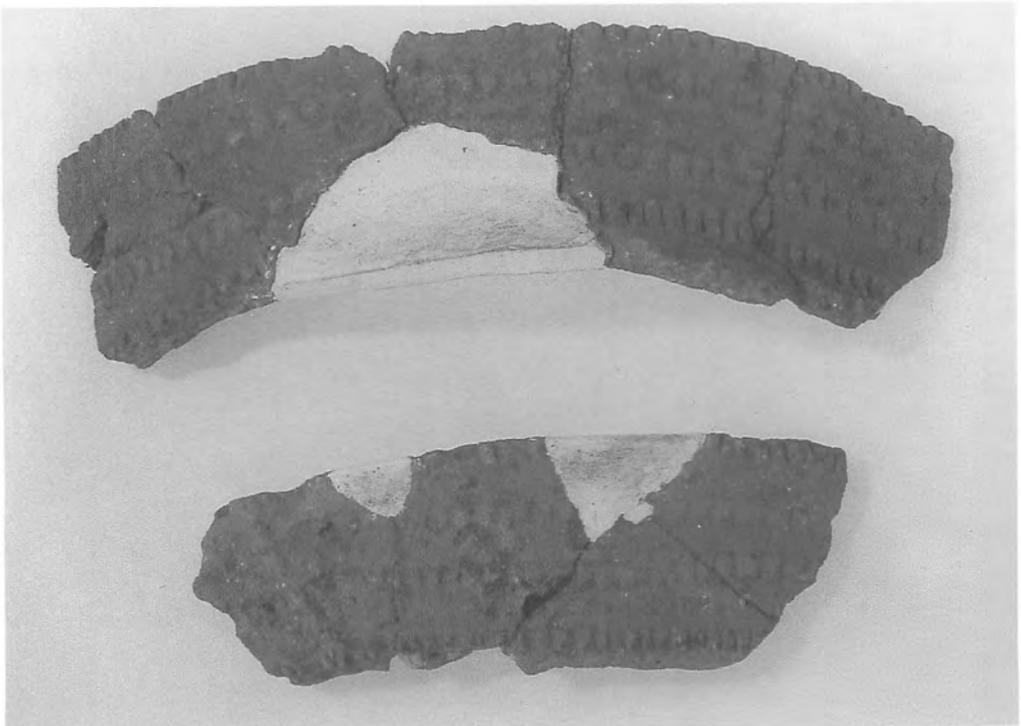


3、塞ノ神式土器(1類)

図版10 縄文時代早期の遺物

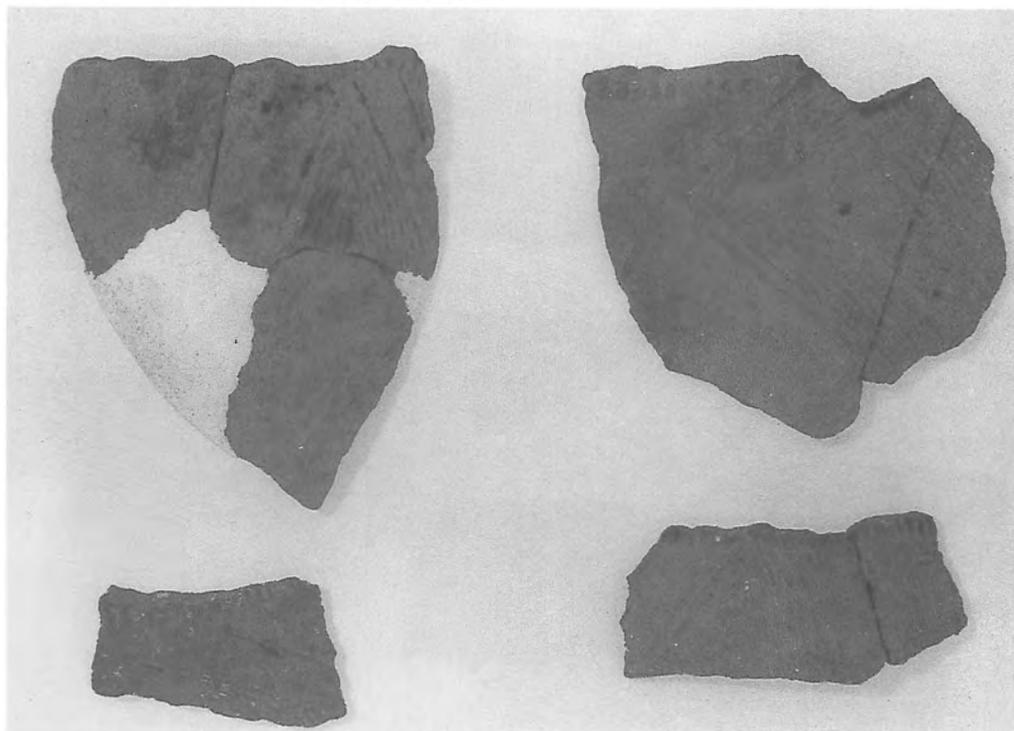


1、塞ノ神式土器(1類)

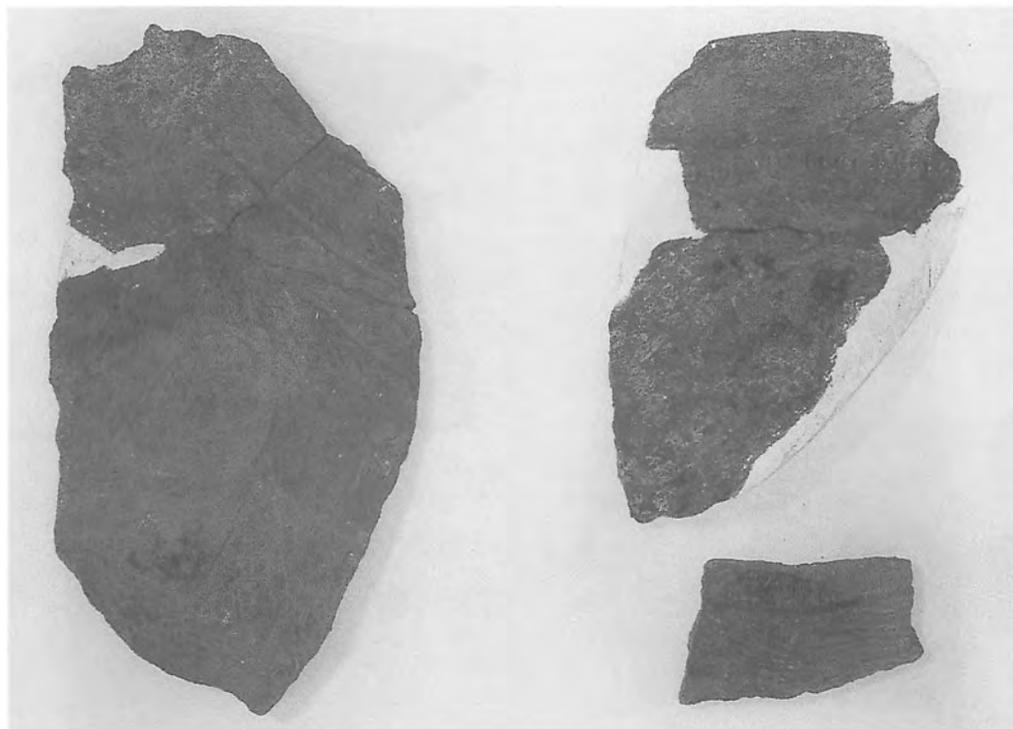


2、塞ノ神式土器(1類)

図版11 縄文時代早期の遺物

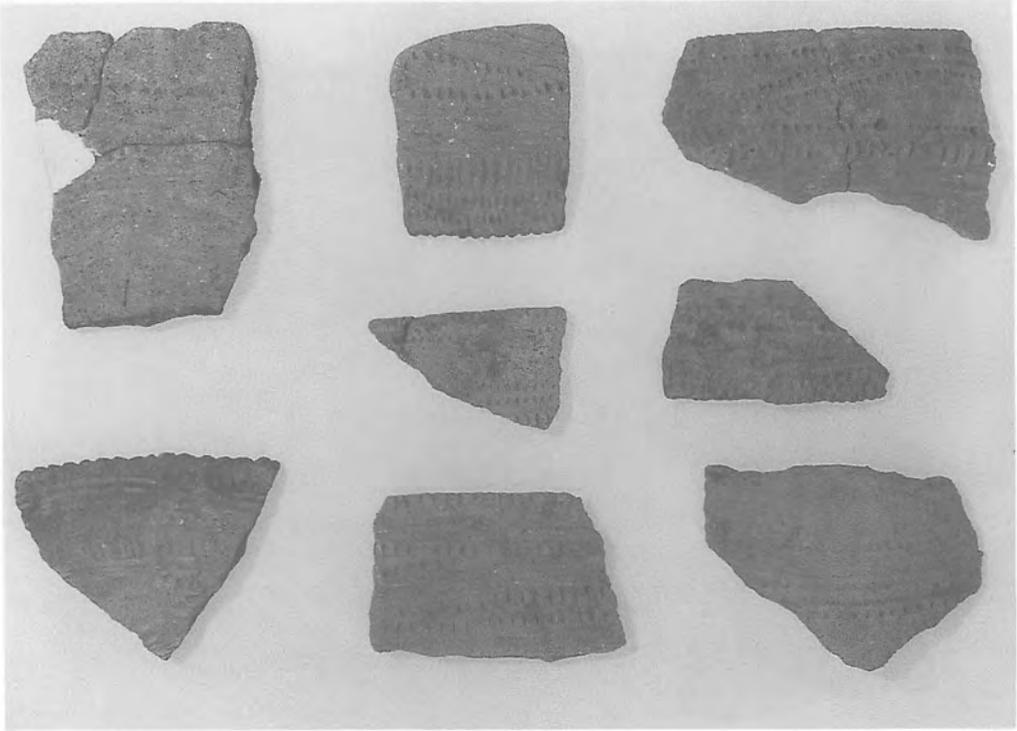


1、塞ノ神式土器(1類)

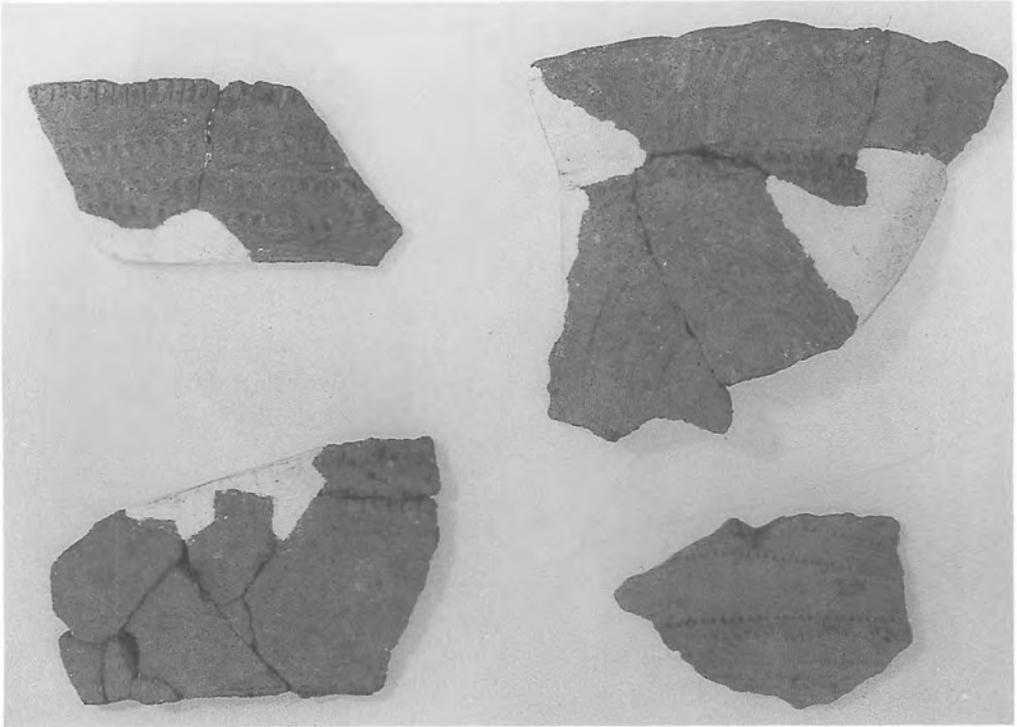


2、塞ノ神式土器(1類)

図版12 縄文時代早期の遺物

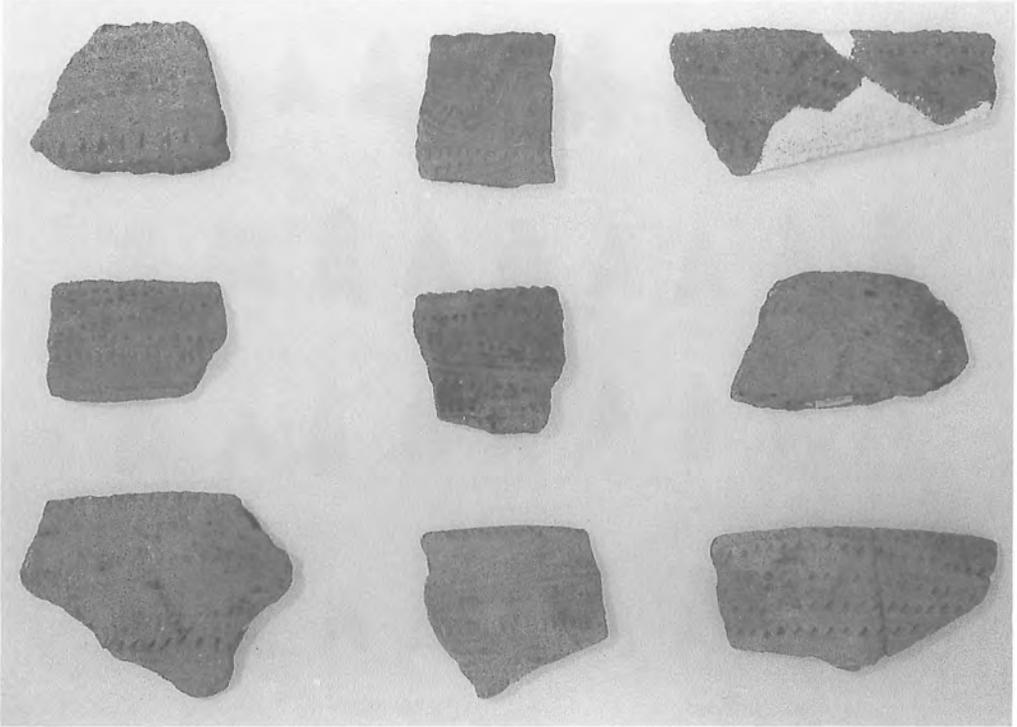


1、塞ノ神式土器(3類)

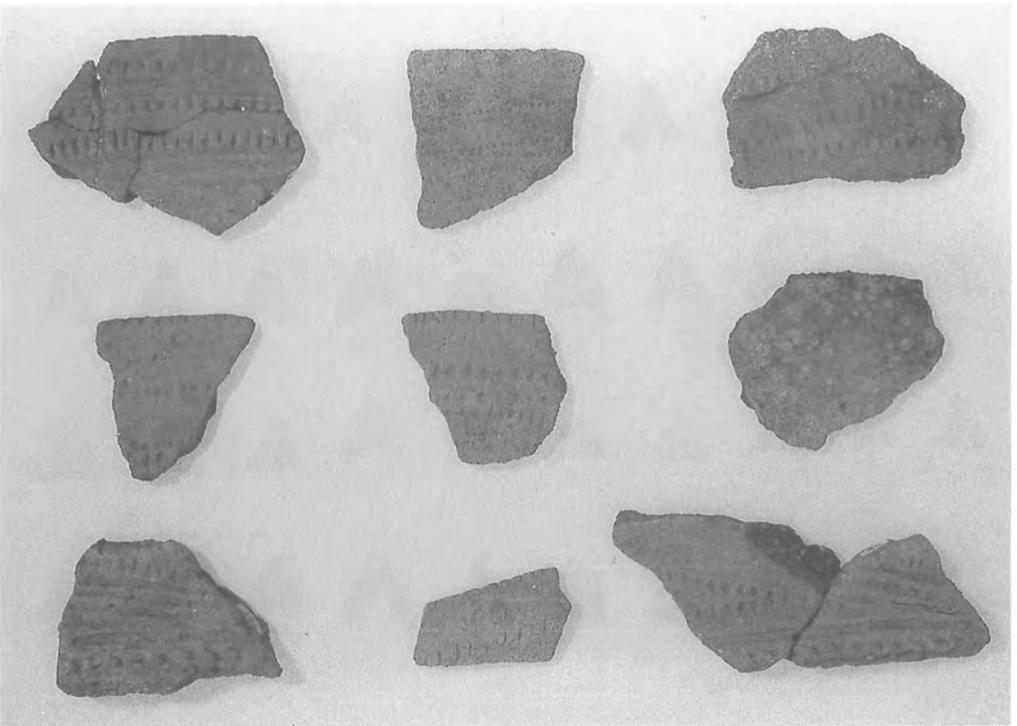


2、塞ノ神式土器(3類)

図版13 縄文時代早期の遺物

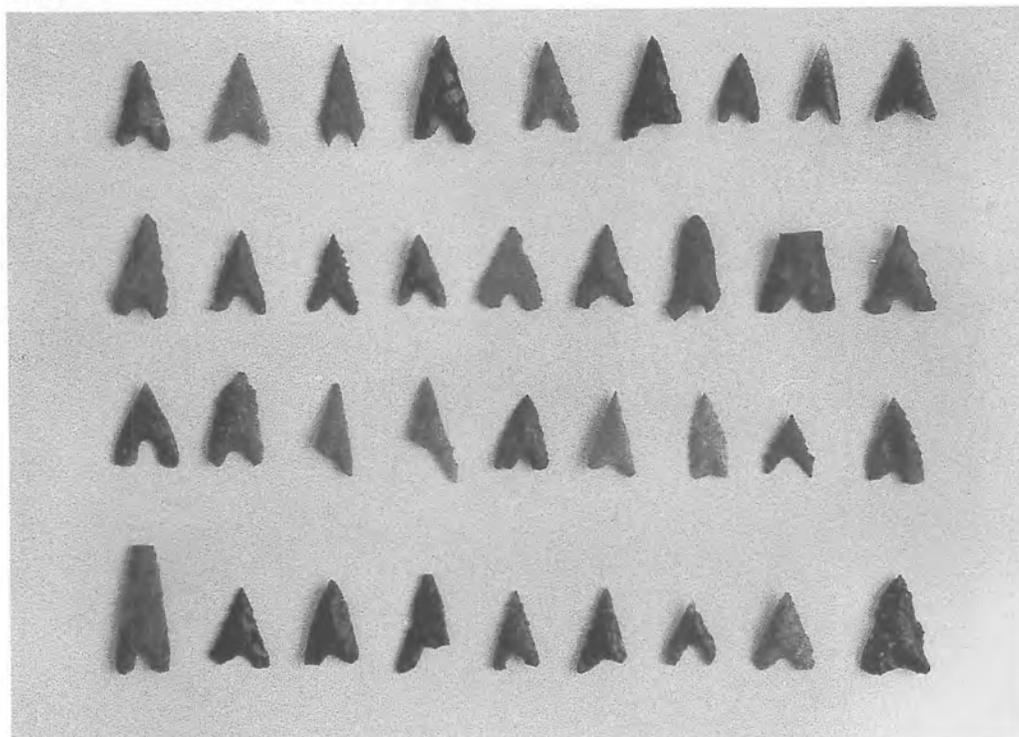


1、塞ノ神式土器(3類)

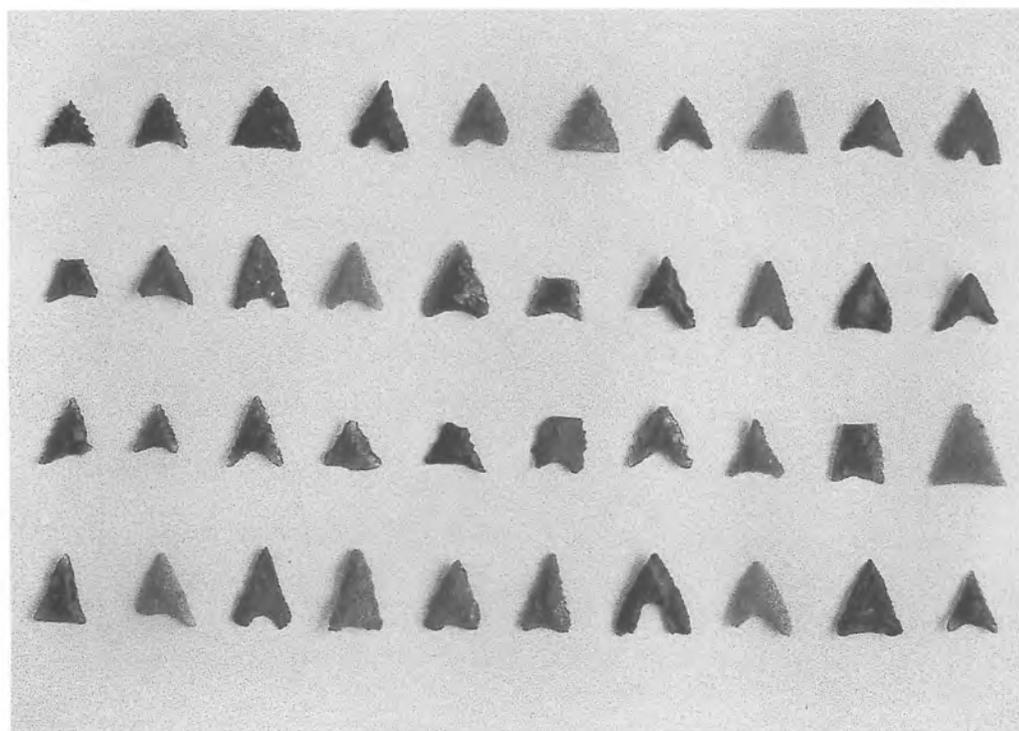


2、塞ノ神式土器(3類)

図版14 縄文時代早期の遺物

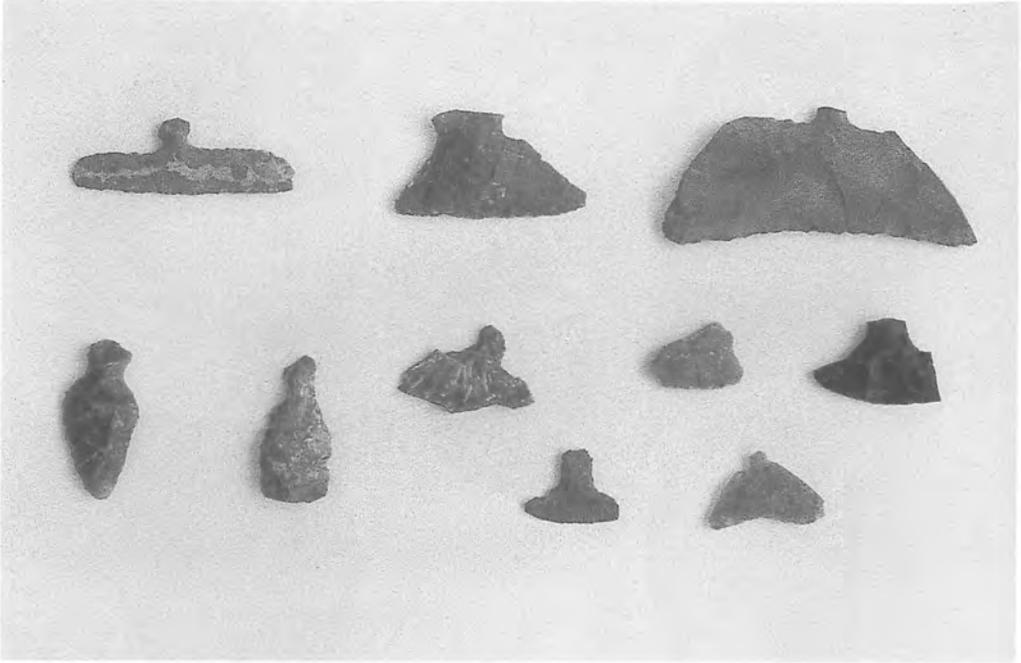


1、石鏃

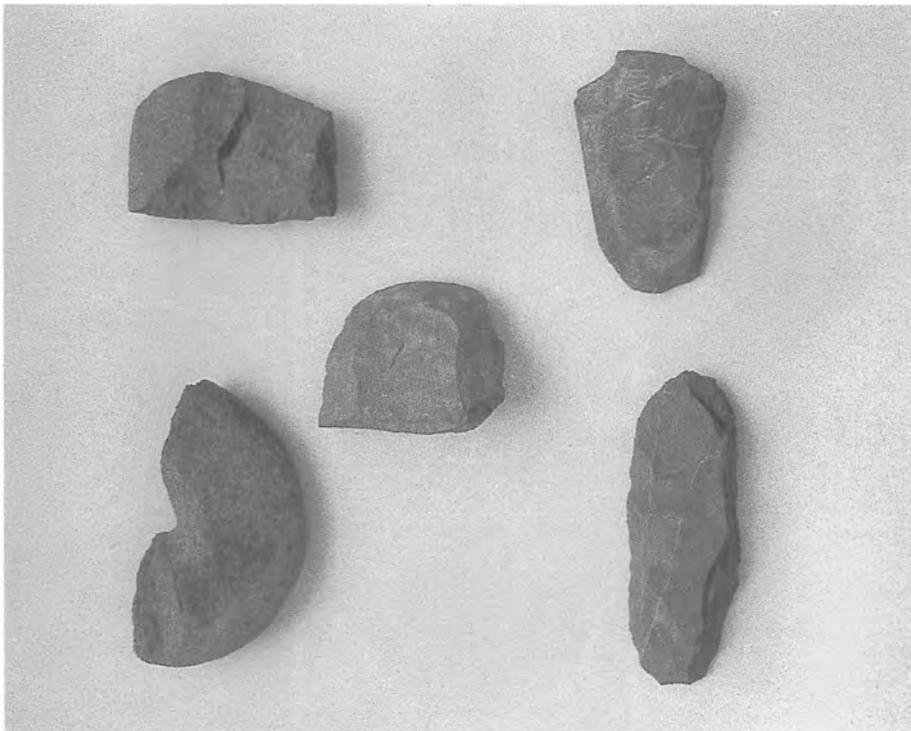


2、石鏃

図版15 縄文時代早期の遺物

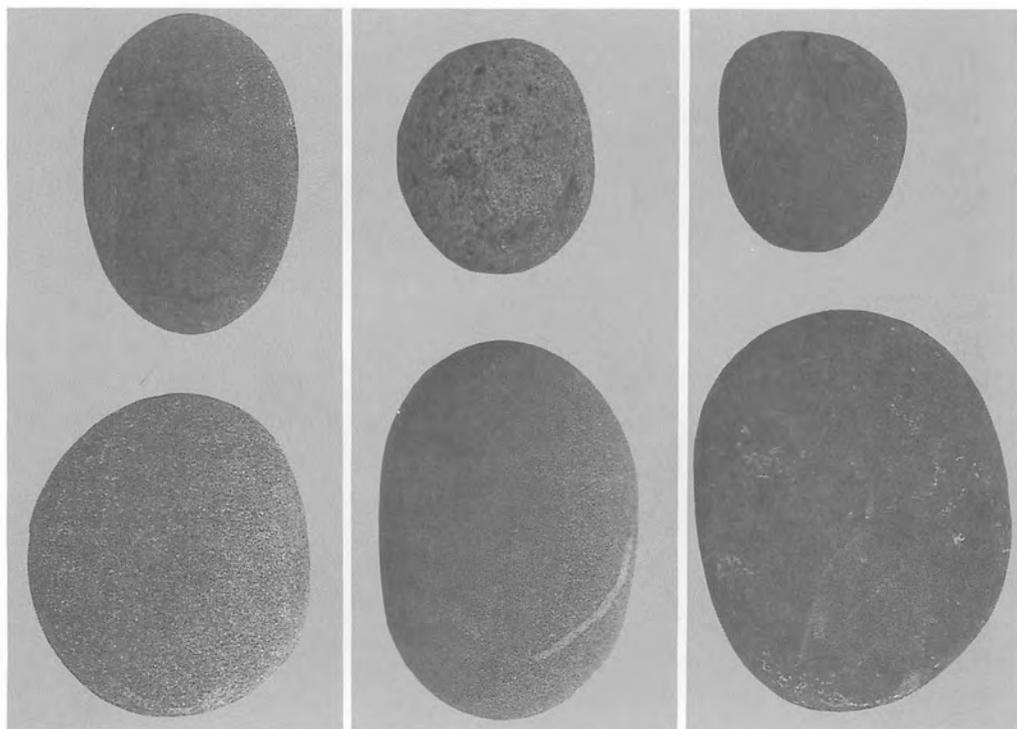
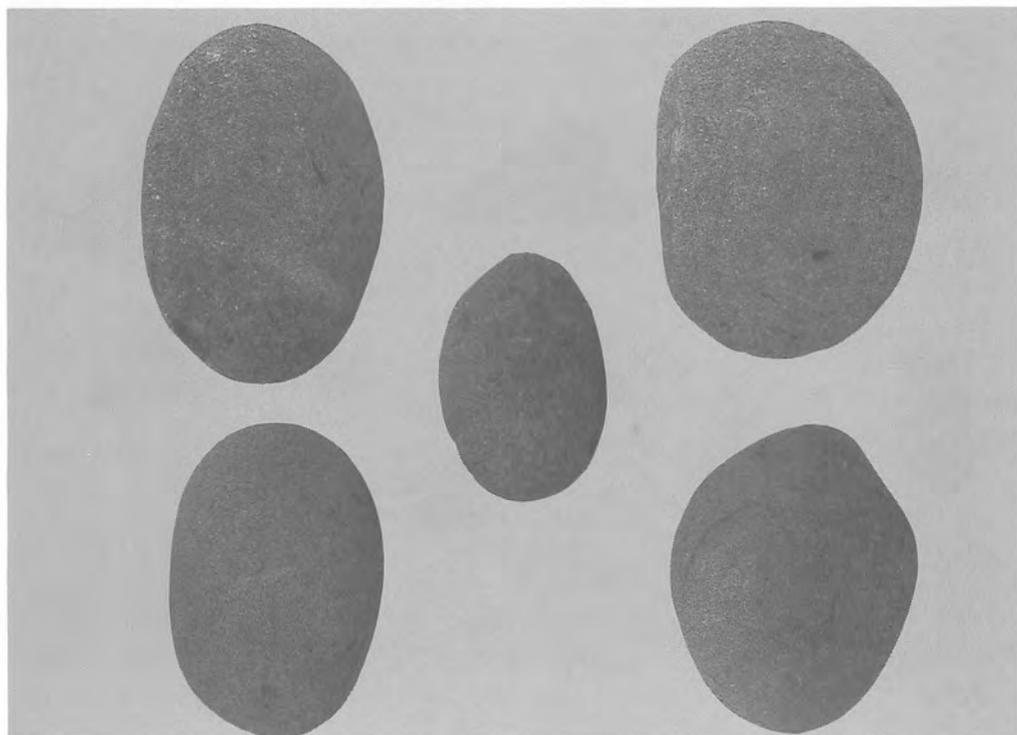


1、石匙



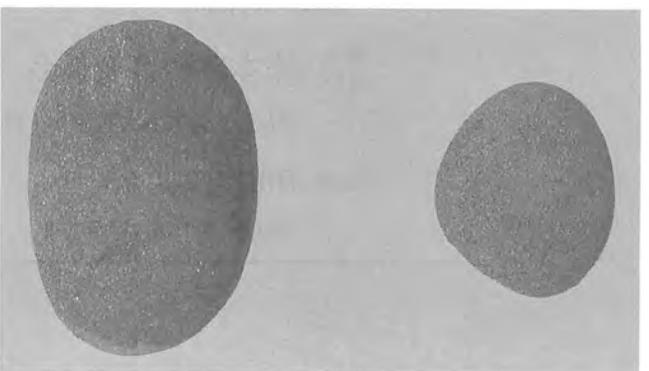
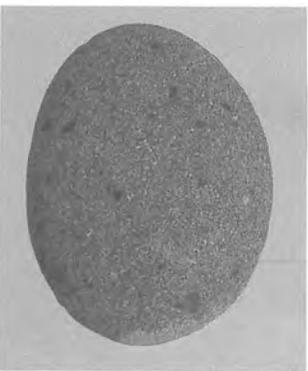
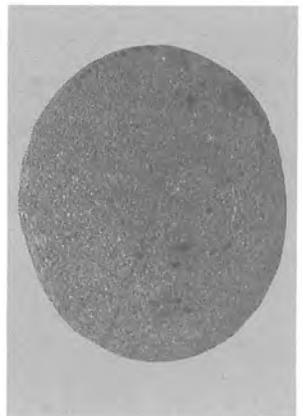
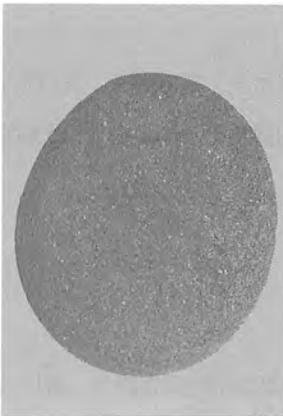
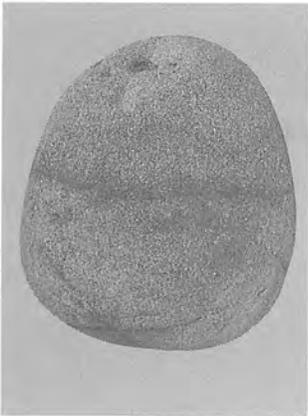
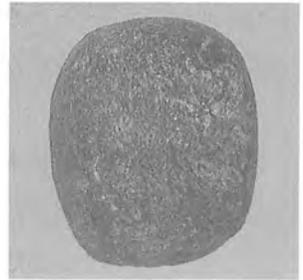
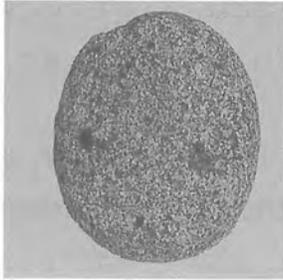
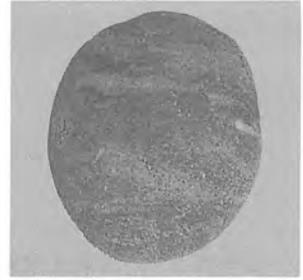
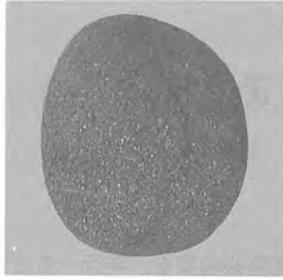
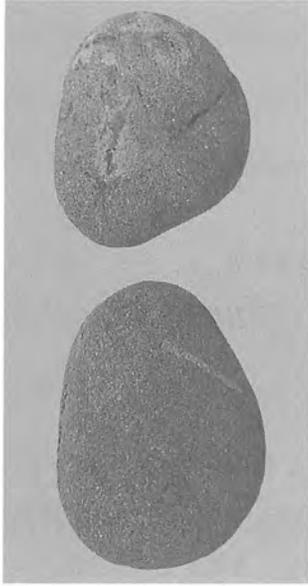
2、石斧

図版16 縄文時代早期の遺物



磨石、敲石

図版17 縄文時代早期の遺物



磨石、敲石

あ と が き

ようやく「白鳥平A遺跡」の調査報告書を、発行することができました。
この1冊の報告書ができあがるまでには、多くの方々のご協力と、ご努力がありました。
そこで、その皆様のご芳名を記して感謝の意を表します。

発掘作業 松村弘、坂本勝喜、牛塚利行、松村ハツ子、坂本信子、福川シマエ、上村信子、山口カメ子、宮原立代、石山ヒトエ、松村和代、石工タツト、赤池ハルエ、赤池サツキ、赤池みちえ、赤池睦子、赤池サトミ、赤池文字、赤池オミエ、赤池ミエ子、宮原チヨノ、花木キエノ、平林婦字子、赤池スミ子、赤池美根子、赤池京枝、木村サツキ、早坂渉、赤池貴寛、大塚俊彦、中村正好

整理作業 石工みゆき、溝口真由美、尾方信子、迫田洋子、林枝三、高田ユリ子、佐田ミヨ子、宮田日文、塩田喜美子、淵上慶子、上村孝子、塚本博子、河野智子

熊本県文化財調査報告 第127集

白鳥平A遺跡

平成5年3月31日

編集 熊本県教育委員会
発行

〒862 熊本市水前寺6丁目18番1号

印刷 印刷協業組合 サン・カラー

〒862 熊本市御領町730

04 教委·教文

② 006

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 127 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：白鳥平A遺跡

発行：熊本県教育委員会

〒862-8609 熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号

電話： 096-383-1111

URL： <http://www.pref.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：2016 年 3 月 31 日